

根 小 屋 城 跡

上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う
埋藏文化財発掘調査報告書

2022

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

根 小 屋 城 跡

上信自動車道吾妻西バイパス建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

群馬県上信自動車道建設事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

上信自動車道は、群馬県渋川市の関越自動車道渋川伊香保インターチェンジと長野県東御市の上信越自動車道湯の丸インターチェンジとを結ぶ総延長約80kmに及ぶ自動車専用の地域高規格道路です。この事業は、群馬県の「はばたけ群馬・県土整備プラン」で示された「7つの交通軸構想」のうちの「吾妻軸」に属し、関越自動車道と上信越自動車道とを結ぶ新たな交通体系として、吾妻地域の活性化に寄与することが期待されています。そして、この上信自動車道整備区間の一つである吾妻西バイパスは、東吾妻町大字厚田から東吾妻町大字松谷に至る7kmの区間です。現在、令和3年度末の事業完了を目指して建設が進められています。

本書で報告します根小屋城跡は、中世の山城として以前より知られていた遺跡で、その近接地も平成25年度から令和元年度にかけて当事業団が発掘調査を実施しており大きな成果をあげています。

根小屋城跡の発掘調査では、縄文時代や古代の遺構も検出されていますが、主たる遺構は中世末の戦乱期に構築された山城にかかる遺構です。山城は、急傾斜の尾根に構築されていたため、安全上すべてを解明することはできませんでしたが、山城にかかる遺構としては堀切や柵、門、建物群などが検出されています。

根小屋城は江見氏や浦野氏の城であり、岩櫃城の斎藤氏と対峙していたことが知られています。こうした史料と発掘調査の成果を併せることで、地域の歴史だけでなく中世戦国時代の解明が進むことが期待されます。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、群馬県県土整備部、群馬県中之条土木事務所、群馬県上信自動車道建設事務所、群馬県教育委員会、群馬県地域創生部、東吾妻町教育委員会をはじめ、関係する各機関や地元関係者の皆様には、多大な御指導・御協力を賜りました。本報告書の上梓にあたり、関係者の皆様には、衷心より感謝申し上げるとともに、本報告書が地域史解明の一助として役立てられることを願いまして序といたします。

令和4年2月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 向 田 忠 正

例　　言

1 本書は、平成27年度上信自動車道吾妻西バイパス建設事業、平成30年度上信自動車道吾妻西バイパス建設事業、平成31年度上信自動車道吾妻西バイバス建設事業に伴う埋蔵文化財調査で発掘調査が実施された根小屋城跡の発掘調査報告書である。

2 根小屋城跡で発掘調査の対象地は、次の地番である。

平成28年度 群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島字根古屋 A 4639、B 4631、B 4630-1、B 4636、B 4637、B 4638、

B 4639、B 4647-1、B 4647-2、B 4648、B 4649、B 4650、B 4654、B 4662、B 乙4663、B 4665、B 乙4666、

B 4666-1、B 4666-2、B 4668-1、B 4668-2、B 4668-3、B 4669-1、B 4670、B 4671、B 甲4672、C 4630。

平成30年度 群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島字根古屋 B 4647-1、B 4647-2、B 4648、B 4649、B 4650、B 4654、

B 4662、B 4661-1、B 乙4663、B 4665、B 乙4666、B 4666-2、B 4667、B 4668-1、B 4668-2、B 4668-3、

B 4669-1、B 4670、B 4671、B 甲4672。

平成31年度 群馬県吾妻郡東吾妻町大字三島字根古屋 B 4662、B 乙4663、B 4654、B 4665、B 甲466-1、B 乙4666、

B 4666-2、B 4667、B 4668-1、B 4668-3、B 4669-1、B 4670、B 4671。

3 事業主体は、群馬県中之条土木事務所、群馬県上信自動車道建設事務所である。

4 発掘調査主体は、公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。

5 発掘調査の期間と体制は、次のとおりである。

発掘調査期間(履行期間)、発掘調査担当者

平成28年10月1日～12月31日(平成28年3月31日～平成29年3月31日)、関口博幸・飯田陽一

平成30年9月1日～11月30日(平成30年4月1日～平成31年3月31日)、山本光明・千明 隼

平成31年4月1日～6月30日(平成31年4月1日～令和2年1月31日)、岩上千鶴・飛田野正佳

遺跡掘削工事請負

平成28年度 歴史の杜・吉澤建設・南波建設吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

平成30年度 シン技術・毛野・山下吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

平成31年度 シン技術・毛野・山下吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体

空中写真撮影 技研コンサル株式会社

地上測量 株式会社 測研

6 整理事業の期間と体制は、次のとおりである。

整理期間(履行期間)、整理担当者

令和2年10月1日～令和3年3月31日(令和2年4月1日～令和3年3月31日)、橋本 淳

令和3年4月1日～令和4年2月28日(令和3年4月1日～令和4年3月31日)、神谷佳明

編集 神谷佳明

執筆 第4章第1節 飯森康広(群馬県地域創生部文化財保護課)、その他神谷佳明、なお、第1章第1節、第2章について事業団発掘調査報告書第668集『四戸遺跡』、第672集『唐堀遺跡(1)』、第695集『細谷E遺跡・根小屋遺跡根小屋B遺跡』を改編・加筆して掲載した。

遺物観察 石器・石製品 岩崎泰一、縄文土器 山口逸弘、土師器 神谷佳明、陶磁器 大西雅広、

金属器 板垣泰之

遺構写真撮影 発掘調査担当者、遺物写真撮影 岩崎泰一、山口逸弘、大西雅広、板垣泰之

保存処理 板垣泰之、関 邦一

7 石材の同定は、飯島静男(群馬地質研究会)に依頼した。

8 発掘調査の記録及び出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

9 発掘調査及び本書の作成にあたっては下記の機関及び方々から協力、ご教示・ご指導をいただいた。記して感謝いたします。

群馬県土整備部、群馬県中之条土木事務所、群馬県上信自動車道建設事務所、群馬県地域創生部文化財保護課、群馬県教育委員会、東吾妻町教育委員会、地元自治会

凡　例

- 1 本報告書に用いた座標・方位は、すべて世界測地系2000(平面直角座標第IX系)による。主軸方位の計測にもこれを用いた。
- 2 遺構の種類は、原則発掘調査時に与えたものを踏襲したが、2号溝については堀切に変更した。
- 3 遺構の番号は、調査年度ごとに1から付与しているため本報告書では必要に応じて振り替えてある。なお、土坑やピット、建物・柵の柱穴はほとんど振り替っているため、表に調査時の番号を明記してある。
- 4 遺構図に示した高さは、すべて標高である。
- 5 遺構図のスケールは、それぞれの図に明記してある。
- 6 遺構図に使用したトーン・記号は下記のとおりである。

平坦地 ■■■ 平場 ■■■ 道・通路 ■■■ 焼土 ■■■ カクラン ■■■■■

- 7 遺物への注記は、下記のように記してある。

注記の記載順 遺構出土遺物 遺跡名・遺構種、遺構番号、遺構外出土遺物 遺跡名、区、グリッド

遺跡名称は次のように記載してある。平成28年度「N E G O」、平成30・31年度「根小ヤ城」

- 8 本報告書で使用した地図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院1/200,000地勢図「長野」

第2図 国土地理院1/50,000 地形図「草津」・「中之条」

第6図 国土地理院1/50,000 地形図「草津」・「中之条」

第7図 国土地理院1/50,000 地形図「草津」・「中之条」

- 9 掲載した遺物図は原則1/3であるが、石器、石製品、金属器では1/1、1/2、1/4で掲載した図がある。これらの図については掲載No.とともに縮尺を明記した。

- 10 遺物観察表

計測箇所の略称は次のとおりである。口：口径、底：底径、高：器高、重：重量、外：錢貨外縁径、内：錢貨内郭径
計測値に()が付けられている値は復元値を表している。

色調は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』を参考にしている。

目 次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1	10 道	88
第1節 調査に至る経緯	1	11 土坑	88
第2節 発掘調査の経過	2	12 ピット	91
第3節 調査区の設定	3	13 集石	99
第4節 整理作業の経過	5	14 遺構外出土遺物	100
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	6	第4章 総括	106
第1節 地理的環境	6	第1節 浦野氏と根小屋城	106
第2節 歴史的環境周辺の遺跡	8	1 地域の文献による根小屋城	106
第3章 検出した遺構と遺物	16	2 文書資料による検討	106
第1節 概要	16	3 根小屋城発掘調査結果からの検討	110
第2節 旧石器時代	16	4 根小屋城山城部の繩張検討	112
第3節 繩文時代	16	5 まとめ	114
1 土坑	16	第2節 まとめ	115
2 遺構外出土遺物	21	遺物観察表	116
第4節 古代	23	写真図版	
1 土坑	23	報告書抄録	
2 遺構外出土遺物	24	付図1	
第5節 中世以降	29	付図2	
1 城館の概要	29		
2 曲輪腰曲輪	55		
3 建物	61		
4 竪穴状遺構	72		
5 樵	73		
6 堀切	81		
7 竪堀	83		
8 溝	85		
9 通路	88		

挿図目次

第1図	道路位置図(国土地理院1/200,000地形図「長野」図幅を加工) ······	1
第2図	上信自動車道吾妻西バイパスの路線と各道路位置図(国土地理院1/50,000地形図「草津」「中之条」図幅を編集・加工) ······	2
第3図	調査区名称 ······	4
第4図	調査区グリッド ······	5
第5図	道路周辺地形分類図(国土交通省国土政策局国土情報課5万分の1都道府県土地分類基本調査(中之条)から図幅を加工) ······	7
第6図	周辺道路(国土地理院1/50,000地形図「草津」「中之条」図幅を編集・加工) ······	11
第7図	中世城館(国土地理院1/50,000地形図「草津」「中之条」図幅を編集・加工) ······	12
第8図	旧石器調査坑位置図、断面図 ······	17
第9図	縄文時代遺構位置図 ······	18
第10図	1~4号土坑遺構図 ······	19
第11図	5~6号土坑遺構図 ······	20
第12図	遺構外出土遺物(1) ······	21
第13図	遺構外出土遺物(2) ······	22
第14図	遺構外出土遺物(3) ······	23
第15図	古代遺構位置図 ······	25
第16図	7~8号土坑遺構図 ······	26
第17図	9~10号土坑遺構図 ······	27
第18図	11号土坑遺構図 ······	28
第19図	遺構外出土遺物 ······	28
第20図	中近世1~2面遺構位置図(1) ······	30
第21図	中近世1~2面遺構位置図(2) ······	31
第22図	中近世3面遺構位置図(1) ······	32
第23図	中近世3面遺構位置図(2) ······	33
第24図	中近世3面遺構位置図(3) ······	34
第25図	トレント位置図 ······	35
第26図	1~7号トレント位置図、2~7号トレント断面図 ······	36
第27図	3~4号トレント断面図 ······	37
第28図	6号トレント断面図 ······	39
第29図	9~11号トレント位置図、9号トレント断面図 ······	40
第30図	10~11号トレント断面図、12~14号トレント位置図、12~13号トレント断面図 ······	41
第31図	14号トレント断面図、15~26号トレント位置図 ······	42
第32図	15号トレント断面図 ······	43
第33図	16号トレント断面図 ······	44
第34図	17~21号トレント断面図 ······	45
第35図	22~23号トレント断面図 ······	46
第36図	25号トレント断面図 ······	47
第37図	27~31号トレント位置図、27~30号トレント断面図 ······	48
第38図	31号トレント断面図、32~38号トレント位置図、32~33号トレント断面図 ······	49
第39図	34~37号トレント断面図 ······	50
第40図	38号トレント断面図、39~44号トレント位置図 ······	51
第41図	39~41号トレント断面図 ······	52
第42図	40号トレント断面図 ······	53
第43図	43~44号トレント断面図 ······	54
第44図	3号腰曲輪構造図(1) ······	56
第45図	3号腰曲輪構造図(2) ······	57
第46図	4号腰曲輪構造図 ······	58
第47図	8号腰曲輪構造図 ······	59
第48図	1号建物遺構図 ······	60
第49図	2号建物遺構図 ······	62
第50図	3号建物遺構図(1) ······	64
第51図	3号建物遺構図(2) ······	65
第52図	4号建物遺構図 ······	67
第53図	5号建物遺構図 ······	69
第54図	6号建物遺構図 ······	70
第55図	7号建物遺構図 ······	71
第56図	1号廻穴状遺構 ······	72
第57図	1号廻穴(1)遺構図 ······	74
第58図	1号廻穴(2)遺構図 ······	75
第59図	8号建物遺構図、2号櫓遺構図 ······	76
第60図	1号道路遺構図(1) ······	78
第61図	1号道路遺構図(2) ······	79
第62図	3号道路遺構図 ······	80
第63図	4号道路遺構図 ······	81
第64図	1号廻切遺構図(1) ······	82
第65図	1号廻切遺構図(2)、出土遺物 ······	83
第66図	1~2号豎掘遺構図(1) ······	84
第67図	1~2号豎掘遺構図(2) ······	85
第68図	4号豎掘遺構図(1) ······	86
第69図	4号豎掘遺構図(2) ······	87
第70図	1号溝遺構図 ······	89
第71図	12~14号土坑遺構図 ······	90
第72図	1~7号ピット遺構図 ······	91
第73図	8~18号ピット遺構図 ······	92
第74図	19~28号ピット遺構図 ······	93
第75図	29~39号ピット遺構図 ······	94
第76図	39~56号ピット遺構図 ······	95
第77図	57~76号ピット遺構図 ······	96
第78図	77~98号ピット遺構図 ······	97
第79図	99~114号ピット遺構図 ······	98
第80図	115~120号ピット遺構図 ······	99
第81図	1~2号集石遺構図 ······	100
第82図	遺構外出土遺物(1) ······	100
第83図	遺構外出土遺物(2) ······	101
第84図	遺構外出土遺物(3) ······	102
第85図	三島根小屋城縄張図 ······	113

表 目 次

第1表	上信自動車道吾妻西バイパス調査道路一覧表 ······	2
第2表	周辺道路一覧表 ······	13~14
第3表	中世城館一覧表 ······	14
第4表	1号建物柱穴計測表 ······	61
第5表	2号建物柱穴計測表 ······	63
第6表	3号建物柱穴計測表 ······	66
第7表	4号建物柱穴計測表 ······	68
第8表	5号建物柱穴計測表 ······	69
第9表	6号建物柱穴計測表 ······	71
第10表	7号建物柱穴計測表 ······	71
第11表	1号櫓柱穴計測表 ······	75
第12表	8号建物柱穴計測表 ······	77
第13表	2号櫓柱穴計測表 ······	77
第14表	3号櫓柱穴計測表 ······	80
第15表	4号櫓柱穴計測表 ······	81
第16表	土坑一覧表 ······	103
第17表	ピット一覧表 ······	103~104~105

写真図版目次

- PL. 1 1 遺跡地遺景(手前右は岩櫃山) 東から
2 遺跡地遺景(奥は椎名山) 西から
- PL. 2 1 遺跡地と吾妻川 南から
2 遺跡地と吾妻川 北から
- PL. 3 1 遺跡地 垂直
2 稲小屋城と斤鉢山 北東から
- PL. 4 1 2016年度調査対象地 南から
2 2016年度調査対象地 近接 西から
3 0区全景 南から
4 0区全景 近接 西から
5 2018年度全景 垂直
6 2018年度全景 北から
7 2018年度全景 東から
8 2018年度全景(下曲輪)と本郭 東から
- PL. 5 1 2018年度全景 西から
2 2018年度全景(左手尾根 本郭) 東から
3 2018年度全景 北から
4 2018年度1区全景 南から
5 2019年度全景 遠景 北西から
6 2019年度全景 北から
7 2019年度4区全景 垂直
8 2019年度4区全景 北から
- PL. 6 1 2019年度5区東側全景 北から
2 2019年度5区西側全景 北から
3 2019年度4区・5区全景 垂直
4 稲小屋城本郭 北から
5 1号石垣調査坑作業状況 南から
6 1号石垣調査坑上層断面 南から
7 2号石器調査坑 西から
8 2号石垣調査坑上層断面 北から
- PL. 7 1 1号土坑 北西から
2 1号土坑上層断面上状態 東から
3 1号土坑上層断面 南から
4 2号土坑 北から
5 2号土坑 南西から
6 2号土坑上層断面 北東から
7 3号土坑 東から
8 3号土坑 西から
- PL. 8 1 3号土坑上層断面 南から
2 4号土坑 北西から
3 5号土坑 北から
4 6号土坑 北西から
5 6号土坑 南西から
6 6号土坑上層断面 南から
7 7号土坑 北西から
8 7号土坑上層断面 北から
- PL. 9 1 8号土坑 南から
2 8号土坑上層断面 東から
3 9号土坑 北西から
4 9号土坑上層断面 北西から
5 10号土坑 北西から
6 10号土坑上層断面B-B' 南西から
7 11号土坑 北東から
8 11号土坑上層断面 北東から
- PL. 10 1 1号トレンチ 南東から
2 1号トレンチ上層断面 南西から
3 2号トレンチ 南西から
4 2号トレンチ上層断面 南西から
5 3号トレンチ 南から
6 3号トレンチ上層断面 南西から
7 4号トレンチ 南東から
8 4号トレンチ上層断面 南西から
- PL. 11 1 6号トレンチ(南北) 南から
- 2 6号トレンチ(東西) 南西から
3 6号トレンチ(南北)上層断面 南西から
4 6号トレンチ(南北)上層断面 南西から
5 7号トレンチ 東から
6 7号トレンチ上層断面 北から
7 8号トレンチ 北西から
8 8号トレンチ上層断面 東から
- PL. 12 1 9号トレンチ上層断面全体 東から
2 9号トレンチ上層断面① 東から
3 9号トレンチ上層断面② 東から
4 9号トレンチ上層断面③ 東から
5 9号トレンチ上層断面④ 東から
6 10号トレンチ上層断面 西から
7 11号トレンチ 東から
8 11号トレンチ上層断面 東から
- PL. 13 1 12号トレンチ上層断面 南西から
2 13号トレンチ上層断面 南から
3 14号トレンチ上層断面 北東から
4 15号トレンチ全体 西から
5 15号トレンチ上層断面① 北西から
6 15号トレンチ上層断面② 北から
7 15号トレンチ上層断面③ 北から
8 15号トレンチ上層断面④ 北から
- PL. 14 1 16号トレンチ全体 南東から
2 16号トレンチ全体 西から
3 16号トレンチ上層断面A-A' 北東から
4 16号トレンチ上層断面B-B' 北東から
5 17~21号トレンチ設営場所
6 17号トレンチ上層断面 西から
7 18号トレンチ上層断面 西から
8 19号トレンチ上層断面 西から
- PL. 15 1 20号トレンチ上層断面 東から
2 21号トレンチ上層断面 西から
3 22号トレンチ上層断面 西から
4 23号トレンチ 南西から
5 23号トレンチ上層断面 北から
6 24号トレンチ上層断面 北西から
7 25号トレンチ 北東から
8 25号トレンチ上層断面① 南東から
- PL. 16 1 25号トレンチ上層断面② 東から
2 25号トレンチ上層断面(2018年度調査) 南東から
3 25号トレンチ上層断面(2019年度調査) 南から
4 25号トレンチ遺物出土状態 東から
5 26号トレンチ 北東から
6 26号トレンチ上層断面 東から
7 27号トレンチ上層断面 南東から
8 28号トレンチ上層断面 南東から
- PL. 17 1 29号トレンチ上層断面 南から
2 30号トレンチ上層断面 東から
3 31号トレンチ 東から
4 31号トレンチ上層断面 南から
5 32号トレンチ上層断面 東から
6 33号トレンチ上層断面 東から
7 34号トレンチ上層断面 東から
- PL. 18 1 35号トレンチ上層断面 東から
2 36・37号トレンチ上層断面 北東から
3 37号トレンチ上層断面 北から
4 38号トレンチ上層断面 北東から
5 38号トレンチ上層断面部分 北東から
6 39号トレンチ 北西から
7 40号トレンチ 北西から
8 40号トレンチ上層断面① 北から
- PL. 19 1 40号トレンチ上層断面② 北から

2	40号トレンチ上層断面③	北から	PL. 30	1	1号掘切(2019年度調査)	北西から	
3	41号トレンチ上層断面①	北西から		2	1号掘切(2019年度調査)	南西から	
4	41号トレンチ上層断面②	北西から		3	1号掘切(2019年度調査)上層断面B-B'	南東から	
5	42号トレンチ	北東から		4	1号堅埴調査状況	北西から	
6	43号トレンチ上層断面①	東北から		5	2号堅埴調査状況	東から	
7	43号トレンチ上層断面②	北西から		6	1号堅埴頂部付近上層断面	北東から	
8	44号トレンチ上層断面	北から		7	2号堅埴頂部付近上層断面	北東から	
PL. 20	1	3号腰曲輪全景	北から	PL. 31	1	4号堅埴	北から
2	3号腰曲輪全景	南西から		2	4号堅埴	北から	
3	3号腰曲輪上部	南東から		3	4号堅埴上部	北から	
4	3号腰曲輪上層断面A-A'	北から		4	4号堅埴下部	北から	
5	3号腰曲輪上層断面B-B'	東北から	PL. 32	1	4号堅埴上部上層断面	東から	
PL. 21	1	4号腰曲輪全景	北東から		2	4号堅埴下部礫堆積状況	北西から
2	4号腰曲輪全景	北西から		3	4号堅埴下部礫堆積状況	南西から	
3	4号腰曲輪近接	東から		4	4号堅埴下部礫堆積状況上層断面	北東から	
4	4号腰曲輪上層断面	東から		5	1号溝	西から	
5	4号腰曲輪96・97号ピット	北から		6	1号溝	北東から	
PL. 22	1	8号腰曲輪全景	東から		7	1号溝	東から
2	8号腰曲輪全景	西から		8	1号溝上層断面	北西から	
3	8号腰曲輪近接	西から	PL. 33	1	12号土坑	東から	
4	8号腰曲輪上層断面	東から		2	12号土坑上層断面	東から	
5	8号腰曲輪上層断面近接	東から		3	13号土坑	東から	
PL. 23	1	1・2号建物	垂直		4	13号土坑上層断面	南から
2	1号建物	南東から		5	14号土坑	東から	
3	1号建物出土状況	南東から		6	14号土坑上層断面	南から	
4	1号建物柱穴P 1	北東から	PL. 34	1	1号ピット	南西から	
5	1号建物柱穴P 1上層断面	南から		2	2号ピット	南西から	
PL. 24	1	2号建物	南東から		3	3号ピット	南から
2	2号建物柱穴P 1	南から		4	4号ピット	南から	
3	2号建物柱穴P 1上層断面	南から		5	5号ピット	南から	
4	3号建物	南東から		6	6号ピット	南から	
5	3号建物	北東から		7	7号ピット	南から	
6	3号建物柱穴P 1上層断面	東から		8	8号ピット	南東から	
7	3号建物柱穴P 8上層断面	東から	PL. 35	1	15号ピット	上層断面	
8	3号建物柱穴P 16上層断面	東から		2	16号ピット	上層断面	
PL. 25	1	4号建物	北西から		3	17号ピット	西から
2	4号建物	南東から		4	17号ピット	上層断面	
3	5号建物	北東から		5	18号ピット	北東から	
4	5号建物	西から		6	18号ピット	上層断面	
5	5号建物	東から		7	19号ピット	東から	
6	5号建物	北から		8	19号ピット	上層断面	
7	6・7号建物	東から		9	20号ピット	西から	
8	6号建物	西から		10	20号ピット	上層断面	
PL. 26	1	6・7号建物	西から		11	21号ピット	南西から
2	7号堅穴建物	西から		12	21号ピット	上層断面	
3	1号堅穴造構	南東から		13	22号ピット	南西から	
4	1号堅穴造構柱穴P 2灘出土状態			14	23号ピット	南西から	
5	1号堅穴造構柱穴P 3			15	23号ピット	上層断面	
6	1号堅穴造構炉	北東から		16	24号ピット	南西から	
7	1号堅穴造構炉上層断面	南西から		17	24号ピット	上層断面	
8	1号堅穴造構上層断面	南西から		18	25号ピット	南西から	
PL. 27	1	8号建物(門)、2号樋、1号通路	南から		19	26号ピット	北東から
2	8号建物(門)、1号通路	南から		20	26号ピット	上層断面	
3	8号建物(門)、2号樋、1号通路	東から		21	27号ピット	南西から	
4	8号建物(門)、2号樋、1号通路	北東から		22	27号ピット	上層断面	
5	8号建物(門)、1号通路	北から		23	27号ピット	南西から	
PL. 28	1	1号掘切	北から		24	27号ピット	上層断面
2	1号掘切	垂直		25	27号ピット	南西から	
PL. 29	1	1号掘切(2018年度調査)	北から		26	27号ピット	北東から
2	1号掘切(2018年度調査)	北西から		27	27号ピット	上層断面	
3	1号掘切(2018年度調査)	南東から		28	27号ピット(手前、奥1号樋+3)	東から	
4	1号掘切(2018年度調査)上層断面	北西から		29	27号ピット	上層断面(右側)	
5	1号掘切(2018年度調査)下層断面	北から					
6	1号掘切(2018年度調査)遺物出土状態	東から					
7	1号掘切(2019年度調査)	北東から					
8	1号掘切(2019年度調査)上層断面C-C'	北から					

10	28号ピット 西から	7	108号ピット 北から
11	28号ピット上層断面 南西から	8	108号ピット上層断面 北から
12	29号ピット 南東から	9	109号ピット 北から
13	29号ピット上層断面 南東から	10	109号ピット上層断面 北から
14	30号ピット 南から	11	110号ピット 北から
15	30号ピット上層断面 南東から	12	110号ピット上層断面 北から
PL. 37	1 31号ピット 南東から	13	111号ピット 北から
2	31号ピット上層断面 南東から	14	111号ピット上層断面 北東から
3	32号ピット 南から	15	112号ピット 北から
4	33号ピット 南から	PL. 39	1 113号ピット上層断面 北から
5	34号ピット 東から	2	114号ピット上層断面 北から
6	36号ピット 東から	3	115号ピット 北から
7	37号ピット 東から	4	115号ピット上層断面 北から
8	40号ピット 東から	5	116号ピット 西から
9	45号ピット 南東から	6	116号ピット上層断面 北西から
10	46号ピット 南東から	7	117号ピット 北西から
11	47号ピット 南東から	8	117号ピット上層断面 北西から
12	95号ピット 北西から	9	118号ピット 北西から
13	96・97号ピット 北西から	10	118号ピット上層断面 北から
14	98号ピット 南から	11	119号ピット 北から
15	100号ピット 北から	12	119号ピット上層断面 北から
PL. 38	1 105号ピット 北から	PL. 40	縄文時代遺構外出土遺物
2	105号ピット上層断面 北から	PL. 41	縄文時代遺構外出土遺物
3	106号ピット 北から	PL. 42	1号縄切口出土遺物 中近世遺構外出土遺物
4	106号ピット上層断面 北から	PL. 43	中近世遺構外出土遺物
5	107号ピット 北から		
6	107号ピット上層断面 北から		

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

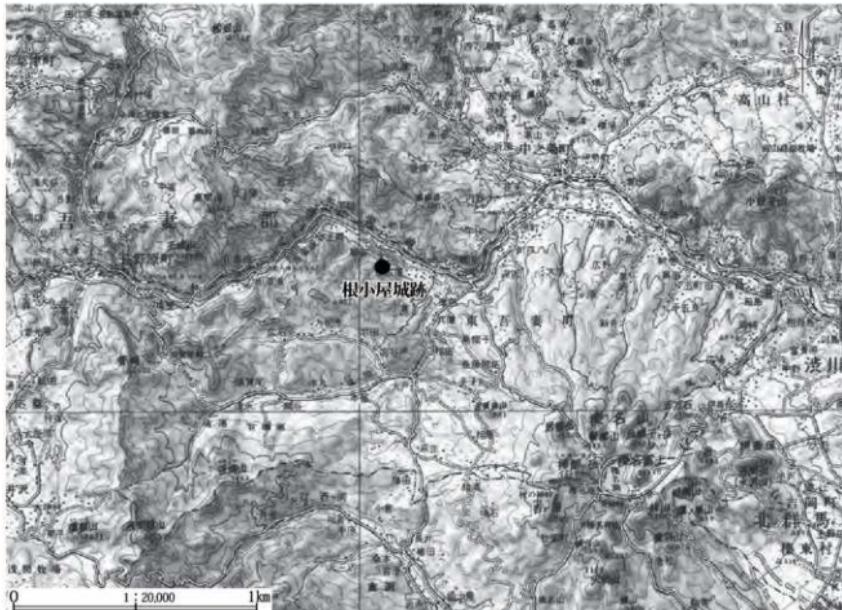
上信自動車道は、国道145号・353号のバイパスとして渋川市の関越自動車道渋川・伊香保インターチェンジを起点に、長野県東御市の上信越自動車道東部湯の丸インターチェンジに至る総延長約80kmの地域高規格道路として平成6年12月16日に計画路線の指定を受けた。この道路は、群馬県の群馬がはばたくための「7つの交通軸構想」における「吾妻軸」として位置付けられ、吾妻地域の活性化に寄与することが期待されている。

上信自動車道は、起点側より渋川西バイパス、金井バイパス、川島バイパス、祖母島～箱島バイパス、吾妻東バイパス、吾妻西バイパス、八ッ場バイパスとその西側の区画に工事が区分されている。

今回の発掘調査は、上信自動車道のうちの吾妻西バイパスに該当する箇所で東吾妻町大字厚田から東吾妻町大字松谷までの区間である。

吾妻西バイパスは、平成21年3月31日に整備区間の指定を受け、その後に路線測量、関係機関との調整、用地買収等の事前準備が進められた。着工に先立ち、平成23年5月13日付で群馬県中之条土木事務所より、当該地域の埋蔵文化財の有無、取扱いについて群馬県教育委員会文化財保護課に確認が行われた。文化財保護課では調査範囲と調査面積の確定のため、用地取得が完了した地点より試掘確認調査を実施し、中之条土木事務所に発掘調査による記録保存が必要な旨を通知した。

発掘調査は、文化財保護課による調整のもと公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託し、実施することとなった。吾妻西バイパスの発掘調査では、本遺跡



第1図 遺跡位置図(国土地理院1/200,000地勢図「長野」図幅を加工)

第1章 調査に至る経緯と経過

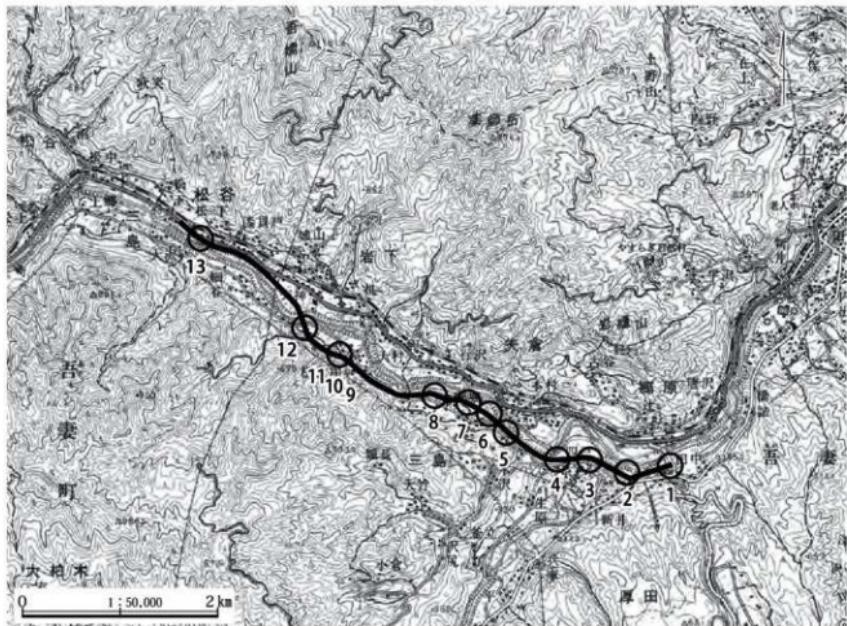
含め13箇所の遺跡が発掘調査されている。

本遺跡の発掘調査は、平成28年度より着手し、平成30年度、平成31(令和元)年度の3箇年度にわたって実施した。

第2節 発掘調査の経過

発掘調査は平成28(2016)年度、平成30(2018)年度、平成31(2019)年度にかけて実施した。

平成28(2016)年度 この年度は、当初吾妻西バイパスの発掘調査工程に根小屋城跡の発掘調査は予定されていなかったが、環境調査が終了したことと、条件が整ったこ



第2図 上信自動車道吾妻西バイパスの路線と各遺跡位置図(国土地理院1/50,000地形図「草津」「中之条」図幅を編集・加工)

第1表 上信自動車道吾妻西バイパス調査遺跡一覧表

遺跡名	調査年度						
	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度
1 厚田中村遺跡	○	○	○	○			
2 新井遺跡		○	○	○			○
3 四丁の古墳群							○
4 四丁遺跡群	○	○	○	○			○
5 万木沢B遺跡					○		
6 店場B遺跡		○	○			○	
7 店場遺跡			○	○	○	○	
8 店場C遺跡			○	○			○
9 根小屋遺跡				○			
10 根小屋B遺跡				○			
11 根小屋城跡				○		○	○
12 錦谷E遺跡				○			
13 松谷松下遺跡							○

とから6月に協議が行われ、発掘調査を実施することとなった。

この年度の発掘調査は、埋蔵文化財調査事業団の年間計画が確定しているなかに追加する形で組み込まれたため、唐堀遺跡他の上信自動車道関連遺跡の発掘調査担当者が兼務する形で実施した。

発掘調査は、根小屋城跡の上信自動車道東端とその北側に設定された工事用進入路として借り上げた用地、次年度以降に調査を実施する区画の遺構把握が調査の対象とされた。

主な対象地は0区調査区と呼称している区画で対象となった面積は3,772.53m²である。発掘調査は、根古屋川左岸に形成されている比較的平坦な面を中心に実施した。根古屋川岸の平坦な面は昭和10年代に起きた洪水の氾濫層が厚く堆積しており遺構の検出に至っていない。その上位にあたる標高456mに位置する平坦な面を重機によって表土を掘削したところ柵1列、竪穴状遺構1棟、土坑1基と多くのピットを検出した。この他、0区北西の緩斜面、腰曲輪とみられる斜面上に存在する半月状の狭い平坦な面を1箇所調査したが遺構などの検出には至っていない。

平成30(2018)年度 この年度は、年度当初より9月から11月の3箇月間に発掘調査を実施する計画が組み込まれていた。遺跡の特質上、急傾斜が存在するため安全対策を施した後に発掘調査を開始した。また、対象地域内には保安林が存在しており、その解除と伐採や周辺に生息しているクマタカへの配慮などがあり、8月上旬より対応が始まった。保安林解除については9月5日に上信自動車道建設事務所より、9月4日付で吾妻環境森林事務所長より、9月10日より伐採の許可がおりたとの連絡があり、伐採を開始している。

この年度の調査対象は根古屋川側の南斜面の一部と「鉄塚」と呼称されている尾根頂部の緩傾斜地、北側斜面の上部を対象とした。

発掘調査の対象地は傾斜地であるため、9月前半は調査対象地までの往来を確保するための作業道設置や安全確保などの準備作業を実施した。この年度は対象範囲全域が把握できることから尾根上部の「鉄塚」が存在する範囲を1区調査区、南斜面を2区調査区、東斜面を3区調査区、北西斜面上部を4区調査区、その下部を5区調査

区とした。さらに各調査区では調査の都合上分割した区分けを行っている。

また、発掘調査対象地の樹木伐採後には、根小屋城全域を把握するために本丸跡付近までを含めた現況図作成を実施した。

発掘調査は、まず1区調査区より重機による竹の伐採・根の削除と表土を掘削し、ここでは近世から中世にかけてと中世と中世以前の2面を調査した。なお、2面に及ぶ調査はこの他の調査区では確認できなかった。調査では、中世～近世にかけての掘立柱建物、柵、檜門と柵、堀、土坑等多くの遺構を検出し、根小屋城にともなう施設の一部について解明するなどの成果をあげている。

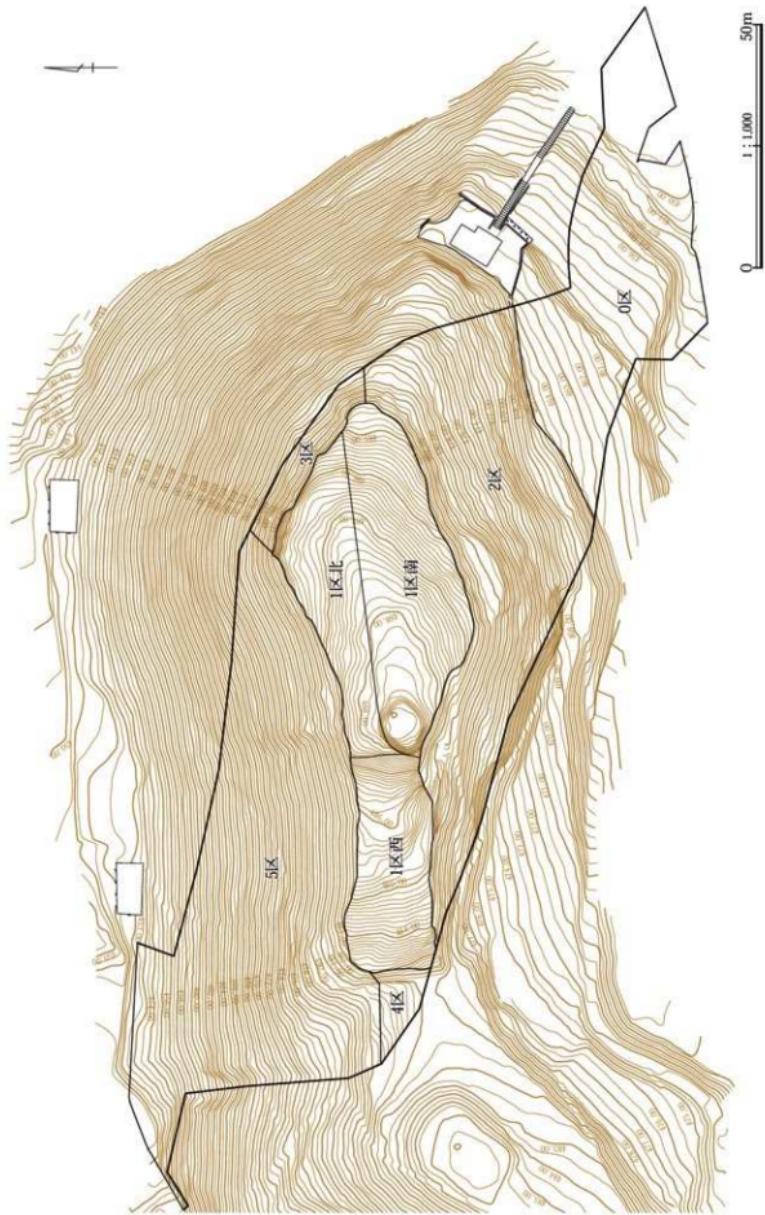
平成31(2019)年度 この年度は、4月から6月までの3箇月間に発掘調査が組み込まれ、4月当初より開始されたが、この年度も当初の半月は作業道設置や安全確保作業で期間を費やしている。発掘調査は、道路建設にかかる根小屋城の北側である5区調査区、4区調査区と1区調査区両側の緩斜面が対象であった。

5区調査区では、工事対象地の西端に現状でも堅堀とみられる痕跡が確認できていた。4区・5区調査区でも現状で平坦な範囲が確認でき、建物などの施設が存在した可能性が窺えた。この他、1区調査区に残る「鉄塚」北側でも僅かではあるが堅堀の痕跡が確認できていた。こうした現状で遺構の存在が想定できる箇所を中心に調査を進めた。

なお、1区南側の調査は、比較的緩斜面に狭い平坦面であることからトレンチ状の調査範囲を設定して発掘調査を実施した。その結果、近世末から近代にかけての墓坑を検出した。この他の調査区では、根小屋城に伴う堅堀や堀切と縄文時代の土坑、古代の落とし穴、土坑、ピットを検出し調査した。

第3節 調査区の設定

発掘調査にあたっては対象範囲を0区から5区までの6箇所に区画した調査区を設定した。なお、平成28(2016)年度の発掘調査では、対象範囲が狭いこともあり調査区の設定を行わずに実施したが、平成30(2018)年度の発掘調査は広範囲が対象になり、一部は次年度に継続するため地形の変換点をもとに調査区の設定を行っ



第3図 調査区名

た。そのため、整理段階で平成28(2016)年度の発掘対象地を0区と呼称することとした。1区は根小屋城の下曲輪に相当する範囲、2区は南側斜面、3区は北東斜面、4区は1区西側の本郭とされている斥候山への尾根に移行する窪地、5区は北斜面を対象にした。なお、1区については、表土掘削による排土を調査区外に搬出することができないため1区南、1区北、1区西の3箇所に小区分した。

平成28(2016)年度は遺跡個別の調査グリッドは設定せず、国家座標をそのまま使用している。

平成30(2018)年度と平成31(2019)年度は、調査範囲を網羅する調査グリッドを設定した。設定にあたっては、国家座標 $X=62,130$ 、 $Y=-95,700$ を基準に5メートル四方を単位とするグリッドを設定した。基準となる座標を「1 A -1」と呼び称し、西へ5m移るごとに「-」の数字・アルファベットのうち、アルファベットを変化させ、1 B、1 C、1 D、1 Eとし、1 Aから95mの地点を1 Tとした。そして、100m移った地点でアルファベットの前の数字を1から2へ変化させ2 Aとし、また「2 T」まで繰り返すこととした。北方向へは、1から5mごとに順に数を増やしていく。

なお、平成30(2018)年度に設定した調査区では平成28(2016)年度に調査した東端一部が漏れることになる。

本報告書では、平成28(2016)年度の調査範囲が一部調査区から漏れるため、全域を網羅する国家座標で標記してある。

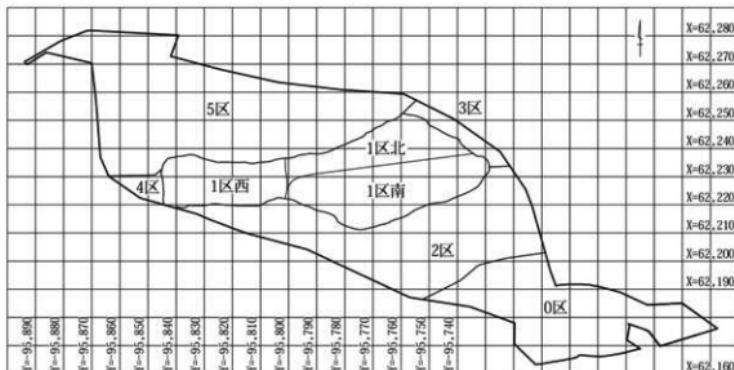
第4節 整理作業の経過

整理作業の実施にあたっては、群馬県教育委員会文化財保護課の調整を受け、上信自動車道建設事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で、平成28年4月1日に上信自動車道吾妻西バイパス関連の6遺跡についての整理事業委託契約が交わされた。

根小屋城跡の整理事業は、令和2年10月1日から着手している。整理作業は出土遺物と検出遺構について併行して整理を実施した。

出土遺物では、遺物の確認、分類、接合作業、取り上げ掲載遺物の遊びだし、復元、写真撮影、実測、観察、浄書などを実施した。

検出遺構については遺構図の確認、修正、編集後にデジタル編集を経てレイアウトを実施し、これと併行して遺構写真の選別、遺構説明などの本文執筆作業を実施した。そして、これらを取りまとめて報告書印刷用版組をデジタルにて作成した。完成後、印刷・製本を委託し、完成したものを『公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第703集 根小屋城跡発掘調査報告書』として刊行した。



第4図 調査区グリッド

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 地理的環境

根小屋城跡が所在する吾妻郡は、群馬県北西部に位置する。本遺跡は、吾妻郡の南東部に位置する東吾妻町三島字根古屋に所在する。東吾妻町は平成18年3月に吾妻町と東村が合併して成立した。本遺跡の北側には東に流れる吾妻川、南西には三島山が存在し、遺跡地は三島山から延びる丘陵部に立地する。

周辺には、標高1000m前後の山々が連なり、その奥は標高1500mの山々に連なる。北部には吾嬬山(1181.5m)・薬師岳(974.4m)、西は高間山(1341.7m)・菅峰(1473.5m)・浅間穩山(1756.7m)があり、東南部には掃部ヶ岳(1449m)を最高峰とする榛名山がそびえる。榛名山は複式成層火山で山頂には火口原湖、中央火口丘があり、山体斜面溶岩ドームや爆裂火口が存在する。なお、榛名山は6世紀初頭と中頃の2度にわたって大規模な噴火を起こしている。この噴火では東側地域に大きな被害をもたらしているが、金井東裏遺跡、金井下新田遺跡、中筋遺跡、黒井峯遺跡等当時の姿を知ることができる遺跡を残している。北西麓にある北側、吾妻側の対岸には岩櫃山(802m)がそびえる。岩櫃山は、奇岩や怪石からなる山容を形成し、この地域のランドマークでもある。この岩山には真田氏の城館として有名な岩櫃城が存在する。

これら周辺の山々は、新生代新第三紀に形成されたもので、中期中新世の凝灰質砂岩と泥岩の互層から成る。沢渡層、後期中新世の根古屋溶岩凝灰岩層や細尾規定疊岩部層、郷原下部凝灰岩層、内野溶岩・凝灰角礫岩部層、郷原上部凝灰角礫岩部層、吾嬬山溶岩・凝灰角礫岩部層からなる吾妻層、複輝石安山岩～玢岩や石英閃綠岩・閃綠岩からなる岩下複合岩体、後期鮮新世の安山岩凝灰疊岩～火山角礫岩と同溶岩から成る小倉層の他、安山岩岩脈、安山岩岩体、流紋岩デイサイトの岩体が絡み合って形成されている。

西側は、国指定名勝吾妻峠(昭和10年12月24日指定)が長野原町との境になる。吾妻峠を形成した吾妻川は長野県境に位置する鳥居峠(1362m)に源を発し、吾妻郡内を

東流し、渋川市で利根川に合流する。

吾妻川は、「草津白根山」(「硫黄」を含んだ火山)を供給源とする「草津温泉」「万座温泉」「旧硫黄鉱山の坑内排水」等の強酸性水の流入(湯川、谷沢川、大沢川)により、魚も棲まない「死の川」と呼ばれていた。

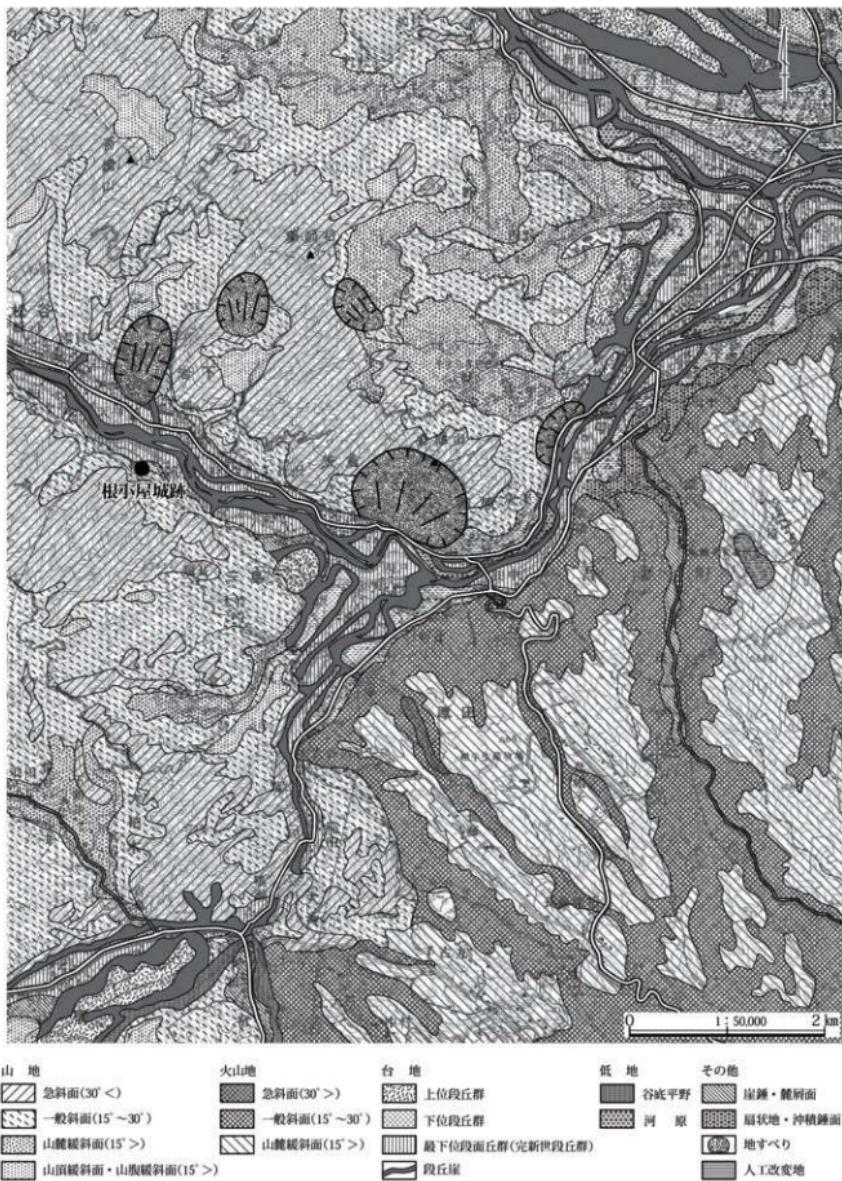
群馬県企業局は酸性水流入の最大原因となる湯川に酸性水中和施設を建設し、石灰を大量に投入することで河水のPH値を中和する「吾妻川総合開発事業」を昭和32年(1957)より始め、昭和39年に品木ダムを始めとする吾妻川の中和施設が完成した。世界最初の河水中和事業である。現在では、魚類が生息する川に生まれ変わった。また、吾妻川は現在でも活発な噴火を繰り返している浅間山によって大きな影響を受けている。その中でも1783(天明3)年の噴火は土石流を起こし、大量の土砂を吾妻川流域に押し流し甚大な被害をもたらしている。

一方、本遺跡が所在する三島地区は、近世は三島村、明治の合併によって岩島村、昭和の合併で吾妻町、平成の合併で現在に至っている。地域経済は、周囲を山地で囲まれていることや鉄道や道路などのインフラが整っていないかったため山地では林業、吾妻川の段丘の僅かな平坦地では今まで農業が主産業である。

農地は、水田より畑地が多く、以前は養蚕が盛んであった。さらに養蚕の他、麻の生産も江戸時代から400年以上続いている。現在では、麻の生産は、法的に厳しい規制があるが、「岩島麻保存会」によって継続されている。

参考文献

1. 新井房夫監修、群馬県地質図作成委員会1999「群馬県10万の1地質図」内外地図
2. 木崎喜雄・野村哲・中島啓治1977「群馬のおいたちをたずねて 下」上毛新聞社
3. 群馬県吾妻教育会1929「群馬縣吾妻郡誌」西毛新聞社
4. 原町誌編纂委員会1960「原町誌」
5. 山口一俊1975「中之条盆地とその周辺の地形」『駒澤大学大学院地理学研究』第5号



第5図 遺跡周辺地形分類図(国土交通省国土政策局国土情報課5万分の1都道府県土地分類基本調査(中之条)から図幅を加工)

第2節 歴史的環境・周辺の遺跡

根小屋城跡のある東吾妻町周辺には全国的に見ても重要な遺構や遺物が検出・出土している。三島地区から吾妻川下流約4.5kmの左岸には国指定重要文化財である、ハート形土偶(縄文時代後期)(指定番号274昭和40年5月29日指定)が出土した郷原遺跡や、郷原遺跡の北にそびえる岩櫃山には、弥生時代中期の土器型式「岩櫃山式土器」が出土した岩櫃山鷹の巣遺跡など学史に残る重要な遺跡がある。岩櫃山鷹の巣遺跡の上流約4kmの段丘上には群馬県指定史跡「姉山の石組かまど」がある。この遺跡は古墳時代の竪穴建物の竈である。このように縄文時代から古墳時代の各時代に国・県指定の遺跡がある。本報告書は吾妻川右岸の歴史解明に1資料を提供するものとなる。

本報告の根小屋城跡周辺遺跡を時代別に概観する。

旧石器時代

吾妻郡内の旧石器時代の遺跡調査事例は極めて少なく、高山村に所在する「新田西沢遺跡1」が知られているのみで、東吾妻町内では調査事例はない。

縄文時代

縄文時代後期のハート形土偶で知られる郷原遺跡や、晩期の唐堀遺跡、ハッカダム関連調査での上郷岡原遺跡があるものの、東吾妻町内の縄文時代の発掘調査例は少なく、現状では不明な点が多い。近年の上信自動車道吾妻西バイパス建設に伴う事前調査では、新井遺跡、万木沢B遺跡、唐堀遺跡、唐堀C遺跡、四戸遺跡などで縄文時代の遺物が出土した遺跡がある。

前期の遺構が検出された遺跡としては、四戸遺跡と新井遺跡、唐堀C遺跡がある。四戸遺跡では前葉の竪穴建物や土坑、新井遺跡では中葉の竪穴建物と土坑、唐堀C遺跡では後葉の竪穴建物と土坑が検出されている。

中期の遺構が検出された遺跡は郷原遺跡がある。郷原遺跡はハート形土偶で知られたあと、昭和59年(1984)、平成6年(1994)年に発掘調査が行われ、中期後半の竪穴建物が検出されている。後期の遺構が検出された遺跡として、郷原遺跡、新井遺跡、上郷岡原遺跡がある。郷原遺跡はハート形土偶もそうであるが昭和59年と平成6年の調査では後期初頭の敷石建物や配石土坑が検出されて

いる。新井遺跡では後期初頭の敷石建物が検出されている。上郷岡原遺跡でも後期初頭から後期前半にかけての敷石建物や竪穴建物が検出されている。また遺構は検出されていないが後期から晩期の多量の遺物が昭和55年に調査された唐堀遺跡がある。晩期の遺構が確認された遺跡は唐堀遺跡、万木沢B遺跡がある。吾妻西バイパス建設に伴う唐堀遺跡調査では、後期後半から晩期の竪穴建物や土坑、配石遺構、水場遺構等が検出され、東北地方から搬入されたと考えられる遮光器土偶の頭部をはじめとする多量の遺物が出土している。さらに万木沢B遺跡においても、土坑と共に晩期の遺物が多量に出土している。

弥生時代

中期の遺跡は、「岩櫃山式土器」の標式遺跡である岩櫃山鷹の巣遺跡、再葬墓が確認された前畠遺跡が知られている。前畠遺跡は吾妻川の河岸段丘の最下位段丘面上に立地する一次埋葬地であり、また岩櫃山鷹の巣遺跡は岩櫃山の岸壁に立地する2次埋葬地と考えられている。他に新井遺跡では土坑や遺物、四戸遺跡では竪穴建物が検出されている。

後期の遺構が検出された遺跡として、四戸遺跡、四戸の古墳群、新井遺跡、唐堀B遺跡がある。四戸の古墳群では数棟の掘立柱建物が検出され、隣接する四戸遺跡と同時期の集落と考えられる。新井遺跡からは、竪穴建物、円形周溝墓、大型の方形土坑等が検出されている。また唐堀B遺跡においても竪穴建物を含む集落が確認されている。四戸遺跡の後期の集落は、吾妻川流域にあって最も西側に位置する大規模なものであることは特筆される。

古墳時代

東吾妻町地域は、本県における古墳所在地の最北端の地として知られてきた。三島地区的段丘上の東端には昭和47年(1972)3月1日に町指定となった四戸の古墳群がある。四戸の古墳群は、昭和13年(1938)年の「上毛古墳総覧」に20基を超える記載があり、そのうちの四戸1号墳(総覧 岩島村19号)、四戸2号墳(総覧 16号)四戸3号墳(総覧 岩島村13号)四戸4号墳については、昭和39・42年(1964・1967)年に群馬大学による調査が行われている。また、吾妻西バイパス建設に伴う四戸の古墳群では3基の古墳が調査され、そのうち1号墳は6世紀後半に比定されるものである。この古墳には家形、大刀形、

鞍形、盾形など複数の形象埴輪が置かれていた。6世紀代の古墳は、この他に下郷古墳群71号墳の発掘調査が行われ、素環頭大刀や馬具が出土している。

他にも「上毛古墳総覧」に記載されている古墳として、上古墳(総覧 岩島村43号)、玉科遺跡(総覧 川戸42~51号)、下郷古墳群(総覧 川戸62~69)、原町下ノ町古墳群(総覧 川原1~16号)、町指定史跡の金井庵寺遺跡(総覧 川戸75号)、岩井寺沢古墳(総覧 太田村17号)、岩井西古墳群(総覧 太田村1~14号)、白山神社遺跡(総覧 太田村21号)等が東吾妻町内にある。

これまで同地域における古墳時代の集落については不明な点が多くかった。三島地区から約3.5km北西に位置する「姉山の石組かまど」は、緩斜面に立地する竪穴建物に構築された山石利用の石組み竈として知られていた。吾妻西バイパス建設事業に伴う発掘調査の進展によって、古墳時代の居住域の展開も次第に判明しつつある。

四戸遺跡では、古墳時代前期から後期までの多くの竪穴建物が検出されており、5世紀後半に急増した竪穴建物は、その後も安定した規模を保ちながら継続した集落を展開している。この集落展開の状況は三島地区的段丘上に点在する古墳群と密接な関係を維持していたことが理解できる。

四戸の古墳群の調査では、6世紀以降の竪穴建物で古墳の石室を彷彿とさせる石組み竈を有するものが数多く検出されている。合わせて竈方向を変える建て替えを行った竪穴建物も多くみられた。

新井遺跡からは、中期から後期の集落、方形周溝墓4基古墳3基も検出されている。ここで検出された一辺27mの方墳は「上毛古墳総覧」に記載された「遠見山古墳」の規模に相当する。唐堀遺跡からは、6世紀後半の円墳1基が検出されている。さらに唐堀遺跡の西側に位置する唐堀C遺跡、万木沢B遺跡では後期の集落が検出されている。

さらに三島地区的南東、吾妻川右岸にある厚田中村遺跡では6世紀初頭に降下したニツ岳火山灰(Hr-FA)によって埋没した古墳時代の小区画水田が部分的に検出された。ニツ岳火山灰層下からの小区画水田は、この地域で初めての検出事例となった。

奈良・平安時代

律令制下において、群馬県域はほぼ「上毛野国(713(和

銅6)年に上野国に変更)」の領域に当たっており、「和名類聚抄」によると国内には「碓水・片岡・甘樂・多胡・綿野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽」の14郡が置かれた(当初13郡、和銅4(711)年に多胡郡設置で14郡)。吾妻郡には「長田」、「尹參」、「太田」の3郷があつたとされ、吾妻郡中之条大字市城付近は官牧である「市代牧」の所在地に想定されている。

根小屋城跡が所在する東吾妻町三島地区周辺の奈良・平安時代の遺跡は、これまで三島地区の吾妻川の対岸にある前畠遺跡などで集落が確認されていたとの、三島地区から北東5kmに位置する白鳳期寺院跡である金井庵寺の存在が知られる他、八ッ場ダム関連の発掘調査で上郷地区から9世紀後半から10世紀にかけての小規模な集落が調査されているにとどまっていた。近年の吾妻西バイパス建設に伴う発掘調査の進展により、奈良・平安時代の遺跡検出事例は、格段に多くなり、注目されている。

本報告の根小屋城跡では、この時代の遺構は落とし穴と見られる土坑が検出されているにすぎないが、複数の遺跡で集落が検出されている。奈良・平安時代の集落では厚田地区に位置する新井遺跡で平安時代9世紀の集落が検出されている。四戸遺跡では7世紀後半から10世紀前半までの数多くの竪穴建物と掘立柱建物からなる集落が検出されている。この時期の竈は古墳時代の竪穴建物同様石組み竈が長期に渡って継続的に造られている。四戸遺跡では9世紀後半の竪穴建物出土土器に「寺」と記された墨書き土器が出土し、2区51号竪穴建物からは、ほぼ完形の状態に復元できた大形の奈良三彩短頸壺が出土し、注目を集めている。さらに北東5kmに所在する下郷古墳群の調査では、竪穴建物だけでなく区画施設と4棟の掘立柱建物が検出されている。ここで検出された掘立柱建物の中には柱穴に礎板石をもつものや間仕切りをもつ床高建物など稀なものがみられ、この施設の性格が検討されている。なお、下郷古墳群では中空円面鏡が出土しているが、この中空円面鏡は鏡面下の部分が環状に作られた珍しいものである。

東吾妻町金井地内には、前出の金井庵寺がある。7世紀後半から9世紀にかけての寺院跡であり、上野国佐位郡にある佐位郡の郡領層が建立したとされる伊勢崎市上植木庵寺と同范の軒丸瓦が採取されている。県内では前橋市の山王庵寺(放光寺)、伊勢崎の上植木庵寺、太田市

の寺井庵寺、そしてこの金井庵寺以外には本格的な白鳳期の寺院の遺跡は発見されていない。吾妻地域にいち早く本格的な寺院を建立できるような強い経済基盤を有する在地首長が存在していた証である。「長元三(1030)年上野国不与解由状案(いわゆる「上野交替実録帳」)定額寺項には、「放光寺」、「法林寺」、「光輪寺」、「慈廣寺」の4寺の名称が記載されている。「放光寺」が前橋市に所在する山王庵寺にあたることは出土した文字瓦によって確実であるので、「法林寺」、「弘輪寺」、「慈廣寺」の3箇寺が、伊勢崎市上植木庵寺、太田市寺井庵寺、東吾妻町金井庵寺のどれかにそれぞれ当たるのではないかと考えられている。

中近世

天仁元年(1108)年浅間山噴火後、上野国内では莊園開発への動きが活発になる。吾妻郡では、12世紀末頃に秀郷流藤原氏(前吾妻氏)が台頭する。

「吾妻鏡」には吾妻八郎・吾妻太郎助亮・吾妻四郎助光の名がみえる。承久三(1221)年に勃発した承久の乱において吾妻助光が戦死したことにより前吾妻氏は滅亡したと言われている。その後、嘉祐年間(1235~38年)に、前吾妻氏と同様、秀郷流藤原氏を称する(下川辺)、行家が鎌倉幕府より吾妻郡を賜った。これを学界では、便宜的に後吾妻氏と称している。貞和5(1349)年に吾妻行盛が里見義侯との争いで戦死し、後吾妻氏は滅亡したとの伝承がある。東吾妻町大字岩井の長福寺五輪塔に刻まれた「藤原行盛」がこの吾妻行盛であるとされるが、戦死の一件については疑問視もされている。

14世紀末になると、この地域は秀郷流藤原氏の齋藤氏が台頭してくる。永禄四(1516)年の上杉輝虎の関東出兵時「関東幕注文」には、「岩下衆 齋藤越前守 六葉柏」とあり、齋藤氏が、本遺跡の北西約3.5kmに位置する岩下城を中心に勢力を張ったことが窺える。

16世紀前半には温川上流の手子丸城(大戸城)に拠った大戸氏が勢力を伸ばし、三島地区の西約3kmに位置する根小屋城に入っている。根小屋城跡は、故山崎一氏によつて縄張りなどが想定されている。根小屋城跡と同時に根古屋川を挟んだ対岸の根小屋B遺跡や、その東側に位置する根小屋遺跡も調査が行われた。

永禄六(1563)年、甲斐・信濃を領した武田信玄の上野国西部への侵攻により、大戸氏は武田氏に従属し、武田

氏の武将真田幸隆により齋藤氏の居城であった岩下城が落城し、岩櫃城が武田氏の拠点となった。これによって吾妻郡域は武田氏の支配下となる。その後岩櫃城は天正十(1582)年の武田氏の滅亡後に独立した真田氏の支配下となり、元和元(1615)年に江戸幕府によって発せられた「一国一城令」により破却されるまで存続した。この岩櫃城は、令和元年10月16日に国指定となっている。

吾妻川流域は中世城館が多い地域として知られているが、こうした中世・戦国期における割権・勢力争いの結果であることは言うまでもない。

徳川家康の江戸入府後、根小屋城跡のある三島村は引き続き真田氏の支配下にあった。そして天和二(1682)年に天領になり、文政七(1824)年には御三卿清水徳川家の支配下となるが、その後の安政二(1855)年には、再度天領となつた。

この間、天明三(1783)年には浅間山が噴火して群馬県南部に火山灰(As-A)を降下させ、吾妻川流域では噴火に伴う泥流被害が知られている。ハッツダム建設に伴う発掘調査でも数多くの泥流下の遺跡が確認され注目を集めている。

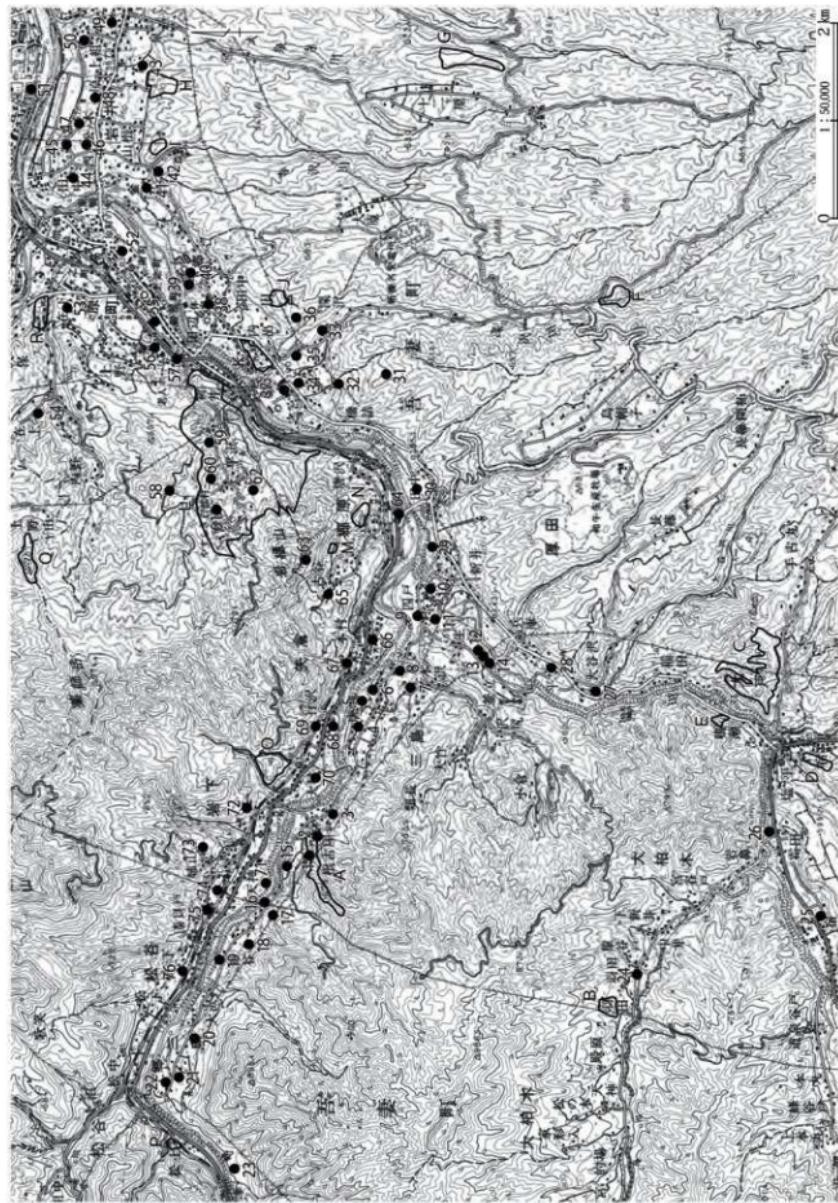
東吾妻町三島でも最上流部に位置する上郷岡原遺跡や上郷西遺跡では、泥流によって埋没した建物や耕作地が検出されている。その中でも検出された麻畑からは、収穫が開始された当初の様子が克明に現れている。

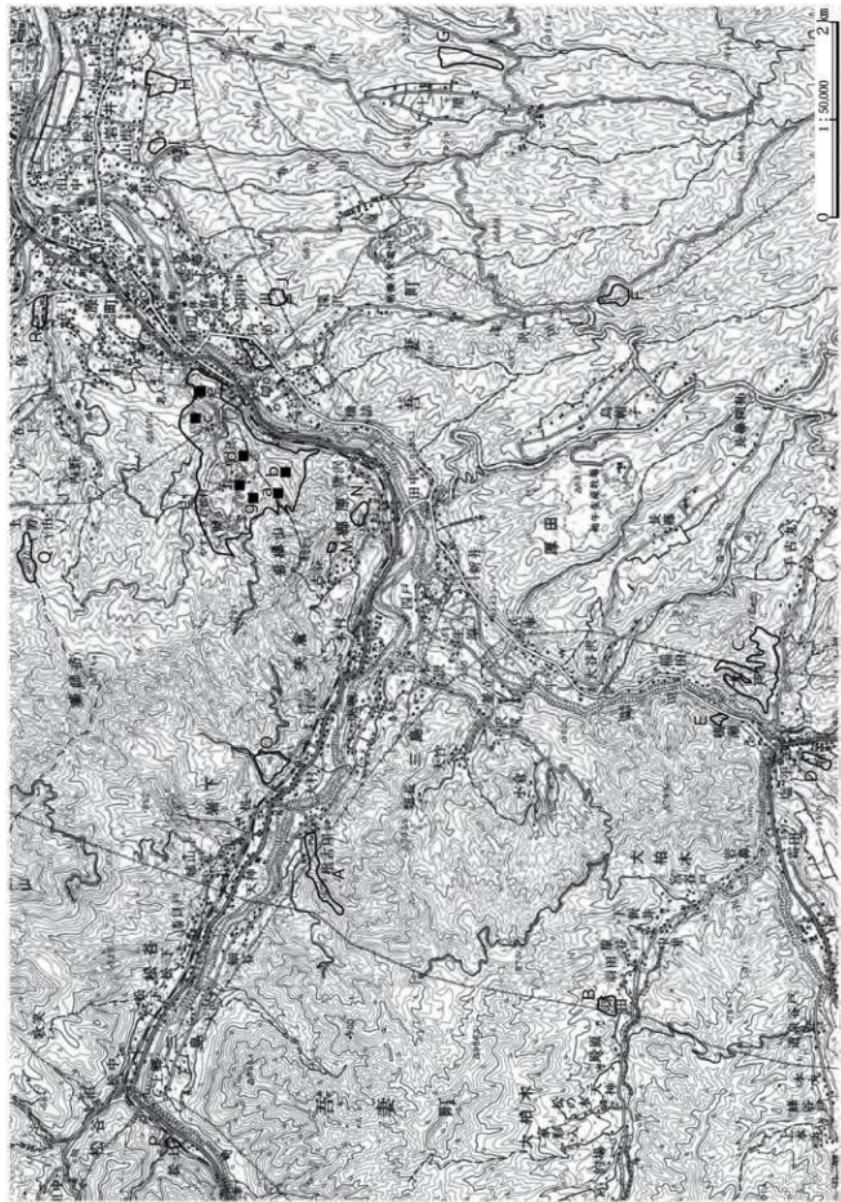
吾妻西バイパスの発掘調査では、唐堀遺跡や厚田中村遺跡から泥流で埋没した水田や畑が検出されている。

なお、吾妻西バイパス建設に伴い中近世の遺構を検出した遺跡は根小屋遺跡、根小屋B遺跡、根小屋城跡、四戸遺跡、厚田中村遺跡、新井遺跡、唐堀遺跡、唐堀B遺跡、唐堀C遺跡、細谷E遺跡がある。なお、細谷E遺跡では鍛冶遺構や土坑が検出され注目を集めている。これらの遺跡群は同一の河岸段丘の上に位置している。

根小屋城

根小屋城については、江戸時代に書かれた「吾妻軍記」に根小屋城の記載がある。その後、1936(昭和11)年に刊行された『群馬縣吾妻郡誌』に簡単に取り上げられている。本格的な研究は、山崎一氏による『群馬縣古城壁址の研究』に縄張り図を加えた成果がある。また、興亡については、山崎武夫氏による『吾妻郡城壁史』に詳しく記載されている。





第7図 中世城館(国土地理院「中之条地形図」[草津]・中之条)図版を編集・加工

第2表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	縦文	弥生	古墳	古代	中近世	種別	参考・引用文献
1	根小屋城跡	東吾妻町三島	○		○	○	○	城館、他	
2	根小屋B遺跡	東吾妻町三島			○	○	○	その他	39
3	根小屋遺跡	東吾妻町三島			○	○	○	集落	39
4	山城C遺跡	東吾妻町三島	○	○	○	○	○	集落、他	38
5	唐堀遺跡	東吾妻町三島		○				古墳	2・37
6	唐堀B遺跡	東吾妻町三島		○		○		集落	33
7	上反遺跡	東吾妻町三島	○					散布地	48
8	万木沢B遺跡	東吾妻町三島		○	○			散布地	43
9	西田遺跡	東吾妻町三島		○	○	○		集落	35
10	西田の古墳群	東吾妻町三島	○	○				集落・古墳	36
11	鐘乳跡	東吾妻町三島		○				散布地	55
12	生原遺跡	東吾妻町三島		○				古墳	10
13	石村下古墳	東吾妻町三島		○				古墳	55
14	上古墳	東吾妻町三島		○				古墳	51・54
15	綱谷E遺跡	東吾妻町三島			○	○		生産、他	39
16	綱谷A遺跡	東吾妻町三島	○					散布地	55
17	綱谷C遺跡	東吾妻町三島	○		○			散布地	55
18	綱谷B遺跡	東吾妻町三島	○		○			散布地	30
19	綱谷A遺跡	東吾妻町三島	○					散布地	55
20	上野B遺跡	東吾妻町三島	○		○			集落、慈城	25
21	上郷A遺跡	東吾妻町三島	○	○	○			集落、慈城、他	23・29
22	上郷回原遺跡	東吾妻町三島	○	○	○	○		集落、慈城	26・27・31
23	上郷西遺跡	東吾妻町三島	○		○			集落、生産	28
24	下中遺跡	東吾妻町大柏木	○					散布地	55
25	下宿遺跡	東吾妻町本宿			○			散布地	55
26	瀬田遺跡	東吾妻町大戸	○					散布地	24
27	平古墳	東吾妻町大戸		○				古墳	51・54
28	平遺跡	東吾妻町大戸		○				散布地	55
29	新井遺跡	東吾妻町厚田	○	○	○			集落	40・41・42・44
30	厚田中村遺跡	東吾妻町厚田		○				水田、畠	22・34
31	川戸橋原遺跡	東吾妻町川戸	○					その他	17
32	川戸太田遺跡	東吾妻町川戸			○			散布地、他	55
33	玉科遺跡	東吾妻町川戸		○	○			散布地、古墳	54
34	上ノ宮遺跡	東吾妻町川戸			○			散布地	55
35	深沢遺跡	東吾妻町川戸			○			集落	55
36	水上遺跡	東吾妻町川戸			○			集落	55
37	川戸神社西古墳	東吾妻町川戸			○			古墳	51・54
38	下郷A遺跡	東吾妻町川戸			○			散布地	55
39	下郷古墳群71号墳	東吾妻町川戸	○	○				集落、古墳	20
40	下郷古墳群	東吾妻町川戸			○			集落、古墳	16
41	金井廃寺跡	東吾妻町金井		○	○			寺院、古墳	1
42	岩井寺沢古墳	東吾妻町岩井			○			古墳	51
43	小田沢遺跡	東吾妻町岩井			○	○		散布地、古墳	49・53
44	岩井寺古墳群	東吾妻町岩井			○			古墳	51・54
45	田中遺跡	東吾妻町岩井	○		○			散布地	55
46	センネンジ遺跡	東吾妻町岩井	○	○		○	○	集落	14・55
47	白山神社遺跡	東吾妻町岩井			○	○		散布地	46
48	岩井寺の木遺跡	東吾妻町岩井	○	○		○		集落、古墳	14・55
49	瀬訪塚古墳	東吾妻町岩井			○			古墳	55
50	植栗舞台遺跡	東吾妻町植栗			○	○		集落	14・55
51	川端遺跡	中之条伊勢町		○	○	○		集落	55
52	原町下ノ町古墳群	東吾妻町原町			○			古墳	51・54
53	東ノ原遺跡	東吾妻町原町		○	○	○		散布地、集落	55
54	上須郷遺跡	東吾妻町原町			○			集落	4
55	原町駅遺跡	東吾妻町原町			○			散布地	55
56	瀬訪前遺跡	東吾妻町原町		○	○	○		集落、古墳、生産	13

順	遺跡名	所在地	縦文	弥生	古墳	古代	中近世	種別	参考・引用文献
57	普尊寺前遺跡	東吾妻町原町	○		○			散布地、墓、他	8
58	磐舟穴遺跡	東吾妻町原町	○					墓、他	55
59	道心穴遺跡	東吾妻町原町	○					散布地	55
60	金仏塚遺跡	東吾妻町原町	○		○			集落	7
61	岩槻城北側遺跡群	東吾妻町原町	○		○			集落	6
62	岩槻城跡	東吾妻町原町	○		○			散布地	19
63	岩槻山鷹の巣	東吾妻町原町		○				墓	47
64	郷原遺跡	東吾妻町郷原			○			散布地、他	3・11・15
65	古谷遺跡	東吾妻町郷原		○				散布地	55
66	ぼたん塚古墳	東吾妻町矢倉	○	○				散布地、古墳	12・51・54
67	泡野古墳	東吾妻町矢倉		○				古墳	51・54
68	胸塚古墳	東吾妻町矢倉		○				古墳	51・54
69	行沢古墳	東吾妻町矢倉		○				古墳	51・54
70	前畠城跡	東吾妻町岩下		○	○	○		散布地、集落、他	9・15
71	弁天瀬遺跡	東吾妻町岩下	○					散布地	55
72	机古墳	東吾妻町岩下		○				古墳	55
73	神山の石組かまど	東吾妻町岩下		○				集落	52
74	天神遺跡	東吾妻町岩下		○	○	○		散布地	55
75	漆貝戸遺跡	東吾妻町岩下			○			散布地	55
76	松谷松下遺跡	東吾妻町松谷			○			集落	18

第3表 中世館一覧表

	遺跡名	所在地	存続期間 (推定・伝承)	種 別	参考・引用 文献
A	根小屋城	東吾妻町三島	16世紀	掘切、堅掘、戸口、腰郭、柵、門	5・49・53
B	羽田城(大柏木城)(芳の城)	東吾妻町大柏木	16世紀	掘、掘切、土塁、戸口、堅掘、土居、腰郭、帯郭	5・49・53
C	大戸城(手子丸城)	東吾妻町大戸	16世紀	掘切、腰郭、戸口、堅掘、土居、井戸、根小屋	5・49・53
D	大戸平城	東吾妻町大戸	16世紀	掘切、土居、腰郭、戸口	5・49・53
E	千人窟陣城	東吾妻町大戸	天正11年	腰郭	5・49・53
F	山の堀屋城	東吾妻町川戸	16世紀	掘切、土居、腰郭	5・49・53
G	中峯城	東吾妻町植柳	16世紀	掘切、腰郭	5・49・53
H	小田沢の砦	東吾妻町岩井	天正10年	掘	5・49・53
I	先陣跡の砦	東吾妻町岩井		堅掘	5・53
J	城峯城	東吾妻町川戸		掘、土居、腰郭	5・53
K	内出城	東吾妻町川戸		掘、土居	5・49・53
L-a	岩櫃城	東吾妻町原町	16世紀	本城、柳沢城、天狗丸、平沢、根小屋等からなる	5・49・53
L-b	(岩櫃本城)	東吾妻町原町	16世紀	館、桥形戸口、掘切、堅掘、土居、腰郭、柵台	5・49・53
L-c	(柳沢城)(岩戻の砦)	東吾妻町原町	16世紀	掘切、腰郭、土居、戸口	5・49・53
L-d	(天狗の丸)	東吾妻町原町	16世紀	掘、戸口、土居、腰郭、堅掘	5・49・53
L-e	(新井の砦)(番城)	東吾妻町原町	16世紀	掘、掘切、腰郭、堅掘	5・49・53
L-f	(平沢根小屋)	東吾妻町原町	16世紀	掘、土居	5・49・53
L-g	志摩小屋	東吾妻町原町	中世	館、掘、土堀	5・49・53
M	古尾瀬(潜龍院)	東吾妻町郷原	天正10年	石垣	5・49・53
N	郷原城	東吾妻町郷原	中世	城館	55
O	岩下城	東吾妻町岩下	16世紀	掘切、土堀、堅掘、腰郭、戸口	5・49・53
P	樺の沢の砦	東吾妻町松谷	16世紀	掘切、腰郭	5・49・53
Q	高野平城(四阿山城)	中之条町山田	16世紀	掘切、土居、腰郭	49・53
R	稲荷城	東吾妻町原町	16世紀	掘、土居、戸口、堅掘	5・49・53

以下、根小屋城について山崎一氏の見解を掲載する。

「三島根小屋城」

吾妻町三島字根古谷の三島根小屋城は鉄塚と呼ぶ丘城の部分とその西七〇〇mに主郭をもつ斥候山(城山)の二つの部分から成る。斥候は「もの見」の意であるが単なる物見郭ではなく明らかに鉄塚を下曲輪とした要害城である。

鉄塚は長さ二〇〇m、幅五〇mの平坦な丘上の城で北、東、南は高さ四一五〇mの急斜面に守られ、数個の別郭になっていたらしいが今は不明である。若干の腰曲輪がある。

ある。

頂上の本丸は径一〇mにすぎず、東から南に腰曲輪をめぐらし、西南に二条の堀切りと武者屯をもつ。東にも二つの堀切りがあつて段々下りに九〇m程下った所からやや広い郭取りがなされ、そのあたり一五〇mの間が城の中核である。ここには八個程の郭があつて土居や井戸跡も見える。

はじめ江見氏の城で、江見山城守のとき齊藤憲広に城を奪われて信濃に走って武田信玄に属した。その跡へ浦野下野守が入った。」

参考・引用文献

1. 吾妻町教育委員会1979『金井庵寺跡』
2. 吾妻町教育委員会1983『唐塙道路』
3. 吾妻町教育委員会1985『郷原道路』
4. 吾妻町教育委員会1992『上須賀道路』
5. 吾妻町教育委員会1992『吾妻町指定史跡 岩櫃城跡一保存整備計画策定報告書一』
6. 吾妻町教育委員会1994『岩櫃城北側遺構群遺跡』
7. 吾妻町教育委員会1994『念仏塚遺跡』
8. 吾妻町教育委員会1998『尊導寺前道路』
9. 吾妻町教育委員会1998『前畠道路』
10. 吾妻町教育委員会1998『生原道路』
11. 吾妻町教育委員会1999『郷原道路』
12. 吾妻町教育委員会2002『岩島 4号墳』
13. 吾妻町教育委員会2004『諒訪前道路 I』
14. 吾妻町教育委員会2004『町内道路 II 小泉天神道路』
15. 吾妻町教育委員会2006『町内道路 III 各種開発事業に伴う試掘確認調査報告書』
16. 東吾妻町教育委員会2011『東吾妻町 下郷古墳群遺跡』
17. 東吾妻町教育委員会2011『門戸横原道路』
18. 東吾妻町教育委員会2014『松谷松下遺跡』
19. 東吾妻町教育委員会2016『東吾妻町指定史跡 岩櫃城跡一平成25年度第1次発掘調査観察報告書一』
20. 東吾妻町教育委員会2016『下郷古墳群71号墳』
21. 東吾妻町教育委員会2018『東吾妻町指定史跡 岩櫃城跡総合調査報告書』
22. 東吾妻町教育委員会2020『厚田中村 2 道跡』
23. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2005『久々戸遺跡 (2)・中郷 II 遺跡 (2)・西ノ上道路・上郷 A 遺跡』
24. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『霜田遺跡』
25. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『上郷 B 遺跡・廣石 A 遺跡・二反沢遺跡』
26. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『上郷岡原遺跡 (1)』
27. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『上郷岡原遺跡 (2)』
28. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『上郷西遺跡』
29. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『上郷 A 遺跡 (2)』
30. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『細谷 B 遺跡』
31. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『上郷岡原遺跡 (3)』
32. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2014『長野原城・林中原 1 遺跡』
33. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2017『唐塙 B 遺跡』
34. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2018『厚田中村遺跡』
35. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2020『四戸の古墳群』
36. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2020『四戸の古墳群』
37. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2021『唐塙遺跡 (1)』
38. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2021『唐塙 C 遺跡』
39. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2021『細谷 E 遺跡・根小屋 遺跡・根小屋 B 遺跡』
40. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2015年報34』
41. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2016年報35』
42. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2017年報36』
43. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2018年報37』
44. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2018年報38』
45. 小池富次郎他1922『群馬縣吾妻郡誌』吾妻教育會
46. 太田村註解編委員会1965『あがつま太田村誌』
47. 杉原社介1968『群馬県岩櫃山における出生時代の墓誌』『考古学集刊』第3巻4号 東京考古学会
48. 岩島村誌編集委員会1971『岩島村誌』
49. 山崎 一・山崎武夫1972『吾妻郡城歴史』西毛新聞社
50. 山崎 一・山崎武夫1972『吾妻郡城歴史』西毛新聞社
51. 群馬県1938『上毛古墳總覽』
52. 群馬県史編さん委員会1986『群馬県史』資料編2 原始古代2 群馬県
53. 群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館跡』
54. 群馬県教育委員会2017『群馬県古墳總覽』
55. 群馬県総合型地理情報システム(GIS)マッピングぐんま「遺跡」

第3章 検出した遺構と遺物

第1節 概要

遺跡地は、以前より山崎一氏により「三島根小屋城」として知られている城館跡である。この城館跡は、鉄塚と呼称される丘陵部分と主郭をもつ候山の二つの部分からなる。発掘調査の対象は、鉄塚と呼ばれる丘陵地を中心とする部分である。鉄塚と呼称されている箇所は、丘陵地の頂部にあたる緩傾斜地に立地されていることから、山崎一氏は下曲輪と想定されており、建物などの施設が存在することが想定された。また、周囲には狭い平坦面も複数みられることから腰曲輪の存在も窺うことが可能であった。発掘調査の対象地は丘陵頂部では比較的緩傾斜地であったが、そこに至る斜面は山城を構築する上で適した急傾斜であるため発掘調査を実施するための安全対策を講じる必要があった。こうしたことから、対象地域全域を発掘調査することは難しく、調査対象地の必要箇所を限定する必要があることから、調査を実施する前に現況の測量を行っている。

現況の測量により複数の腰曲輪とみられる平坦面や堀跡とみられる溝状の窪みを確認することができ、こうした腰曲輪や堀が存在する部分については、遺構の有無を確認する調査を実施するとともに丘陵頂部についてはほぼ全面を対象とした。

発掘調査は、「発掘調査の経過」で記したように2016(平成28)年度に南側の丘陵下部の0区から着手し、2018(平成30)年度に丘陵頂部の1区、2019(平成31)年度に残りの2区~5区の丘陵斜面について実施した。

発掘調査の結果、縄文時代の土坑、古代の土坑、中世の城館に伴うとみられる曲輪、建物、柵、通路、堀、溝、土坑、ピットと近代の墓坑を検出し、調査した。出土遺物は、縄文土器、土師器、陶磁器、石器・石製品、金属製品等がみられた。しかし、遺構に伴うものは、根小屋城関連でも僅かで、縄文時代では、土坑から微細な縄文土器が出土しているだけで、図示した土器、石器はすべて遺構外からの出土である。また、土師器も同様である。

第2節 旧石器時代

発掘調査地には、急傾斜の丘陵地であることから旧石器時代の遺物が存在する可能性は低いと想定された。その中にあって丘陵頂部は緩斜面地が存在することから、旧石器時代の狩猟地の可能性が想定された。そのため範囲を限定して調査を実施した。

発掘調査は、幅1.0m長さ4.0mの調査坑を2箇所に設定し、石器等が出土したときはその周囲を拡張することとした。

調査坑は、1号調査坑がX=62,232、Y=-95,806~-95,809、2号調査坑がX=62,235、Y=-95,763~-95,767である。なお標高は486mと487mほどである。

調査の結果は、ローム土の大部分が流失し、残る堆積は僅かであった。また、石器等の遺物の出土は確認できなかった。

第3節 縄文時代

縄文時代の遺構は、1区と5区からそれぞれ3基の土坑を検出した。これらの土坑から遺物の出土はみられなかったが、埋没土の状態から縄文時代と判断した。また、出土遺物は、縄文土器や石器が遺構外から出土し、縄文土器40点、石器2点を図示し掲載した。

1 土坑

1号土坑

位置 1区、丘陵部のほぼ中央、X=62,232・62,233、Y=-95,768~-95,769に位置する。

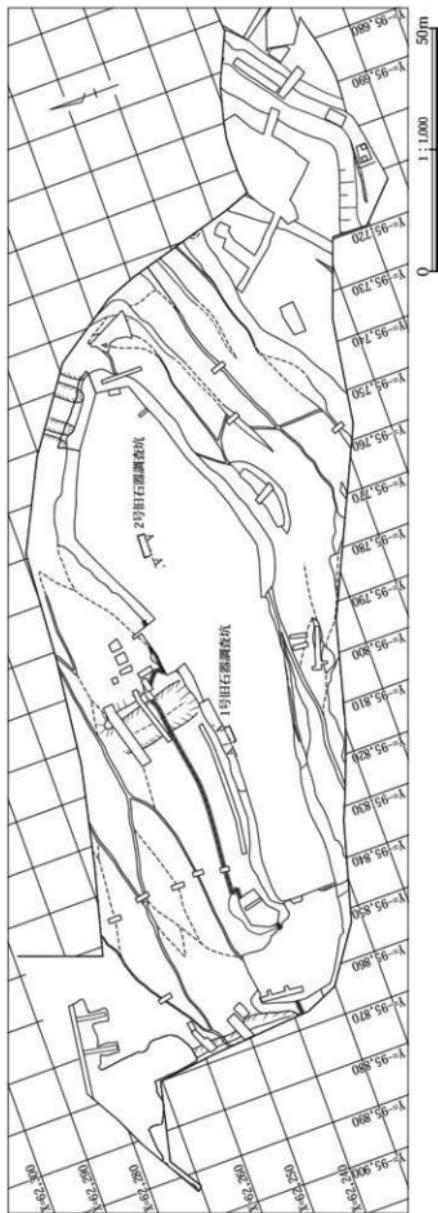
重複関係 他遺構との重複は確認されなかった。

形状 平面はやや角のある楕円形を呈する。断面は箱形に近い形状である。

規模 長軸1.55m、短軸1.22m、深さ0.23mを測る。なお、遺構確認面での標高は487.40mである。

長軸方向 N-52°-E

埋没状態 西側はローム土に近い黄褐色土、東側3分の

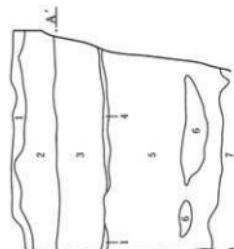


1号古石器調査坑

- 1 黄褐色土 109.3 / φ 1 ~ 3 mmの細・黄・白色粒を少し、φ 1 ~ 3 mmの黄褐色鮮石を僅かに含み、しまりがない。
- 2 にぶい黄褐色土 109.4 / φ 2 ~ 5 mmの細・黄褐色・黄褐色を極かとφ 1 ~ 2 mmの鮮石とみられる粒子を多く含み、φ 20 ~ 40mmの特徴の黒色土を含み、しまりがない。
- 3 淡色土 109.4 / φ 3 ~ 10mmの粗・黄褐色上を少しとしにぶい黄褐色のローム粒子を含む、褐色鮮石を僅かに含み、ややしまりがある。
- 4 にぶい褐色土 109.4 / 褐や砂を含む。

2号古石器調査坑

- 1 にぶい黄褐色土 109.6 / やや柔らかく、粘質土。有機物はみられない。
- 2 黄褐色土 109.5 / 粘性・褐色粒子を含み、しまりがある粘土。
- 3 浅褐色～褐色鮮石 109.8 / ~ 7.5mR7/6 壊かい粒子 (As-YPA) からなる。
- 4 淡灰色シルト 109.5 / 灰山灰層。
- 5 にぶい黄褐色土 7.5mR5/6 灰白色灰・黄褐色鮮石を多量に、φ 10 ~ 15mmの塊・φ 50mmの塊を含み、しまりがある。
- 6 にぶい黄褐色土 7.5mR5/6 み、しまりがある。
- 7 淡色土 7.5mR6-7/6 φ 2 ~ 5 mmの黄色鮮石とにぶい赤褐色・青灰・褐色を少し含む。



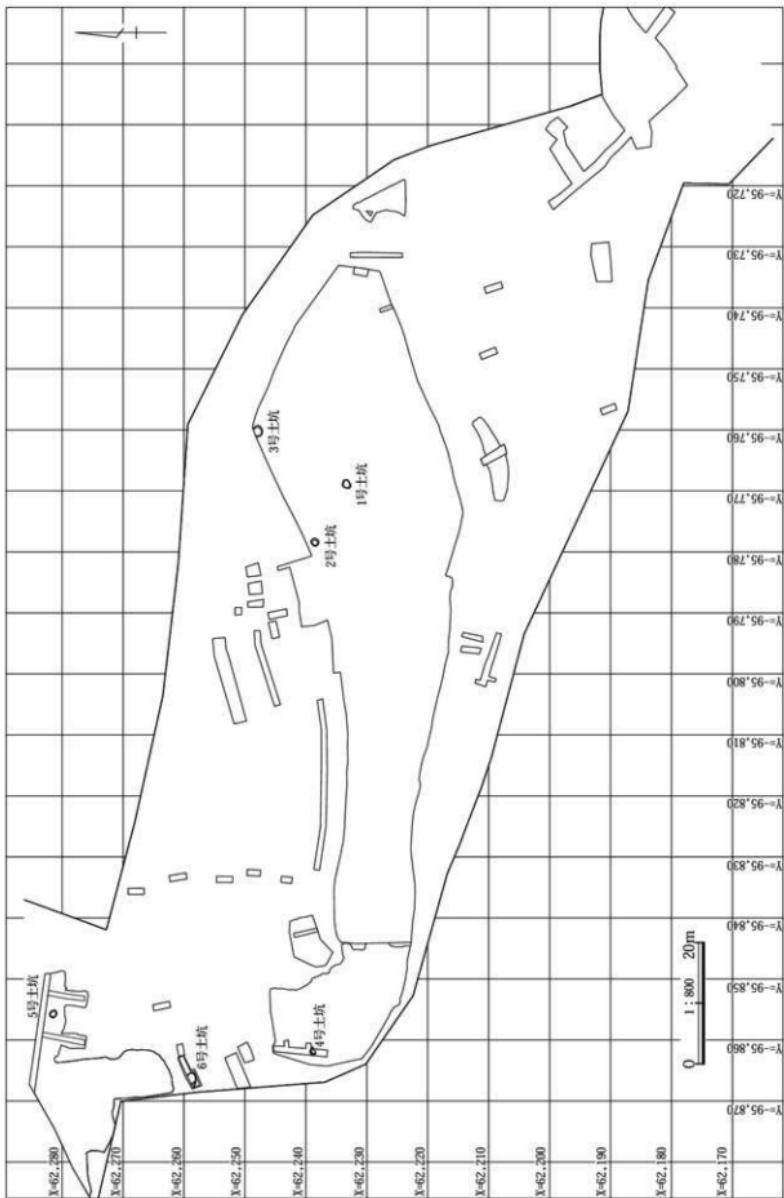
1号古石器調査坑



2号古石器調査坑

第8図 旧石器調査坑位置図、断面図

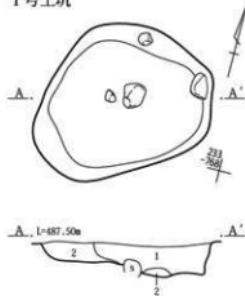
0 1~40 1m



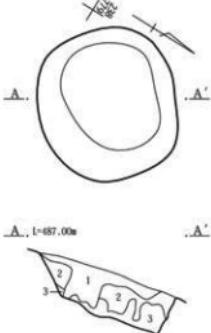
第9圖 綱文時代遺構位置

繩文時代 土坑

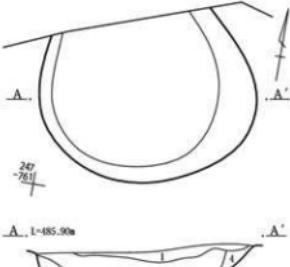
1号土坑



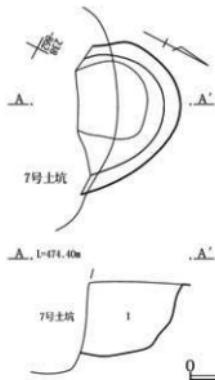
2号土坑



3号土坑



4号土坑



1号土坑

- 黒褐色土10YR3/2 ϕ 30~100mmの黄褐色土ブロックと ϕ 2~10mmのYPkをやや多く、炭化物をわずか含み、しまりがあまりない。
- 黄褐色土10YR5/6 ローム土の流れ込みか、YPkをやや多く含み、しまりがある。

2号土坑

- にぶい黄褐色土10YR4/3 ϕ 1~2mmの黄・黄褐色粒子と ϕ 10~30mmの小礫を僅かに、炭化物をやや多く含み、ややしまりがある。
- 褐色土10YR4/4 黄褐色土ブロック状と炭化物をやや多く、 ϕ 2~4mmの黄褐色軽石を少し含む。
- 褐色土10YR4/6 ϕ 2~7mmの細・黄色粒子をやや多く、 ϕ 5~10mmの礫少し、炭化物を少し含み、固くしまる。

3号土坑

- にぶい黄褐色土10YR4/3 砂質、YPkを少し含み、しまりがあまりない。
- 暗褐色土10YR3/3 炭化物を僅かに、YPkの黄褐色微細粒をやや多く含む。
- 黒褐色土10YR3/2 炭化物を少し、黄褐色ローム土をブロック状に含む。
- 黄褐色土10YR5/6 YPkの褐色軽石を少し含み、しまりがある。

4号土坑

- 灰黄褐色土10YR4/2 ϕ 5~7mmのYP粒子と少量の炭化物、多くのローム粒を含み、しまりがある。

0 1:40 1m

第10図 1~4号土坑遺構図

2は黒褐色土の堆積が観察されている。埋没状況については自然埋没と想定されるが断定には至らなかった。

底面 若干の起伏はみられるが、ほぼ平坦である。底面内の比高差は8cmであった。

出土遺物 10~20cm大の礫が数点と繩文土器の細片が出土している。

所見 繩文時代の土坑と想定される。用途等については判断には至らなかった。

2号土坑

位置 調査対象地の中央、1区、丘陵部のほぼ中央、X=62,237~62,239, Y=-95,777~-95,779に位置する。

重複関係 他遺構との重複は確認されなかった。

形状 平面は南北方向に長い楕円形を呈す。断面は逆台形状を呈する。

規模 長軸1.28m、短軸1.22m、深さ0.49mを測る。なお、遺構確認面での標高は487.90mである。

長軸方向 N-40°-E

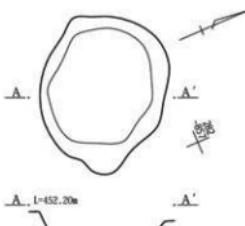
埋没状態 底面付近に堆積している褐色土からは炭化物の小片が確認されている。全体的に不自然な堆積が観察されているが、人為的な埋め戻しか自然埋没かの断定には至らなかった。

底面 ほぼ平坦であるが、底面内の比高差が30cmほどある。

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

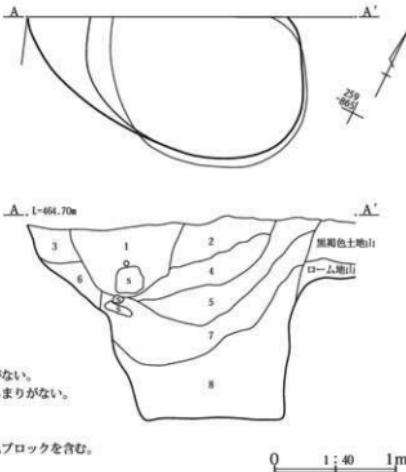
所見 埋没土から繩文時代の土坑と想定される。用途等

5号土坑



6号土坑

6号土坑



第11図 5・6号土坑遺構図

については判断には至らなかった。

3号土坑

位置 調査対象地の中央、1区、丘陵部のほぼ北東部、 $X=62,247 \sim 62,248$ 、 $Y=-95,759 \sim -95,761$ に位置する。

重複関係 他遺構との重複は確認されなかった。

形状 平面はやや歪みのある円形を呈す。断面は底面と側面の境が明確ではない逆台形状を呈する。

規模 長軸1.78m、短軸1.36m、深さ0.42mを測る。なお、遺構確認での標高は485.90mである。

長軸方向 N-67°-W

埋没状態 土層断面の観察では東側の4がやや不自然な堆積状態であるが、全体的には周囲から流れ込んだ様子がみられることから、自然埋没と判断できる。

底面 ほぼ平坦である。

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 埋没土から縄文時代の土坑と想定される。用途等については判断には至らなかった。

4号土坑

位置 調査対象地の中程、1区北西部、 $X=62,238 \sim 62,239$ 、 $Y=-95,861 \sim -95,862$ に位置する。重複関係にある7号土坑によって南半を欠く。

重複関係 7号土坑と重複関係にあり、新旧関係は本土坑のほうが古い。

形状 詳細は不明であるが、平面は楕円形を呈す。断面は底面と側面の境に屈曲をもつが半円形に近い形状である。

規模 残存範囲で長軸1.18m、短軸0.82m、深さ1.10mを測る。なお、遺構確認面での標高は474.32mである。

長軸方向 N-32°-W

埋没状態 土層断面の観察ではローム土に近い黄褐色土によって短時間に埋没したとみられる。埋没土が單一土層のため埋没状態については明確ではないが、自然埋没と想定できる。

底面 中に向かいやや弧状を呈するが、平坦に近い。

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 確認面や埋没土から縄文時代の土坑と想定される。用途等については判断には至らなかったが、周囲の状況から落とし穴の可能性が高い。

5号土坑

位置 調査対象地の北端、5区北東部、 $X=62,281 \sim 62,282$ 、 $Y=-95,857 \sim -95,858$ に位置する。

重複関係 他遺構との重複は確認されなかった。

形状 平面は円形に近い形状を呈す。断面はほぼ逆台形

状を呈する。

規模 長軸1.33m、短軸1.03m、深さ0.21mを測る。なお、遺構確認での標高は452.20mである。

長軸方向 N-60°-W

埋没状態 調査時の所見ではローム土に近い土砂によって埋没しているが、堆積状態については不明である。

底面 ほぼ平坦である。

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 埋没土から縄文時代の土坑と想定される。用途等については判断には至らなかった。

6号土坑

本土坑は当初、4号竪堀の範囲確認を目的とした調査坑(24号トレンチ、42号トレンチ)で検出した。当初、調査の所見では4号竪堀頂部の可能性を想定したが、精査を行ったところ側面が確認面より広がることが判明し、形状から袋状土坑と判断した。なお、北側の一部は安全対策上掘削が不可能であった。

位置 調査対象地の西部、5区北西部、X=62,258・62,259、Y=-95,865～-95,867に位置する。

重複関係 調査範囲内での平面は他遺構との重複は確認されなかつたが、土層断面の観察では別遺構の掘り込みが確認されている。

形状 詳細は不明であるが、平面は梢円形を呈す。断面は側面の一部が確認面の上端より膨らむ袋状を呈する。

規模 残存範囲で長軸1.88m、短軸1.55m、深さ1.59m

を測る。なお、遺構確認面での標高は474.32mである。

長軸方向 N-76°-W

埋没状態 土層断面の観察では西側に別遺構の掘り込みが確認できるが、ほぼ周囲から土砂が流れ込んだ様子がみられる事から自然埋没と想定できる。

底面 中央に向かいやや弧状を呈するが、平坦に近い。

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 断面形状や埋没土から縄文時代の土坑と想定される。用途等については形状から貯蔵用と想定されるが、この丘陵斜面に貯蔵施設を設ける必要性が窺えないことから用途については保留としたい。

2 遺構外出土遺物

縄文土器40点と石器2点を図示した。

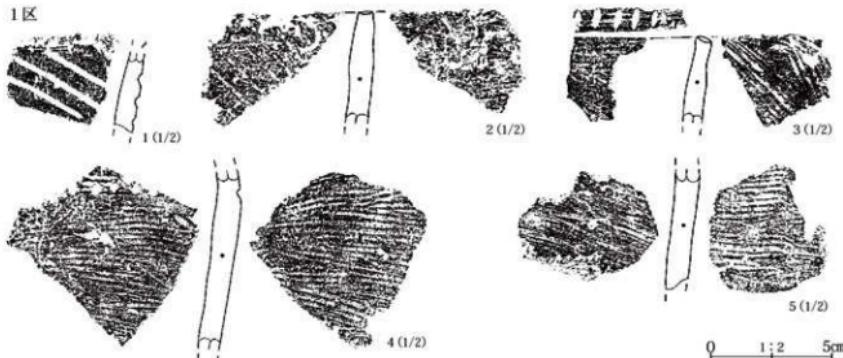
縄文土器は早期沈線文、条痕文、鞠ヶ島台式、前期黒浜式、有尾式、諸磯a式、諸磯c式、中期五領ヶ台2式、勝坂I式、阿玉台Ib式などが出土している。

出土位置は1区28点、5区12点である。1区では早期6点、前期18点、中期4点、5区では早期5点、前期8点と早期が3割、前期が約6割、中期1割である。

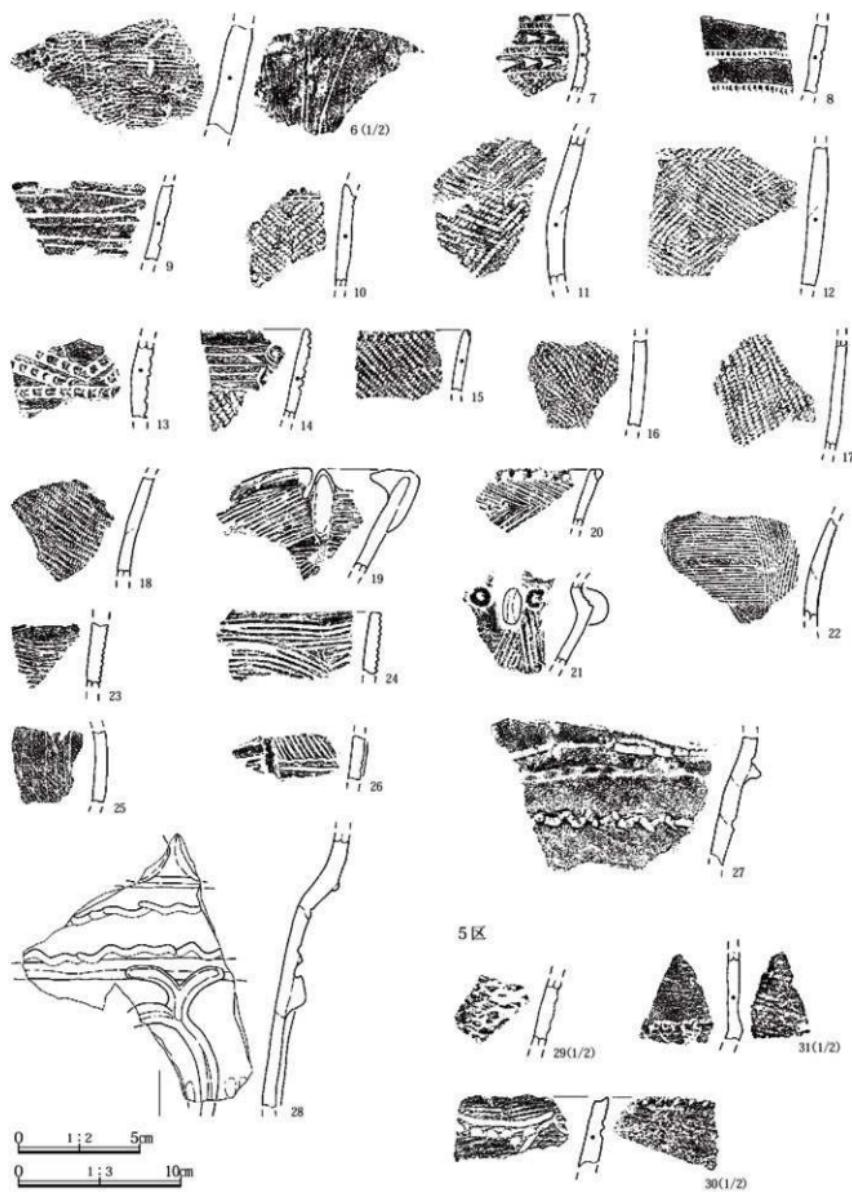
石器は石匙、二次加工のある剥片を各1点ずつ図示した他、黒曜石の剥片7点、棒状礫1点が出土している。

遺構外出土遺物

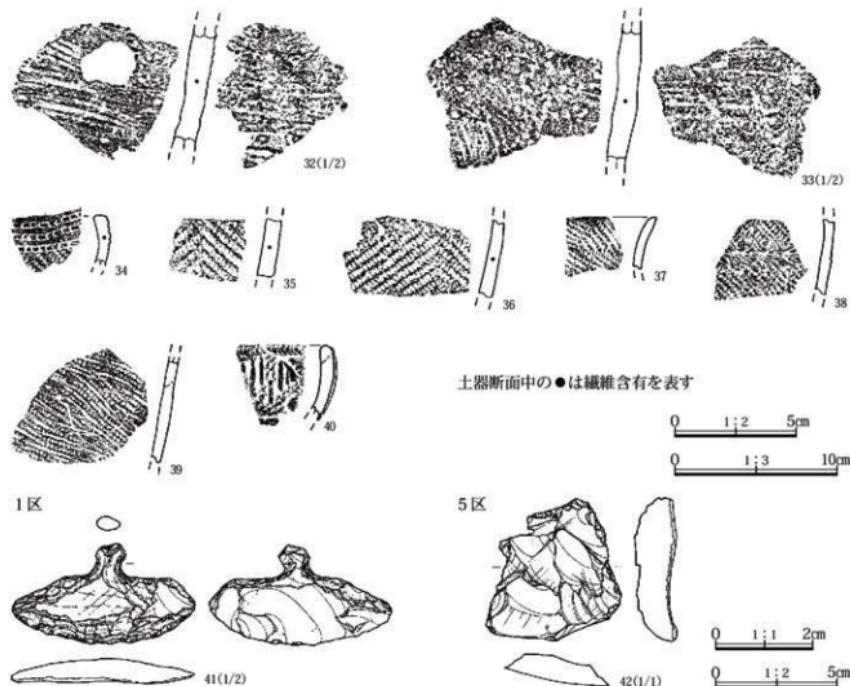
1区



第12図 遺構外出土遺物(1)



第13図 遺構外出土遺物(2)



第14図 遺構外出土遺物(3)

第4節 古代

1 土坑

7号土坑

位置 調査対象地西部、4区北西部、X=62,237・62,238、Y=-95,860～-95,863に位置する。

重複関係 4号土坑と重複関係にある。新旧関係は本土坑のほうが新しい。

形状 確認面での平面形状は梢円形を呈するが、下半は隅丸長方形を呈する。断面は長軸方向が箱形、短軸方向がV字状を呈する。

規模 長軸1.95m、短軸1.53m、深さ1.91mを測る。なお、遺構確認での標高は414.70～415.30mである。

長軸方向 N-60°-E

埋没状態 不明である。

底面 平面形態は長方形を呈し、逆茂木は検出されず。ほぼ平坦である。

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 確認面や形狀から古代と想定される。用途については底面で逆茂木を検出していないが、形狀から落とし穴と判断できる。

8号土坑

位置 調査対象地西部、4区北西部、X=62,242～62,245、Y=-95,860～-95,862に位置する。

重複関係 調査範囲内での平面は他遺構との重複は確認されなかった。

形状 詳細は不明であるが、平面は梢円形を呈す。断面は逆台形状を呈すると想定される。

規模 調査範囲内での長軸2.62m、短軸1.18m、深さ1.38

第3章 検出した遺構と遺物

mを測る。なお、遺構確認での標高は472.70～473.20mである。

長軸方向 N-5°-E

埋没状態 土層断面の観察では標高の高い南側から土砂が流れ込んだ様子がみられることから自然埋没と判断できる。

底面 ほぼ平坦である。

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 埋没土から古代と想定される。用途等については判断には至らなかった。

9号土坑

位置 調査対象地西部、4区西部、X=62,230・62,231、Y=-95,857～-95,859に位置する。

重複関係 調査範囲内での平面は他遺構との重複は確認されなかった。

形状 確認面での平面形状は楕円形を呈するが、下半は圓丸長方形を呈する。断面は長軸方向が箱形、短軸方向がV字状を呈する。

規模 長軸2.31m、短軸1.59m、深さ2.05mを測る。なお、遺構確認での標高は477.90～484.40mである。

長軸方向 N-49°-E

埋没状態 土層断面の観察ではローム土と黒色土が厚さ1cm前後で17～20層ほどレンズ状に堆積し、確認面付近ではAs-Kkの堆積がみられ、自然埋没と想定されたが断定には至っていない。

底面 平面形態は長方形を呈し、逆茂木は検出されず。ほぼ平坦である。

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 確認面付近にAs-Kkが堆積していることや平面や断面形状から古代でも平安時代と想定される。用途については底面で逆茂木を検出していないが、形状から落とし穴と判断できる。

10号土坑

位置 調査対象地西部、4区中央部、X=62,234～62,236、Y=-95,854・-95,855に位置する。

重複関係 調査範囲内での平面は他遺構との重複は確認されなかった。

形状 確認面での平面形状は楕円形を呈する。断面は側面がやや弧状を呈する逆台形状を呈する。

規模 長軸1.90m、短軸1.22m、深さ0.49mを測る。な

お、遺構確認での標高は476.90～477.30mである。

長軸方向 N-65°-E

埋没状態 土層断面の観察では軽石を含む暗褐色土で短時間に埋没していることがみられることから、自然埋没と判断できる。

底面 若干の凹凸は確認できたが、ほぼ平坦である。

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 遺物の出土がみられないため、詳細は不明であるが、埋没土から古代に想定される。

11号土坑

位置 調査対象地西部、4区南西部、X=62,226・62,227、Y=-95,854～-95,856に位置する。西側4分の1は調査対象区外のため全貌は不明である。

重複関係 調査範囲内での平面は他遺構との重複は確認されなかった。

形状 確認面での平面形状は楕円形を呈すると想定されるが、下半は長方形を呈する。断面は長軸方向が箱形、短軸方向が逆台形を呈する。

規模 長軸は調査範囲内で1.66m、短軸1.56m、深さ1.36mを測る。なお、遺構確認での標高は479.90～480.10mである。

長軸方向 N-53°-E

埋没状態 土層断面の観察では壁際に地山の崩落土、中央部にローム土などが不自然に堆積している様子がみられる。堆積自体は不自然であるが、人為的埋没か自然埋没かの判断には至らなかった。

底面 平面形態は長方形を呈し、逆茂木は検出されず。ほぼ平坦である。

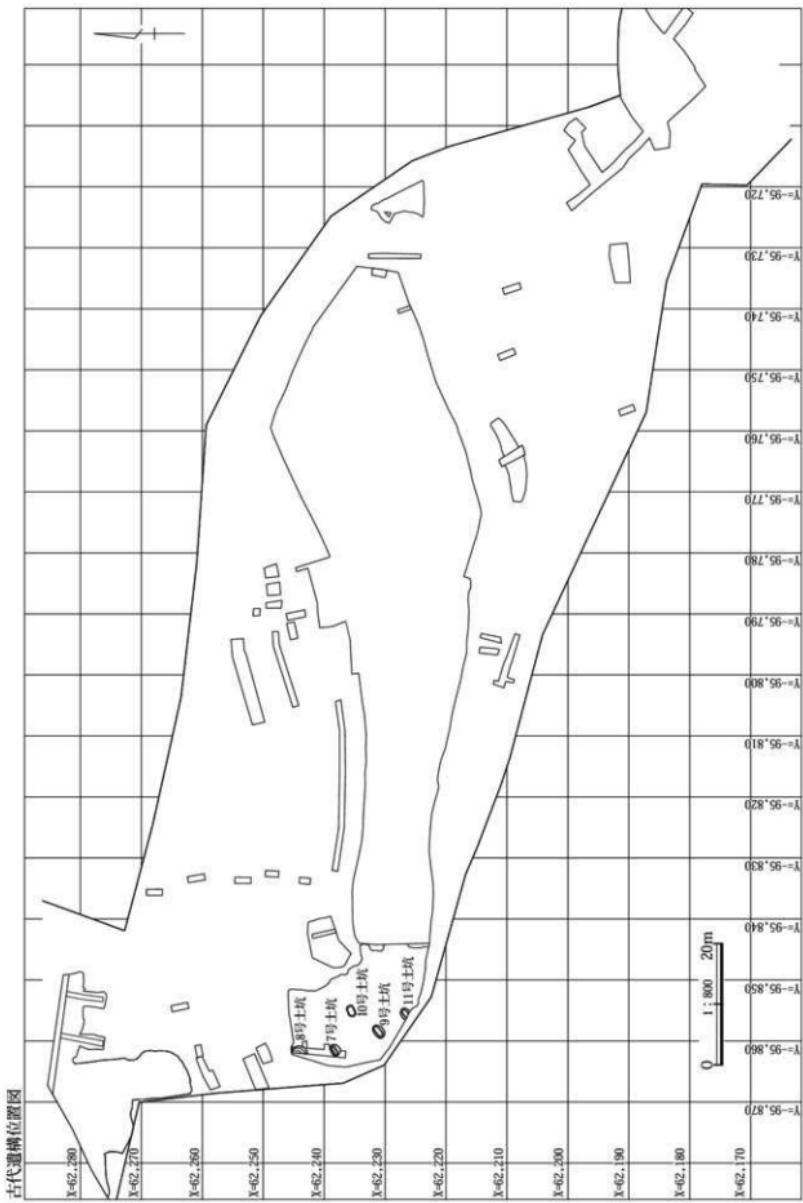
出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 平面や断面形状から古代と想定される。用途については底面で逆茂木を検出していないが、形状から落とし穴と判断できる。

2 遺構外出土遺物

古代の遺物は、土師器が僅かに出土しているだけである。図示した土師器は椀と壺の破片である。出土は1の土師器椀が丘陵頂部である1区西端、2の土師器壺が5区からの出土である。ともに小片のため詳細は不明であるが、1は古墳時代後期の年代観が与えられる。2については器面が摩滅しており、整形が不鮮明であるため断

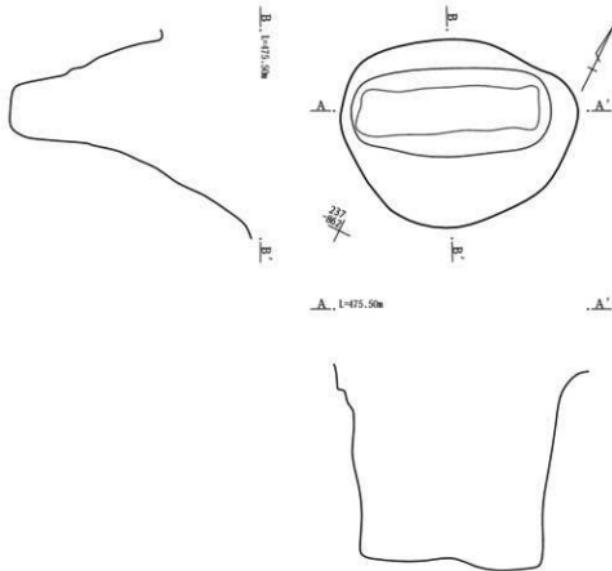
第15圖 古代遺構位置圖



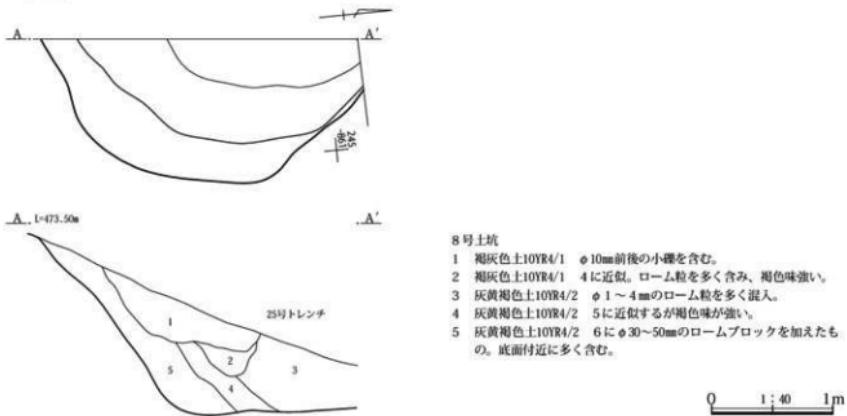
第3章 検出した遺構と遺物

古代 土坑

7号土坑

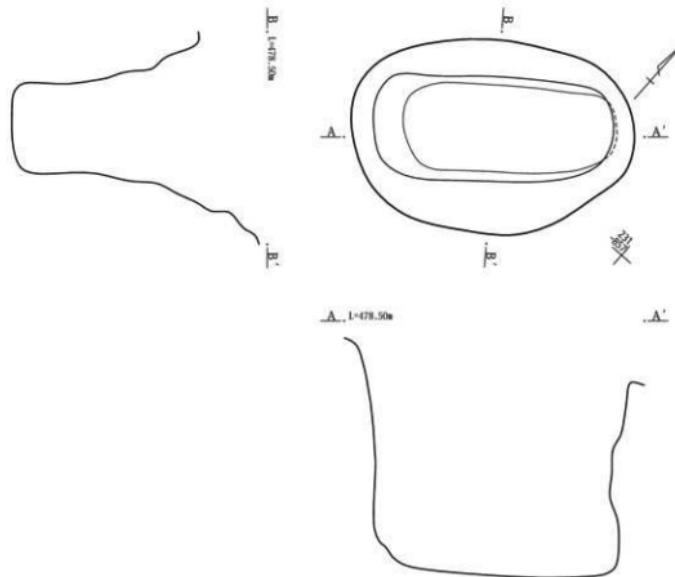


8号土坑

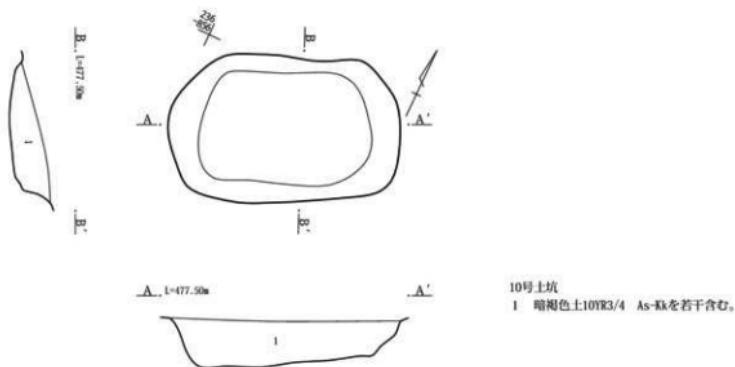


第16図 7・8号土坑遺構図

9号土坑



10号土坑

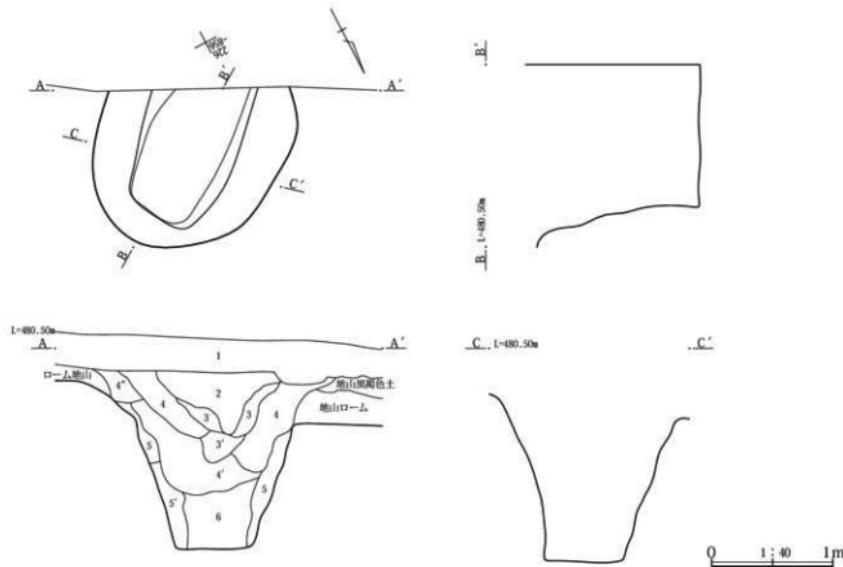


10号土坑
I 暗褐色土10YR3/4 As-EKを若干含む。

0 1:40 1m

第17図 9・10号土坑遺構図

11号土坑

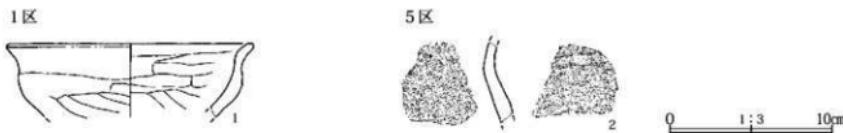


11号土坑

- 1 にぶい黄褐色土10YR7/4 表土。
- 2 にぶい黄褐色土10YR6/4 粗細なローム粒を多く、 $\phi 10\sim15mm$ の小礫を少量含み、しまりがない。
- 3 黄褐色土10YR5/2 粗細なローム粒を多く含み、しまりがない。
- 3' 黄褐色土10YR5/2 ローム粒を少量含む。
- 4 黒褐色土10YR3/1 微細なローム粒・ $\phi 10mm$ のロームブロックと $\phi 10mm$ の小礫を少量含み、しまりがない。
- 4' 黒褐色土10YR3/1 ローム粒を多く含み、しまりがない。
- 4'' 黒褐色土10YR3/1 4よりローム粒を多く含み、しまりがない。
- 5 黒褐色土10YR3/1 ローム粒・ロームブロックを主体とする黄褐色土、しまりがない。
- 5' 黒褐色土10YR3/1 ロームブロックが主体。
- 6 にぶい黄褐色土10YR6/3 ローム粒を主体とするが砂質性のバミスを多く含む。

第18図 11号土坑遺構図

遺構外出土遺物



第19図 遺構外出土遺物

定できないが1と同様な年代観が与えられる。

なお、1区1号土坑と4区29号トレンチから土師器甕

が2点出土しているが、胸部小片のため図示することは

できなかった。

第5節 中世以降

1 城館の概要

概要 根小屋城は、今回発掘調査の対象である「鉄塚」と呼称される下曲輪と下曲輪から西へ約500mに位置する斥候山に配置された主郭からなる。城館全体については第4章に詳しい。ここでは発掘調査対象地での概要について記載する。

発掘調査の対象になった下曲輪は、南側を根古屋川、北東側を吾妻川に挟まれた丘陵地である。丘陵頂部の標高は488m、南側根古屋川側の標高448～450m、北側低地の標高453mと丘陵の傾斜は比高差30m以上ある急傾斜地である。

丘陵部は、東西110m、南北12m～30mほどの広さで標高482～488mと比高差が少ない緩斜面となっており、多くの施設が存在した可能性が窺えた。実際、頂部は1区として調査したが、ここでは建物7棟、門1箇所、柵3条、通路、溝1条などが検出されている。ただし、建物は柱穴の状態から恒久的なものではなく一時的なものであった可能性が窺える。

南側の0区と呼称している丘陵裾の平坦地では小規模な竪穴状遺構1基、柵1条、土坑1基が検出されている。これらの遺構は中世に比定されるが、城館との関係は明確ではない。

斜面では丘陵先端の北東斜面、北斜面で堅堀を窺わせる窓みが確認され、トレンチによる調査を実施した。その結果、3号竪堀は現地表面では8m近い窓地が確認でき大規模な竪堀が想定されたが、実際は上幅2m、深さ1mほどのV字状掘り込みが確認できたにすぎない。

4号竪堀では現地表面では標高470m付近から堅堀と想定できる窓みが確認できたが、実際はもっと下方に設定されていた。また、調査の結果は、大きく崩落した状態で検出されている。

斜面の8箇所では、三日月状に平坦地がみられたことから腰曲輪の可能性が窺えた。しかし、調査を行ってみると腰曲輪と断定できるものは少なかった。

その反面、現地表面では確認できない施設も検出している。下曲輪と主郭間の凹地では比較的規模の大きな堀

切が検出され、主郭防衛の目的がみられた。

根小屋城の調査では、丘陵頂部以外は急な傾斜地であったため、調査にあたっては安全対策を講じる必要が生じたため部分的な調査となり、全貌解明には至らなかつたのが惜しまれる。

調査坑(トレンチ)による調査

調査地は中世の城館であることから急傾斜の丘陵地に存在している。現地での地表面観察や調査前に行った測量においても斜面に腰曲輪や堅堀の存在を窺い知ることができた。このような急傾斜地での遺構調査を実施するにあたり、作業の安全確保が重要課題であった。そのため、丘陵頂部の1区を除き調査範囲を現況図で確認できる腰曲輪や堅堀、通路の想定できる箇所に絞り込み、調査を実施することとした。その対象地の調査にあたっては、斜面側にテラス状の作業所を設置し、最初に想定した遺構の存在を確認するため調査坑(「トレンチ」と呼称)による調査を行い、遺構が確認できたときは周囲を拡張し、発掘調査を行った。なお、安全対策上の作業所を設定したため、拡張した箇所においては、斜面側の掘削を行うことができなかつた。

調査坑(トレンチ)は、第25図のように44箇所に設定した。その結果、一部で遺構が確認できることから周囲を拡張して調査した。なお、土坑やピットなど小規模な遺構については調査坑内の調査に留めた。調査した遺構についてはそれぞれの遺構種の項で記載してある。

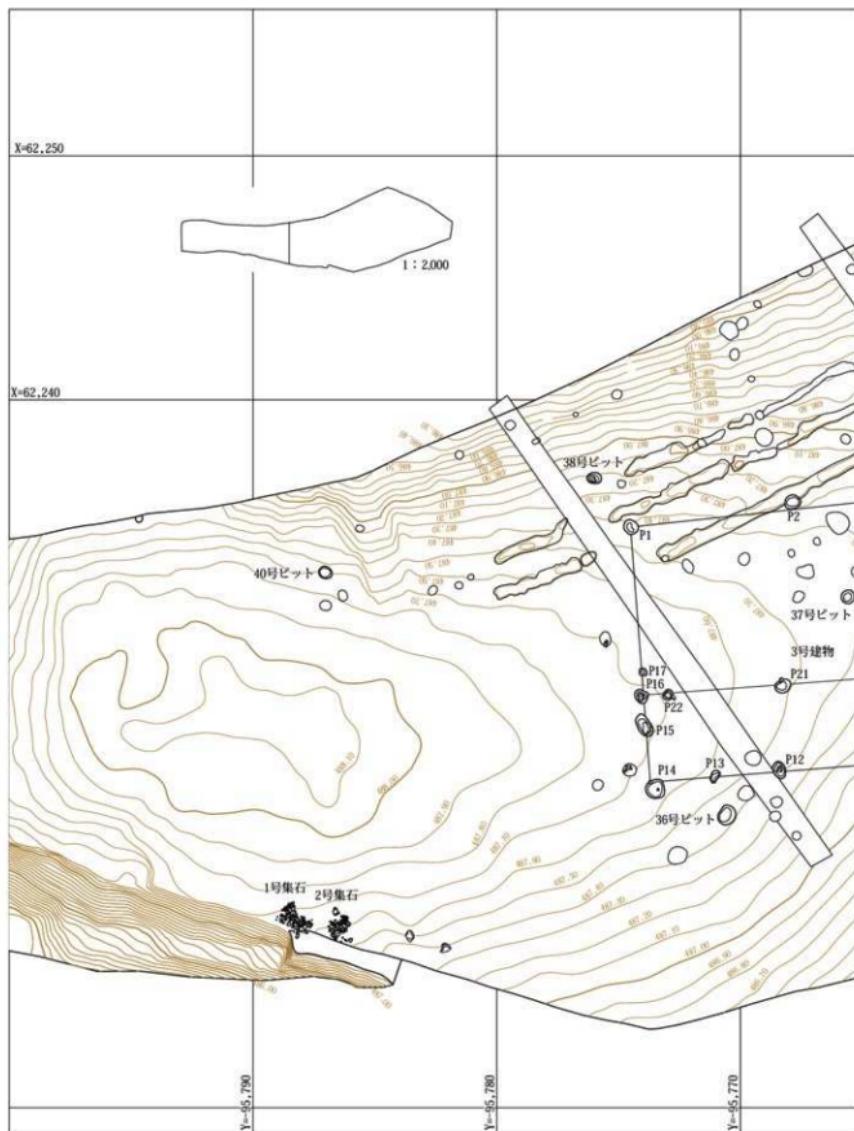
なお、調査坑(以下、トレンチと呼称)での想定した遺構と調査の結果は下位のとおりである。

1号トレンチ 丘陵麓の平坦地であることから建物などの施設が存在していた可能性が窺えたため、こうした遺構を確認する目的で調査を行った。調査の結果、遺構などの検出には至らなかつた。

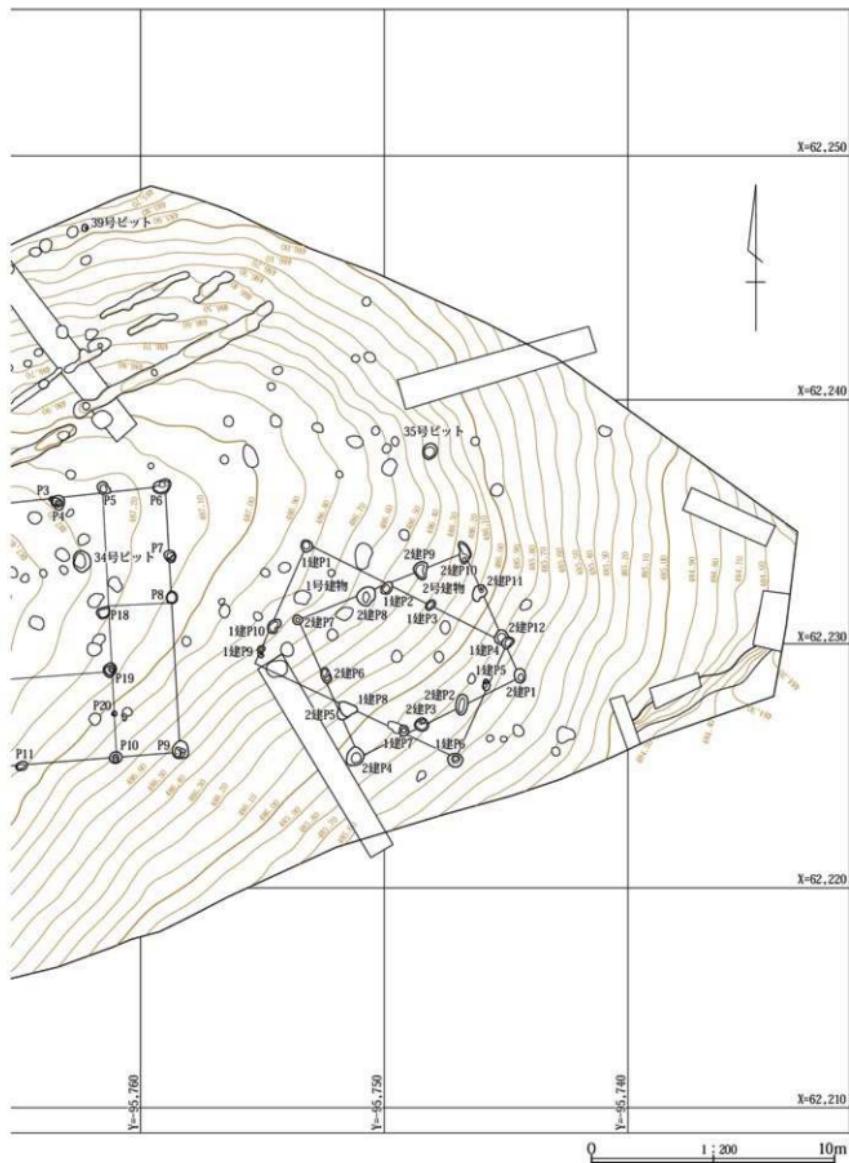
2号トレンチ 丘陵麓の平坦地であることから建物などの施設が存在していた可能性が窺えたため、こうした遺構を確認する目的で調査を行つた。

調査の結果、遺構などの検出には至らなかつた。また、断面観察では現在は比較的平坦であるが、当時は根古屋川に向かったやや傾斜のある地形であることが判明している。

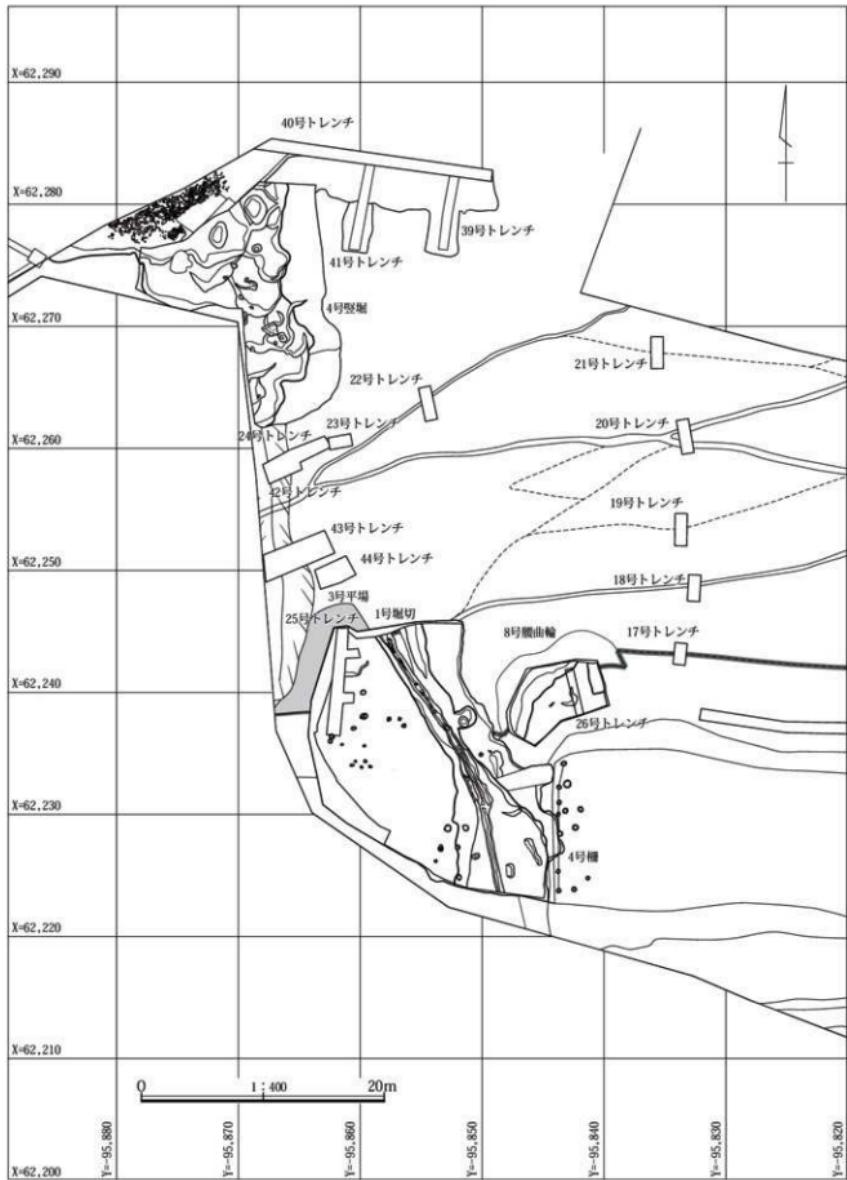
3号トレンチ 現況で石垣が確認できることから、この造成時期を明確にすることとその下層に中世以前の遺構



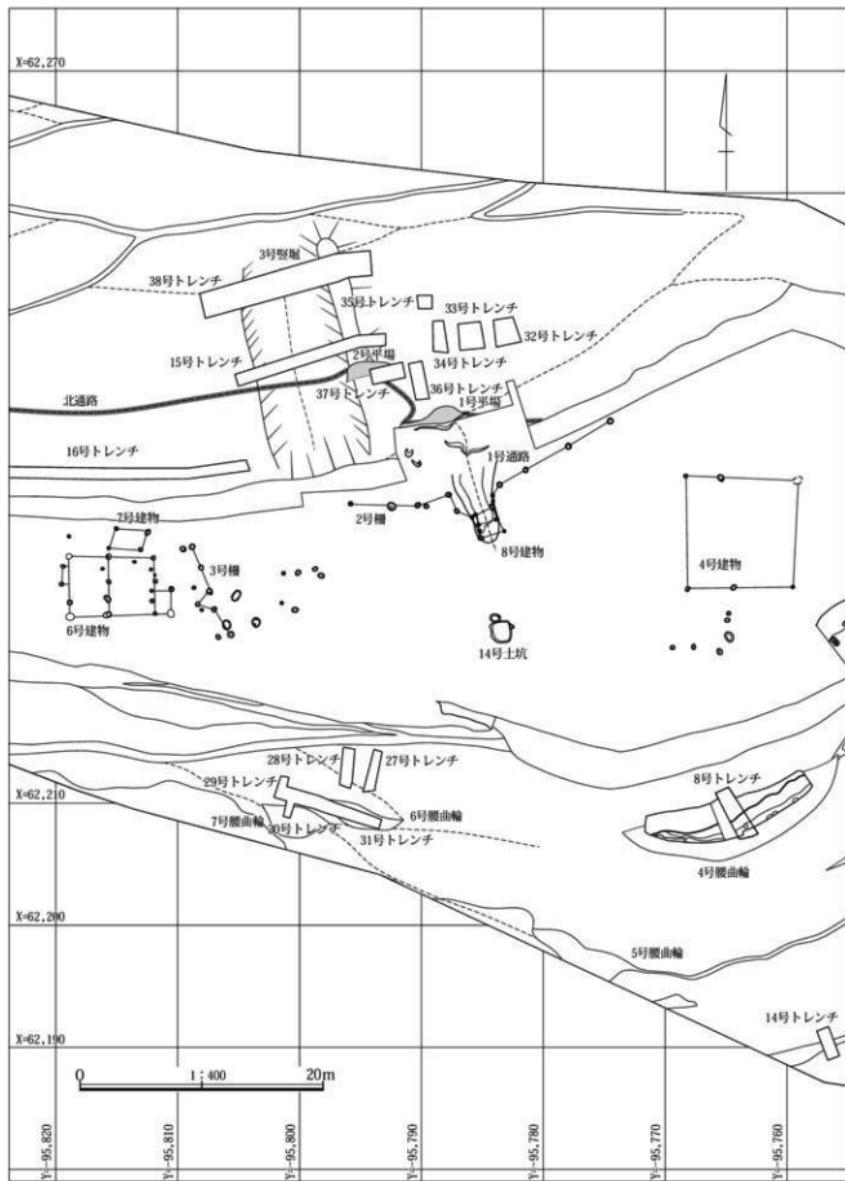
第20図 中近世1区2面遺構位置図(1)



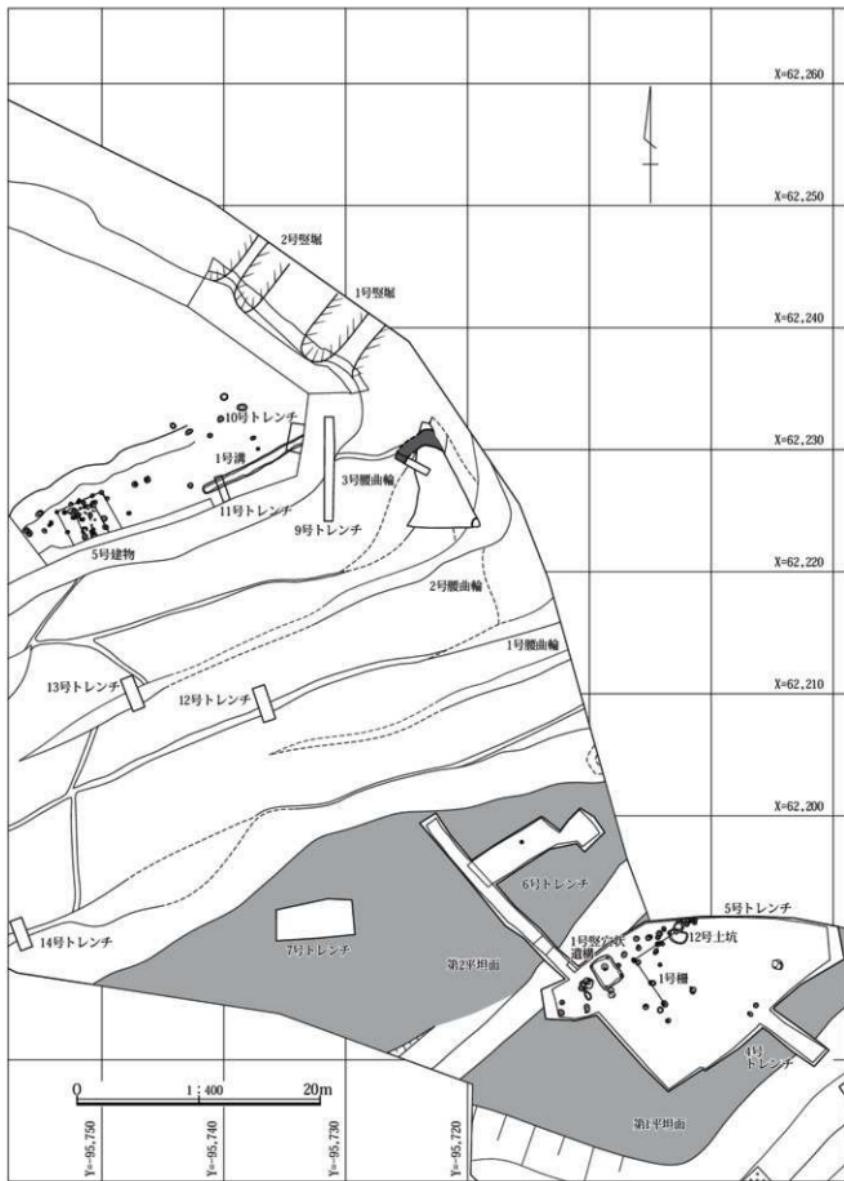
第21図 中近世1区2面遺構位置図(2)



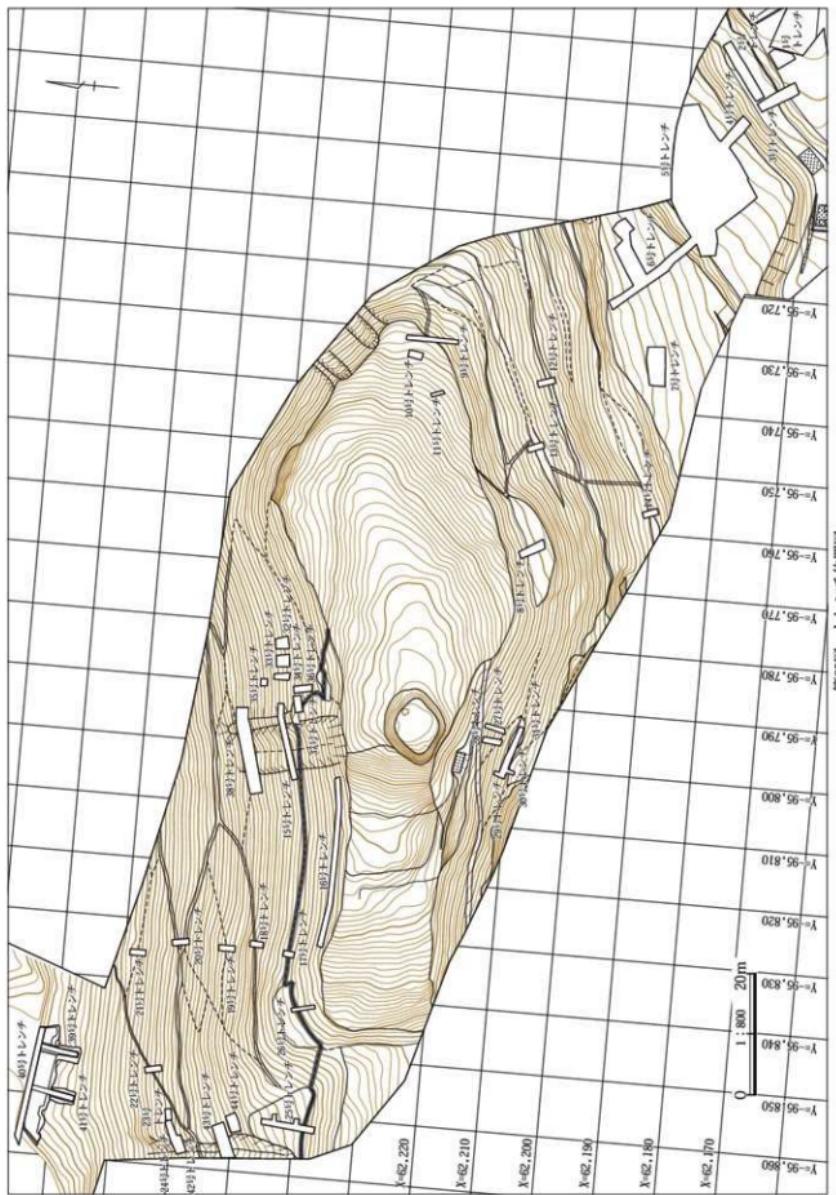
第22図 中近世3面遺構位置図(1)



第23図 中世近世3面遺構位置図(2)

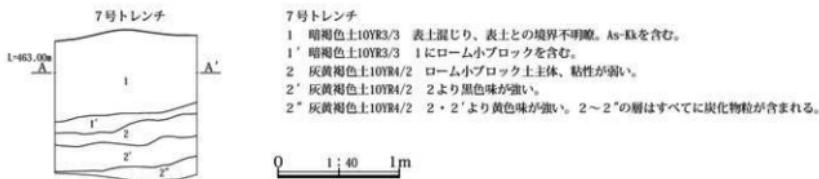
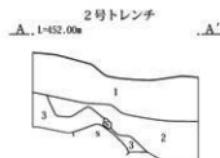
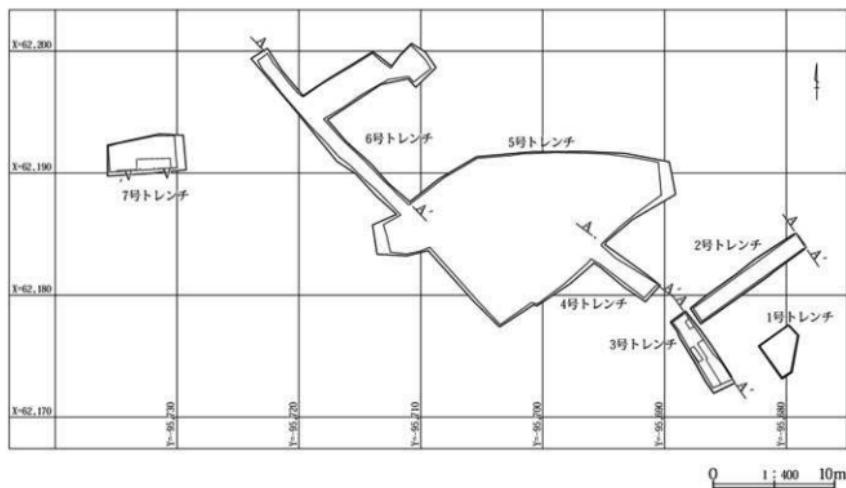


第24図 中近世3面遺構位置図(3)



第25回 トレンチ位置図

1～7号トレンチ



第26図 1～7号トレンチ位置図、2・7号トレンチ断面図

が存在しているか否かを目的に調査を行った。

調査の結果、石垣による造成年代は解明することはできなかったが、石垣によって本来の地表面より1.5mほど高く造成されていた。なお、中世以前の遺構は検出されなかった。

4号トレンチ 0区南側は遺構が希薄になるが、平坦地

が広がることから柵などの遺構が存在する可能性が窺えたため、トレンチによる確認を目的に調査した。

調査の結果、平坦地を広げるため盛り土による造成が行われていることが判明した。なお、この造成は近世以降とみられる。また、斜面下に当たる箇所には崩落によるとみられる礫が確認されている。

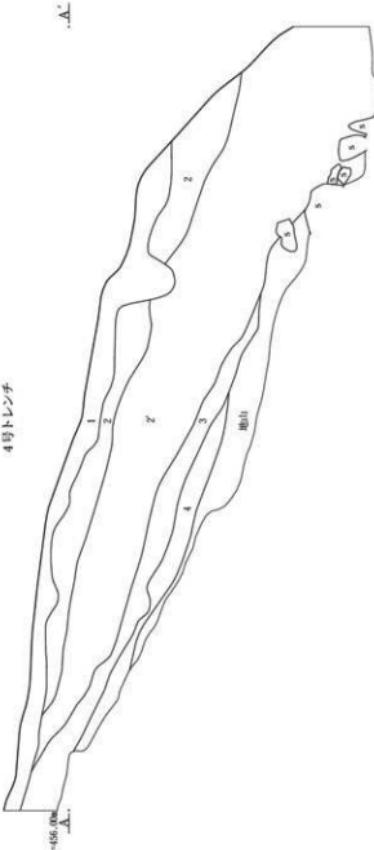
0 1 40 1m

3号トレンチ



- 1 明褐色土±10%E/3 表土、小礫を少含む。
 2 暗褐色土±10%E/3 1に細粒、石由葉込り、礫の混入はない。
 3 明褐色土±10%E/3 4が混じる耕作土。小礫を含む。
 4 にぶく黄褐色土±10%E/3 黄色味をおびた耕作土の上部と深い土の層の混土。根古屋川の洪积物か。
 5 黒褐色土±10%E/2 不均等に小礫を含む。ややしまりが強く、粘性弱い。
 6 灰黃褐色±10%W/2 ローム土と7の混土。赤色味をおびた土と暗褐色じりの小礫を含み、しまりがある。上側からなる路土。
 7 黑褐色土±10%E/2 基質は5に近いが、混入物少なく、しまりが強い、粘質土。

A'



- 1 明褐色土±10%E/3 表土、小礫を少含む。
 2 暗褐色土±10%E/3 土質は表土に類似。As-鉱を含み、ローム土等混じり、やや黄色味をおびた粘質土。
 2' 明褐色土±10%E/3 より疊ぐくなる。
 3 暗褐色土±10%E/3 土質は2に類似。As-鉱の含有量は明瞭ではない。
 4 にぶく黄褐色土±10%W/3 ローム土と2の混土。ややしまりが強い。地山の大さめな角礫を含む。

第27図 3・4号トレンチ断面図

第3章 検出した遺構と遺物

5号トレンチ 0区として拡張。

6号トレンチ 0区北側の比較的傾斜の緩い面と0区との間の傾斜地とともに傾斜の緩い箇所にT字状のトレンチを設定、この緩斜面地では遺構の存在を確認する目的で調査した。

調査の結果、南北方向のトレンチでは中世以前は現状より傾斜の急な地形で崩落土が堆積して緩斜面に変化したことが判明した。なお、東西方向のトレンチでは8号ピットを検出し、調査している。

7号トレンチ 6号トレンチと同じ緩斜面、6号トレンチの西側に設定、遺構の存在を確認することを目的とした。

調査の結果、遺構の存在は確認できなかった。

8号トレンチ 現況図で想定できた4号腰曲輪の確認を目的に設定した。

調査の結果、造成の可能性がみられた。詳細は4号腰曲輪の項を参照。

9号トレンチ 丘陵頂部東端の様相確認を目的に設定した。

調査の結果、遺構の存在は確認できなかった。

10号トレンチ 丘陵頂部東端の様相確認を目的に設定した。

調査の結果、遺構の存在は確認できなかった。

11号トレンチ 10号トレンチと同様に丘陵頂部東端の様相確認を目的に設定した。

調査の結果、1号溝を検出した。

12号トレンチ 現況図で武者走りとみられる通路が想定されたことから、その確認を目的に設定した。

調査の結果、硬化面や造成の痕跡は確認できず、武者走りなどの通路の存在を明らかにすることはできなかった。

13号トレンチ 現況図で武者走りとみられる通路が想定されたことから、その確認を目的に設定した。

調査の結果、硬化面や造成の痕跡は確認できず、武者走りなどの通路の存在を明らかにすることはできなかったが、斜面地のため崩落によって失われた可能性も否定できない。

14号トレンチ 現況図で武者走りとみられる通路が想定されたことから、その確認を目的に設定した。

調査の結果、硬化面や造成の痕跡は確認できず、武者

走りなどの通路の存在を明らかにすることはできなかつたが、斜面地のため崩落によって失われた可能性も否定できない。

15号トレンチ 現況図で想定できた3号竪堀の確認を目的に設定した。

調査の結果、土層断面の観察では不自然な堆積がみられたが、竪堀の痕跡は確認できなかった。

16号トレンチ 現況図では遺構の想定はできなかつたが、斜面が急傾斜であることから完全に埋没してしまった可能性が窺える竪堀などの遺構検出を目的に設定した。

調査の結果、遺構の存在は確認できなかった。土層断面では大きな塊で土砂が堆積していることがみられた。こうしたことから、16号トレンチ付近では長期にわたって樹木が倒れていたとみられる。

17号～21号トレンチ 本来なら丘陵斜面の状態を確認するため通じて設定する予定であったが、傾斜が急なため作業の安全を図り5分割とした。

17号・19号・21号トレンチ 現況図では武者走りなどの痕跡は想定できなかつたが、埋没して地表面で窺い知ることが不可能な遺構を確認することを目的に設定した。

調査の結果、遺構の確認には至らなかった。

18号・20号トレンチ 現況図で武者走りとみられる通路が想定されたことから、その確認を目的に設定した。

調査の結果、硬化面や造成の痕跡は確認できず、武者走りなどの通路の存在を明らかにすることはできなかつたが、斜面地のため崩落によって失われた可能性も否定できない。

22号トレンチ 現況図で武者走りとみられる通路が想定されたことから、その確認を目的に設定した。

調査の結果、硬化面や造成の痕跡は確認できず、武者走りなどの通路の存在を明らかにすることはできなかつたが、斜面地のため崩落によって失われた可能性も否定できない。

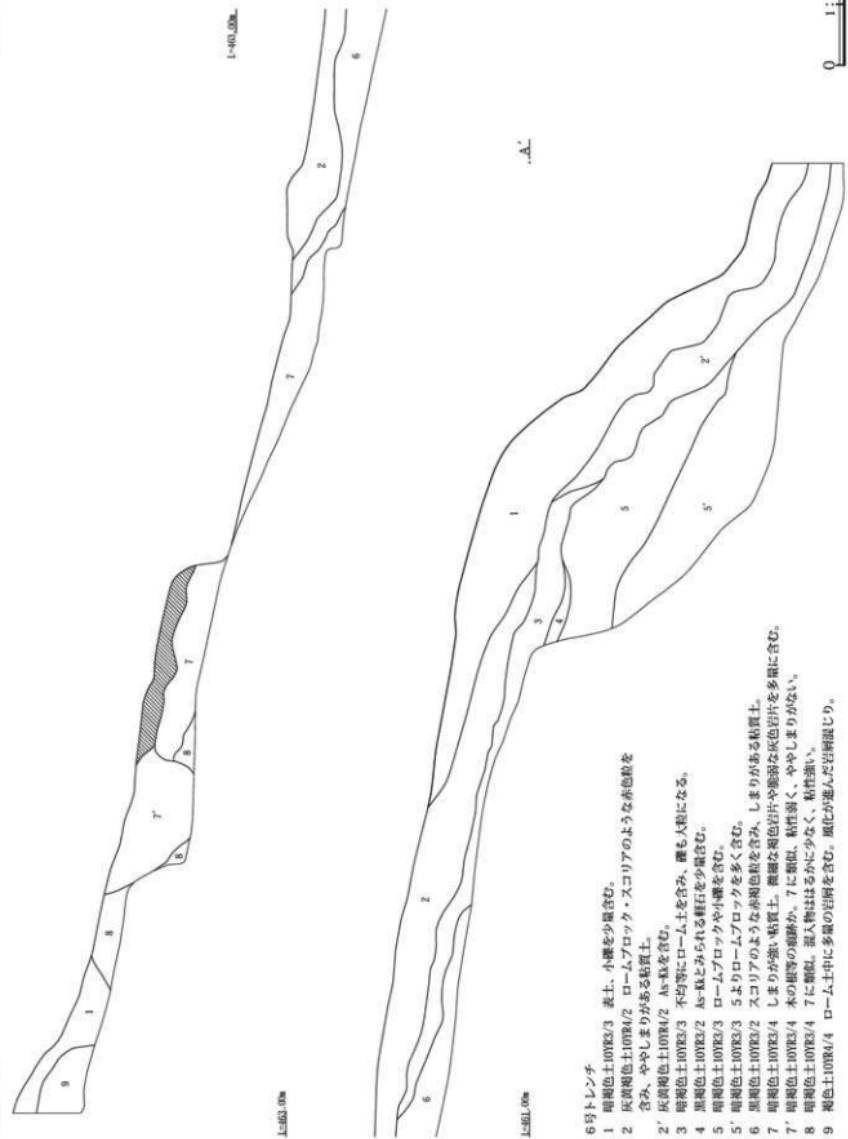
23号トレンチ 現況図ではこのトレンチの西側で4号竪堀の存在が想定できることから、4号竪堀の崩落や埋没状態を把握することを目的に設定した。

調査の結果、このトレンチでは竪堀の痕跡は確認できなかった。

6号トレンチ

L=465.00m

A-A'



第28図 6号トレンチ断面図

9～11号トレンチ



9号トレンチ

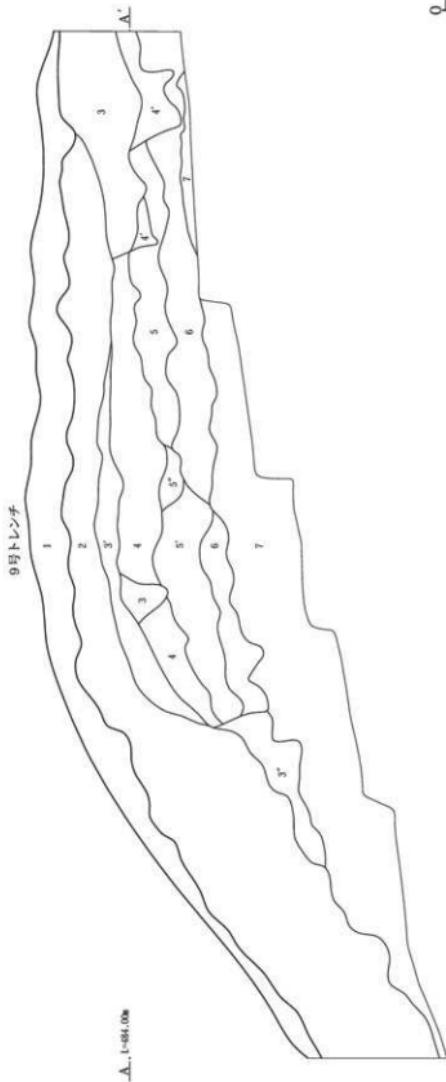
- 1 用褐色±1.0m/3.2 表土、しまりがない。
- 2 黄褐色±1.0m/3.3 地土・オリーブ灰色土・黒色土・ブロックを少し、砂粒を僅かに含み、しまりがあまりない。
- 3 黄灰褐色±1.2.5m/4.2 ♂30~50mmの灰オリーブ土・ブロックを僅かに、♂3~5mmの褐色粒を含み、ややしまりがある粘質土。
- 3' 黄灰褐色±1.2~3.0mの中間的な相。♂30~50mmの灰オリーブ土・ブロックと♂3~5mmの褐色粒を僅かに含み、ややしまる。
- 3'' 黄灰褐色±2.5m/4.2 3に類似、灰オリーブ土・ブロックがより多く含まれる。粘質土。
- 4 黄灰褐色±2.5m/4.2 地上より多く見られる。褐色・明褐色土のブロックを多量に含む。これらの含物のために黄褐色が強く見える部 分もある。炭化物も僅かに含み、ややしまりがある。
- 4' 黄褐色±1.2.5m/4.2 地山上のブロックが少なく、底土の黒色土がやや多い。色調が3に近似。
- 5 黄褐色±1.2.5m/3.2 塩張の黒色土が多く混入、♂5~10mmの褐色・灰土と炭化物ごとに含み、しまりがあまりない粘質土。
- 5' 黄オリーブ褐色±2.5m/3.3 色調は3・4に似る。地山よりのブロックが5に比べて多く含まれている。
- 6 由5号坑褐色土±1.0m/4.0/3 下のオリーブ灰色土が多くの混じる。地山よりのブロックが5に比べて多く含まれている。
- 7 黄白色±50cm/3.1 黄褐色の層がある。層の端が層中に陥没した状態。

10号トレンチ

- 1 用褐色±1.0m/3.2 表土、しまりがない。
- 2 黄褐色±1.0m/3.3 地土・オリーブ灰色土・黒色土・ブロックを少し、砂粒を僅かに含み、しまりがあまりない。
- 3 黄灰褐色±1.2.5m/4.2 ♂30~50mmの灰オリーブ土・ブロックと♂3~5mmの褐色粒を含み、ややしまる。
- 3' 黄灰褐色±2.5m/4.2 3に類似、灰オリーブ土・ブロックがより多く含まれる。粘質土。
- 4 黄灰褐色±2.5m/4.2 地上より多く見られる。褐色・明褐色土のブロックを多量に含む。これらの含物のために黄褐色が強く見える部 分もある。炭化物も僅かに含み、ややしまりがある。
- 4' 黄褐色±1.2.5m/4.2 地山上のブロックが少なく、底土の黒色土がやや多い。色調が3に近似。
- 5 黄褐色±1.2.5m/3.2 塩張の黒色土が多く混入、♂5~10mmの褐色・灰土と炭化物ごとに含み、しまりがあまりない粘質土。
- 5' 黄オリーブ褐色±2.5m/3.3 色調は3・4に似る。地山よりのブロックが5に比べて多く含まれている。
- 6 由5号坑褐色土±1.0m/4.0/3 下のオリーブ灰色土が多くの混じる。地山よりのブロックが5に比べて多く含まれている。
- 7 黄白色±50cm/3.1 黄褐色の層がある。層の端が層中に陥没した状態。

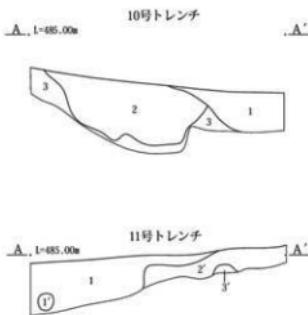
11号トレンチ

- 1 用褐色±1.0m/3.2 表土、しまりがない。
- 2 黄褐色±1.0m/3.3 地土・オリーブ灰色土・黒色土・ブロックを少し、砂粒を僅かに含み、しまりがあまりない。
- 3 黄灰褐色±1.2.5m/4.2 ♂30~50mmの灰オリーブ土・ブロックと♂3~5mmの褐色粒を含み、ややしまる。
- 3' 黄灰褐色±2.5m/4.2 3に類似、灰オリーブ土・ブロックがより多く含まれる。粘質土。
- 4 黄灰褐色±2.5m/4.2 地上より多く見られる。褐色・明褐色土のブロックを多量に含む。これらの含物のために黄褐色が強く見える部 分もある。炭化物も僅かに含み、ややしまりがある。
- 4' 黄褐色±1.2.5m/4.2 地山上のブロックが少なく、底土の黒色土がやや多い。色調が3に近似。
- 5 黄褐色±1.2.5m/3.2 塩張の黒色土が多く混入、♂5~10mmの褐色・灰土と炭化物ごとに含み、しまりがあまりない粘質土。
- 5' 黄オリーブ褐色±2.5m/3.3 色調は3・4に似る。地山よりのブロックが5に比べて多く含まれている。
- 6 由5号坑褐色土±1.0m/4.0/3 下のオリーブ灰色土が多くの混じる。地山よりのブロックが5に比べて多く含まれている。
- 7 黄白色±50cm/3.1 黄褐色の層がある。層の端が層中に陥没した状態。

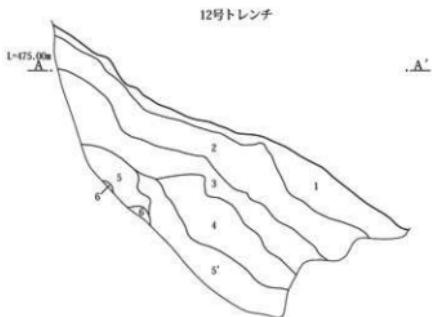
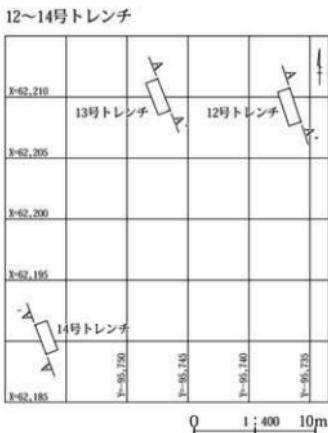


0 1:40 1m

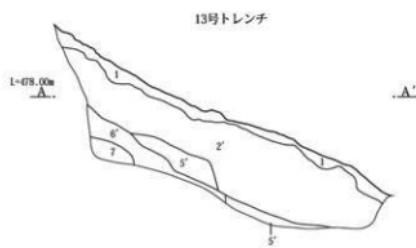
第29図 9～11号トレンチ位置図、9号トレンチ断面図



- 10・11号トレンチ
- 黒褐色土10YR3/2 ϕ 20~40mmの青灰土ブロックをぐく僅かに、 ϕ 5~10mmの礫・砂も僅かに、 ϕ 1~2mmの褐色軽石をぐく僅かに含み、しまりがあまりない。
 - ϕ 20~40mmの青灰土ブロックと ϕ 1~2mmの褐色粒子、 ϕ 10mmの青灰色土ブロックも僅かに含む。
 - にぶい黄褐色土10YR4/3 青灰色土・褐色土が多量に混入。 ϕ 5~30mmの小礫を少し含み、しまりがあまりない。
 - にぶい黄褐色土10YR4/3 青灰色土が混入。
 - 褐色土10YR4/4 青灰色土・褐色土が多く混入。 ϕ 1~4mmの黄褐色軽石を少し含み、しまりがあまりない。
 - 褐色土10YR4/4 3に近似。青灰色土が多量に混じり灰黄褐色土に見える。
- Scale: 1:40, 1m

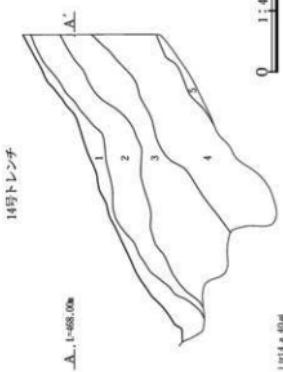


- 12・13号トレンチ
- 黒褐色土10YR3/2 表上。
 - にぶい黄褐色土10YR4/3 青灰土ブロック、黄褐色土を多く、 ϕ 1~5mmの褐色粒を僅かに含み、しまりがない。
 - にぶい黄褐色土10YR4/3 2に類似、黒褐色土を粘状に含む。
 - 暗褐色土10YR3/3 黒色土をブロック状に。 ϕ 2~10mmの青灰、黄褐色土をやや多く、炭化物・褐色軽石を僅かに含み、しまりがある。
 - 褐色土10YR4/4 ϕ 1~3mmの青灰、黄褐色粒、褐色軽石を僅かに含み、しまりがあまりない。
 - 褐色土10YR4/6 ϕ 5~20mmの青灰、黄褐色土を多く、ローム粒を多く、褐色軽石を少し、炭化物を僅かに含み、しまりがある粘質土。
 - 暗褐色土10YR3/4 5に類似、5より暗い色調。
 - 黄褐色土10YR5/6 青灰、橙・黄褐色の砂礫を多く含み、しまりがある。
 - 黄褐色土10YR5/6 6に類似。
 - 青灰土5BG5/1 破片。
- Scale: 1:40, 1m



第30図 10・11号トレンチ断面図、12~14号トレンチ位置図、12・13号トレンチ断面図

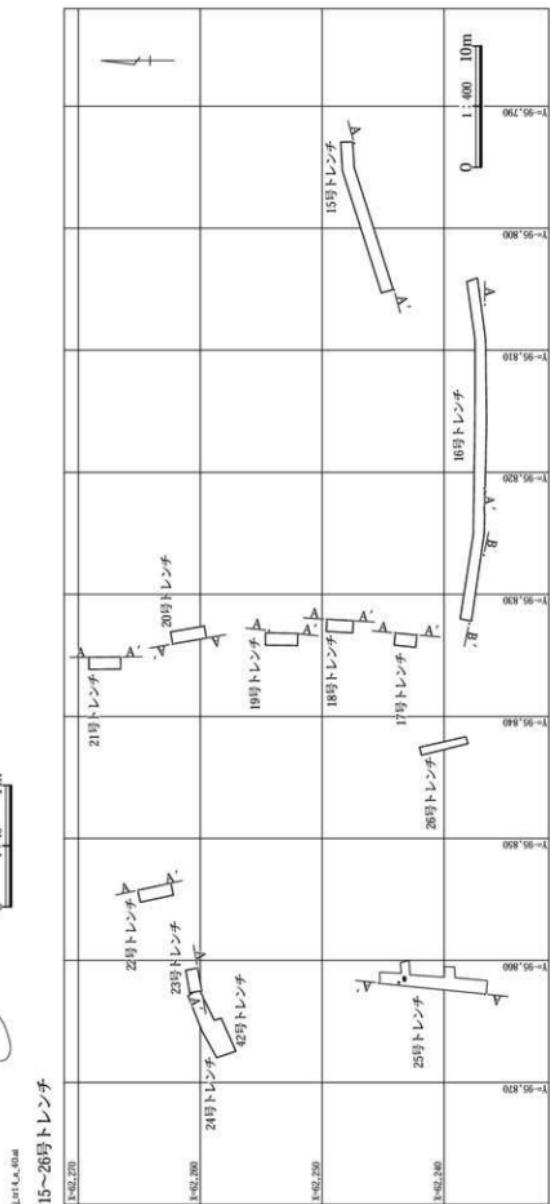
14号トレンチ



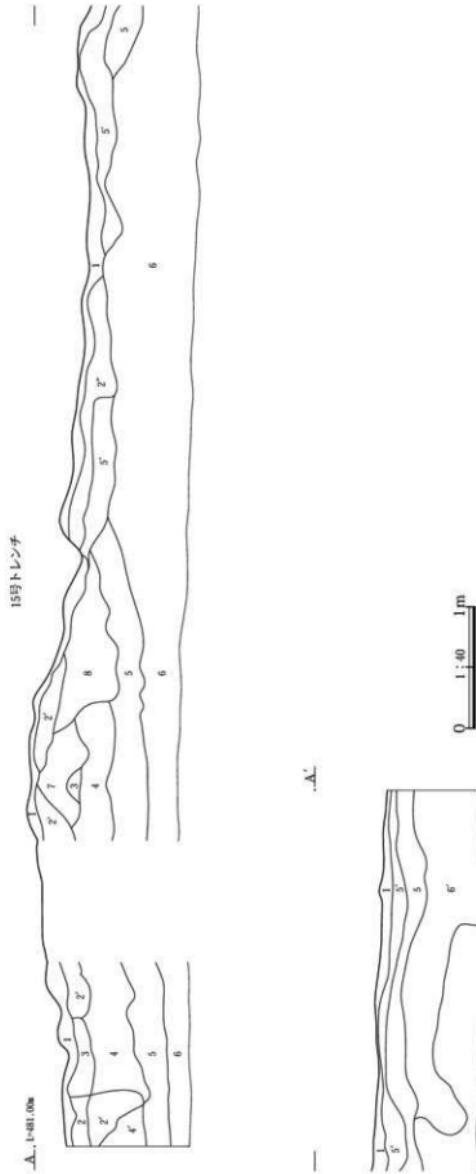
14号トレンチ

- 1 黒褐色土:1.0m/2 表土。
2 黒褐色土:1.0m/2.2 φ 5~20mm・φ 50~100mmの角礫とφ 1mmの黄褐色粒状鉄石を多量に含み、ややしりがある。
3 黒褐色土:1.0m/2 φ 5~20mmの砂とφ 1~3mmの黄褐色粘土を多量に含み、φ 1mmの黄褐色粒状鉄石を僅かに含み、ややしりがある。
4 黑褐色土:2.5/3.1 背後壁、φ 5~15mmの小礫、砂粒を多量に含み、ややしりがある。
5 青灰褐色土:5.6/5.1 順層、僅かに黒褐色土を含む。

15~26号トレンチ



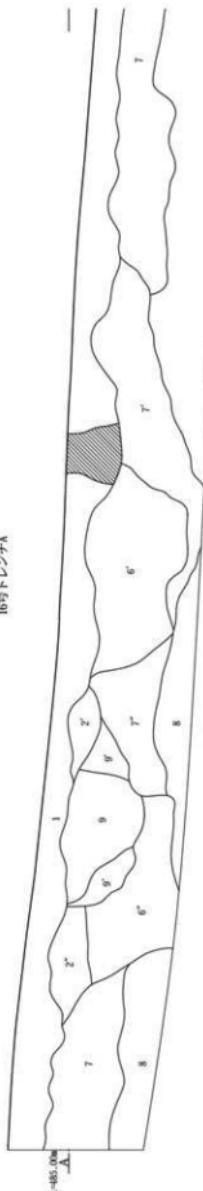
第31図 14号トレンチ断面図、15~26号トレンチ位置図



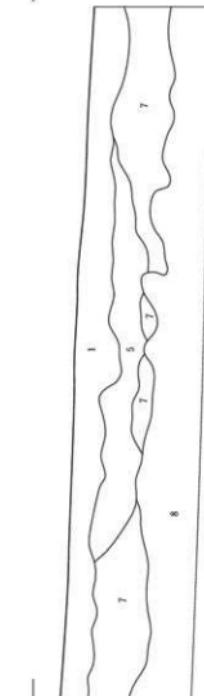
- 15号 レンチ 表土。
- 1 黒褐色土±10PR2/2 黄褐色石・青灰・黄褐色土、黒色土を僅かに含み、しまりがあまりない。
 - 2 黒褐色土±10PR3/1 ♂ 5mmの小礫を少し、♂ 1~2mmの細・微細角砾石、青灰・黄褐色土、黒色土を含む部分、しまりがある。
 - 2' 黄褐色土±10PR3/2 黄褐色ローム土をやや多く含む部分、しまりがある。
 - 2 黑褐色土±10PR3/3 2に削除。2より多くの黄褐色・褐色粘土を含む。
 - 3 黑褐色土±10PR2/1 ♂ 3~10mmの礫を多く、♂ 1mmの細角砾石を含み、黒色土を含む。
 - 4 黑褐色土±10PR2/2 ♂ 5~15mmの礫を少し、♂ 1mmの細角砾石を含むが、黒褐色土や灰色土を夾む部分に含み、しまりがあまりない。
 - 4' 黑褐色土±10PR2/1 4に削除。色調が暗く、しまりがない。
 - 5 黑褐色土±10PR2/3 ♂ 1~2mmの細角砾石を僅かに、暗褐色土に含む箇所もある。
 - 5' 灰白色土±3PR7/1 6' が削除。このたがれ5と同一の層だが、色調が異なり、位置を多層に含む。
 - 6 灰白色土±10PR4/4 ローム土と♂ 2~4mmの他・砂粒を少し含み、しまりがある。
 - 6' オリーブ色土±7.5PR5/1~5/2 黑褐色土混入、♂ 1~10mmの砂礫を多く、褐色鉱石を少し含み、しまりがある。
 - 7 灰~灰オリーブ色土±7.5PR5/1~5/2 黑褐色土混入、♂ 1~10mmの砂礫を少し含み、褐色鉱石を少し含み、しまりがある。
 - 8 明灰黄色土±2.5V4/2 ♂ 1mm未満の灰白色土を多く、♂ 3~7mmの小礫を少し、灰白色土をプロック状・斑状に含み、しまりがあまりない。

第32図 15号レンチ断面図

16号トレンチ

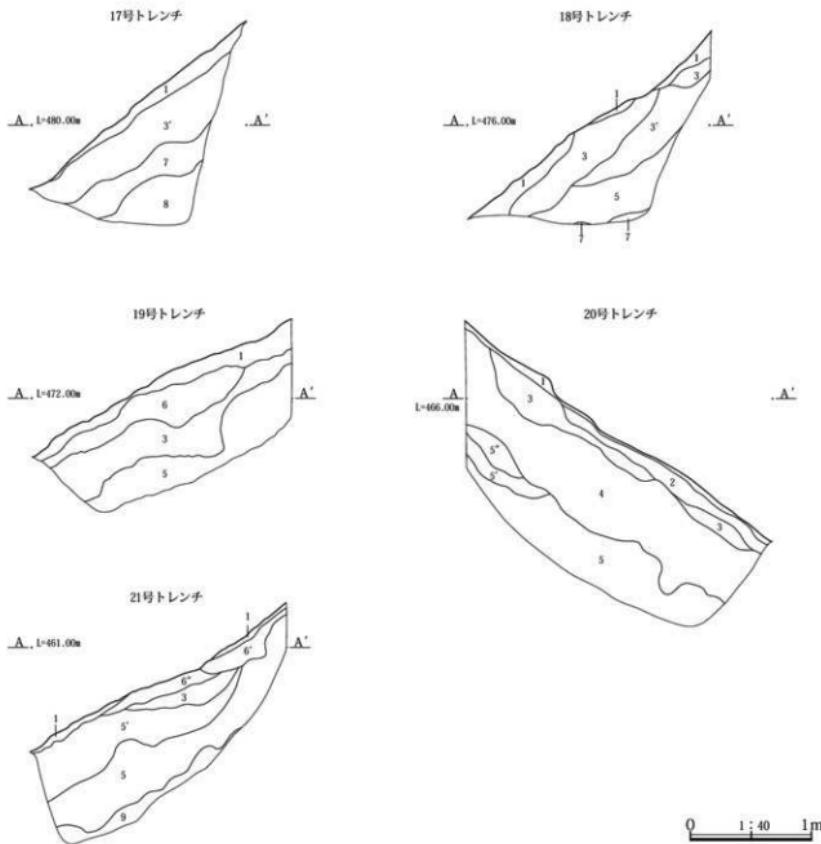


16号トレンチ



- 1 黒褐色土10R3/2 表土。
 2 黒褐色土10R3/1 前褐色土ブロックを少し、 ϕ 10~30mmの礫をやや多く、 ϕ 5~20mmの角礁の所産を少し含み、しまりが少ない。
 2' 黒褐色土10R3/1 2に類似、地山の角礁をやや多く含む。
- 2'' 黒褐色土10R3/6 2・2'に類似、2'よりロームの混入が多いめかげ黄色味が強い。
- 3 保育園色土10R1/2 ϕ 10~70mmの角礁を多量に、 ϕ 1~2mmの黄褐色石を少しあり。
 石をやや多く、黒褐色土ブロックを一枚板に少し含み、砂質でしまりがある。
- 4 にぶい黄褐色土10R4/3 ϕ 10~70mmの角礁を多く、黄褐色石を少しあり。
 砂質でややしまりがある。
- 4' にぶい黄褐色土10R4/3 4に類似、4より黄褐色土を多く含み、礫は ϕ 10~30mmとやや多いである。
- 5 黒褐色土10R3/1 As級と見られる粗石を多く、灰白・黄褐色土ブロック、
 砂質を少し含み、しまりがない。
- 6 黑褐色土・3R4/4 ϕ 5~10mmの角礁を多く、角礁を動的に、黒褐色土ブロック
 ク、 ϕ 1~3mmの黄褐色石を含み、ややしりがある。
- 6' 海色土・3R4/4 6に類似、多量の黄褐色土が混入し、
 1~3mmの黄褐色土をやや多く含み、しまりがない。
- 6'' 海色土7・3R4/4 6に類似、 ϕ 30~100mmの多量の角礁を含み、しまりがあ
 りがない。
- 7 明黄褐色土10R6/6 ϕ 2~5mmの黄褐色石が少し、 ϕ 5~20mmの礫をやや
 多く、黒褐色土をブロック状・塊状に、青灰・褐色土をやや多く含み、しま
 りが少ない。
- 7' 明黄褐色土10R6/6 7に比べて褐色土や青灰土が多く見られ、しまりが弱
 い、崩落して地軸か。
- 7'' 海色土7・3R4/6 7に類似の岩が複数してつづばく見える部分、含物物ほど同じ、
 分や砂質化している部分も確認。
- 8 青灰色土3R6/6 1 優褐色が付着して黄褐色を帯びる断面がある。粘土状の層
 が付着している。
- 9 褐色土10R4/6 ϕ 10~2mmの黄褐色石をやや多く、 ϕ 10~40mmの所産を少
 し、黒褐色土ブロックを僅に含み、しまりがない。
- 9' 褐色土10R4/6 9に ϕ 30~100mmの角礁を多く含む。ほとんど離散。

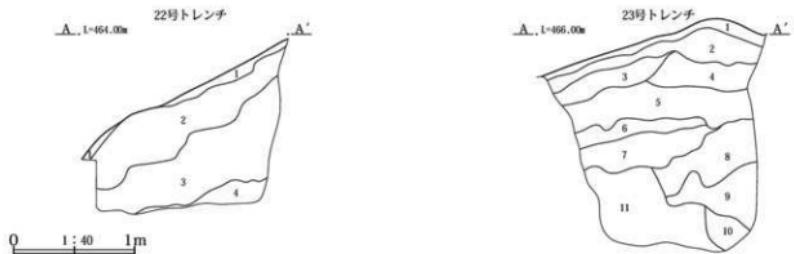
第33図 16号トレンチ断面図



17~21号トレンチ

- 黒褐色土10YR2/2 表土。
- 黒色土10YR2/1 ϕ 3~5mmの小礫と ϕ 1~3mmの褐色粒、 ϕ 2~4mmの青灰・褐色礫を僅かに含み、しまりがある粘質土。
- 黒色土10YR2/1 ϕ 3~10mmの小礫・As-Kをやや多く、 ϕ 1~2mmの褐色粒を僅かに含み、しまりがある。
- 黒褐色土10YR3/2 3より ϕ 3~10mmの小礫を多く含み、3の黒色土に5が混入した状態、しまりがある。
- 黒褐色土10YR3/2 ϕ 2~10mmの黄褐色粒と ϕ 5~10mmの礫を僅かに、黒色土や黄褐色土を斑状に含み、ややしまりがある。
- 暗褐色土10YR3/3 ϕ 2~12mmの黄褐色石を少し、 ϕ 5~10mmの礫を僅かに、黄褐色土を斑状に含む。
- 褐色土10YR4/4 5より黄褐色土が多く混入、含有している粒子等は5と同じだが黄褐色石がやや多い。
- にぶい黄褐色土10YR4/3 含有している粒子等は5に類似、礫・軽石の含有がとても少ない。
- 暗褐色土10YR3/7 ϕ 10~30mmほどの小礫が少し、 ϕ 2~3mmの黄褐色粒を僅かに、部分的に褐色土を斑状に含み、しまりがある。
- 黒褐色土10YR2/6 6に類似、色調がさらに暗い。
- 黒褐色土10YR2/2 6に類似、色調が暗い。
- 黄褐色土10YR5/6 ローム上、YR6の黄色軽石を少し含み、ややしまりがある。
- 明褐色土10YR6/8 ローム上、 ϕ 5~10mmの小礫をごくわずかに、黄褐色・黄・白色軽石を僅かに含み、しまりがある。
- 褐色土10YR4/4 橙色粒子を少し、 ϕ 10~40mmの小礫や多く含む。

第34図 17~21号トレンチ断面図



22号トレンチ

- 1 黒褐色土10YR3/2 表土、砂礫を少し含み、しまりはほとんどない。
 - 2 黒褐色土10YR2/2 ϕ 3~10mmの角礫片又は軽石を多量に、 ϕ 1~2mmの褐色粒子を僅かに、As-鉱を多く含み、しまりがあまりない。
 - 3 暗褐色土10YR3/3 ϕ 5~30mmの小礫をやや多く、 ϕ 100~200mmほどの礫を少し、橙・黄色粒子を僅かに含み、ややしまりがある。
 - 4 褐色土10YR4/4 ロームまたは地山の黄褐色土と ϕ 10~30mmの小礫を多量に、 ϕ 100mmの礫も多く、 ϕ 1~3mmの黄褐色・明黄褐色粒状軽石・礫をやや多く含み、ややしまりがある。
- 23号トレンチ
- 1 黒褐色土7.5YR2/2 表土、 ϕ 5~8mmの小礫を僅かに含み、しまりがほとんどない。
 - 2 褐色土10YR4/4 ϕ 2~3mmの黄褐色粒子を僅かに、 ϕ 2~7mmの小礫を少し、As-鉱を多く、黄褐色土を含み、しまりがあまりない。
 - 3 黑褐色土10YR3/2 ϕ 5~10mmの小礫・軽石(As-鉱か)、 ϕ 1~2mmの褐色粒子と地山の礫片を少しと黒色土を含み、しまりがあまりない。
 - 4 暗褐色土10YR3/3 ϕ 3~7mmの軽石、地山の礫を多量に、 ϕ 1~2mmの褐色粒子をごく僅か、粒状の青灰・褐色土を僅かに含み、ややしまりがある。
 - 5 にぶい黄褐色土10YR4/3 ϕ 3~10mmの粒子を多く、 ϕ 1~2mmの褐色ローム・軽石・礫片を僅かに含み、ややしまりがある。
 - 6 にぶい黄褐色土10YR4/3 基質や混入粒子は5に類似、 ϕ 20~150mmの角礫が多量に、5に比べて褐色粒子をやや多く含み、ややしまりがある。
 - 7 黒色土10YR2/1 6に類似、角礫を多量に含む。
 - 8 喀斯特土10YR3/4 9に類似、 ϕ 1~3mmの褐色粒子を少し、 ϕ 20~150mmの角礫を多量に、黄褐色土を多く含み、なかにはブロック状のものも見られ、ややしまりがある。
 - 9 暗褐色土10YR3/4 ϕ 50~150mmの角礫を少し、 ϕ 2~4mmの黄褐色粒子を多く含み、ややしまりがある。
 - 10 黄褐色土10YR5/6 ϕ 1~3mmの褐色粒子少し、砂礫を僅かに含み、しまりがあまりない。2・3よりしまりは弱く、角礫を含まない。
 - 11 黄褐色土10YR5/6~5/8 10に類似、 ϕ 10~200mm・500mmの角礫を多量に含む。

第35図 22・23号トレンチ断面図

24号・42号トレンチ 23号トレンチ同様、4号竪堀の状

態把握を目的に設定した。2018年度の24号トレンチでは土坑状の落ち込みを検出したことから、2019年度に42号トレンチとして再度調査を行った。

調査の結果、前述のように2018年度は土坑状の落ち込みを検出し、4号竪堀の一部か他遺構かの判断に至らなかったため、次年度に再度調査を行うこととした。2019年度に再度調査を行ったところ、「3縄文時代(1)土坑、6号土坑」で記載したように縄文時代の土坑と判明した。なお、4号竪堀の痕跡は確認できなかった。

25号トレンチ 現況図では比較的広い平坦地であることから曲輪が存在し、建物などの遺構が存在していることが想定された。

調査の結果、縄文時代と古代の土坑が検出された。土層断面では傾斜は比較的緩やかではあるがブロック状や薄い層の堆積がみられたことから降雨などで土砂が流れ

ていたことが想定された。

26号トレンチ 現況図で想定できた8号腰曲輪の確認を目的に設定し、2018年度に調査を実施したが、設定位置が想定した8号腰曲輪よりやや上位であったため腰曲輪の確認には至らなかった。そのため、8号腰曲輪については2019年度に平面での調査を行うことにした。

27号トレンチ 現況図で想定できた6号腰曲輪上部の様相確認を目的に設定した。

調査の結果、斜面の傾斜は40°と急傾斜であることが判明した。

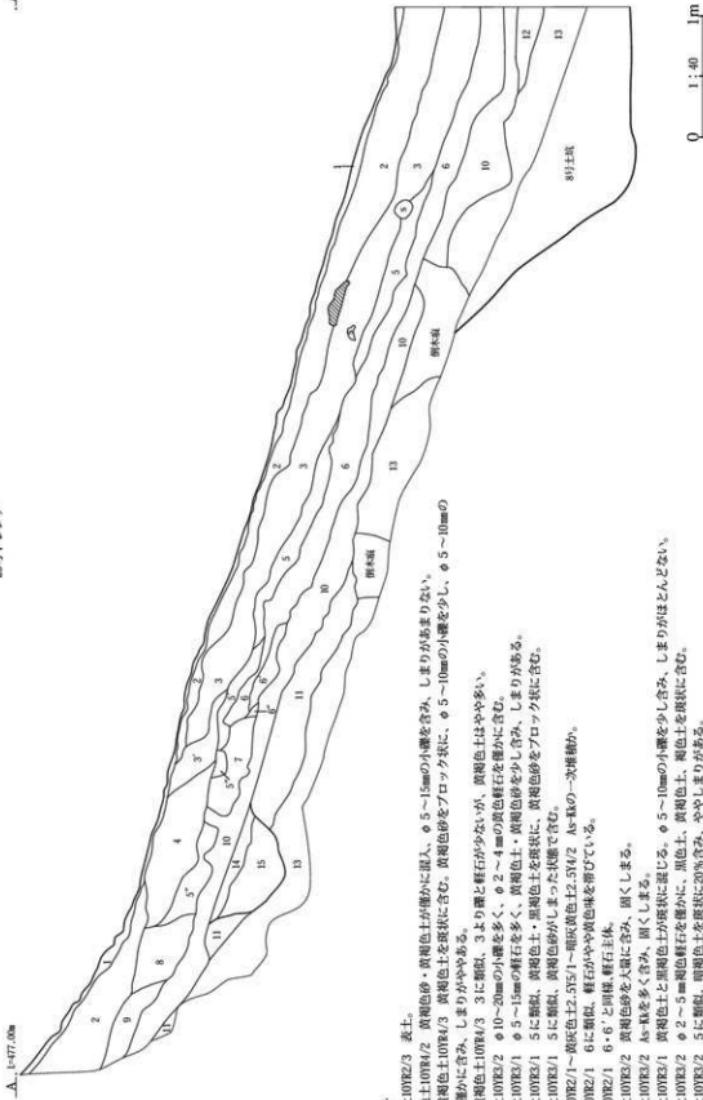
28号トレンチ 現況図で想定できた6号腰曲輪上部の様相確認を目的に設定した。

調査の結果、斜面の傾斜は50°と急傾斜であることが判明した。

29号・31号トレンチ 現況図で想定できた6号腰曲輪の確認を目的に設定した。

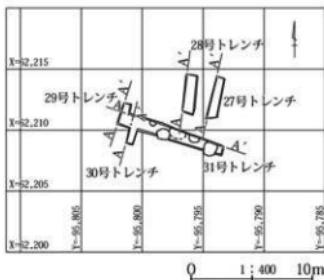
Δ'

25号トレンチ

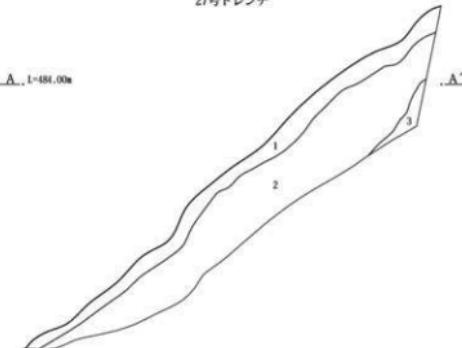


第36図 25号トレンチ断面図

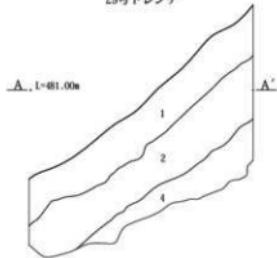
27~31号トレンチ



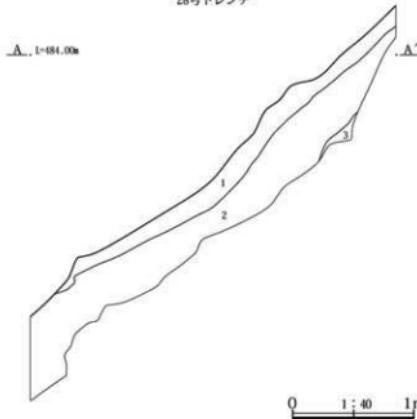
27号トレンチ



29号トレンチ



28号トレンチ



30号トレンチ



27~30号トレンチ

- 1 表土。
- 2 暗褐色土10YR3/3 φ 40~70mmの角礫を含む。
- 3 地山の礫の二次堆積。
- 4 黒褐色土10YR3/2 2に近似するがφ 50~100mmの角礫を含む。

第37図 27~31号トレンチ位置図、27~30号トレンチ断面図

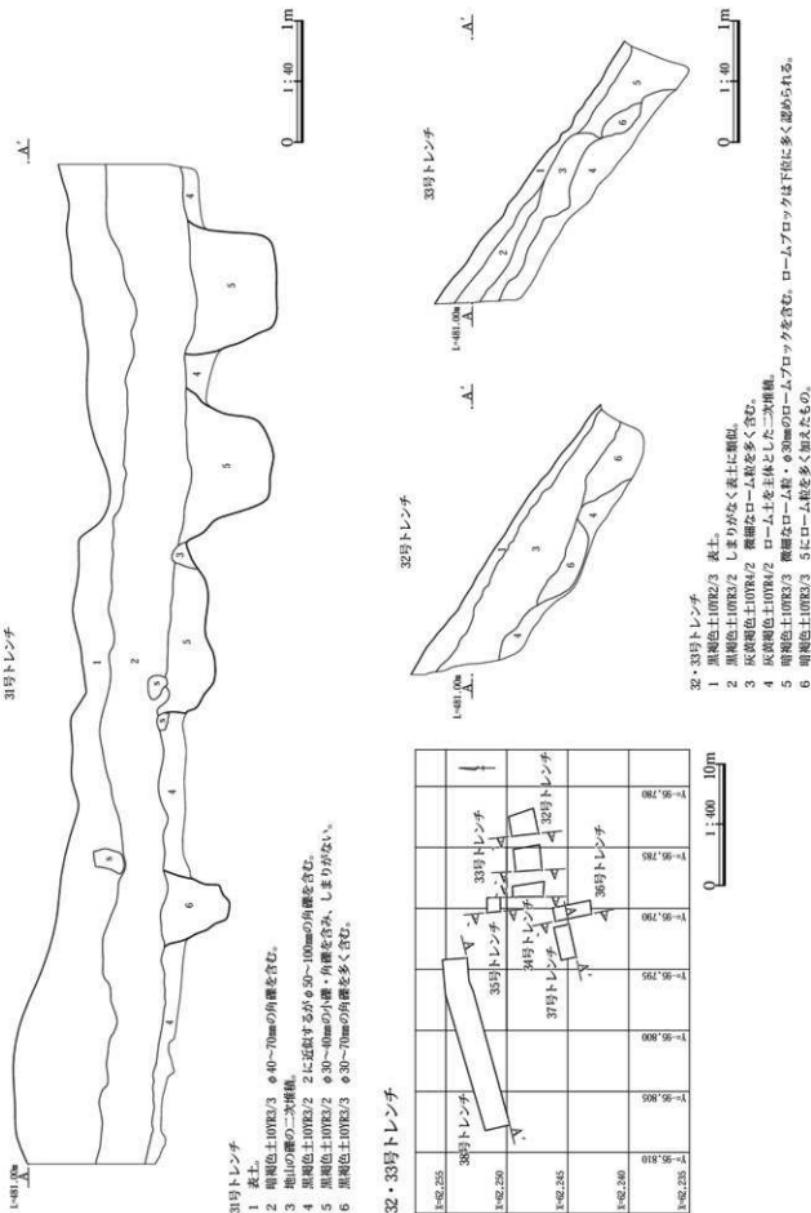
調査の結果、墓坑を検出、調査した。詳細は6号腰曲輪の項を参照。

30号トレンチ 現況図で想定できた6号腰曲輪の確認を目的に設定した。

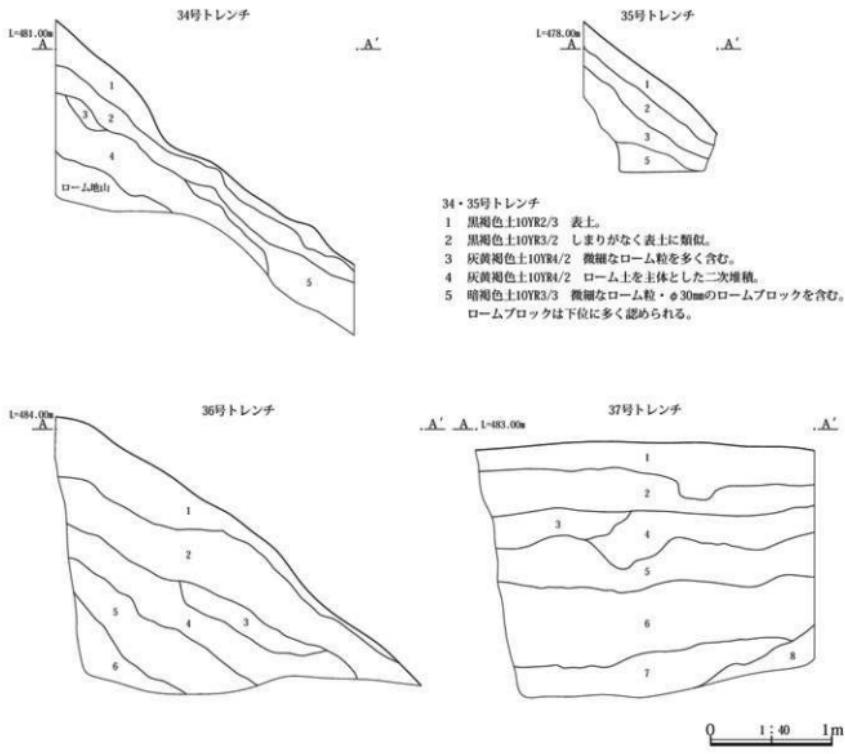
調査の結果、造成の可能性がみられた。詳細は7号腰

曲輪の項を参照。

32号・33号・34号・35号トレンチ 1区平坦面の中程、北寄りで検出した1号通路、2号柵、8号建物などの城館に伴う一連施設の斜面下位の様相を確認する目的で設定した。



第38図 31号トレンチ断面図、32~38号トレンチ位置図、32・33号トレンチ断面図



- 36・37号トレンチ**
- 1 黒褐色土10YR2/3 表土。
 - 2 喻褐色土10YR3/3 ϕ 10~20mmの小礫、 ϕ 100mmの角礫を含み、しまりがない。
 - 3 黑褐色土10YR3/1 小礫 ϕ 10mmを含み、しまりがない、やや砂質土。
 - 4 灰褐色土10YR4/2 3に近似するが黄味強い。
 - 5 にぶい黄褐色土10YR6/3 ローム粒を主体とし、しまりがない。

- 6 ローム二次堆積 As-YP粒を含み、しまりがない。
- 7 ローム二次堆積 やや砂質性あり 上位の層よりしまりがある。
- 8 ロームと明暗灰地山の混土。角礫を含む。

第39図 34~37号トレンチ断面図

調査の結果、遺構の存在は確認できなかった。

36号トレンチ ここでは東側で検出した通路が伸びると想定して通路の検出を目的に設定した。

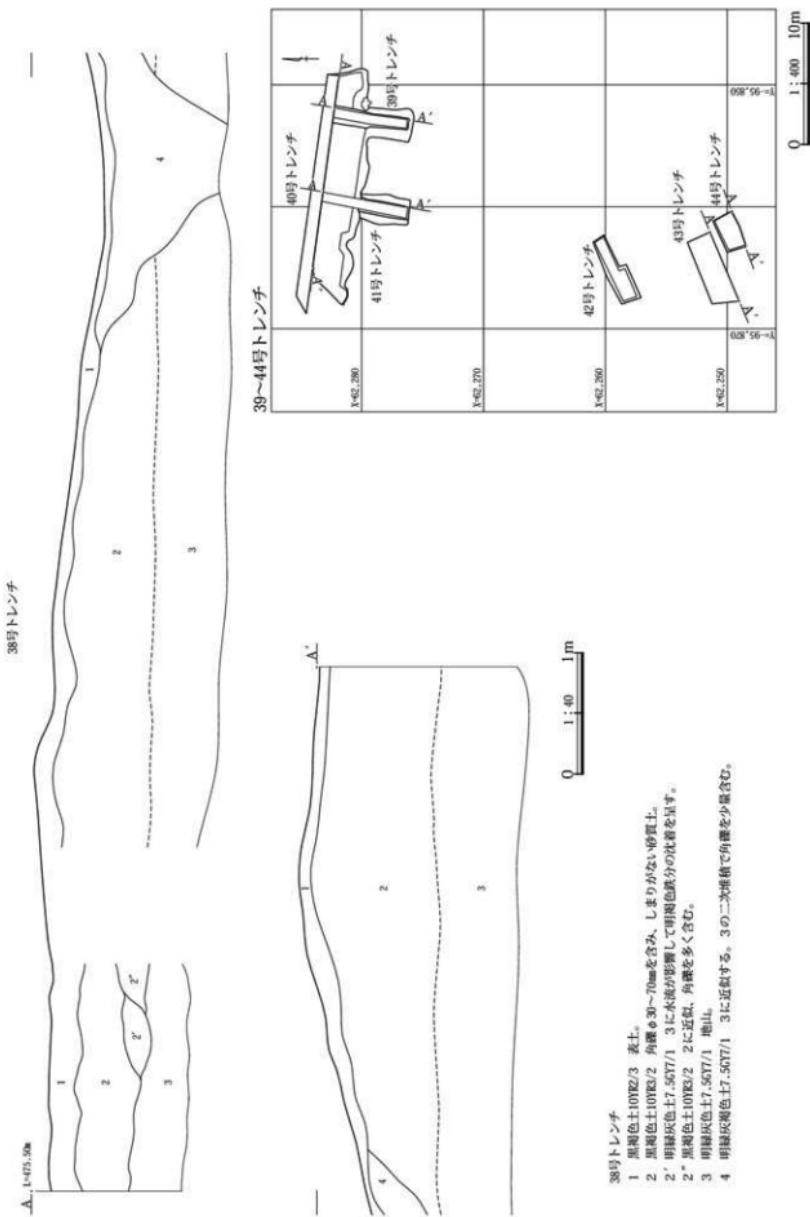
調査の結果、通路などの遺構の検出には至らなかった。この地点は傾斜が40°以上ある斜面のため地山を掘削しないと行き来は難しい箇所である。

37号トレンチ 36号トレンチ同様に東側で検出した通路が伸びると想定して通路の検出を目的に設定した。

調査の結果、通路などの遺構の検出には至らなかった。

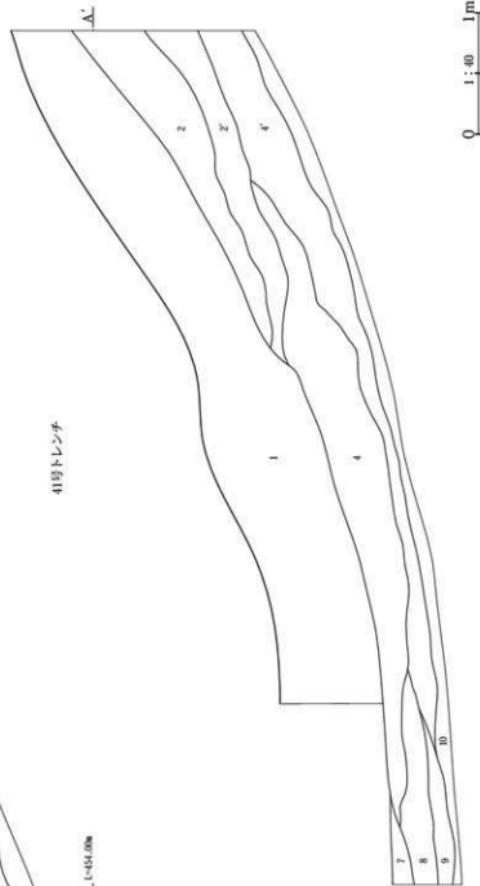
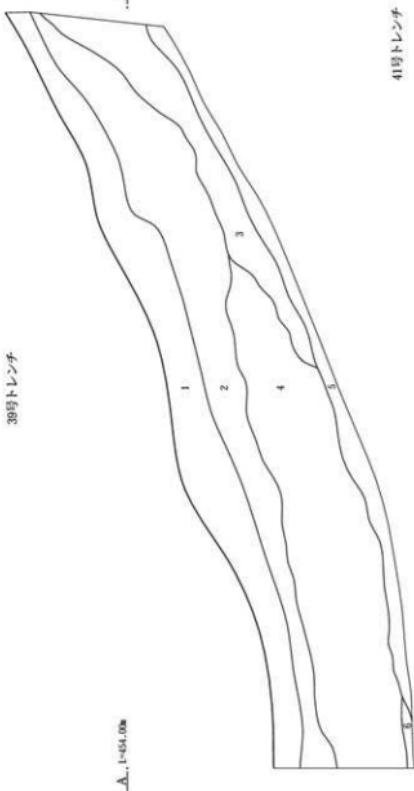
38号トレンチ 現況図で想定できた3号竪堀の確認を目的に設定した。なお、3号竪堀については斜面上位の標高480m付近に15号トレンチを設定したが、ここでは竪堀の存在は確認されていない。

調査の結果、幅2m、深さ1mのV字状の掘り込みを確認し、竪堀の可能性が想定できた。詳細は3号竪堀の項を参照。

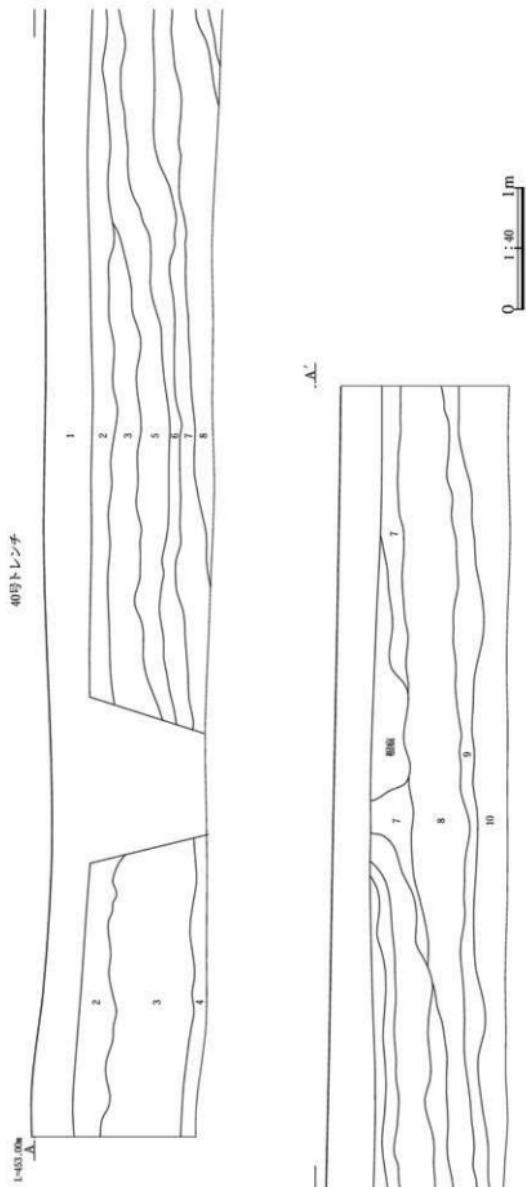


第40図 38号トレンチ断面図、39-44号トレンチ位置図

- 39・41号トレンチ
 1 黒褐色土±10R/2/3 粘土。
 2 黒褐色土±10R/2/3 φ30°～70mmの角礫純質の粘土が主体。
 2' 黒褐色土±10R/2/2 φ30°～40mmの中間的な土、礫が混入。
 3 黑褐色土±10R/3/2 2に近似し、やや粘性のある褐褐色土との混
土。
 4 黑褐色土±10R/3/1 2に類似、角礫を主体とする。
 4' 黑褐色土±10R/3/1 2に類似、角礫を多く含む。
 5 黑褐色土±10R/3/2 角礫を多く含む、粘質土。
 6 黑褐色土±10R/2/1 5に近似、より黒色が強く、角礫を多量に
含む。粘質土。
 7 ローム質土・黒褐色土の層じり合った土、漸移層的な組成。
 8 黑褐色土±10R/7/6 ローム・黒褐色土が砂板に混入。φ 5°～10
mmの赤い鉄色バニスを含む。
 9 明褐色土±10R/7/6 ヨセ土を主体としたローム。
 10 に赤い鉄色土±10R/7/2 バニスを含む。

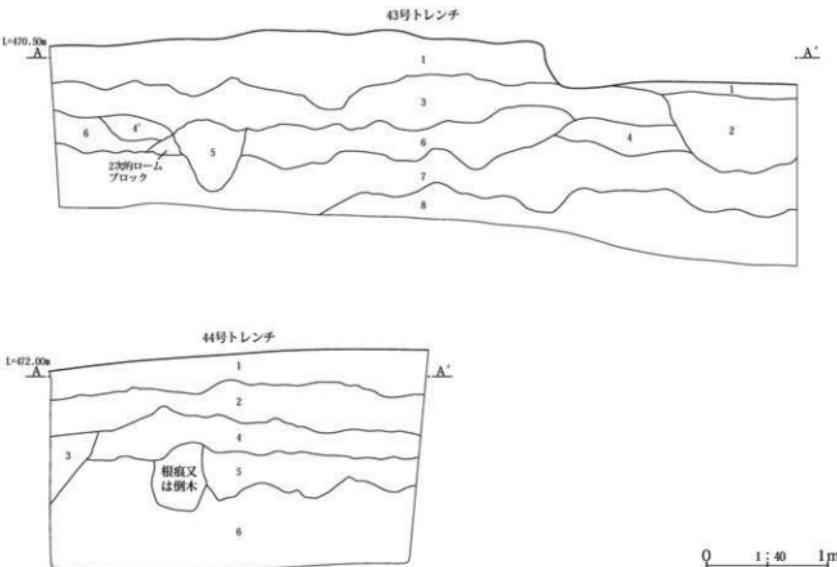


第41図 39・41号トレンチ断面図



- 40号トレンチ
- 1 黒褐色±010R2/3 表土。
 - 2 黒褐色±010R3/2 φ30~70mmの角礫を含む。
 - 3 黒褐色±010R3/1 2に細粒、角礫を主とする。
 - 4 黒褐色±010R3/1 5に泥灰、5より黒色が強く、角礫を含む。
 - 5 黒褐色±010R3/1 2に細粒、角礫を少含む。
 - 6 黒褐色±010R3/1 φ 5~10mmの黄褐色ローム粒に含み、粘質土。
 - 7 ローム質土と黄褐色土との接合した土。漸移的な様相。
 - 8 明黄褐色±00R7/6 ローム・黒褐色が混在する。φ 5~10mmに少い角礫を含む。
 - 9 明黄褐色±00R7/6 As-VPをE-E'としたロード。
 - 10 にぶい黄褐色±010R7/2 ハミスを含む。

第42図 40号トレンチ断面図



- 43号トレンチ
 1 黒褐色土10YR2/3 表土。
 2 黒褐色土10YR3/2 ϕ 10~25mmの小礫とAs-Kkを含み、しまりがない。
 3 灰黄褐色土10Y4/2 ϕ 10mmのAs-Kkを含み、しまりがない砂質土。
 4 にぶい黄褐色土10YR5/3 ϕ 5mm前後のローム粒を含み、しまりがある。
 4' にぶい黄褐色土10YR5/3 4に類似。
 5 暗褐色土10YR2/3 ϕ 5mmのAs-Ypを含み、しまりがある粘質土。
 6 黒褐色土10YR2/1 ϕ 1~5mmのローム粒を含む。
 7 にぶい黄褐色土10YR5/3 ϕ 30~50mmのロームブロックが斑状に、As-Ypを含み、しまりがある。
 8 暗褐色土10YR3/3 As-Ypを含む粘質土。

- 44号トレンチ
 1 黒褐色土10YR2/3 表土。
 2 にぶい黄褐色土10YR5/3 As-Kkを多く含み、しまりがある粘質土。
 3 灰黄褐色土10YR5/2 ϕ 1~10mmのローム粒を多く含む。
 4 灰黄褐色土10YR4/2 As-Kkを少量含み、しまりがない。
 5 黑褐色土10YR3/2 ローム粒またはAs-Ypを含み、しまりがある。
 6 黄褐色土10YR5/2 ローム土の二次堆積か。

第43図 43・44号トレンチ断面図

39号・41号トレンチ 丘陵北側斜面下部の状況について
調査する目的で設定した。

調査の結果、この付近は現在30°前後の傾斜であるが、以前も同様であることが判明した。なお、城館に伴う遺構や他の時代の遺構は確認できなかった。

40号トレンチ 丘陵北側斜面下のやや平坦地の状況について調査する目的で設定した。

調査の結果、東へやや傾斜していたことが判明した。なお、城館に伴う遺構は検出できなかったが、縄文時代

の土坑(5号土坑)を1基検出している。

42号トレンチ 24号トレンチ参照。

43号・44号トレンチ 現況図で想定した4号堅堀の状態を確認する目的で設定した。

調査の結果、倒木痕や小規模な落ち込みは確認できたが、堅堀は検出されなかった。

2 曲輪・腰曲輪

曲輪

丘陵尾根頂部、「鉄塚」と呼称される下曲輪に相当する。今回の調査対象地の1区である。標高は482~488mで中央部の約10メートル四方が台状に高くなっている。

ここでは、台状部の東側はローム土上に灰色を帯びた黄褐色土層が確認でき前後の層位から上面が中世に相当するとみられた。このことからこの土層が確認できる範囲では中世面と中世及びそれ以前の2面調査を行っている。なお、この灰色を帯びた黄褐色土上面が調査の所見では中世面のことであるが、この土層下面でも城館に伴う遺構が検出されている。この状況から灰色を帯びた黄褐色土は城館が築かれ、廃城になるまでのどの段階で堆積または造成されたのかは不明である。

この曲輪で検出した城館に伴う遺構は次のとおりである。通路、防御施設として北側中央で北斜面をあがってくる通路と曲輪への出入り口である門とみられる8号建物、その両側に2号柵が設置されていた。また、防御施設として西端に4号柵、その東35mに3号柵が設けられていた。

建物等の施設としては2面で1号~3号建物、下面の3面で4号~7号建物を検出した。これらの建物は1号建物と2号建物と5号建物、3号建物と4号建物の間では重複しており、存続時期が異なるが、6号建物と7号建物はその位置関係から併存し、7号建物は6号建物に付随するものとみられる。

この他の遺構としては中央で14号土坑を検出しているが、遺物等の出土がみられなかったため詳細は不明である。

なお、曲輪のほぼ中央に位置する台状については表土を掘削していく過程でほぼ平坦になり、掘削中の観察でも中世での盛り土や周囲の掘削などの造成は確認できなかつた。

1号腰曲輪

調査範囲の東端、丘陵東斜面の標高473~474m、X=62,213~62,227、Y=-95,708~-95,722に位置する。長さ約20m、最大幅3mの三日月状の狭い平坦地であることから腰曲輪の存在が窺えた。なお、大部分は調査対象区外に存在する。

なお、1号腰曲輪については大部分が調査対象区外に存在するため面的な掘削などの調査は行わなかった。

2号腰曲輪

調査範囲の東端、丘陵東斜面の標高478~479m、X=62,219~62,231、Y=-95,716~-95,728に位置する。長さ約16m、最大幅3mの三日月状の狭い平坦地であることから腰曲輪の存在が窺えた。また、西側には武者走とみられる通路状の痕跡が窺えたが、確証には至っていない。

3号腰曲輪

調査範囲の東端、丘陵東斜面の標高480~481m、X=62,220~62,232、Y=-95,722~-95,730に位置する。長さ約14m、最大幅4mの三日月状の狭い平坦地であることから腰曲輪の存在が窺えた。

2号腰曲輪と3号腰曲輪については近接していることから両方を同一に掘削して調査を行った。しかし、2号腰曲輪に相当する箇所については、ごく一部しか掘削できなかつたため、腰曲輪と判断できる要素はみられなかつた。3号腰曲輪について南北4m、東西1mの範囲で比高差30cmほどの平坦面が確認された。なお、調査は安全対策のため腰曲輪全体について行うことができなかつたため全貌は不明である。なお、調査時に北端で東西方向の道跡を検出した。検出した箇所の断面が不良のため南側にトレチでの掘削を行い、この箇所で確認した。この調査では通路が大きく曲がることが確認できるとともに道面は青灰色土をブロック状に敷き、固く踏みしめていることがわかつた。

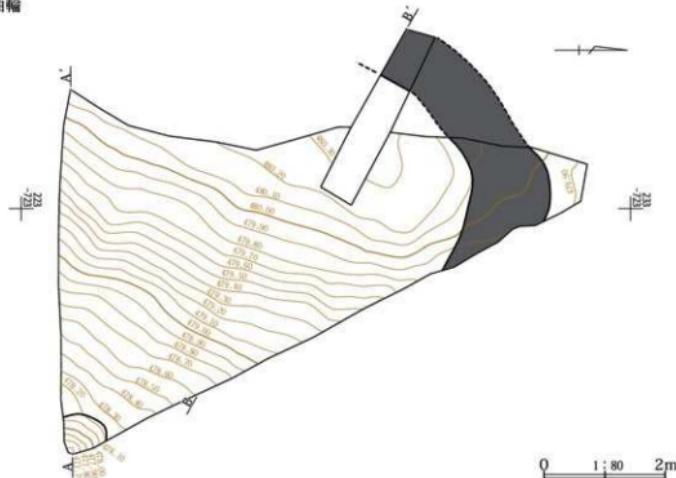
4号腰曲輪

調査範囲の南東部、丘陵南斜面の標高482.00~483.50m、X=62,205~62,213、Y=-95,756~-95,773に位置する。長さ19m、最大幅4mの三日月状の狭い平坦地であることから腰曲輪の存在が窺えた。

遺構の状態について確認を行うため調査坑(8号トレチ)による調査を実施したところ、造成の可能性が窺える堆積が観察できた。そのため、ここでは平面での調査を実施することにした。平面調査では、傾斜の下端部分にあたる箇所は安全対策のため掘削できないため全貌は不明であるが、調査範囲南側で4基のピット(95号~98号ピット)を検出した。

4号腰曲輪は現況では、20cmほどの比高差であったが、

3号腰曲輪



第44図 3号腰曲輪遺構図(1)

地山面では、1 m以上の比高差が確認されている。腰曲輪造成にあたっては、上部を掘削し、下部を盛り土したとする調査所見があるが、土層注記では盛り土の一部に「しまりが弱い」との所見があるため、腰曲輪自体は上部の地山掘削範囲に限定される可能性がある。また、4基のピットは東西方向に列んでいるが、柱穴間が2箇所しかないことや西側に延びないこと、間隔が余りにも不均等であるため柵の可能性は低いと判断した。それぞれのピットの詳細は「(12)ピット」に掲載した。

5号腰曲輪

調査範囲の東、丘陵東斜面の標高473~476m、X=60,195~62,199、Y=-95,772~-95,780に位置する。長さ9m、最大幅3mの三日月状の狭い平坦地であることから腰曲輪の存在が窺えた。

6号履曲輪

調査範囲の南部、2区南端、丘陵南斜面の標高480~480.80m、X=61,207~61,210、Y=-95,791~-95,797に位置する。長さ6.5m、最大幅2mの三日月状の狭い平坦地であることから腰曲輪の存在が窺えた。

遺構の状態について確認を行うため調査坑(29・31号トレンチ)による調査を実施したところ、土坑とみられる遺構を検出した。これらの遺構を調査したところ、近世末～近代初頭にかけての墓地であった。このため、6号腰曲輪と想定していた狭い平坦地は、中世の城館に伴う可能性はあるが、墓地によって改変され痕跡は確認できなかった。なお、墓地・墓坑は出土した副葬品より江戸末期～明治初期に想定されることから、本報告書では掲載しない。

7号腰曲輪

調査範囲の南部、2区南端、丘陵南斜面の標高478.50m～479.80m、X=61,207～61,209、Y=-85,797～-95,803に位置する長さ6m、最大幅3mの三日月状の狭い平坦地であることから腰曲輪の存在が窺えた。

遺構の状態について確認を行うため調査坑(30号トレーナー)による調査を実施したところ、掘削や造成などが行われた痕跡は確認できなかった。

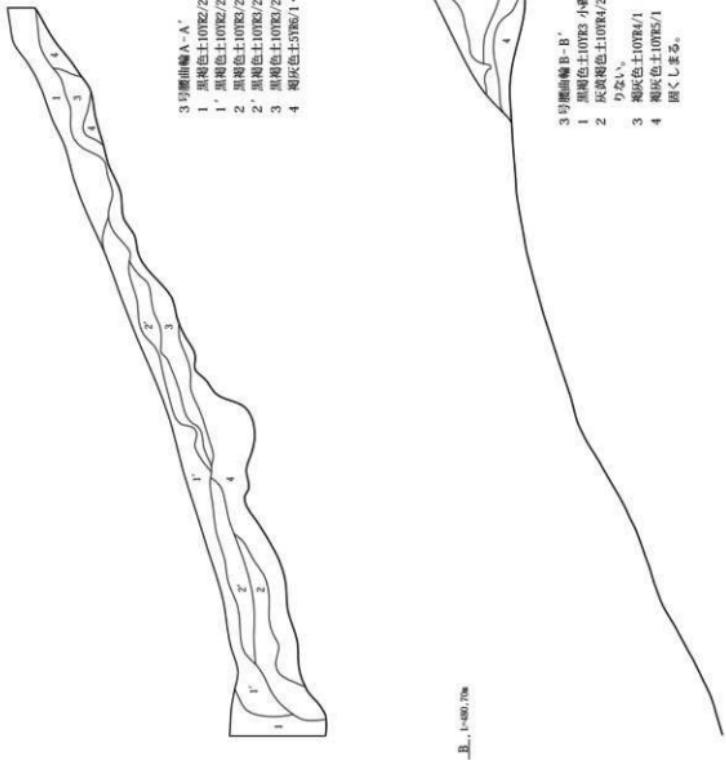
8号腰曲輪

調査範囲の北東より、5区南西部、丘陵北斜面、標高479.50~481.00、X=62,236~62,245、Y=-95,838~-95,848に位置する長さ約12m、幅4m程の半月状の狭

0 1:40 1m

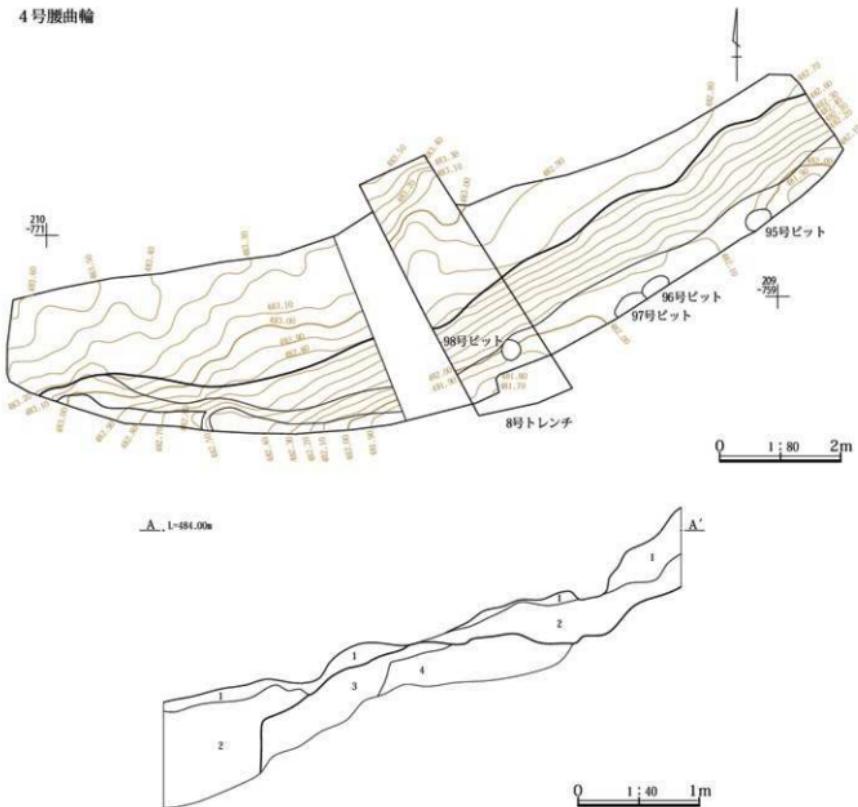
第45図 3月廻曲輪遺構図(2)

△A, 1:40, 7m



- 3月廻曲輪B-B'
- 1 黒褐色土10R2/3 小礫とφ 1～3mmの黄褐色粗石を少し含み、しまりがあまりない。
2 黄褐色土10R4/2 φ 5～15mmの小礫と黄褐色土粘土・青灰色土粘土・ブロックを何かに含み、しまりがあまりない。
3 黄褐色土10R4/1 黄褐色解土を僅かに、青灰色土アロックを含み、崩くします。
4 褐灰色土10R5/1 黃褐色土・黄褐色粗石を少し、φ 20～30mmほどの青灰色土アロックを多く含み、崩くします。

4号腰曲輪



4号腰曲輪

- 1 黒褐色土10YR2/2 ϕ 5~15mm・500mm前後の礫と砂を多く含み、しまりがあまりない。
- 2 喷褐色土10YR3/3 青灰色土・砂礫をやや多く、角礫・砂粒を少し含み、ややしまりがある。
- 3 喷褐色土10YR3/3 角礫を多量と青灰色土を多く含み、しまりがある。
- 4 褐色~明褐色土7.5YR4/4~5/6 程層、断面頂中央から南は青灰色が軟化化、北1/4ほどは緑灰色または灰白色の礫、中央部は酸化鉄が付着している。

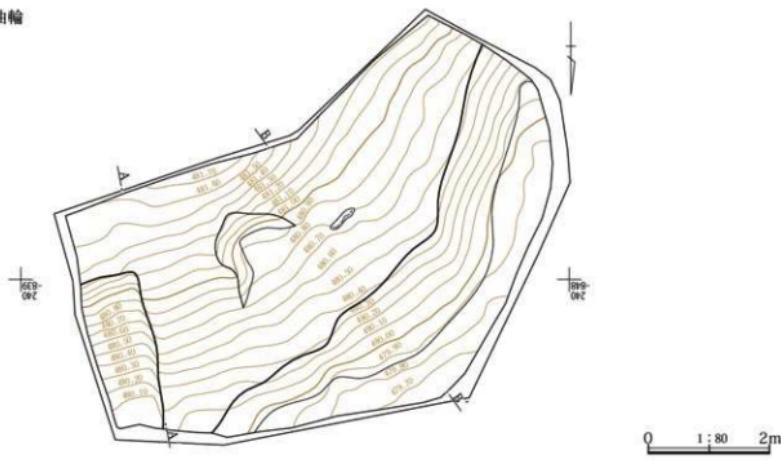
第46図 4号腰曲輪構造図

い平坦地であることから腰曲輪の存在が窺えた。

遺構の状態について確認を行うため2018年度に調査坑(26号トレンチ)による調査を実施したが、設定位置がずれてしまつたため腰曲輪の確認までは至らなかった。そのため2019年度に平面調査を実施した。しかし、ここでは地山の二次堆積など斜面崩落などは確認できたが、掘削や造成などが行われた痕跡は確認できなかった。なお、

地山面での傾斜は約30°と急傾斜であった。作業にあたっては安全確保のため調査前に作業場を設定したため腰曲輪全面の調査はできなかった、調査の結果からは腰曲輪の可能性を否定、否定にも至っていない。

8号腰曲輪

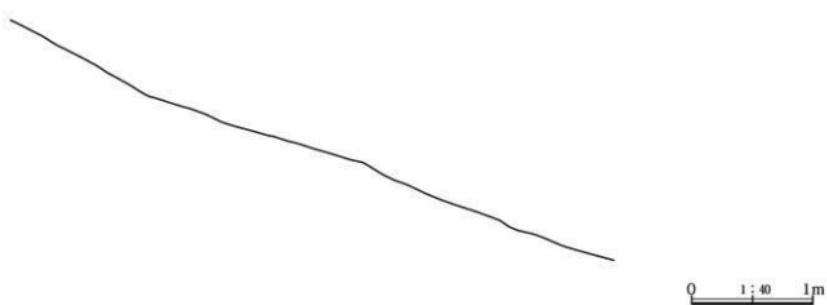


8号腰曲輪

- 1 黒褐色土10YR2/3 表土。
 - 2 にふい 黄褐色土10YR5/3 φ 5~10mmの小礫を含み、しまりがない砂質土。
 - 3 にふい 黄褐色土10YR5/3 φ 5~10mmの小礫の混入なし、しまりがない。
 - 4 黄褐色土10YR5/2 φ 5~7mmの小礫を含み、しまりがない砂質土。
 - 5 剥離褐色土10YR5/1 φ 5 mm前後の小礫を少量含み、地山の褐灰色土の二次堆積土を主体とする。
 - 6 明黄褐色土2.57/6 青灰色の角礫凝灰岩半固結が主体、一部焼成土している。

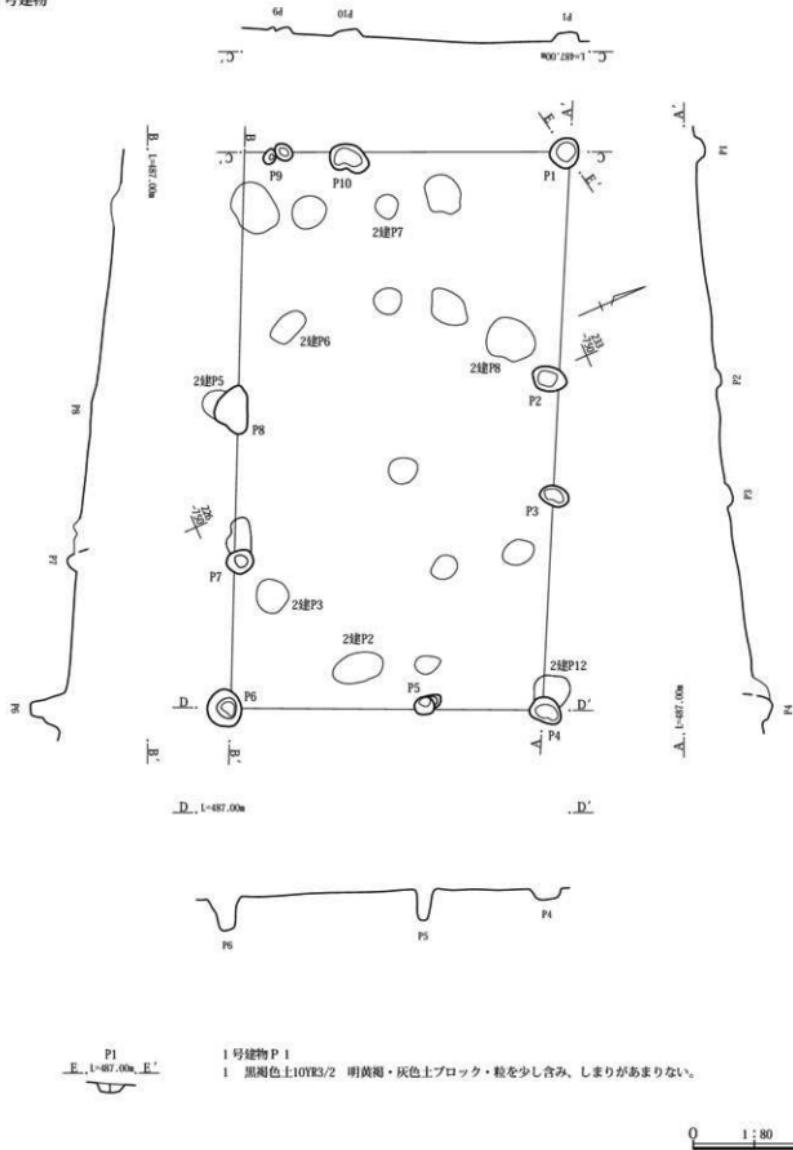
B-1-482,00m

B-8



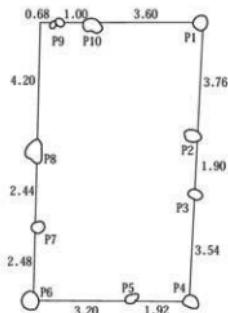
第47図 8号腰曲輪遺構図

1号建物



第48図 1号建物遺構図

1号建物柱穴間距離



第4表 1号建物柱穴計測表

単位(m)

柱穴No	IIINo	平面形	長軸	短軸	深さ	重複
P 1	I建P 10	楕円	0.50	0.47	0.17	
P 2	I建P 7	楕円	0.57	0.40	0.15	
P 3	I建P 5	楕円	0.48	0.33	0.11	
P 4	I建P 3	楕円	0.53	0.40	0.18	2建P 12
P 5	I建P 2	楕円	0.48	0.31	0.54	
P 6	I建P 1	円形	0.63	0.57	0.58	
P 7	I建P 4	円形	0.44	0.38	0.21	
P 8	—	不整形	0.80	0.58	—	2建P 5
P 9	—	楕円形	0.33	0.24	0.11	
P 10	—	楕円形	0.66	0.40	0.14	

IIINo.は発掘調査時の名称

3 建物

1号建物

位置 調査対象地東部、1区東部、X=62,225~62,234、Y=-95,744~-95,755に位置する。

重複 2面中世上面での調査である。2号建物、5号建物、13号土坑、複数のピットと重複関係にある。新旧関係は2号建物、5号建物より本建物のほうが新しいが、13号土坑とは柱穴が直接重複していないため新旧関係は不明である。なお、ピットとの新旧関係は柱穴と直接の重複が確認できなかったため不明である。

立地 丘陵尾根状の比較的緩斜面ではあるが、標高は最高値486.80m、最低値485.50mとその比高差は1.30mと大きい。

形状 平面形態は北辺が南辺より0.08m、西辺が東辺より0.16m長いため、やや歪んだ長方形を呈す。柱穴の配置はP 1~2、P 3~4、P 8~P 9、P 10~P 1のように3.54~4.20mと間隔が離れた箇所が存在する。このため、一部の柱穴はP 8のように浅いため確認段階では失われてしまった可能性が窺える。こうしたことから梁行3間、桁行4間と想定される。

規模 北辺9.20m、南辺9.12m、東辺5.12m、西辺5.28mを測る。

床面積 48.57m²を測る。

長軸方向 N-63°-Wを指す。

柱穴 平面形態は楕円形か円形を呈し、規模は径(長軸)が27~66cm、深さはほとんどが11~21cmと浅いが、P 5・

P 6は54~58cmと深い。なお、柱痕については不明である。

その他施設 検出されていない。

出土遺物 遺物は出土していない。

所見 柱穴の埋没土から中世に位置づけられることから根小屋城に伴う建物と判断できる。

2号建物

位置 調査対象地東部、1区東部、X=62,225~62,233、Y=-95,744~-95,753に位置する。

重複 2面中上面での調査である。1号建物、5号建物、13号土坑、複数のピットと重複関係がある。新旧関係は1号建物より本建物のほうが古く、5号建物より新しい。13号土坑とは柱穴が直接重複していないため新旧関係は不明である。なお、ピットとの新旧関係は柱穴と直接の重複が確認できないため不明である。

立地 丘陵尾根状の比較的緩斜面ではあるが、標高は最高値486.60m、最低値485.60mとその比高差は1.00mと大きい。

形状 平面形態は北辺と南辺はほぼ同じ長さであるが、西辺は東辺に比べ0.56m長い長方形を呈する。柱穴の配置は梁行2間、桁行3間で、柱穴間距離も1.60m~2.96mとややバラツキが見られるが、他の建物に比べると比較的整然とした配置である。

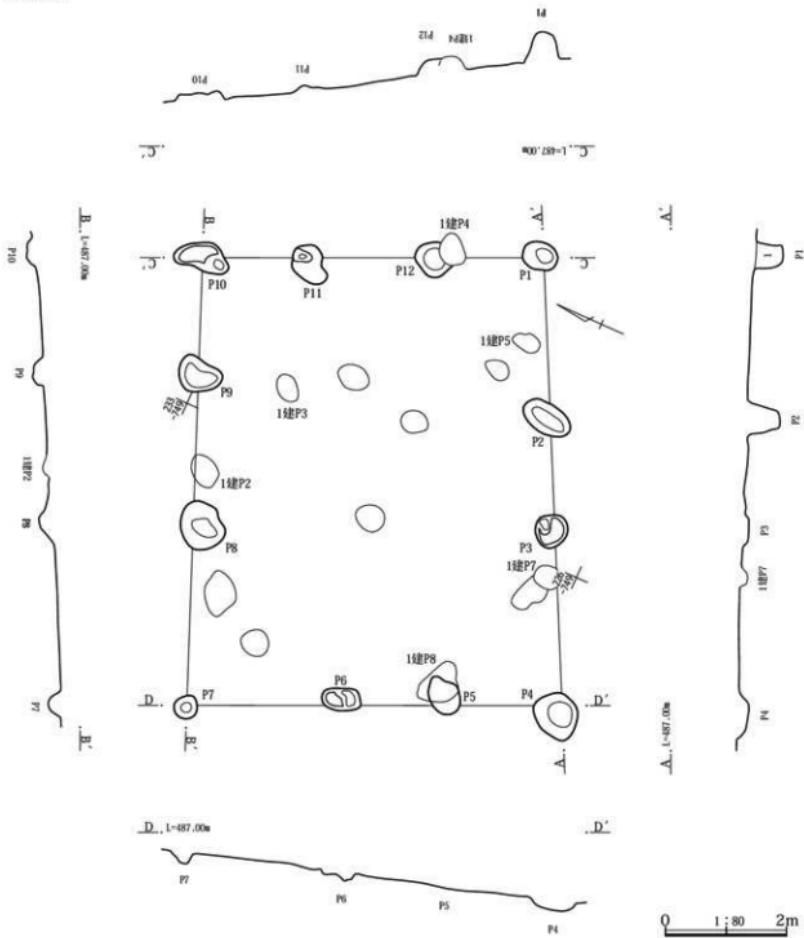
規模 北辺7.36m、南辺7.32m、東辺5.52m、西辺6.08mを測る。

床面積 44.15m²を測る。

長軸方向 N-65°-E

柱穴 平面形態は楕円形か円形、不整形を呈し、規模は

2号建物



2号建物 P 1

1 喰褐色土10YR3/3 明黄褐・灰色土ブロック・粒を少し、 ϕ 1~3mmほどの黄色軽石を僅かに含み、しまりがあまりない。

第49図 2号建物遺構図

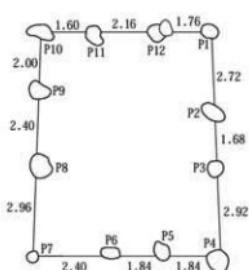
径(長軸)が41~97cm、深さはほとんどが12~26cmと浅いが、P 1・P 2は50・59cmと深い。なお、柱痕について不明である。

その他施設 検出されていない。

出土遺物 遺物は出土していない。

所見 柱穴の埋没土から中世に位置づけられることから根小屋城に伴う建物と判断できる。

2号建物柱穴間距離



第5表 2号建物柱穴計測表

単位(m)

柱穴No	II No	平面形	長軸	短軸	深さ	重複
P 1	2建P 1	楕円形	0.59	0.47	0.50	
P 2	2建P 5	楕円形	0.86	0.49	0.59	
P 3	2建P 7	円形	0.57	0.53	0.18	
P 4	2建P 9	楕円形	0.79	0.70	0.22	
P 5	2建P 10	不整形	0.57	0.50		— 1建P 8
P 6	2建P 11	楕円形	0.63	0.36	0.19	
P 7	2建P 12	円形	0.41	0.38	0.21	
P 8	2建P 8	楕円形	0.81	0.65	0.26	
P 9	2建P 6	楕円形	0.73	0.57	0.21	
P 10	2建P 4	楕円形	0.97	0.48	0.22	
P 11	2建P 3	楕円形	0.71	0.54	0.12	
P 12	2建P 2	楕円形	0.64	0.57	0.23	1建P 4

II No.は発掘調査時の名称

3号建物

位置 調査対象地東部・1区の東寄り、X=62,223～62,236、Y=-95,758～-95,774に位置する。

重複 2面中世上面での調査である。4号建物と重複関係にある。新旧関係は調査面において本建物が2面、4号建物が3面と新旧関係は明白であるとともに、P 6と4号建物P 1が直接重複しており、新旧関係も本建物のほうが新しい。

立地 丘陵尾根の比較的緩斜面ではあるが、標高は最高値487.70m、最低値486.50mとその比高差は1.20mと大きい。

形状 平面形態は、対面する各辺長が20～40cmほど異なるためやや歪みがある長方形を呈する。また、柱穴間は北辺P 1～P 2が6.64m、P 2～P 3が4.48mと大きく間隔が開いてしまうため、残存していない柱穴の存在が窺える。こうしたことから南辺の柱穴数を基に梁行3間、桁行6間の大型建物であった可能性が高い。また、柱穴の配置から南側と東側の1間は庇か下屋の可能性が想定できる。

規模 全体は北辺15.60m、南辺15.38m、東辺10.80m、西辺10.48m、身舎は北辺13.04m、南辺12.84m、東辺7.208m、西辺6.88mを測る。

床面積 全体167.07m²、身舎92.17m²を測る。

長軸方向 N-85°-Eを指す。

柱穴 平面形態は楕円形、円形を呈し、規模は径(長軸)が17～82cm、深さ11～64cmである。柱穴の規模は前記の

ように差が大きいが、身舎と庇部分で異なるわけではなく、それの中でも差がみられる状態であった。なお、柱痕については不明であるが、身舎南西角のP 16、東側庇P 9、南側庇P 12の底面には径20～40cm環が置かれた状態で礎石的な利用が行われた可能性が窺える。

その他施設 検出されていない。

出土遺物 遺物は出土していない。

所見 柱穴の埋没土から中世に位置づけられることから根小屋城に伴う建物と判断できる。

4号建物

位置 調査対象地東部、1区の東寄り、X=62,227～62,236、Y=-95,758～-95,768に位置する。

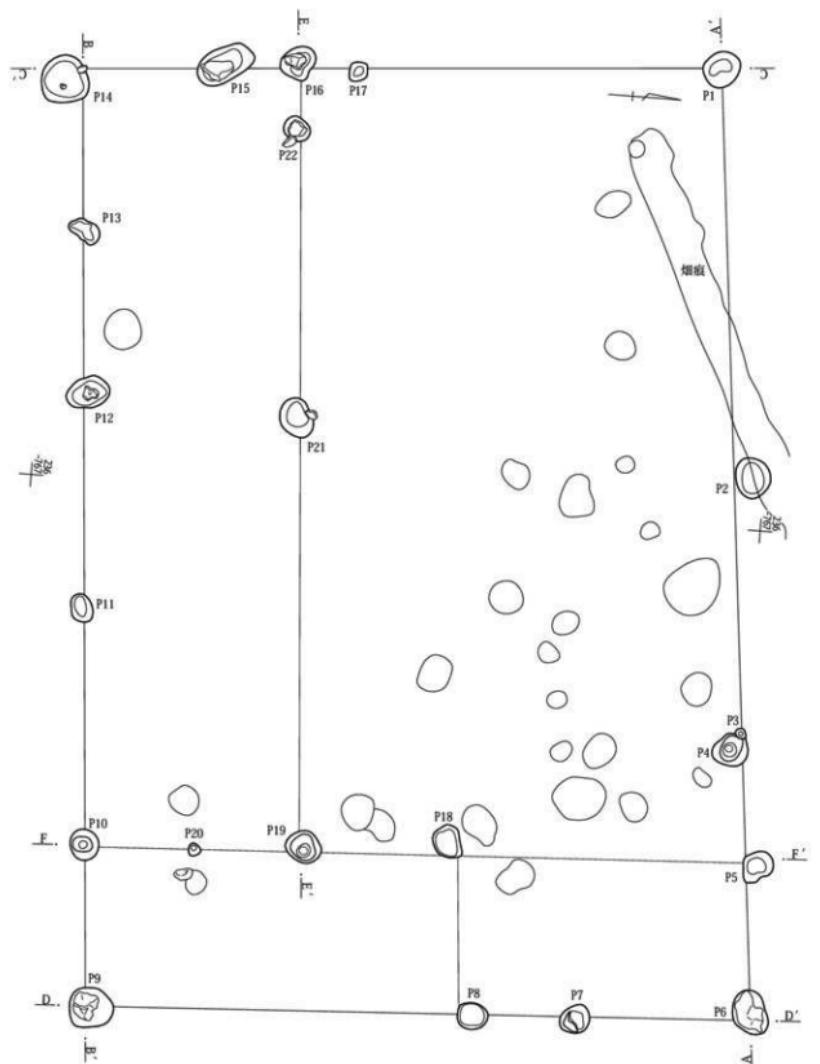
重複 3号建物と重複関係にある。新旧関係は3号建物で記載したように本建物の方が古い。

立地 丘陵尾根の比較的緩斜面ではあるが、標高は最高値487.30m、最低値486.70mとその比高差は0.60mとやや大きい。

形状 平面形態は、対面する各辺長が北辺・南辺で0.64m、東辺・西辺0.40mほど異なるためやや歪みがある方形を呈する。また、柱穴間が北辺P 1～P 2間が8.80m、P 4～P 5が9.20mと大きく間隔が開いてしまうため、残存していない柱穴の存在が窺える。こうしたことから他の建物の柱穴間を参考にすると梁行3間、桁行3間の建物であった可能性が高い。

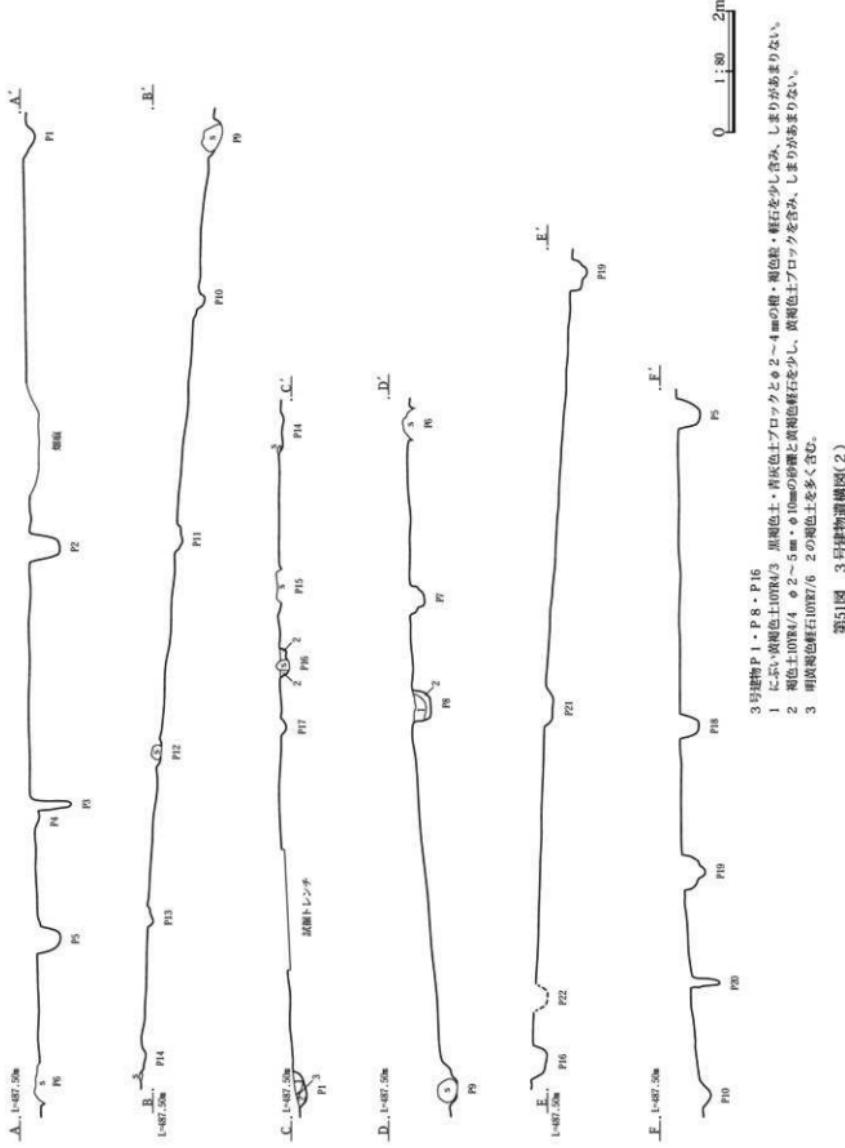
規模 北辺9.20m、南辺8.56m、東辺8.80m、西辺9.20mを測る。

3号建物



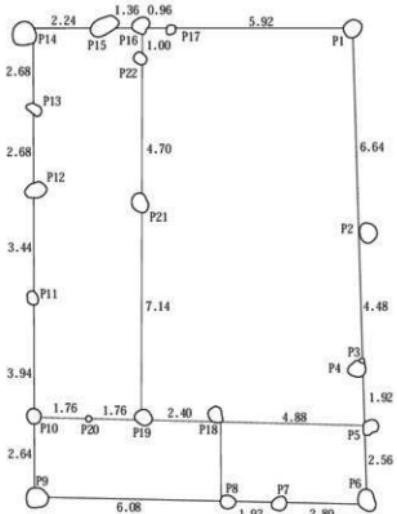
0 1 2m

第50図 3号建物遺構図(1)



第51圖 3號建物遺構圖(2)

3号建物柱穴間距離

床面積 79.94m²を測る。

長軸方向 N-87°-W

柱穴 平面形態は楕円形または円形を呈し、規模は径(長軸)32~57cm、深さ15~33cmである。なお、柱痕については不明である。

その他施設 検出されていない。**出土遺物** 遺物は出土していない。

所見 柱穴の埋没土から中世に位置づけられることから根小屋城に伴う建物と判断できる。

5号建物

本建物は2面調査面(中世上面確認面)終了後、3面(中世及び古代~縄文時代確認面)の調査においてX=62,220~62,230、Y=-95,720~-95,730の範囲のローム土に黒褐色土が混入している状態であったことから、80~90cmほど確認面を掘り下げたところで検出した。すなわち、上面で検出した1号建物や2号建物とは確認面が大幅に異なることになる。なお、遺構の南側は安全対策を講じた外側になるため調査することはできなかった。

第6表 3号建物柱穴計測表

単位(m)

柱穴No.	IIINo.	平面形	長軸	短軸	深さ	重複
P 1	3建P 23	楕円形	0.63	0.55	0.25	4建P 1
P 2	3建P 18	楕円形	0.68	0.57	0.48	
P 3	北P 18	円形	0.20	0.17	0.64	
P 4	北P 65	楕円形	0.60	0.54	0.28	
P 5	3建P 5	楕円形	0.58	0.47	0.38	
P 6	3建P 4	楕円形	0.75	0.57	—	
P 7	3建P 3	楕円形	0.51	0.44	0.28	
P 8	3建P 2	楕円形	0.51	0.43	0.31	
P 9	3建P 1	楕円形	0.72	0.64	—	
P 10	3建P 12	円形	0.51	0.47	0.13	
P 11	3建P 19	楕円形	0.48	0.36	0.11	
P 12	3建P 22	楕円形	0.72	0.50	0.06	
P 13	3建P 27	楕円形	0.54	0.32	0.09	
P 14	3建P 29	円形	0.82	0.82	0.04	
P 15	3建P 26	楕円形	0.98	0.54	0.09	
P 16	3建P 24	楕円形	0.61	0.53	0.24	
P 17	3建P 25	楕円形	0.37	0.32	0.11	
P 18	3建P 9	楕円形	0.58	0.49	0.37	
P 19	3建P 10	楕円形	0.60	0.53	0.40	
P 20	—	円形	0.21	0.21	0.46	
P 21	3建P 21	楕円形	0.67	0.51	0.13	
P 22	3建P 30	楕円形	0.45	0.36	-	

IIINo.は発掘調査時の名称

位置 調査対象地東部、I区東部、X=62,222~62,226、Y=-75,748~-75,753に位置する。

重複 1号建物、2号建物、複数のビットと重複関係にある。新旧関係1号建物、2号建物より本建物のはうが古い。なお、ビットとの新旧関係は柱穴と直接の重複が確認できないため不明である。

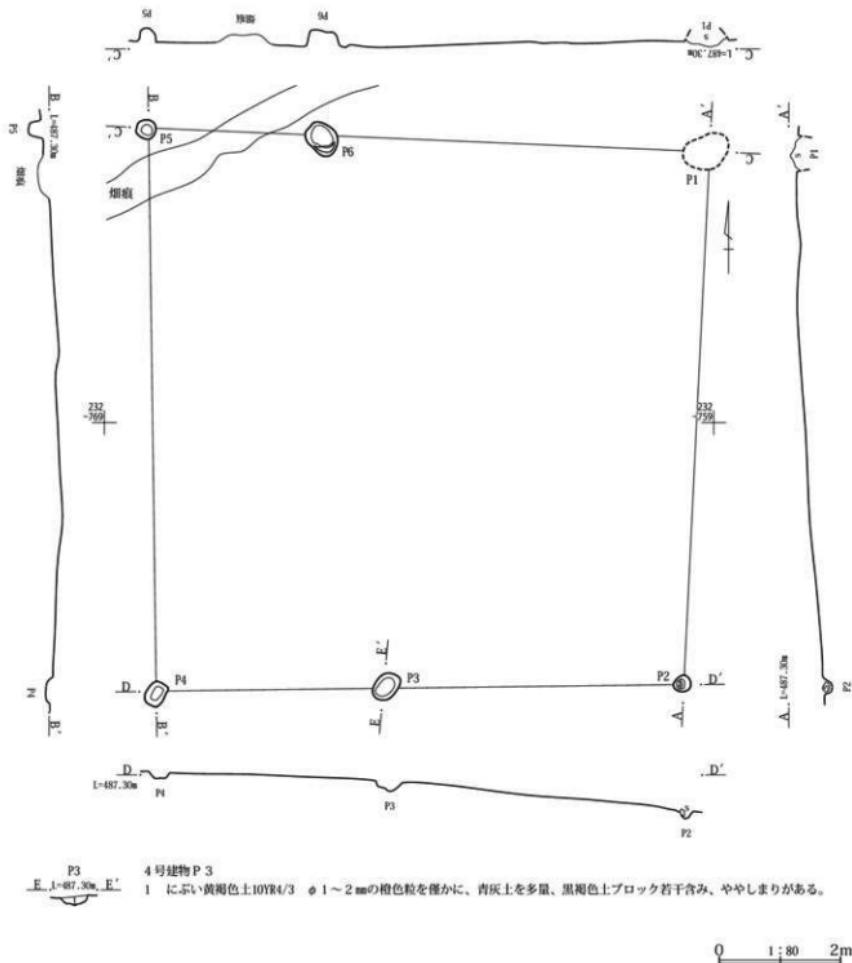
立地 丘陵尾根頂の頂部から南斜面に移行する緩斜面ではあるが、標高は最高値485.40m、最低値484.90mとの比高差は0.50mほどである。

形状 内側にやや規模の大きな主柱穴が配置され、その外側に小規模柱穴が配置されていることと主柱穴P 2とP 3の間にが設けられていることから床面は土間、屋根の形状は寄せ棟の建物と想定できる。

規模 北辺4.02m、東辺西辺3.2m+ α を測る。**床面積** 残存範囲で13.29m²を測る。**長軸方向** N-24°-W

柱穴 平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径(長軸)28~58cm、深さは25~78cmであるが、主柱穴である

4号建物



第52図 4号建物遺構図

P 1 ~ 4 は 65 ~ 88cm と深い。なお、柱痕については不明であるが、主柱穴 P 1 ~ 4 の断面形状からは抜き取りは行われなかつたと想定される。

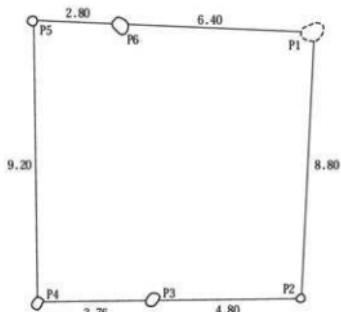
その他施設 主柱穴 P 2 と P 3 の間に炉が設けられている。確認面で焼土範囲が確認できたことから炉と判断し

た。南側の一部が調査できなかつたため全貌は不明である。形状は南北に長い楕円形を呈し、規模は長軸 0.60m + α 、短軸 0.52m を測る。

出土遺物 遺物は出土していない。

所見 柱穴の埋没土から中世に位置づけられることから

4号建物柱穴間距離



第7表 4号建物柱穴計測表

単位(m)

柱穴No.	III No.	平面形	長軸	短軸	深さ	重複
P 1	4建P 2	楕円形	0.75	0.57	—	3建P 6
P 2	4建P 1	円形	0.29	0.26	0.18	
P 3	4建P 3	楕円形	0.52	0.36	0.20	
P 4	4建P 5	楕円形	0.41	0.32	0.15	
P 5	4建P 6	円形	0.33	0.32	0.24	
P 6	4建P 4	楕円形	0.60	0.48	0.33	

III No.は発掘調査時の名称

根小屋城に伴う建物と判断できる。また、炉が設けられていることから兵士駐屯のさいに炊事に使用された施設と想定できる。

6号建物

位置 調査対象地西部・1区西寄り、X=62,225～62,230、Y=-95,810～-95,819に位置する。

重複 他の遺構との重複関係は確認されていない。

立地 丘陵尾根状の比較的緩斜面ではあるが、標高は最高値485.90m、最低値485.40mとその比高差は0.50mほどである。

形状 平面形態は、身舎はほぼ長方形を呈するが、東辺の南端と西辺の北端に下屋状の張出状の施設を有する。また、身舎中央には南北方向に間仕切りとみられる柱穴列が列ぶ。なお、桁行の柱間は3.20～3.76mと間隔が広いため、間に支柱穴が存在した可能性が窺えるが、桁行2間、梁行2間の建物であった可能性が高い。

規模 身舎は、北辺7.00m、南辺6.96m、東辺4.60m、西辺5.00m東側の張出は南北方向1.84m、東西方向1.52m、西側の張出は南北方向1.48m、東西方向0.58mを測る。

床面積 全体36.76m²、張出を除いた部分33.27m²を測る。

長軸方向 N-90°-Eを指す。

柱穴 平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径(長軸)21～70cm、深さは8～35cmと浅い。なお、柱痕については不明である。

その他施設 検出されていない。

出土遺物 遺物は出土していない。

所見 柱穴の埋没土から中世に位置づけられることから根小屋城に伴う建物と判断できる。

7号建物

位置 調査対象地西部・1区西寄りの6号建物北側、X=62,230～62,232、Y=-95,812～-95,815に位置する。

重複 他の遺構との重複関係は確認されていない。

立地 丘陵尾根状の比較的緩斜面ではあるが、標高は最高値485.80m、最低値485.70mとその比高差は0.10mと他の建物に比べて少ない。

形状 平面形態は菱形に近い歪んだ四角形を呈し、桁行1間、梁行1間の建物である。

規模 北辺、南辺とも2.64m、東辺、西辺とも1.80mを測る。

床面積 4.752m²を測る。

長軸方向 N-86°-W

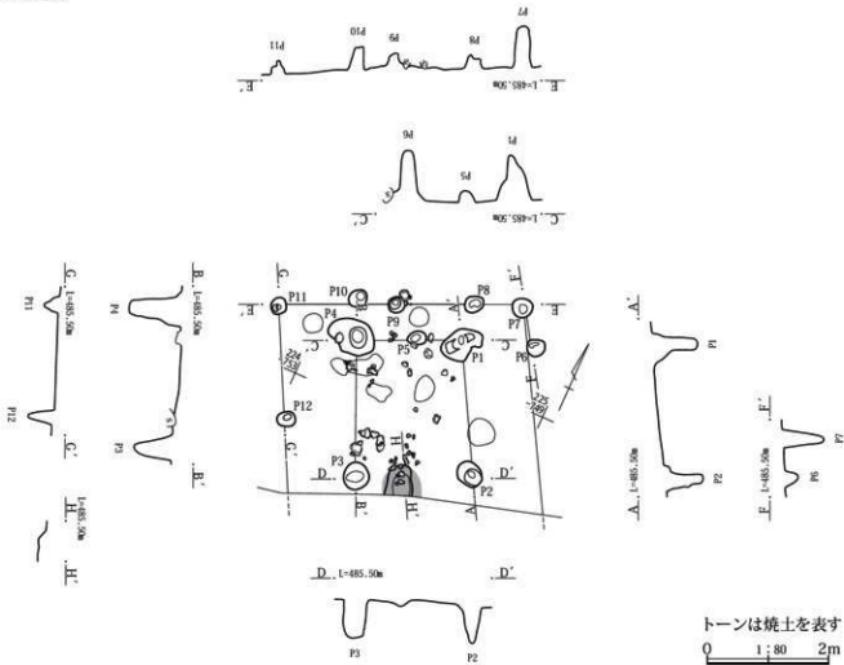
柱穴 平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径(長軸)29～55cm、深さ9～24cmである。なお、柱痕については不明である。

その他施設 検出されていない。

出土遺物 遺物は出土していない。

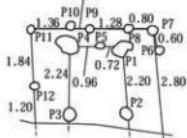
所見 柱穴の埋没土から中世に位置づけられることから根小屋城に伴う建物と判断できる。また、6号建物とは隣接しており、配置や位置関係から、6号建物に付随するものと想定できる。

5号建物



第53図 5号建物造構図

5号建物柱穴間距離

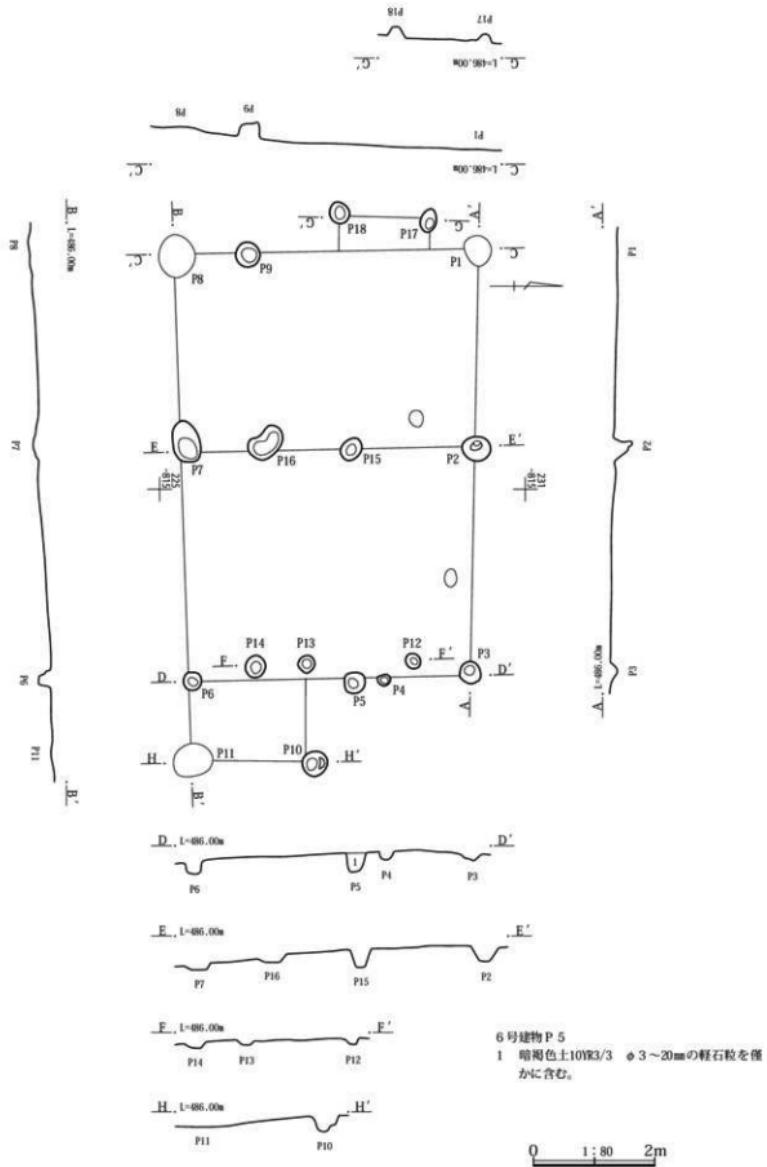


第8表 5号建物柱穴計測表

柱穴No	IIIno	平面形	長軸	短軸	深さ	重複
P 1	東部 P 7 + 8	不整形	0.70	0.43	0.74	
P 2	東部 P 16	楕円形	0.45	0.35	0.69	
P 3	東部 P 15	円形	0.44	0.42	0.65	
P 4	東部 P 10	楕円形	0.82	0.58	0.88	
P 5	東部 P 13	楕円形	0.32	0.22	0.20	
P 6	東部 P 4	円形	0.32	0.30	0.23	
P 7	東部 P 5	円形	0.34	0.32	0.69	
P 8	東部 P 9	楕円形	0.33	0.27	0.25	
P 9	東部 P 13	円形	0.28	0.26	0.29	
P 10	東部 P 18	円形	0.32	0.30	0.41	
P 11	東部 P 20	円形	0.28	0.27	0.25	
P 12	東部 P 21	楕円形	0.31	0.24	0.44	

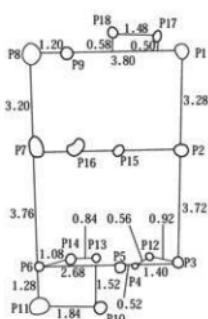
IIInoは発掘調査時の名称

6号建物



第54図 6号建物遺構図

6号建物柱穴間距離

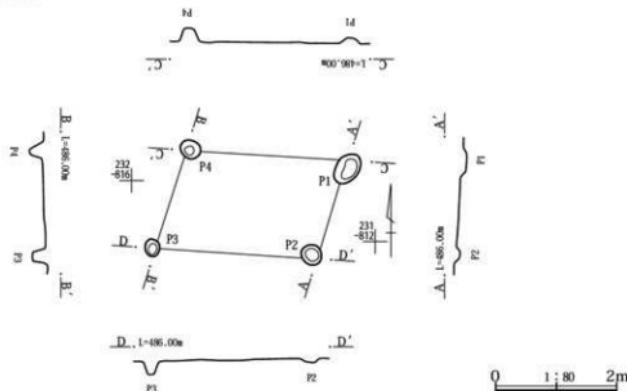


第9表 6号建物柱穴計測表

柱穴No	II No	平面形	長軸	短軸	深さ	重複
P 1	No無し	楕円形	0.51	0.43	—	
P 2	西P 34	楕円形	0.47	0.41	0.27	
P 3	西P 27	円形	0.37	0.35	0.11	
P 4	西P 25	円形	0.21	0.18	0.14	
P 5	西P 24	円形	0.38	0.36	0.35	
P 6	西P 21	円形	0.31	0.31	0.24	
P 7	西P 38	楕円形	0.70	0.45	0.11	
P 8	—	円形	0.70	0.60	—	
P 9	西P 39	円形	0.40	0.40	0.26	
P 10	西P 20	円形	0.42	0.39	0.27	
P 11	西P 19	楕円形	0.66	0.53	0.10	
P 12	西P 26	円形	0.27	0.24	0.10	
P 13	西P 23	円形	0.30	0.28	0.08	
P 14	西P 22	円形	0.37	0.33	0.10	
P 15	西P 36	楕円形	0.40	0.31	0.31	
P 16	西P 37	不整形	0.53	0.37	0.11	
P 17	西P 40	楕円形	0.39	0.26	0.15	
P 18	西P 42	円形	0.37	0.32	0.10	

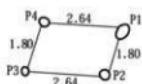
II No.は発掘調査時の名称

7号建物



第55図 7号建物造構図

7号建物柱穴間距離

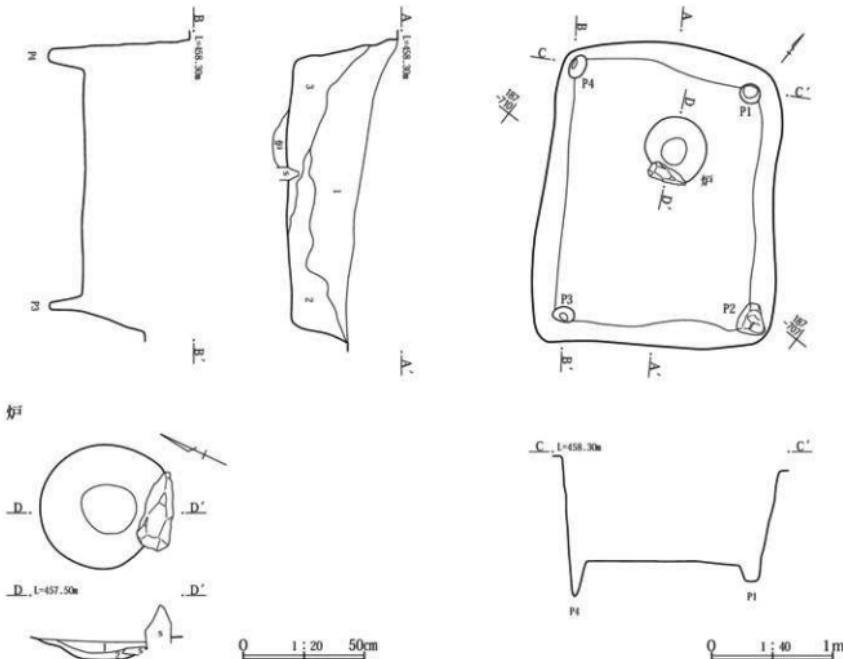


第10表 7号建物柱穴計測表

柱穴No	II No	平面形	長軸	短軸	深さ	重複
P 1	西P 28	楕円形	0.55	0.38	0.10	
P 2	西P 29	円形	0.35	0.32	0.09	
P 3	西P 33	楕円形	0.29	0.24	0.24	
P 4	西P 32	円形	0.35	0.30	0.23	

II No.は発掘調査時の名称

1号竪穴状遺構



1号竪穴状遺構

- 暗色土10YR3/3 ややしまりある粘質土。小礫・ローム土ブロック等不均等に含む。
- 灰黄褐色土10Y4/2 土質は1に近いが、ローム土を多く含み、礫の混入は少ない。東側からの埋没、壁崩落土も混じる。
- 黄褐色土10Y4/2 土質は1に近いが、ローム土やや多く含み、礫の混入少ない。斜面上側からの埋没、底面付近に炭化物粒を含む。

炉

- 黒褐色土2.5Y3/2 粘質土。炭化物粒・焼土を含み、ややしまりがない。
- 黒褐色土10Y2/2 1に炭化物が多く混入。焼土・灰の混入少ない。しまりがない。

第56図 1号竪穴状遺構

4 竪穴状遺構

1号竪穴状遺構

古代の竪穴建物と同様に地表面を掘り窪めて床面を構築、掘削した四隅に柱を立てて屋根を葺いた建物である。

位置 調査対象地南東部、0区中程X=62,185~62,188、

Y=-95,707~ -95,709に位置する。

重複 24号ピットと重複関係にある。新旧関係は本竪穴状遺構のほうが新しい。

立地 丘陵地の比較的平坦地、標高457.80~458.20mに立地する。

形状 北辺と東辺が対面する南辺、西辺より短いがほぼ長方形に近い形状を呈する。

規模 北辺1.68m、南辺1.82m、東辺2.15m、西辺2.32m、長軸2.46m、短軸1.99mを測る。

床面 掘削した地山をそのまま使用しているが、ほぼ平坦である。床面の状態は不明である。

床面積 3.21m²を測る。

長軸方向 N-32°-W

埋没状態 土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだレンズ状の堆積がみられることから自然埋没と判断できる。

壁 垂直に近い立ち上がりを呈し、確認面からの深さは最小47cm、最大95cm、平均65cmを測る。

柱穴 南東角を除く3箇所の角から小規模な柱穴を検出した。各柱穴の形状と規模はP1が円形、径17×16cm深さ13cm(床面より)、P2が楕円形、径18×13cm、深さ26cm、P3が楕円形、径21×13cm、深さ29cmである。なお、南東角には床面直上に平面形態が三角形に近い亜角礫が据えられていた。この礫の大きさは長さ26cm、幅23cm、厚さ15cmで、上面は平坦であった。

その他施設 炉が中央よりやや北寄りに設置されていた。炉は円形を呈し、規模は径0.50mほどで南端に長さ32cm、幅13cm、厚さ12cmほどの細長い亜角礫を枕石として置いてあった。

出土遺物 遺物の出土は確認されていない。

所見 柱穴位置などの形態から中世に比定できる。出土遺物が存在しないため、詳細な時期については不明なため根木屋城に伴うか否かは判断できない。

5 檻

1号櫓

0区の平面調査を実施した調査範囲北端で検出しており、調査対象区外の東へ延びると想定される。

位置 調査対象地東南部、0区、X=62,184~62,191、Y=-95,701~-95,706に位置する。

重複 P2が12号土坑、P3が27号ピットと重複関係にある。新旧関係は12号土坑、27号ピットより本櫓のほうが新しい。

立地 丘陵裾の比較的平坦地に立地する。標高は最高値457.90m、最低値457.40mである。

形状 南北方向に4本の柱穴が設置され、西端のP4でほぼ直角に曲がるように2本の柱穴が設置されている。

規模 東西方向は調査区内で6.00m以上、南北方向は4.44mを測る。

長軸方向 南北方向はN-56°-Eを指す。

柱穴 平面形態は楕円形を呈し、規模は径(長軸)40~59cm、深さ16~61cmである。柱穴の埋没状態は、P1、P3、

P6などやや深い柱穴を観察すると柱を抜き取った様子がみられる。また、P2を除く柱穴では底面付近や内部に礫が存在し、礫石的な利用が行われていたとみられる。

その他施設 検出されていない。

出土遺物 遺物は出土していない。

所見 柱穴の埋没土から中世に位置づけられるが、設置してある範囲が一部であり、城館でどのような役割を持っていたかは不明である。

8号建物・2号櫓・1号通路

下曲輪の北側出入り口とみられる。北斜面から丘陵頂部のやや平坦になる地点に幅1.6mほどの通路が設けられている。そして丘陵頂部の端部に門とみられる建物を配置し、その両側に柵が設置されている。通路は北側に延びるが、安全対策上拡幅はできなかった。そのため通路の方向を確認するため北側から北西側にかけて32号~37号トレンチを設置して通路の検出を試みたが、どのトレンチでも明確な通路の検出には至らなかった。

なお、ここでは8号建物、2号櫓、1号通路は一体の施設であることからここで一括して扱う。

全体

位置 調査対象地中程、1区北端、X=62,231~62,241、Y=-95,774~-95,795に位置する。

重複 他遺構との重複は確認されなかった。

立地 丘陵頂部から北斜面に移る比較的平坦地に立地する。

8号建物(門)

位置 X=62,231~62,234、Y=-95,783~-95,785に位置する。

立地 丘陵頂部の平坦地、標高は最高値487.70m、最低値487.20mである。

形状 南北方向に3本の柱穴、東西に2本の柱穴が設置されている。形状は曲輪側が若干広い台形に近い形狀である。

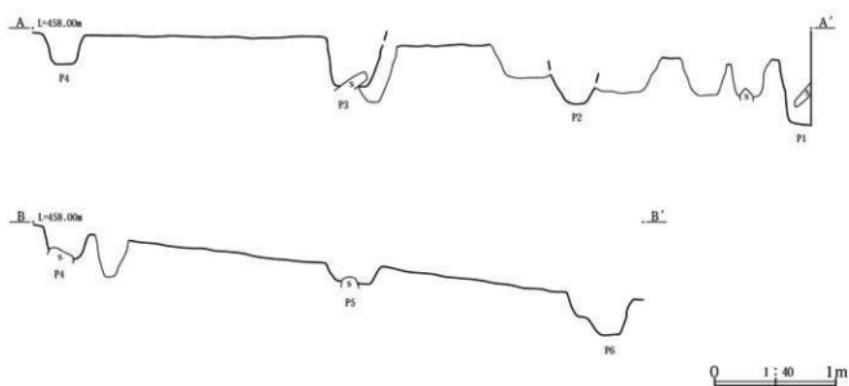
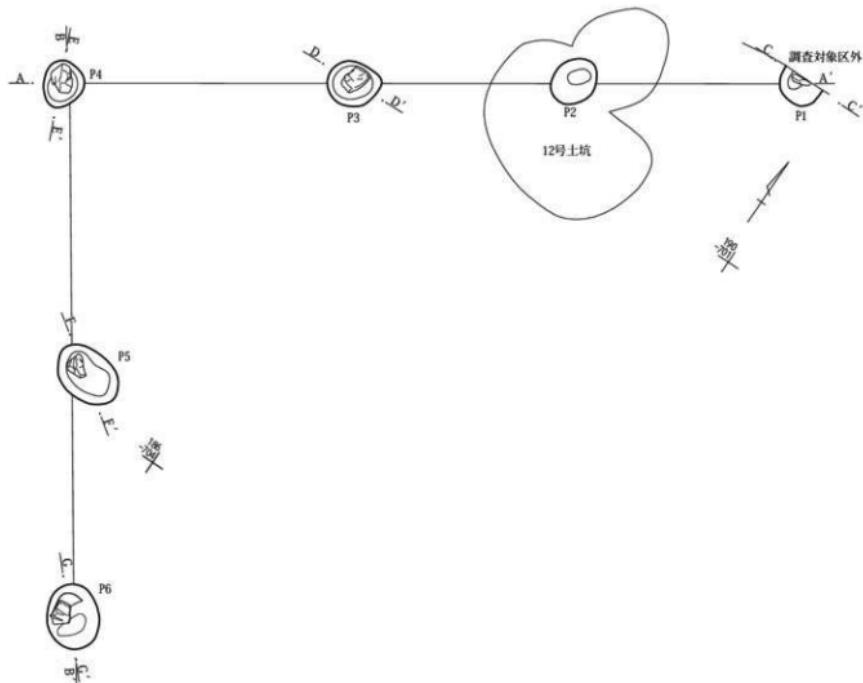
規模 北辺1.44m、南辺2.04m、東辺2.12m、西辺2.02mを測る。柱穴間距離は出入り口側が斜面側1.44m、曲輪側2.04mと広く、側面側は0.56~1.08mとやや狭い。

面積 3.42m²

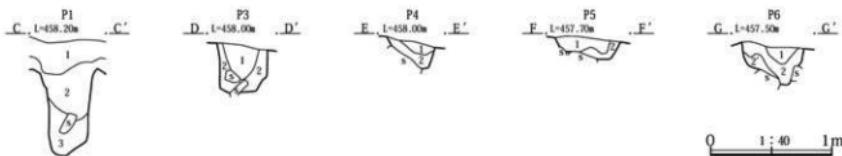
長軸方向 通路側にN-18°-Wを指す。

柱穴 平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径(長軸)26~49cm、深さ3~25cmである。柱穴の埋没状態は、

1号柵



第57図 1号柵(1)遺構図



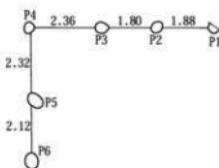
1号柵

- P 1
表土。
2 黒褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を少量含む。
小礫・ロームブロックを含む。
3 黒褐色土10YR2/3 1より確に大粒となり、ロームブロックを多く含む。
P 3
1 黒褐色土10YR2/3 As-Kkとローム粒を少量含む。しまりが強い粘質土。
2 黒褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を多量に含む。しまりが強い粘質土。
P 4
1 黒褐色土10YR2/3 粘性弱く、ややしまりがない。As-Kkとみられるバ
ミスを少量含む。

- 2 灰黄褐色土10YR4/2 黒褐色土にローム小ブロックをやや多く含み、しまりが強い。
P 5
1 黒褐色土10YR2/3 粘性弱く、ややしまりがない。As-Kkとみられるバ
ミスを少量含む。
2 オリーブ褐色土2.5Y4/3 粗粒の山砂と黒褐色土の混土。
P 6
1 黒褐色土10YR2/3 粘性弱く、ややしまりがない。As-Kkとみられるバ
ミスを少量含む。
2 黒褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を少量含む。
2' 黒褐色土10YR2/3 2よりローム粒を多く含み、しまりがさらに強い。

第58図 1号柵(2)遺構図

1号柵柱穴間距離



第11表 1号柵柱穴計測表

P No.	IINo.	平面形	長軸	短軸	深さ	重複
P 1	P 17	楕円形?	(0.36)	(0.36)	0.61	
P 2	—	楕円形	0.42	0.35	0.49	12号土坑
P 3	P 32	楕円形	0.45	0.38	0.39	27号ビット
P 4	P 12	楕円形	0.40	0.33	0.25	
P 5	P 6	楕円形	0.59	0.40	0.16	
P 6	P 4	楕円形	0.53	0.43	0.37	

IINo.は発掘調査時の名称

不明である。なお、西辺はP 4とP 7の間に補助的なP 6が存在する。このP 6については門上部に警護のための施設を設けた櫓門であればP 4またはP 7を使って梯子を設けたと想定できる。なお、P 8の西0.40mに位置するP 5についてはどのような役割を持たせていたか不明である。

その他施設 検出されていない。

出土遺物 遺物は出土していない。

所見 柵、通路と一体のものであることから城館に伴う施設である。

2号柵

形状 柵は門の東西両側に設置されていた。東側の柵は、東端をP 1とし、西へ直線的に設置され、P 4からやや角度をもたせ、門手前P 6と8号建物柱穴P 1を結んで

いる。西側の柵は、西端をP 11とし、P 8でほぼ直角に曲げて門に向かいP 7と8号建物P 5を結んでいる。すなわち、下曲輪の一部を取り囲む位置に設定されている柵は出入り口に設定されている通路で幅を絞り込むよう門である8号建物に取り付けられている。

規模 門東側で全長12.64m、西側11.28mを測る。

柱穴 平面形態は円形または楕円形を呈し、規模は径(長軸)29~66cm、深さ5~45cmである。柱穴の埋没状態は不明であるが、柱を抜き取った様子は窓えない。なお、P 9とP 12は柱穴間距離が0.80mと近くどのような役割を持たせていたか不明である。

その他施設 検出されていない。

出土遺物 遺物は出土していない。

所見 柱穴の埋没土から中世に位置づけられるが、設置

8号建物・2号橋

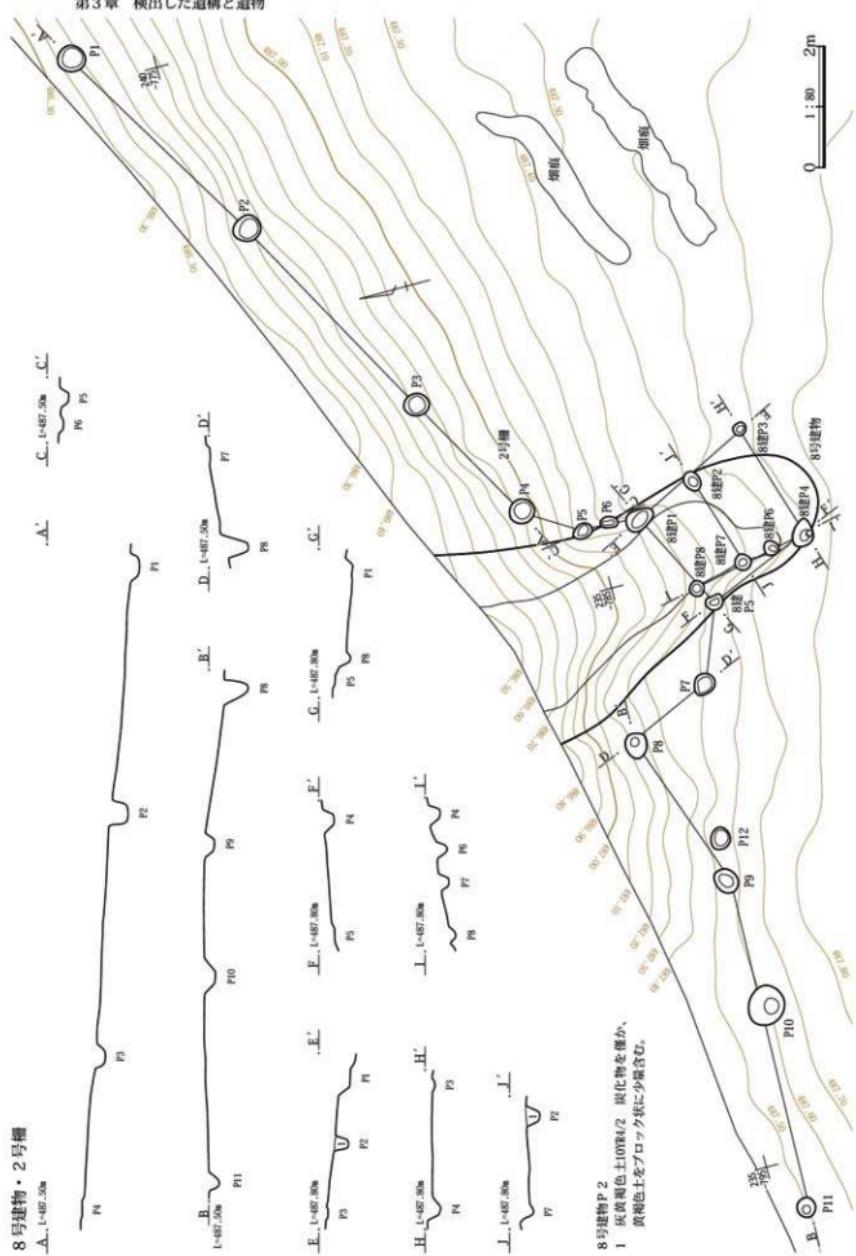
A' - C', 1-487.5m - L'

8号建物

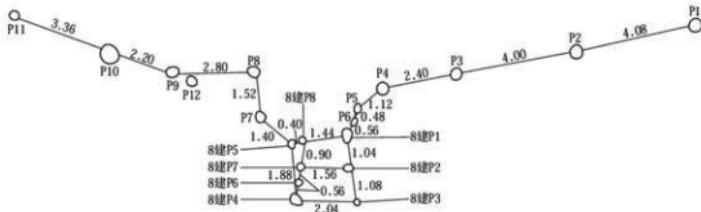
2号橋

76

第3章 検出した遺構と遺物



8号建物・2号柵柱穴間距離



第12表 8号建物柱穴計測表

P No	IINo	平面形	長軸	短軸	深さ	重複
P 1	北-西P 5	楕円形	0.49	0.33	0.13	
P 2	北-西P 4	楕円形	0.34	0.26	0.25	
P 3	北-西P 25	円形	0.23	0.20	0.03	
P 4	北-西P 7	楕円形	0.45	0.34	0.22	
P 5	北-西P 8	楕円形	0.30	0.24	0.05	
P 6	北-西P 21	楕円形	0.26	0.24	0.20	
P 7	北-西P 35	円形	0.27	0.26	0.23	
P 8	北-西P 22	円形	0.26	0.25	0.16	

IINo.は発掘調査時の名前

位置から下曲輪への出入り口である通路や門の両側に設置されており、有事の際に下曲輪への侵入を防ぐための施設と判断できる。

通路

この部分は現状で溝状に幅2.4~3.0mほどの間が窪んでおり、当初豎堀の可能性も想定されたことから土層断面A-A'で確認を行ったところ豎堀は検出されなかった。また、下曲輪に接する箇所では建物、両側に柱が列ぶことから柵と判断され、この窪地も門に取り付く通路と判断した。なお、標高484m以下の斜面についてはトレント(32号~37号トレント)による調査を行ったが検出には至らなかった。

なお、土層断面の観察では路面の痕跡は確認できなかった。

規模 門より北側に3mほど検出している。通路幅は門側2.00m、斜面側3.60mと斜面側がやや広い。

その他施設 検出されていない。

出土遺物 遺物は出土していない。

第13表 2号柵柱穴計測表

P No	IINo	平面形	長軸	短軸	深さ	重複
P 1	北-西P 34	円形	0.46	0.44	0.23	
P 2	北-西P 31	楕円形	0.47	0.41	0.42	
P 3	北-西P 27	円形	0.42	0.37	0.24	
P 4	北-西P 26	円形	0.42	0.40	0.06	
P 5	北-西P 24	楕円形	0.33	0.23	0.09	
P 6	北-西P 6	楕円形	0.29	0.18	0.08	
P 7	北-西P 11	楕円形	0.39	0.33	0.05	
P 8	北-西P 13	楕円形	0.42	0.36	0.45	
P 9	北-西P 15	楕円形	0.43	0.36	0.18	
P 10	北-西P 18	楕円形	0.66	0.58	0.27	
P 11	北-西P 19	円形	0.33	0.31	0.20	
P 12	北-西P 14	円形	0.37	0.32	0.13	

IINo.は発掘調査時の名前

所見 柵、門と一緒にものであることから城館に伴う施設である。

3号柵

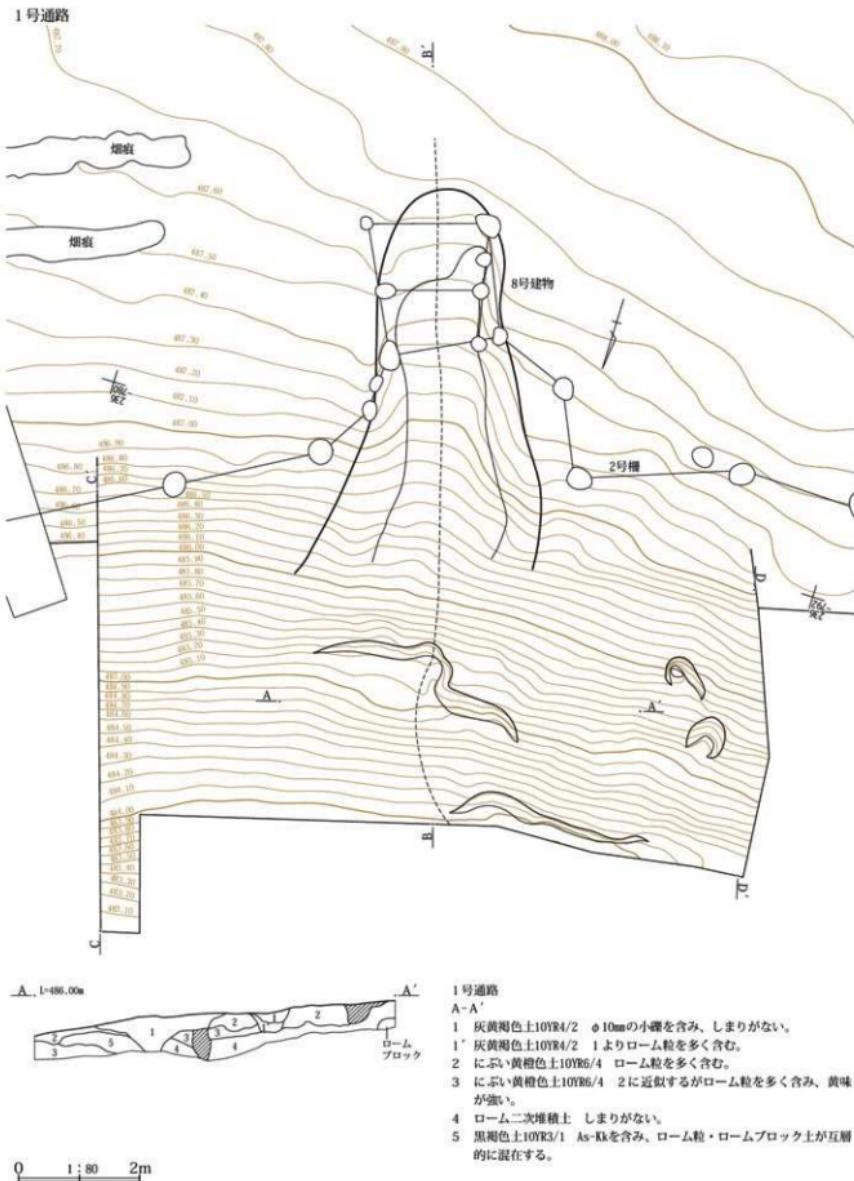
1区中程よりやや西で丘陵頂部を南北に横断する形で検出した。ここでは同規模なビットが6基検出されている。その中でP 1~P 3、P 5、P 6は直線的に列ぶが、P 4は西側に突出する形で配置されていた。柱穴の状態はP 3とP 4が深いことから突出した形状に設置されたことが想定された。なお、柵は南北に延びる可能性が想定できるが傾斜が急になるため柱穴などを検出するには至っていない。

位置 調査対象地中程、1区中程ほどの西寄り、X=62,223~62,231、Y=-95,805~-95,809に位置する。

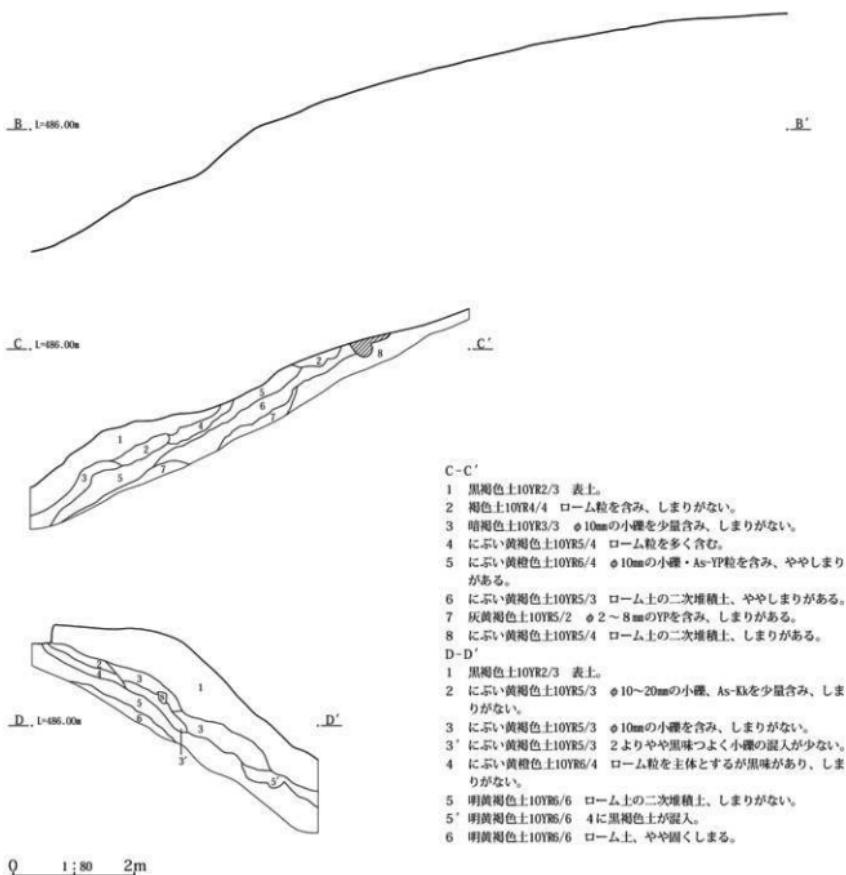
重複 81号ビットと重複関係にある。新旧関係は柱穴と直接重複していないため不明である。

立地 丘陵頂部の比較的緩い傾斜地に立地する。標高は最高値486.30m、最低値485.90mである。

形状 南北方向に5本の柱穴が設置され、P 3とP 5の



第60図 1号通路遺構図(1)



第61図 1号通路遺構図(2)

間に西へ1.20mの位置にP 4が設置されている。

規模 P 4を除いた直線では7.92m、すべての柱穴を結んだ長さは9.32mを測る。

長軸方向 P 1とP 6を結んだ線上はN-25°-Wを指す。

柱穴 平面形態はP 5がやや方形を呈するが、他は円形または楕円形を呈し、規模は径(長軸)40~54cm、深さ6~54cmである。柱穴の埋没状態は、P 3、P 4以外は浅いため不明であるが、P 3、P 4は54cm、43cmと深く、

P 3は柱がそのまま残された可能性がある。

その他施設 検出されていない。

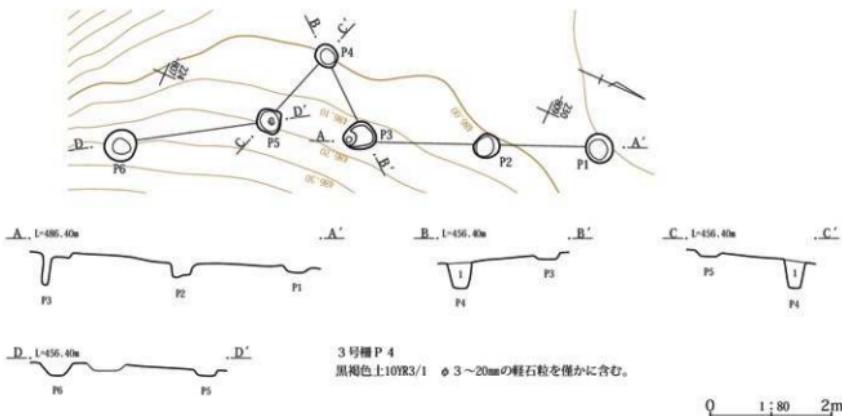
出土遺物 遺物は出土していない。

所見 柱穴の埋没土から中世に位置づけられる。丘陵頂部に設けられた下曲輪内部を区分する施設と判断される。

4号櫓

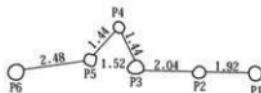
1区、丘陵頂部西端を南北に横断する形で検出した。ここではピット7基がほぼ直線上に列んだ状態で配置さ

3号柵



第62図 3号柵遺構図

3号柵柱穴間距離



第14表 3号柵柱穴計測表						
P No.	IIHNo.	平面形	長軸	短軸	深さ	重複
P 1	西P 16	円形	0.48	0.45	0.06	
P 2	西P 15	円形	0.43	0.38	0.27	
P 3	西P 13	椭円形	0.54	0.45	0.54	
P 4	西P 18	円形	0.40	0.35	0.43	
P 5	西P 11	方形	0.44	0.44	0.11	
P 6	西P 8	円形	0.53	0.51	0.28	

IIHNo.は発掘調査時の名前

れている。1区丘陵頂部西端の西側には4区・5区で検出した1号堀切が存在する。なお、柵は南北に延びる可能性が想定できるが傾斜が急になるため柱穴などを検出するには至っていない。

位置 調査対象地西部、1区西端、X=62,223~62,234、Y=-95,842~-95,843に位置する。

重複 他遺構との重複は確認されなかった。

立地 丘陵頂部西端に立地する。標高は最高値483.10m、最低値482.80mである。

形状 南北方向に7本の柱穴が設置され、P2とP7間にほぼ南北方向に設置されているが、P1とP2間はやや東方向に向く。

規模 角柱間の柱穴間距離の和の長さは10.60mを測る。

長軸方向 N-2°-Eを指す。

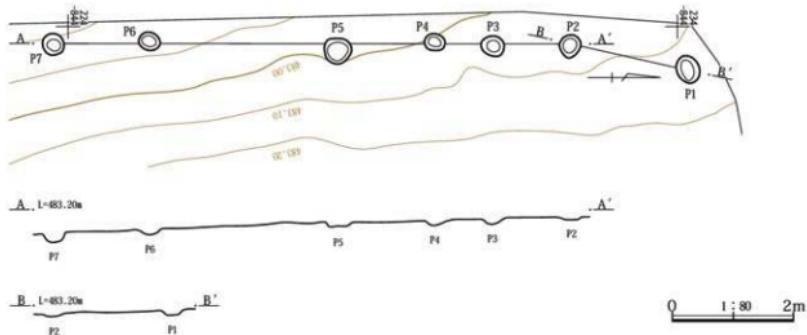
柱穴 平面形態は円形または椭円形を呈し、規模は径(長軸)34~47cm、深さ5~18cmである。柱穴の埋没状態は、不明である。

その他施設 検出されていない。

出土遺物 遺物は出土していない。

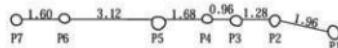
所見 検出した位置から城館の下曲輪に伴う施設と判断できる。また、この柵の西に位置する1号堀切と併せてみると主郭に通じる尾根と下曲輪を分断する形で防衛する施設である。なお、P1とP7の北側及び南側は柵が延びる可能性がある。

4号柵



第63図 4号柵遺構図

4号柵柱穴間距離



第15表 4号柵柱穴計測表					
P No	H No.	平面形	長軸	短軸	深さ
P 1	西端 P12	橢円形	0.47	0.37	0.10
P 2	西端 P13	円形	0.39	0.34	0.05
P 3	西端 P10	円形	0.39	0.33	0.13
P 4	西端 P 9	橢円形	0.34	0.27	0.09
P 5	西端 P 6	橢円形	0.45	0.45	0.08
P 6	西端 P 4	円形	0.35	0.30	0.10
P 7	西端 P 3	円形	0.37	0.35	0.18

H No.は発掘調査時の名称

6 堀切

1号堀切

1号堀切は主郭と下曲輪を区画する大規模な堀である。調査当時は2号溝として調査したが、調査途中で掘切と名称を変更した。

なお、4区・5区は調査区南側で尾根頂部になるが、西から斜面がここでやや傾斜が緩やかになり、今回の調査対象地の主要部分である丘陵頂部、1区西端でまた急に2m以上立ち上がるような不自然な傾斜がみられる。こうしたことから現状においても人為的な造作が行われたことが窺えた。

位置 調査対象地の西、4区・5区調査区中央の南北で検出され、X=62,223~62,465、Y=-95,851~-95,858に位置する。

重複関係 他の遺構との重複関係は確認されていない。

立地 本郭の存在する斥候山と下曲輪が存在する丘陵との間、標高は480~481mと比較的平坦である。

形状 底面は僅かに屈曲するがほぼ直線である。底面の位置は調査区南端でX=62,223、Y=-95,848、北端でX=62,244、Y=-95,858である。

断面 断面はV字形を呈するが上部が大きく開く形態である。

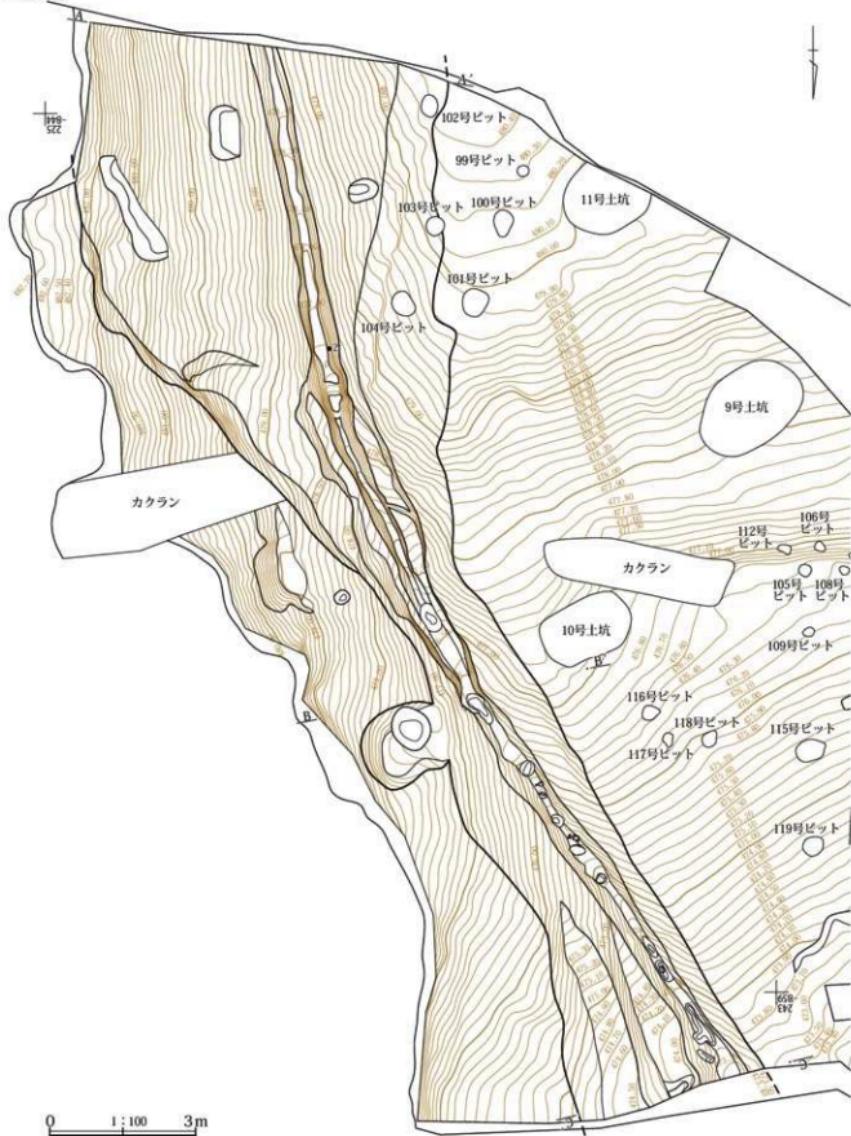
規模 調査範囲内での全長は24mを測る。確認面での上幅は1.60~7.42m、底面幅は0.10~0.34mである。深さは2.70~4.50mを測る。

走向方向 南から北への走向方向は南半でN-10°-W、北半でN-30°-Wである。

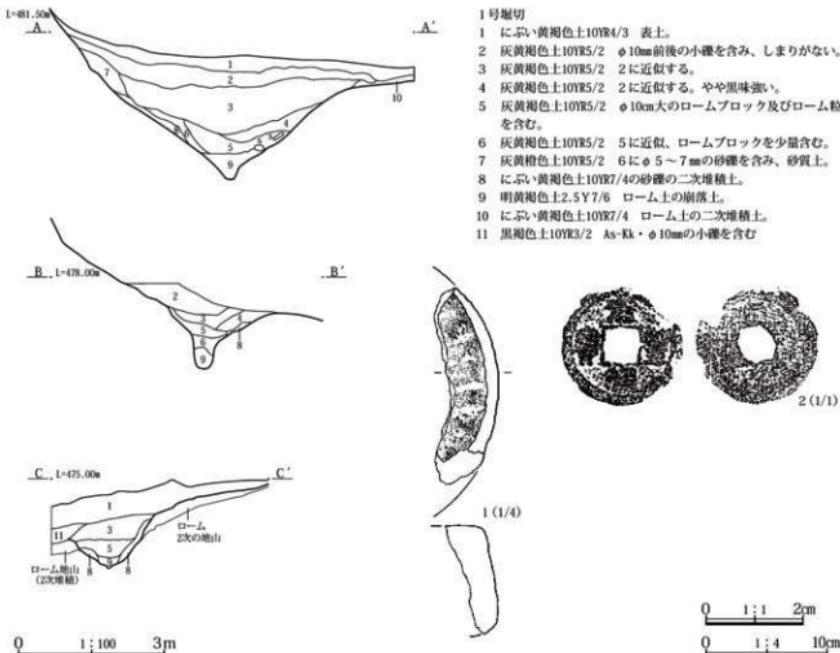
埋没状態 土層断面の観察では両側から土砂が流れ込みレンズ状の堆積がみられることから自然埋没と判断できる。

底面 数箇所で土坑状の落ち込みがあるが他の箇所はほぼ平坦で、南から北へ傾斜する。なお、底面の標高は南

1号堀切



第64図 1号堀切遺構図(1)



第65図 1号堀切遺構図(2)、出土遺物

端で478.47m、北端で473.30mである。

その他施設 検出されていない。

出土遺物 土器や陶器などの出土はみられなかった。底面近くで2の「元豐通寶」が出土している。この他、石臼の破片が底面よりや上位からと底面から数個の碟がみられたが、加工や使用痕は確認できなかった。

所見 出土遺物や形状から根小屋城の主郭と下曲輪の間に設けられた防護施設と判断できる。なお、南側は調査対象外に延びるため不明であるが、北側は堀切の延長線上に44号トレンチを設定し、堀切が伸びているか否かの確認を行ったところ、44号トレンチでは存在が確認できなかった。

7 堪堀

1号堪堀

調査対象地東部、丘陵北東斜面、3区に位置する。現

況図で標高485mを頂部として幅約3.0m、長さ6~7mの窪みが確認できることから堪堀が想定できた。ここは、斜度が急なことや調査対象区外に近いため、堪堀頂部付近にトレンチを入れて確認に留めた。

トレンチ調査の結果、落ち込みが確認でき、堪堀が存在していた可能性が高い。調査は堪堀のごく一部のため多くは不明である。

2号堪堀

1号堪堀の北西5mに隣接し、調査対象地東部、丘陵北東斜面、3区に位置する。現況図で標高485.5mを頂部として1号堪堀と同様に幅約3.0m、長さ6~7mの窪みが確認できることから堪堀が想定できた。ここも斜度が急なことや調査対象区外に近いため、堪堀頂部付近の堪堀の西側にトレンチによる確認に留めた。

トレンチ調査の結果、明確ではないが落ち込みが確認でき、堪堀が存在していた可能性が高い。また、2号堪

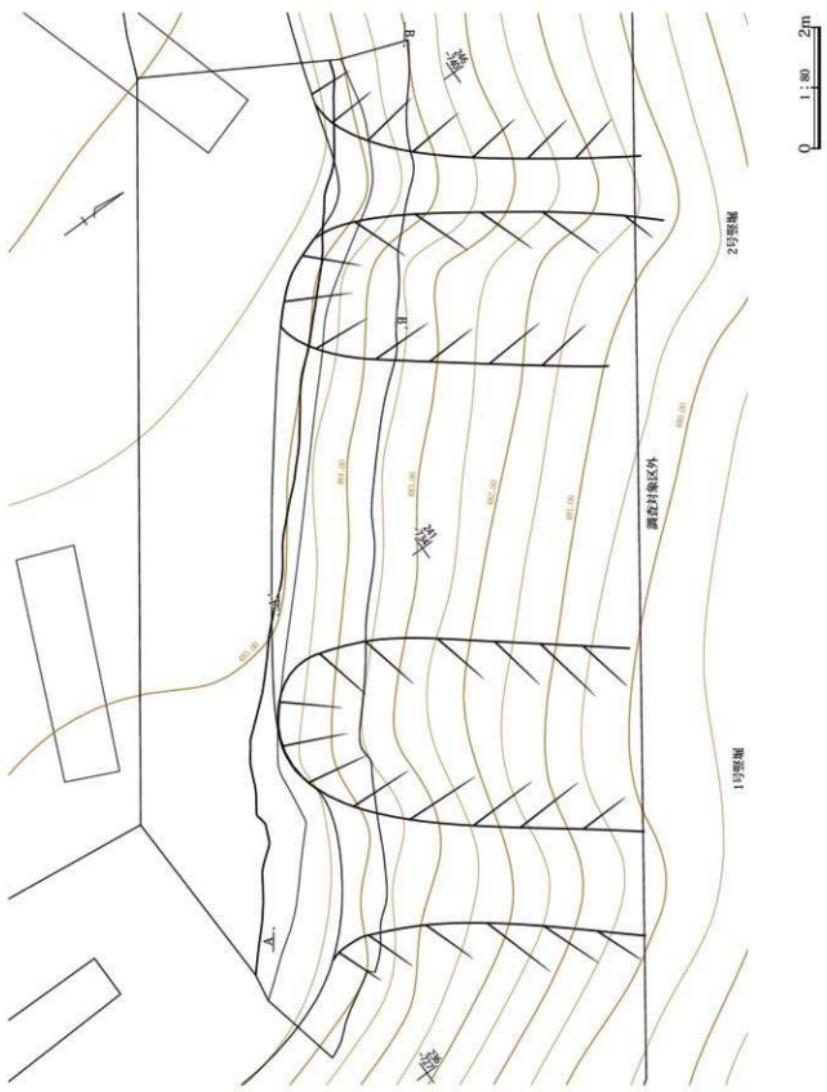
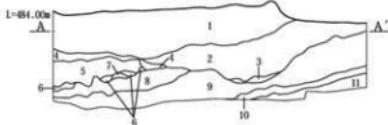


图 1-2 号型钢连接图(1)

11 • 2号點題

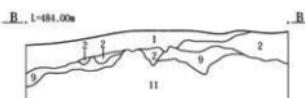
1号豎堀



1・2号豎堀

- 1 表土
- 2 灰黃褐色土10YR4/2 ϕ 5~10mmの粒・11と同様な青灰・褐色土ブロックを僅かに含み、ややしまりがある。
- 3 黒褐色土10YR2/2 2に類似、9のローム土を含む。
- 4 に似る黄褐色土10YR4/3 5に似る灰褐色土が混入した色調、11の青灰土ブロック、褐色土を少し含み、ややしまりがある。
- 5 明オリーブ色7.5Y6/2 11を盛り土したものか。明オリーブ灰土と暗灰黃土が混じり合った土。 ϕ 5~20mmの青灰・黄褐色小礫が多く、 ϕ 2~5mmの黄色軽石を僅かに含み、ややしまりがある。
- 6 黑褐色土10YR2/2 ϕ 3~10mmのに似る黄褐色軽石をやや多く、黄褐色・青灰・褐色土ブロックを少し含む。
- 7 黑褐色10YR2/2 6に類似、青灰土が多く混入する部分があり、軽石がやや少ない。
- 8 黑褐色10YR2/2 6に類似、黄褐色土が多く混入する部分があり、軽石がやや少ない。
- 9 に似る黄褐色土10YR4/3 ϕ 20~50mmの黄褐色・青灰・褐色粒子及びブロックをやや多く、 ϕ 2~4mmの黄褐色軽石を僅かに含み、ややしまりがある。
- 10 に似る黄褐色土10YR4/3 9に類似、9に比べて青灰粒を多く含み、しまりがある。
- 11 褐色土7.5YR4/4・青灰色土5BG5/1 青灰・褐色の礫を多く含む。

2号豎堀



0 1:80 2m

第67図 1・2号豎堀遺構図(2)

堀を想定した西側では2号豎堀以上に落ち込む様相がみられることから西側にもう1条の豎堀が存在していた可能性も窺えた。なお、調査は豎堀のごく一部のため多くは不明である。

3号豎堀

調査対象地北部、丘陵北斜面、5区中程の丘陵頂部に近い箇所に位置する。現況図で標高486~467mを頂部として幅約8.0m、長さ17~18mの窪みが確認できたことから豎堀が想定できた。

トレンチ調査では、15号トレントと38号トレントを設定して調査を行った。

調査の結果、幅2m、深さ1mのV字状の掘り込みを確認し、豎堀の可能性が想定できた。なお、ここは傾斜が急なため、掘削を行うと斜面が崩落する危険性が想定されたため平面での調査は実施していない。

4号豎堀

調査対象地西部、5区西端に位置する。現況図では調査対象地の西側境界をまたいた状態で、標高476m付近から幅6m前後、長さ20m程の豎堀が想定された。まず、トレント調査にて4号豎堀が掘られている範囲確定を行った。その結果、当初想定していたより下位の標高463mより掘り込まれていることがわかり、ここでは豎堀下部に平坦地が存在することから平面での調査を実施した。しかし、豎堀自体は残存状態が不良で数回に渡つ

て崩落しており、ほとんど原形を留めていない。

今回の調査では、4号豎堀については崩落が激しく、堀の原形が確認できる箇所が存在しないため、確認できただけである。

また、下部の平坦地で検出した角礫を多量に含む範囲は、4号豎堀の崩落に伴って落下した礫が堆積したものとみられる。

8 溝

1号溝

位置 調査対象地の東部、1区南東端、X=62,226~62,231、Y=-95,733~-95,741に位置する。

立地 丘陵頂部の平坦地から斜面に移る地点、標高は最高値484.90m、最低値484.10mである。

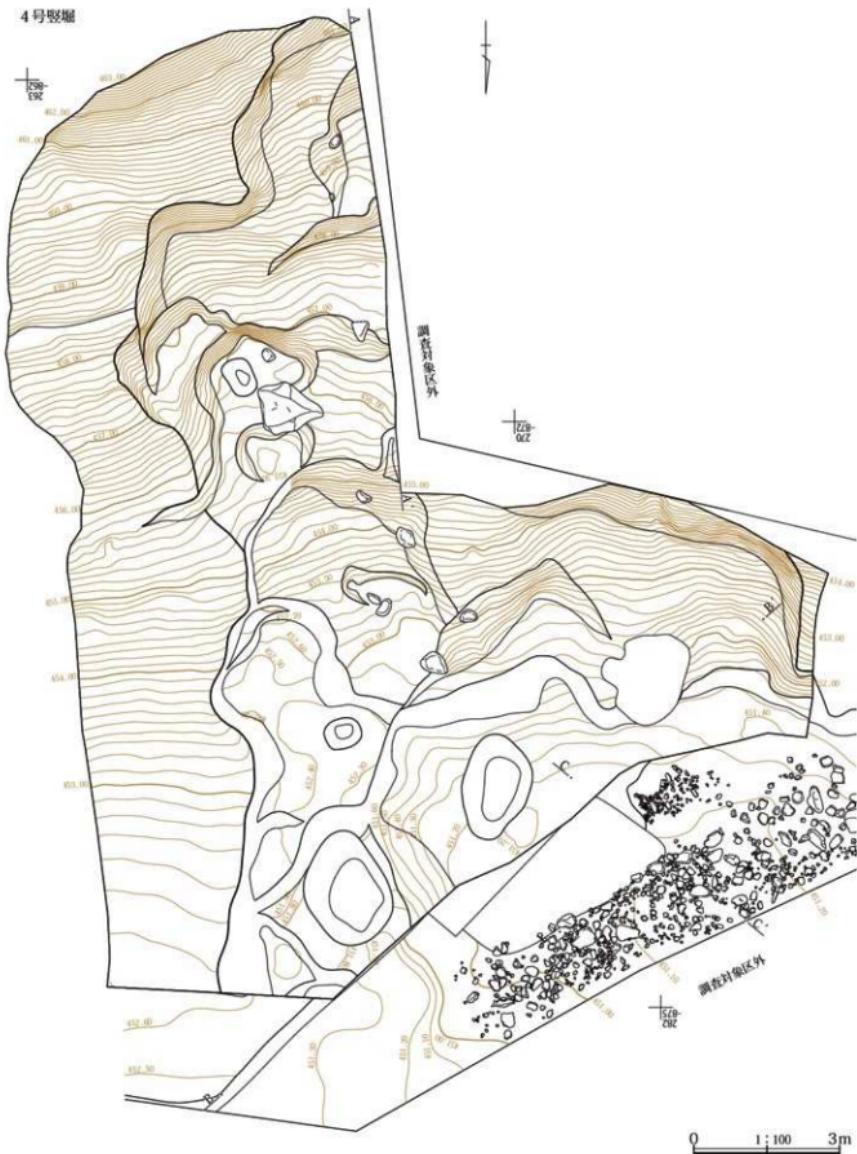
重複 他の遺構との重複関係は確認されていない。

形状 平面は直線的、断面は箱形に近い。

規模 調査範囲内での全長は9.40m、幅は土層断面で上幅0.90m、底面幅0.60m、深さ0.37m、確認面で上幅0.64~0.85m、下幅0.45~0.65m、深さは0.26~0.68mを測る。

走向方向 N-65°-Eを指す。

埋没状態 土層断面の観察では砂や小礫と地山の青灰色ブロックが混じる灰黃褐色土單独で埋没しているため、埋没状態の判断が難しいが砂や小礫が混じることから自然埋没と想定される。



第68図 4号堅掘遺構図(1)



第69図 4号竖掘遺構図(2)

第3章 検出した遺構と遺物

4号堀

- 1 黒褐色土10YR2/3 表上。
- 2 黒褐色土10YR3/2 $\phi 30\text{mm}$ のロームブロックを含む。
- 3 黒褐色土10YR3/2 ロームブロックを50%ほど含む。
- 4 黒褐色土10YR3/2 2とローム土との混上。
- 5 黒褐色土10YR3/2 3に近似するが黒褐色土の比率がやや多い。
- 6 黒褐色土10YR3/2 3に近似、ローム粒を多く含む。
- 7 黒褐色土10YR3/2 ローム粒、 $\phi 5\sim30\text{mm}$ のロームブロックを含む。
- 8 暗褐色土10YR3/3 $\phi 2\sim30\text{mm}$ のローム粒を含む。
- 9 黒褐色土10YR3/2 ローム粒、ロームブロック主体の土を50~70mmの層厚で3層に互換として挟む。
- 10 黒褐色土10YR3/1 $\phi 5\text{mm}$ のローム粒を少量含み、やや粘質土。
- 10' 黑褐色土10YR3/1 10よりローム粒の含有量が少ない。
- 11 黒褐色土10YR3/2 $\phi 70\sim120\text{mm}$ のロームブロックを少量含む。

底面 ほぼ平坦である。底面の標高は西端で484.48m、東端で484.07mと東側に向かって傾斜している。

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 遺物の出土がみられないことや埋没土の状態から断定はできないが、位置関係から城館に伴う可能性が高いとみられる。

9 通路

1号通路 (4)幅『8号建物、2号柵、1号通路』にて記載。

10 道

現況図からは丘陵南斜面や北斜面の北東部を除く斜面で武者走(犬走)と呼称される斜面を横に兵士を移動させるためとみられる道が想定できたが、トレレンチなどによる調査では明確なものは確認できなかった。なお、想定している箇所が斜面のため崩落によって硬化面などが流出してしまった可能性が高く、当時に存続していた可能性は残る。

なお、3号腰曲輪北端で武者走と想定できる道跡を検出したが、詳細については明らかにすることはできなかった。

11 土坑

12号土坑

当初、2基の土坑が重複していると想定されたが、掘削を進め、埋没土の観察を行った結果、1基の土坑であると判断した。

位置 調査対象地南東部・O区北端部、X=62,189~62,191、Y=-95,702~-95,703に位置する。

- 11' 黒褐色土10YR3/2 ロームブロックを多く含む。
- 12 ローム粒、ロームブロックを主体とした黒褐色土。
- 13 黒褐色土10YR3/2 ローム土を30~50%ほど含む。
- 14 にぶい黄褐色土10YR4/3 黄褐色土ブロックを20%含む。
- 15 黒褐色土10YR3/1 13に近似。
- 16 ロームブロック主体。
- 17 黑褐色土10YR3/2 16に近似。
- 18 にぶい黄褐色土10YR7/2 ローム主体、黒色土ブロックを多く含む。
- 19 ロームブロック主体。
- 20 黑褐色土10YR3/2 9に近似、立ち上がり壁付近にローム粒、ロームブロックを多く含む。

重複関係 1号柵P2、32号ピット、33号ピットと重複関係にある。新旧関係は1号柵、32号・33号ピットより本土坑のほうが古い。

形状 確認面での平面形状は凸形を呈する。断面は逆台形を呈する。

規模 長軸は1.80m、短軸1.49m、深さ0.31mを測る。なお、遺構確認での標高は457.70~457.80mである。

長軸方向 N-5°-W

埋没状態 土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が観察できることから自然埋没と判断できる。

底面 平面形態は確認面と同様に凸形を呈し、若干の凹凸はみられるがほぼ平坦である。

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 遺物の出土がみられないため、詳細な時期は判断できないが、埋没土から中世以降と判断した。

13号土坑

位置 調査対象地中央部・1区中央東寄り、X=62,229・62,230、Y=-95,749~-95,751に位置する。

重複関係 2号建物と重複関係にある。新旧関係は直接柱穴などの重複関係が無いため不明である。

形状 確認面での平面形状は、梢円形の南側に小突起がみられるため、不整形とする。断面は平面に表現した段は比較的高低差が少ないとからほぼ逆台形を呈する。

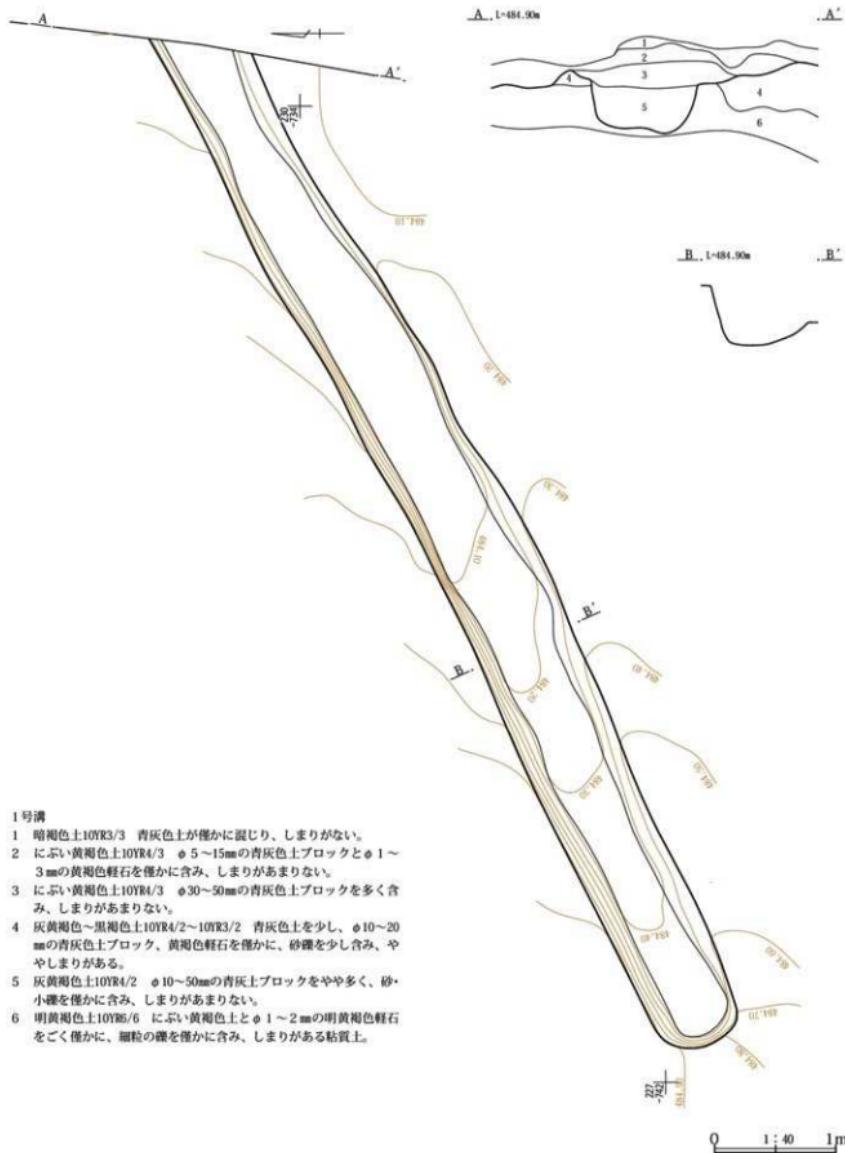
規模 長軸は2.20m、短軸1.68m、深さ0.42mを測る。なお、遺構確認での標高は457.70~457.80mである。

長軸方向 N-50°-E

埋没状態 土層断面の観察では周囲から土砂が流れ込んだ様子が観察できることから自然埋没と判断できる。

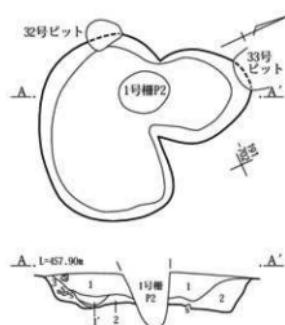
底面 平面形態は確認面と同様に不整形を呈し、若干の凹凸はみられる。

1号溝

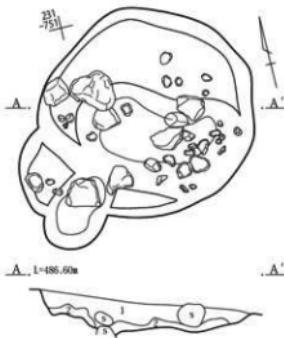


第70図 1号溝遺構図

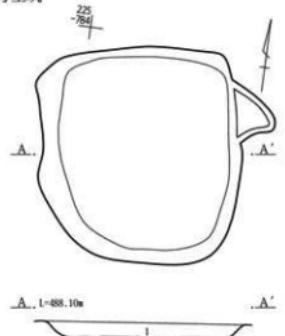
12号土坑



13号土坑



14号土坑



12号土坑

- 1 黒褐色土10YR3/2 黏性弱く、ややしまりが強い土。As-Kkを少量含み、澤も不均等に少量混じる。
- 1' 黒褐色土10YR2/3 黏性強い。1よりしまり弱い。
- 2 脱離色土10YR4/3 ローム上の混入多く、上面は踏み固めの可能性のある硬化面。
- 3 にぶい黄褐色土10YR4/3 ローム主体で黒色土が不均等に混じる。壁崩落。

13号土坑

- 1 灰黄褐色土10YR4/2 ϕ 7~30mmの明褐色土・灰オーリーブ土をブロック状にやや多く、 ϕ 2~4mmの黄褐色軽石を僅かに含み、しまりがありません。
- 2 褐色土10YR4/4 ϕ 1~3mmの明黄褐色軽石を少し含み、ややしまりがある。

14号土坑

- 1 にぶい黄褐色土10YR4/3 ブロック状の明褐色ローム上、灰オーリーブ土と ϕ 1~4mmの明黄褐色軽石少しあり、ややしまりがある。

0 1:40 1m

第71図 12~14号土坑遺構図

出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 遺物の出土がみられないため、詳細な時期は判断できないが、埋没土から中世以降と判断した。

14号土坑

位置 調査対象地中央部・1区ほぼ中央、X=62,223・62,224、Y=-95,782~-95,784に位置する。

重複関係 41号ビットと接しているが、直接の重複関係はない。なお、41号ビットとの新旧関係は不明である。

形状 確認面での平面形状は、隅丸長方形を呈する。断面は中程で8cmほどの高低差がある段をもつがほぼ逆台形を呈する。

規模 長軸は1.76m、短軸1.65m、深さ0.18mを測る。なお、遺構確認での標高は487.95~487.00mである。

長軸方向 N-7°-W

埋没状態 土層断面の観察ではにぶい黄褐色土の單一土で埋没しているため明確ではないが、不自然な様相がみられないことから自然埋没と判断できる。

底面 平面形態は東西の間に段をもって区分するが、それぞれは平坦である。

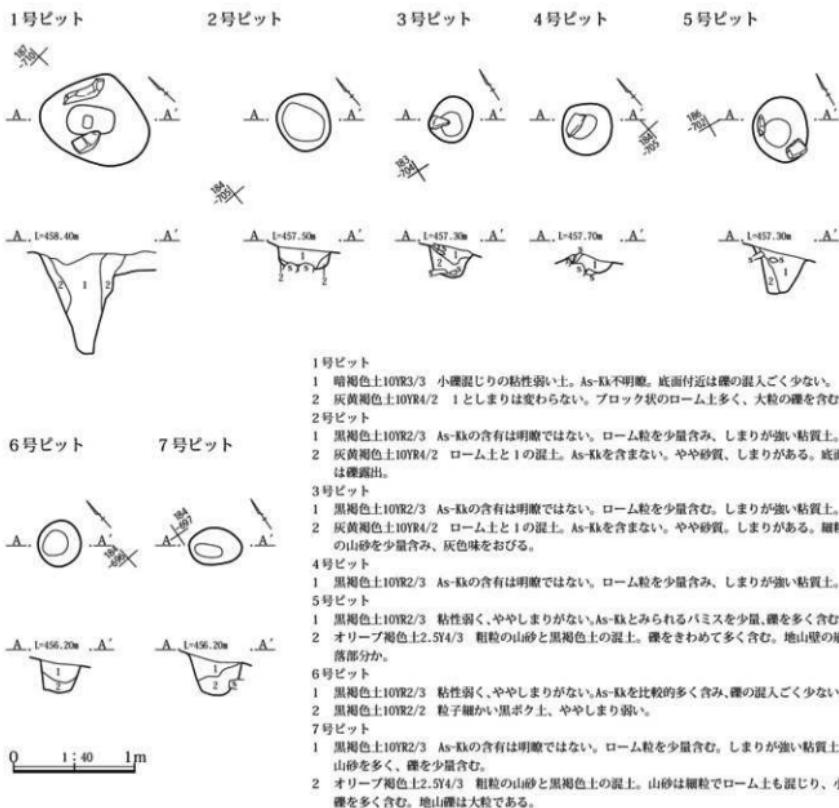
出土遺物 遺物の出土はみられなかった。

所見 遺物の出土がみられないため、詳細な時期は判断できないが、埋没土から中世以降と判断した。

12 ピット

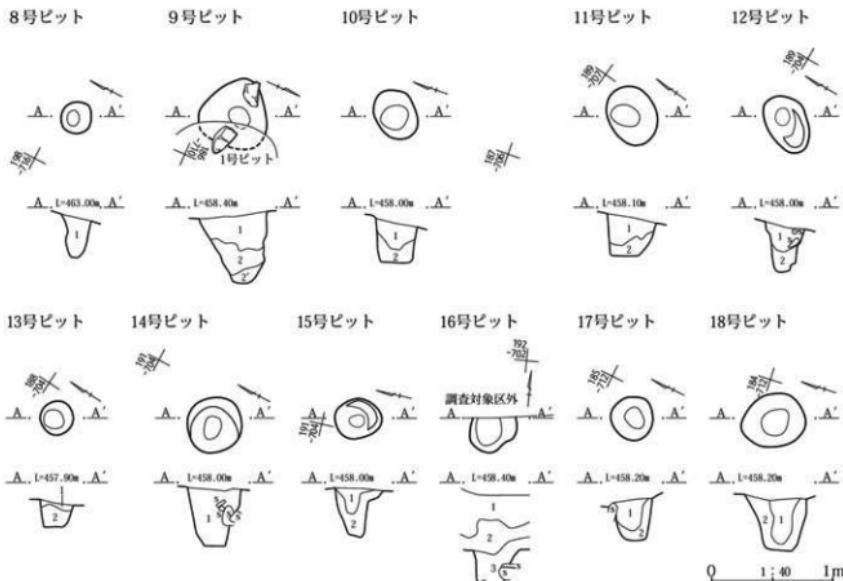
ピットは3区を除く0区33基、1区61基、2区4基、4区6基、5区16基を検出している。その分布は0区ではほぼ平面調査した部分の北側、1区では東側の1号～4号建物付近とその周辺、2区は4号腰曲輪南端、4区と5区は1号掘堀の西側などであるが、この分布は平面調査を実施した範囲が限定されているため、これに影響されていると言える。

なお、形状や規模などの個別の状態は第17表に示してある。その中で1区の60号ピットと66号ピットは底面に礫が置かれていた。当初、このピットについては建物や柵の柱穴の可能性を想定したが、周囲に同様なピットや建物・柵を構成できるピットが存在していなかった。そのため、このピットが単独でどのような機能を持っていたか課題となった。



第72図 1～7号ピット遺構図

第3章 検出した遺構と遺物



8号ビット

1 黒褐色土10YR3/3 粘性強い。混入物が少なく、しまりがある。As-Kkは含まない。

9号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を少量含む。しまりが強い粘質土。東側で礫の混入多い。

2 灰黒褐色土10YR4/2 ローム土と1上の混土。As-Kkを含まない。やや砂質、しまりがある。

2' 灰黒褐色土10YR4/2 2より礫の混入が少なく、ローム土を多く含む。

10号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 粘性弱く、ややしまりがない。As-Kkとみられるバミスを少量含む。

2 灰黒褐色土10YR4/2 黒褐色土にローム小ブロックをやや多く含み、しまりが強い。

11号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を少量含み、しまりが強い粘質土。

2 灰黒褐色土10YR4/2 ローム土と1の混土。As-Kkを含まない。礫の混入多い。

12・13号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を少量含み、ややしまりがない。

2 灰黒褐色土10YR4/2 ローム土と1の混土。As-Kkを含まない。ややしまりがない。

14号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 粘性弱く、ややしまりがない。As-Kkとみられるバミスを少量含む。礫の混入多い。

15号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を少量含み、小礫がやや多く混入。

2 灰黒褐色土10YR4/2 ローム土と1の混土。As-Kkを含まない。ローム土の含有率が高い。

16号ビット

1 表土。

2 黒褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を少量含む。

3 灰黒褐色土10YR4/2 ローム土と1の混土。As-Kkを含まない。不揃いのロームブロックを含む。

17号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 粘性弱く、ややしまりがない。As-Kkとみられるバミスを少量含む。

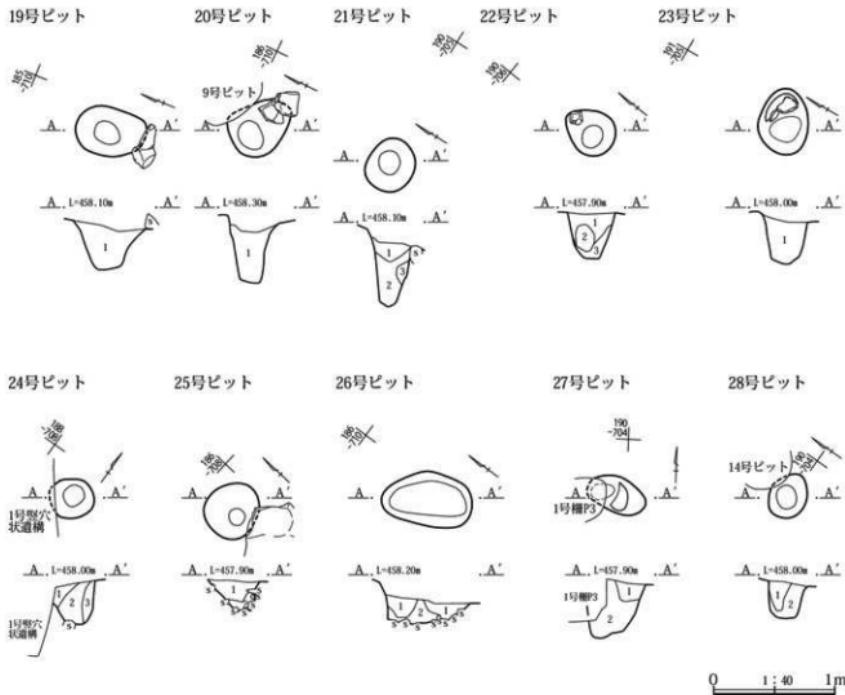
2 オリーブ褐色土2.5Y4/3 粗粒の山砂と黒褐色土の混土。しまりがある。

18号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 粘性弱く、ややしまりがない。As-Kkとみられるバミスを少量含む。山砂の混入あり、礫の混入ごく多い。

2 オリーブ褐色土2.5Y4/3 粗粒の山砂と黒褐色土の混土。1に比べしまりが強い。

第73図 8～18号ビット遺構図

**19・20号ビット**

1 黒褐色土10YR2/3 黏性弱く、ややしまりがない。As-Kkとみられるバミスを少量含む。礫の混入多い。

21号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 黏性弱く、ややしまりがない。As-Kkとみられるバミスを少量、小礫をやや多く含む。

2 黒褐色土10YR3/2 しまりがない。

3 オリーブ褐色土2.5Y4/3 粗粒の山砂と黒褐色土の混上。ややしまりがある。

22号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒と炭化物粒を少量含む。しまりが強い粘質土。

2 暗褐色土10YR3/2 ややしまりがない。礫混じる。

3 オリーブ褐色土2.5Y4/3 粗粒の山砂と黒褐色土の混上。ややしまりが強い。

23号ビット

1 灰黄褐色土10YR4/2 小礫、粗砂状の山砂等の混入多く、As-Kkを含み、ややしまりがない。

24号ビット

1 灰黄褐色土10YR4/2 ローム土の混入多い。しまりがない。

2 黑褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を多く含み、しまりが弱い。

3 黑褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を少量含み、しまりが強い粘質土。

25・26号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 黏性弱く、ややしまりがない。As-Kkとみられるバミスを少量含み、礫の混入多い。

2 オリーブ褐色土2.5Y4/3 粗粒の山砂と黒褐色土の混上。編状のローム堆積が見られる。人為的理め灰土。

27号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を少量含む。しまりが強い粘質土。

2 オリーブ褐色土2.5Y4/3 粗粒の山砂と黒褐色土の混上。編状のローム堆積が見られる。人為的理め灰土。

28号ビット

1 黒褐色土10YR2/3 As-Kkの含有は明瞭ではない。ローム粒を少量含む。しまりが強い。

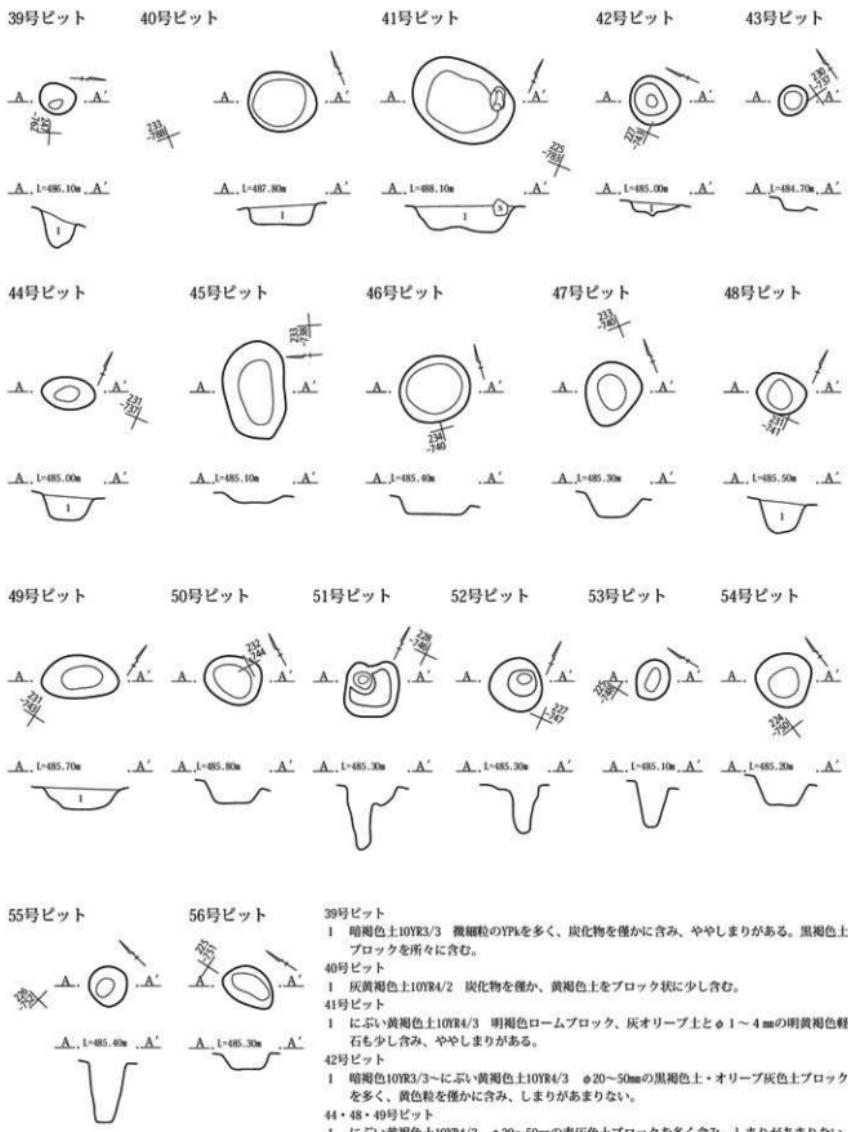
2 黒褐色土10YR2/3 1に類似、しまりがある。

第74図 19~28号ビット遺構図

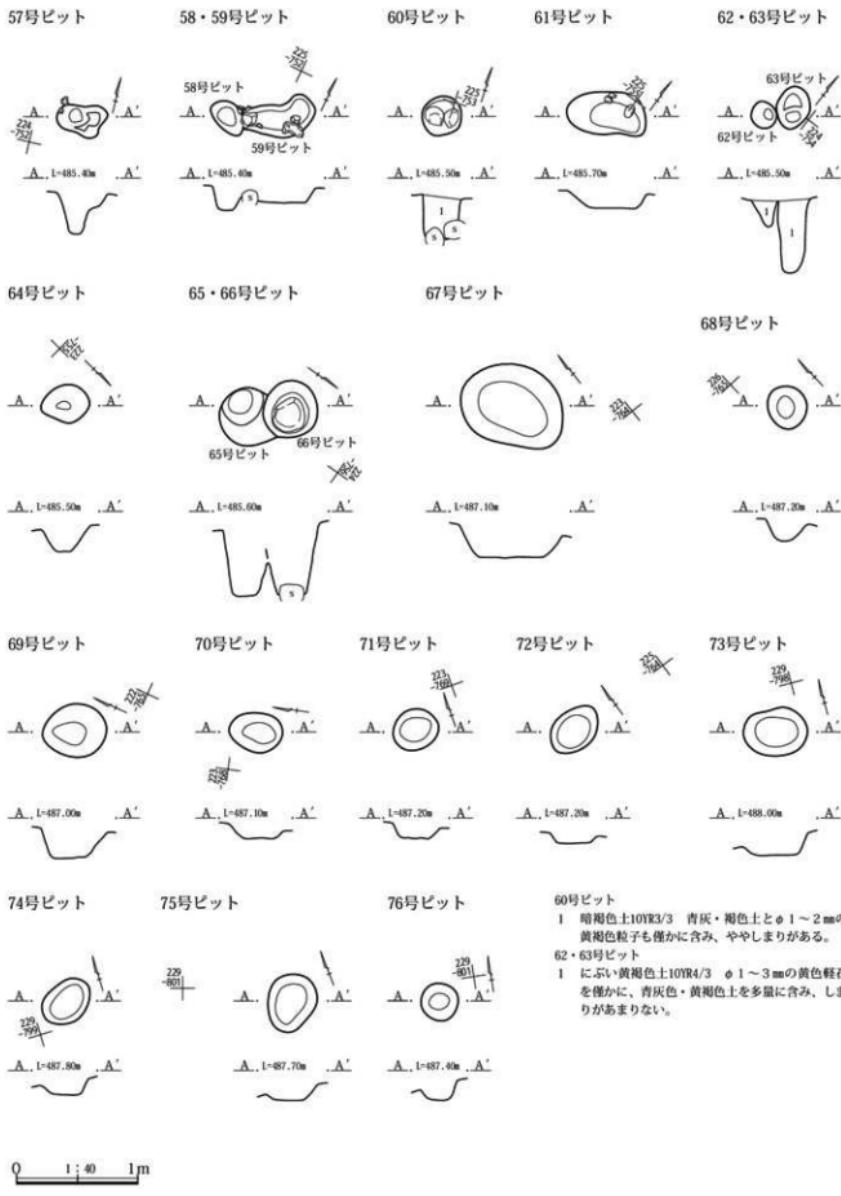
第3章 検出した遺構と遺物



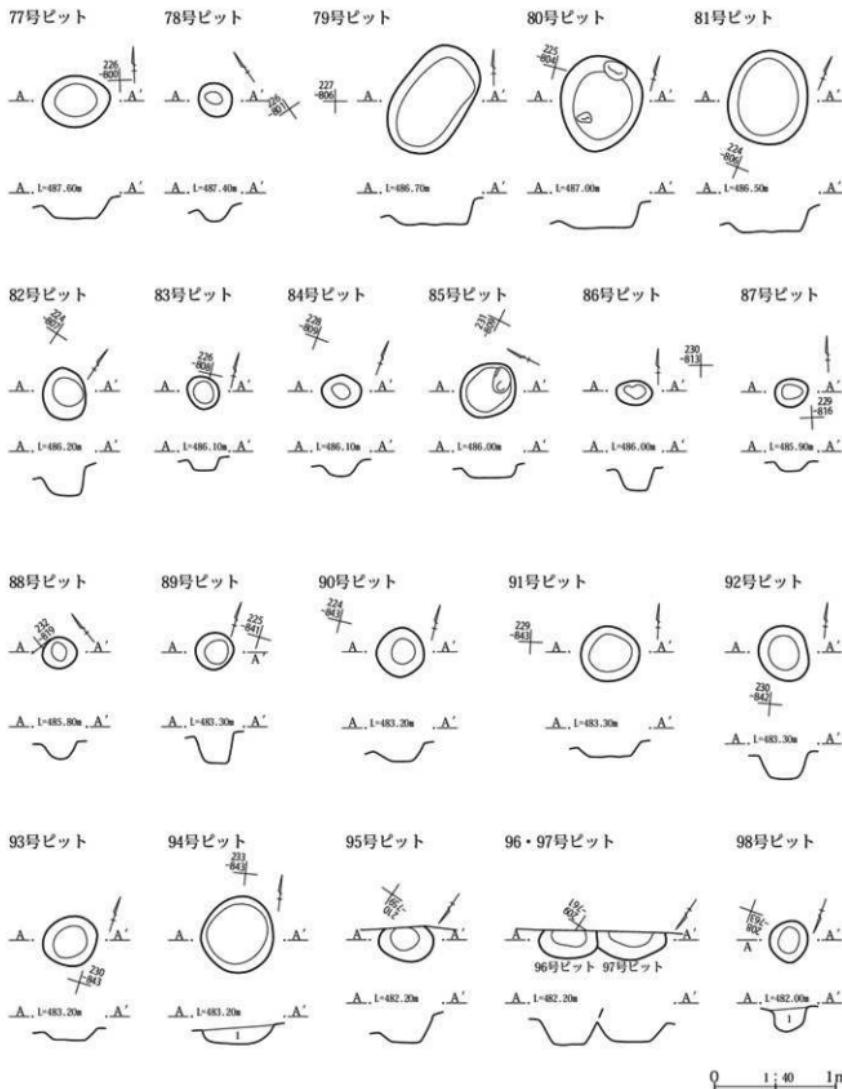
第75図 29～38号ピット遺構図



第76図 39~56号ピット遺構図



第77図 57～76号ピット遺構図



94号ピット

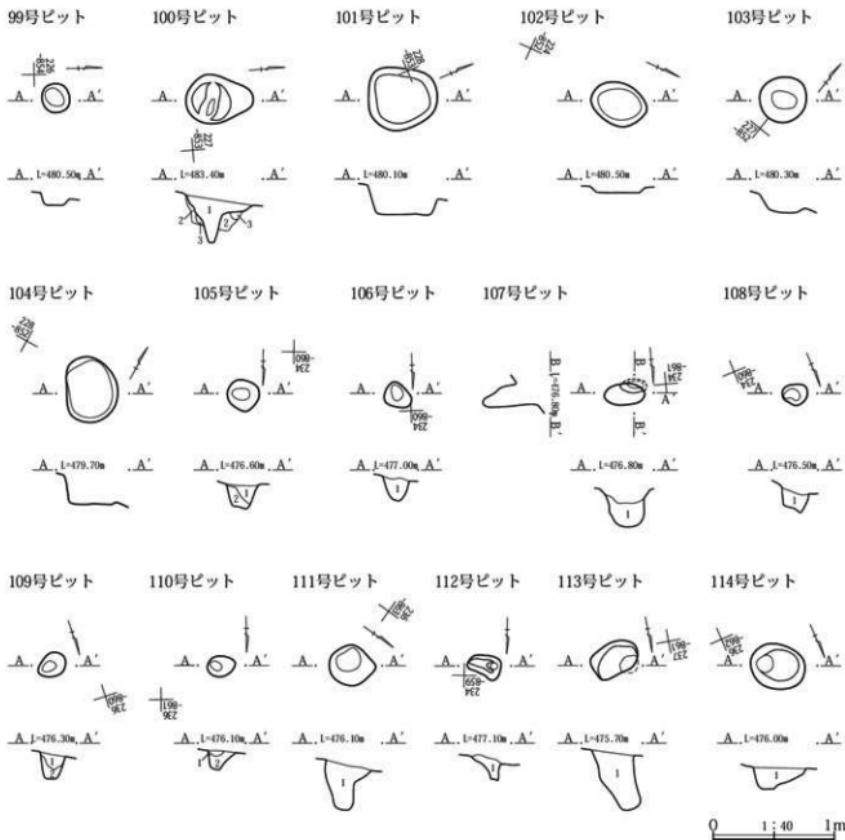
1 黄褐色土2.5Y5/4 塩化物を僅かに、φ 3~20mmの青灰・黄褐色砂礫を多く、黒褐色土を斑状に含み、ややしまりがある。

98号ピット

1 黑褐色土10YR3/2 青灰色土・砂礫をやや多く、角礫・砂粒を少し含み、しまりがやや弱い。

第78図 77~98号ピット遺構図

第3章 検出した遺構と遺物



100号ピット

1 にぶい 黒褐色土10YR4/3 ϕ 2～4mmの明黄褐色輕石と ϕ 10mmの小礫を少し含み、しまりがあまりない。

2 褐色土10YR4/6 ϕ 1～3mmのローム粒または輕石の黃褐色粒子を僅かに、ロームブロックを含む。固くしまる。

3 明黄褐色土10YR6/8 明黄褐色土ブロック。非常に硬くしまる。

105号ピット

1 黒褐色土10YR3/1 ローム粒・ ϕ 2～10mmのロームブロックを含み、しまりがない。

2 ローム流れ込み。

106号ピット

1 黒褐色土10YR3/1 ローム粒・ ϕ 1～3mmのロームブロックを含み、しまりがない。

107号ピット

1 黒褐色土10YR3/1 ローム粒・ ϕ 2～5mmのロームブロックを含み、しまりがない。

108号ピット

1 黒褐色土10YR3/1 ローム粒・ロームブロック ϕ 2～20mmを含み、しまりがない。

109号ピット

1 黒褐色土10YR3/1 しまりがない。
2 黒褐色土10YR3/2 ローム粒が多く混入。

110号ピット

1 黒褐色土10YR3/1 しまりがない。
2 黑褐色土10YR3/2 ローム粒を多く含む。

111号ピット

1 黒褐色土10YR3/2 ϕ 1～2mmのローム粒、微細な灰白色粒を少量含み、固くしまる。

112号ピット

1 黑褐色土10YR3/2 微細～ ϕ 2mmのローム粒を含み、固くしまる。

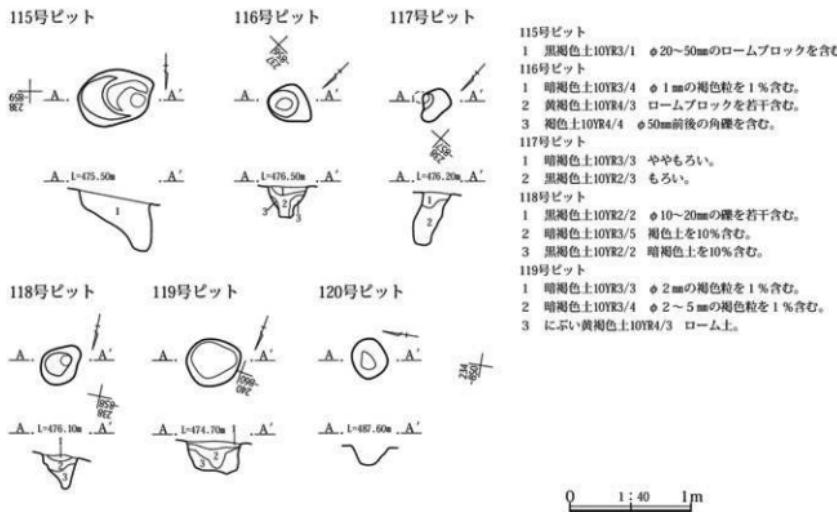
113号ピット

1 黑褐色土10YR3/1 灰白色粒微細を含み、しまりがない。

114号ピット

1 晴褐色土10YR3/3 微細なローム粒・灰白色粒を少量含み、固くしまる。

第79図 99～114号ピット遺構図



第80図 115~120号ピット遭難図

13 集石

1号集石・2号集石とも1区丘陵頂部から南斜面に移行する箇所に列ぶような位置関係で検出した。この付近は斜面に移行する部分で表土の堆積が浅く地表面より數cmほど掘削したところで礫上部が確認されている。

1号集石

位置 調査対象地の中ほど、1区中ほどの南端、 $X = 62.218 \sim 62.219$ 、 $Y = -95.787 \sim -95.789$ に位置する。

立地 丘陵頂部の平坦地から斜面に移行する地点、標高は487.50~488.00mである。

重複 他の構造との重複関係は確認されていない。

形状 特に配置など意図的な様相はみられなかった、集められた礫はφ 5~30cm代であるが、小礫が多くを占めている。礫は積み重ねた状態ではなく、平面的に広がりをもった状態である。

規模 南北1.5m、東西1.6mほどの範囲である。

遺物 近接した位置から近世末とみられる陶器片が出土しているが、集石に伴う遺物の出土はみられなかった。

また、集石の中に使用痕が残るものや加工が施されたものは存在していなかった。

所見 出土遺物がみられないため、時期は不明であるが、近接して出土した陶器などから中世城館に作うものではなく、1区東部から検出されている近代の烟と同様に近世において丘陵頂部が開墾されたときに出土器を斜面に近いこの地点に廻棄した跡とみられる。

2号集石

位置 調査対象地の中ほど、1区中ほどの南端、X=

立地 丘陵頂部の平坦地から斜面に移行する地点、標高は487.50~488.00mである。

重複 他の造構との重複関係は確認されていない。

形状 特に配置など意図的な様相はみられなかった、集められた礫はφ 5~30cm代であるが、小礫が多くを占めている。礫は積み重ねた状態ではなく、平面的に広がりをもった状態である。

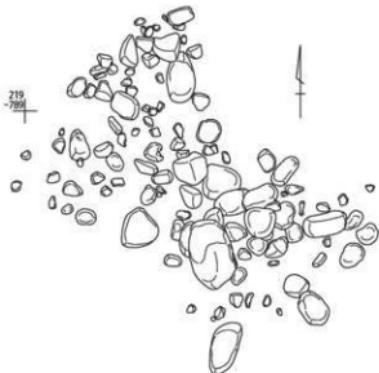
規模 南北1.5m、東西1.1mほどの範囲である。

遺物 遺物の出土はみられなかった。また、1号集石と同様に集石の中に使用痕が残るものや加工が施されたものは存在していなかった。

所見 出土遺物がみられないため、時期は不明である。

1号集石と同様に由世城館に伴うものではなく、1区画

1号集石



2号集石



第81図 1・2号集石遺構図

部から検出されている近代の畠と同様に近世において丘陵頂部が開墾されたときに出土した砾を斜面に近いこの地点に廃棄した跡とみられる。

14 遺構外出土遺物

陶磁器11点と石臼と茶臼各1点、石鉢1点、金属製品の錢貨(寛永通宝)1枚、キセル、笄、不明品各1点を掲載した。

中世城館に伴うとみられるものは、第82図1～4の内耳鍋4点がみられた。これらは城館に常備されていたものが、破損または城館が廃止されていく中で廃棄されたものとみられる。

この他は、近世の年代観が与えられており、第83図7・8の肥前磁器や9の瀬戸・美濃陶器は近世末から近代初期にかけての墓に副葬されたものとみられる。

石製品石臼と石鉢については年代観を与えることが難しいが、石臼や石鉢は日常的な用具であることから墓への副葬品としてより城館で使用していた可能性が高い。

金属製品は4点とも近世に比定される。第84図14の不明品とした鉄製品は4号腰曲輪から出土しており、城館に伴う可能性も窺えるが、全体像や用途が不明なため断定はできない。

遺構外出土遺物

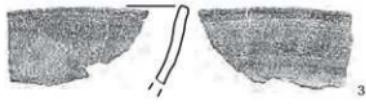
0区



2区



4区



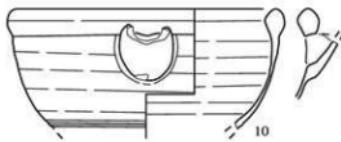
0 1:3 10cm

第82図 遺構外出土遺物(1)

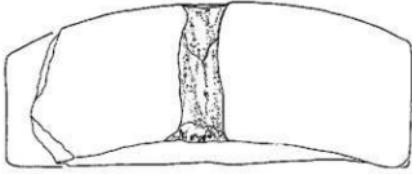
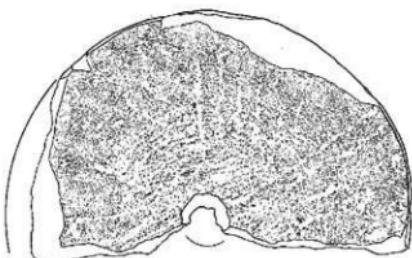
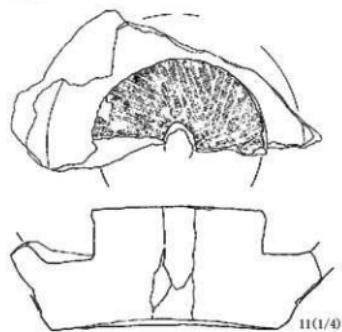
0区



2区



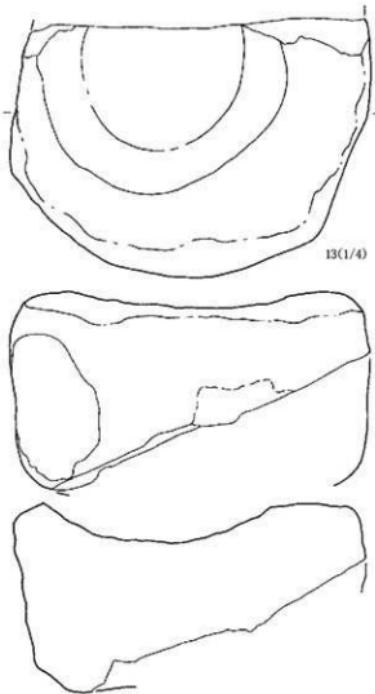
5区



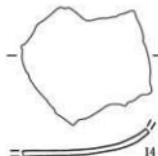
0 1:3 10cm
0 1:4 10cm

第83図 遺構外出土遺物(2)

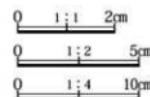
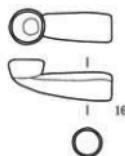
5区



2区



5区



第84図 遺構外出土遺物(3)

第16表 土坑一覧表

区	№	旧No.	グリッド位置	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複
1	1	1区3面3号土坑	232° - 768	楕円形	1.55	1.22	0.23	N-52°-E	
1	2	1区3面4号土坑	238° - 778	楕円形	1.28	1.22	0.49	N-40°-E	
1	3	1区3面5号土坑	247° - 759	円形	1.78	(1.36)	0.42	N-67°-W	
5	4	4・5区3面 第8平坦面8号土坑	238° - 861	楕円形	1.18	(0.83)	1.10	N-32°-W	7号土坑
5	5	5区3面 第9平坦面名称無し	281° - 857	円形	1.33	1.03	0.21	N-60°-W	
5	6	5区 豊龜1号トレンチ名称無し	258° - 865	楕円形	1.88	(1.55)	1.59	N-76°-W	24,42号トレンチ内
5	7	4・5区3面 第8平坦面6号土坑	237° - 860	楕円形	1.95	1.53	1.91	N-60°-E	4号土坑
5	8	4・5区3面 第8平坦面7号土坑	242° - 861	楕円形	2.62	(1.18)	1.38	N-5°-E	25号トレンチ内
5	9	4・5区3面 第8平坦面9号土坑	230° - 857	楕円形	2.31	1.59	2.05	N-49°-E	
5	10	4・5区3面 第8平坦面10号土坑	235° - 854	楕円形	1.90	1.22	0.49	N-65°-E	
5	11	4・5区3面 第8平坦面11号土坑	226° - 854	楕円形	(1.66)	1.56	1.36	N-53°-E	
0	12	0区1号土坑	189° - 702	凸形	1.80	1.49	0.31	N-5°-W	1号櫛P 2 32,33号ピット
1	13	1区1号土坑	229° - 749	不整形	2.20	1.68	0.42	N-50°-E	
1	14	1区2号土坑	223° - 782	橢丸長方形	1.76	1.65	0.18	N-7°-W	

旧No.は発掘調査時の名稱

第17表 ピット一覧表

区	№	旧No.	グリッド位置	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複
0	1	P 1	186° - 709	楕円形	0.92	0.73	0.83	N-24°-W	9号ピット
0	2	P 2	184° - 704	円形	0.47	0.43	0.39	N-23°-E	
0	3	P 3	183° - 703	円形	0.38	0.33	0.28	N-62°-E	
0	4	P 5	184° - 705	円形	0.44	0.44	0.15	N-1°-E	
0	5	P 7	185° - 701	楕円形	0.53	0.44	0.39	N-9°-E	
0	6	P 8	184° - 696	円形	0.38	0.35	0.27	N-45°-E	
0	7	P 9	183° - 698	楕円形	0.43	0.30	0.37	N-49°-W	
0	8	P 10	197° - 715	円形	0.28	0.26	0.39	N-73°-W	
0	9	P 11	186° - 710	楕円形	(0.56)	0.54	0.56	N-10°-E	1・20号ピット
0	10	P 13	187° - 705	楕円形	0.43	0.33	0.40	N-36°-E	
0	11	P 14	188° - 707	楕円形	0.50	0.38	0.36	N-30°-E	
0	12	P 15	188° - 704	楕円形	0.50	0.34	0.42	N-32°-E	
0	13	P 16	187° - 704	円形	0.28	0.27	0.20	N-26°-W	
0	14	P 18	190° - 704	円形	0.49	0.45	0.54	N-75°-W	28号ピット
0	15	P 19	190° - 703	円形	0.38	0.34	0.37	N-13°-W	
0	16	P 20	191° - 702	楕円形	(0.40)	(0.30)	0.22	N-52°-E	
0	17	P 21	184° - 712	円形	0.35	0.35	0.39	N-18°-W	
0	18	P 22	183° - 712	楕円形	0.54	0.43	0.45	N-32°-W	
0	19	P 23	184° - 710	楕円形	0.58	0.41	0.60	N-20°-W	
0	20	P 24	185° - 710	楕円形	0.52	0.43	0.42	N-33°-W	9号ピット
0	21	P 25	189° - 706	円形	0.44	0.40	0.69	N-57°-E	
0	22	P 26	187° - 703	楕円形	0.44	0.37	0.39	N-5°-W	
0	23	P 27	189° - 705	楕円形	0.54	0.42	0.42	N-57°-W	
0	24	P 28	187° - 707	円形	(0.37)	0.31	0.38	N-55°-W	1号櫛穴状遺構
0	25	P 29	185° - 708	円形	0.46	0.46	0.28	N-50°-W	
0	26	P 31	185° - 710	楕円形	0.74	0.44	0.25	N-30°-W	
0	27	P 33	189° - 703	楕円形	(0.46)	0.28	0.52	N-59°-W	1号櫛P 3

区	№	井№	グリッド位置	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複
0	28	P 34	189 • -704	楕円形	0.39	0.30	0.34	N-87°-W	14号ビット
0	29	P 35	191 • -701	円形	0.36	0.34	0.33	N-60°-W	
0	30	P 36	191 • -701	円形	0.32	0.30	0.27	N-45°-E	
0	31	P 37	191 • -701	円形	0.30	0.24	0.18	N-50°-E	
0	32	P 38	190 • -703	楕円形	0.30	0.25	0.50	N-20°-E	12号土坑
0	33	P 39	191 • -702	円形	(0.37)	0.20	0.44	N-85°-E	12号土坑
1-2面	34	北 P 19	233 • -762	楕円形	0.89	0.71	0.18	N-8°-W	
1-2面	35	北 P 46	238 • -748	楕円形	0.67	0.57	0.17	N-23°-E	
1-2面	36	北 P 60	222 • -770	楕円形	0.82	0.67	0.20	N-13°-E	
1-2面	37	北 P 64	231 • -765	円形	0.57	0.55	0.24	N-23°-E	
1-2面	38	北 P 66	236 • -775	楕円形	0.60	0.46	0.73	N-85°-W	
1-2面	39	北 P 69	246 • -762	楕円形	0.30	0.25	0.29	N-9°-W	
1-2面	40	北西 P 10	232 • -786	楕円形	0.57	0.49	0.19	N-35°-W	
1-3面	41	1号ビット	225 • -783	楕円形	0.85	0.64	0.23	N-76°-W	
1-3面	42	2号ビット	226 • -742	楕円形	0.42	0.40	0.14	N-24°-W	
1-3面	43	重機口 P 1	230 • -737	円形	0.27	0.23	0.10	N-75°-E	
1-3面	44	重機口 P 2	230 • -737	楕円形	0.44	0.27	0.15	N-73°-E	
1-3面	45	重機口 P 3	233 • -738	楕円形	0.81	0.50	0.14	N-82°-E	
1-3面	46	重機口 P 4	234 • -739	円形	0.59	0.55	0.14	N-51°-E	
1-3面	47	重機口 P 5	232 • -740	楕円形	0.53	0.44	0.21	N-40°-E	
1-3面	48	重機口 P 6	231 • -741	楕円形	0.41	0.33	0.16	N-65°-E	
1-3面	49	重機口 P 7	231 • -742	楕円形	0.64	0.35	0.13	N-57°-E	
1-3面	50	重機口 P 8	231 • -744	楕円形	0.47	0.39	0.18	N-43°-W	
1-3面	51	東部 P 1	227 • -746	不整形	0.53	0.48	0.53	N-15°-E	
1-3面	52	東部 P 2	227 • -747	円形	0.44	0.43	0.43	N-16°-E	
1-3面	53	東部 P 3	224 • -747	楕円形	0.33	0.27	0.37	N-65°-E	
1-3面	54	東部 P 6	224 • -749	円形	0.45	0.44	0.24	N-34°-W	
1-3面	55	東部 P 12	225 • -751	円形	0.33	0.31	0.50	N-29°-E	
1-3面	56	Na無し	224 • -750	楕円形	0.45	0.31	0.13	N-6°-W	
1-3面	57	東部 P 14	224 • -751	不整形	0.41	0.26	0.34	N-65°-E	
1-3面	58	東部 P 17	224 • -752	楕円形	0.33	0.21	0.18	N-65°-W	59号ビット
1-3面	59	Na無し	224 • -751	不整形	(0.60)	0.27	0.12	N-58°-E	58号ビット
1-3面	60	東部 P 19	224 • -752	円形	0.34	0.32	0.39	N-7°-E	
1-3面	61	Na無し	224 • -754	楕円形	0.65	0.34	0.26	N-62°-E	
1-3面	62	東部 P 22	223 • -754	円形	0.22	0.21	0.25	N-51°-W	
1-3面	63	Na無し	223 • -754	楕円形	0.36	0.27	0.64	N-28°-W	
1-3面	64	Na無し	223 • -754	楕円形	0.41	0.31	0.21	N-52°-W	
1-3面	65	東部 P 23	223 • -755	楕円形	(0.52)	0.47	0.57	N-10°-W	66号ビット
1-3面	66	Na無し	223 • -756	円形	0.49	0.45	0.60	N-75°-E	65号ビット
1-3面	67	3 P 1	223 • -764	楕円形	0.88	0.66	0.27	N-25°-W	
1-3面	68	3 P 2	225 • -764	円形	0.34	0.32	0.17	N-8°-E	
1-3面	69	3 P 3	222 • -765	楕円形	0.53	0.44	0.23	N-36°-W	
1-3面	70	3 P 4	222 • -767	楕円形	0.45	0.32	0.12	N-2°-W	
1-3面	71	3 P 5	222 • -769	円形	0.37	0.34	0.12	N-72°-E	
1-3面	72	3 P 6	224 • -764	楕円形	0.47	0.33	0.09	N-79°-E	
1-3面	73	西 P 1	228 • -798	楕円形	0.53	0.39	0.18	N-75°-W	
1-3面	74	西 P 2	229 • -798	楕円形	0.43	0.33	0.12	N-55°-E	
1-3面	75	西 P 3	228 • -800	楕円形	0.49	0.40	0.12	N-36°-E	
1-3面	76	西 P 4	228 • -801	円形	0.31	0.31	0.16	N-10°-W	
1-3面	77	西 P 5	225 • -800	楕円形	0.55	0.42	0.17	N-88°-W	
1-3面	78	西 P 6	228 • -801	円形	0.29	0.27	0.13	N-20°-W	
1-3面	79	西 P 7	226 • -805	楕円形	0.94	0.58	0.21	N-36°-E	
1-3面	80	Na無し	224 • -803	楕円形	0.79	0.67	0.20	N-10°-W	
1-3面	81	西 P 9	224 • -805	楕円形	0.77	0.64	0.20	N-14°-W	

区	№	旧№	グリッド位置	平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複
1-3面	82	西P10	223・-806	橢円形	0.48	0.35	0.23	N-35°-W	
1-3面	83	西P12	225・-807	円形	0.28	0.24	0.10	N-50°-W	
1-3面	84	西P14	227・-808	橢円形	0.32	0.26	0.11	N-70°-E	
1-3面	85	西P17	230・-809	橢円形	0.50	0.43	0.10	N-76°-W	
1-3面	86	西P30	229・-813	橢円形	0.30	0.20	0.18	N-76°-W	
1-3面	87	西P35	229・-816	円形	0.28	0.23	0.09	N-71°-E	
1-3面	88	西P41	231・-819	円形	0.29	0.26	0.14	N-50°-W	
1-3面	89	西端P 1	224・-841	円形	0.31	0.30	0.25	N-24°-E	
1-3面	90	西端P 2	223・-842	円形	0.40	0.39	0.14	N-16°-W	
1-3面	91	西端P 5	228・-842	円形	0.48	0.46	0.11	N-68°-E	
1-3面	92	西端P 7	230・-841	円形	0.47	0.39	0.21	N-26°-W	
1-3面	93	西端P 8	230・-843	円形	0.46	0.41	0.10	N-45°-E	
1-3面	94	西端P11	232・-842	円形	0.64	0.58	0.18	N-10°-E	
2	95	P 1	210・-759	(橢円形)	0.46	(0.28)	0.22	N-55°-E	
2	96	P 2	209・-760	(橢円形)	0.48	(0.23)	0.22	N-48°-E	97号ビット
2	97	P 3	208・-761	(橢円形)	(0.57)	(0.23)	0.18	N-60°-E	96号ビット
2	98	P 4	208・-763	円形	0.35	0.32	0.29	N-18°-W	
4	99	P 1	228・-853	円形	0.24	0.24	0.10	N-40°-E	
4	100	P 2	227・-853	橢円形	0.55	0.40	0.40	N-3°-E	
4	101	P 3	228・-852	橢円形	0.58	0.54	0.21	N-10°-W	
4	102	№無し	224・-851	橢円形	0.47	0.34	0.09	N-12°-W	
4	103	№無し	227・-851	円形	0.40	0.38	0.15	N-6°-E	
4	104	№無し	228・-851	橢円形	0.54	0.42	0.22	N-31°-W	
5	105	P 6	224・-859	円形	0.27	0.26	0.25	N-17°-W	
5	106	P 7	233・-859	橢円形	0.24	0.19	0.27	N-51°-W	
5	107	P 8	233・-860	橢円形	0.34	0.18	0.49	N-86°-W	
5	108	P 9	234・-860	橢円形	0.21	0.17	0.22	N-55°-W	
5	109	P 10	235・-859	橢円形	0.25	0.19	0.25	N-72°-E	
5	110	P 11	235・-861	橢円形	0.24	0.17	0.16	N-82°-E	
5	111	P 12	235・-862	橢円形	0.39	0.34	0.43	N-34°-W	
5	112	P 13	233・-859	不整形	0.28	0.16	0.23	N-70°-W	
5	113	P 14	237・-860	橢円形	0.40	0.26	0.55	N-68°-E	
5	114	P 15	236・-862	橢円形	0.47	0.37	0.18	N-49°-W	
5	115	P 16	237・-859	橢円形	0.64	0.44	0.54	N-70°-E	
5	116	P 17	237・-854	橢円形	0.39	0.31	0.32	N-71°-E	
5	117	P 18	237・-856	不整形	0.30	0.24	0.55	N-12°-W	
5	118	P 19	237・-857	橢円形	0.37	0.30	0.36	N-35°-E	
5	119	P 20	239・-859	橢円形	0.45	0.39	0.37	N-58°-E	
5	120	№無し	234・-850	橢円形	0.32	0.27	0.28	N-53°-E	

旧№は発掘調査時の名称

()内は残存または推定

第4章 総括

第1節 浦野氏と根小屋城

群馬県地域創生部文化財保護課
飯森 康広

1 地域の文献にみる根小屋城

天和3年(1683)に編まれた著者不詳の『吾妻記』(『吾妻史料集録』上巻 吾妻文化俱楽部1949年刊)では、「三島 浦野新兵衛」とあり、おそらく根小屋城主を指す。金剛院(東吾妻町原町)の円聖が享保5年(1720)に編んだ『再編吾妻記』(前掲書下巻)には、「三島根小屋城 是は三島一揆の地頭なり、小身と見えたり、領主江見下野守同三郎代々在城の処、弘治年中斎藤家と合戦、利をうしなひ信州に退去々」とある。同じく円聖が記した『吾妻軍記』(前掲書上巻)では、「根児屋城要害の事」という項を設け、江見下野守が在城する根児屋城を斎藤越前守基国が攻め、江見氏は打ち負けて信濃国へ落ちたとしている。後2書は概ね同じ状況を伝えている。

明治初期の『上野国郡村誌』「三島村」では、古跡の「根古屋城」について、「往昔江見氏居之、後浦野氏住スト云、天正年中ニ至テ廢城ス」と記す。

系図では、浦野和美著『浦野文書と一族の系譜』(2000年)所載の浦野禪津家系(東吾妻町三島 吉祥院浦野家系図)に、「幸貞 浦野右衛門進、上州吾妻郡三島村根古屋城居住ス、父重俊討死後修驗トナリ号吉祥院」とある。

2 文書史料による検討

(1) 浦野氏と三島

史料1 武田信玄書状写(新編会津風土記)

就于忠信、三島・山縣井権田・三藏・水沼・岩冰相渡
□、越國本意之上、依于戰功一所可出置候者也、恐々
謹言。

永禄十年丁卯

卯月十六日

信玄(花押影)

浦野宮内左衛門尉殿

同 能化丸

(群馬県史中世編2352号、以下県史〇〇号)

これは永禄10年(1567)武田信玄が西上野経略を終了した際、一齊に行なった論功行賞の一つであり、浦野宮内左衛門尉(大戸氏)は大戸城主で、後に真業斎と号した人物である。黒田基樹氏は「大戸氏の研究」(『戦国大名と外様國衆』文献出版1997年刊)で、「この六か所は三島・山県と権田以下との間が「井」でつながれていることから、三島・山県と権田以下四か所に大きくわけられ」、「三島・山県は大戸氏の本領の一部ではなく、武田氏への従属後に武田氏から新恩地として充行された所領であった」とした。また、天正7年(1579)には浦野弾正忠へ同六か所が武田勝頼から安堵されており(県史2953号)、弾正忠は真業斎の子で能化丸の後身とみられる。ところが、三島については以下の史料がある。

史料2 武田信玄判物(岡山市浦野孝俊氏所蔵文書)

今度忠節無比類候、因茲本領三島之地雖下知候、浦野三河守相渡候間、無了簡候、然者為其替地、信州高梨領之内新野八百貫同於井上稲米式百俵出置候、猶香坂弾正忠可有口上候、仍如件

甲子

信玄(花押)

二月七日

浦野三河守殿

同新四郎殿

(『戦国遺文武田氏編』862号、以下戦武〇〇号)

三河守は大戸浦野氏で、真業斎の父とみられる。黒田氏は「本文書は本文の内容と宛所との間に矛盾がみられる」(筆者傍線部)、「本文書は明確な写であり、写本作成の段階で誤りが生じた」が、「本文内容を重視する」とした上で、史料1の三島について見解を示した(黒田氏前掲論文)。ただし、これに関連する史料が以下のとおり存在する。

史料3 上杉景勝充行状写(須田右近家頼 潟野新四郎所持)

近年所持之知行、不可有相違候、并本領之由候間、上州本意之上、三島之地、山縣分、可出置者也、仍如件、天正十年

七月七日 景勝御居判

浦野能登守殿

〔元禄四年米沢藩御書集〕793号「上杉家御書集成II」
上越市2014刊)

浦野能登守について、山本隆氏は天正10年以前景勝側で載った史料を示しながら、「信濃に本拠を持った者と思われる。「近年所持之知行」と三島・山県を区別しているのも、大戸浦野氏の一員でないためと思う。三島・山県について「本領之由」を申して安堵約束を得たのは、その地を所有する大戸浦野氏が後北条方に属したためであろう」(山本隆氏「浦野文書と浦野氏について」『高崎市史研究』5 1995年刊所載)としている。ただし、この史料について『群馬県史』(県史3149号)は、『上杉年譜』を出典とし、山本氏は『信濃史料』15巻を出典としている。このため、史料3にある「須田右近家頼 潟野新四郎所持」の記載を考慮していないこととなつたのだろう。

問題を整理すると、黒田氏は史料2について、「本文書は本文の内容と宛所との間に矛盾があり、写本作成時の誤りと指摘した。つまり、本文中の三河守と宛所の三河守が重なる点で、どちらかが誤りと考えたわけである。写本であるため、改変の痕跡は判別できない。

さて、史料3の情報から、能登守受給文書を所持する新四郎という人物が米沢藩上杉家中にいたことが判明した。これを合理的に理解すれば、史料2の宛所は本来能登守(あるいはその家系の筆頭者)であり、写本段階で三河守と誤写してしまったと考えられる。したがって、能登守・新四郎(以下能登守系浦野氏と呼ぶ)は、武田氏に服属した際、当初本領安堵を伝えられていた。しかし、永禄7年大戸浦野三河守に給与されたため、信州で替地を得て活動していた。そこで、上杉氏と北条氏の対立に乗じて、上杉景勝に本領三島・山県分の安堵を要望したと考える。言い換えれば、永禄10年に史料1で信玄から宮内左衛門尉に安堵された「三島・山県分」は、永禄7年段階で能登守へ与えられず三河守に与えられたものと考

えられる。

ところで、長野原林 潟野氏系図では、「村正 潟野能登守 号心楽斎、全透院浦野家系譜(安中市原市 潟野家系図)では「大戸能登守 貞信 後号 心楽斎」と載せ、父を「浦野參河守 貞春」とし、藤岡市 大戸家系図もほぼ同様な内容となっている(浦野氏前掲著書)。

しかし、心楽斎は中務少輔・宮内左衛門尉・心楽斎と改称した大戸城主として、黒田氏や山本氏の研究により明らかにされている。系図にみえる能登守と心楽斎は別人物とするのが、現在の認識と考えられる。

また浦野氏の検討過程で、その背景となる文書の来歴を山本氏が説明している。浦野文書には4種があり、A 新編会津風土記所収浦野勝平文書、B 高崎市小崎町烏子稻荷神社所蔵浦野文書(2種)、C 群馬郡倉渕村(現高崎市)全透院所蔵浦野文書、D 東大史料編纂所蔵写本浦野(嘉吉)文書がある。A本は中務少輔(宮内左衛門尉)・新八郎(民部右衛門尉)系の伝来文書としての性格が強い。A本は41通と関係文書の大半を占める。また、B・C・D本の系統で最も古いものはB-①本24通(烏子稻荷神社所蔵)であり、会津藩家臣浦野六郎某が藩主保科正之時代(1643~1672年)に書写して全透院もしくは烏子稻荷神社へ提供したものとしている。C・D本はB本の写しであり、B本はすべてA本と重複する。なお、浦野和美氏は会津の浦野家を検討した際、浦野勝平が六郎右衛門を名乗りとする一族であったことを明らかにした(浦野氏前掲著書)。これにより、B本もA本と同じ家系から伝來したものと判明した。大戸城主心楽斎の嫡流は会津へ移住し、その後途絶した一族とみなされる。

一方、三島に関係する文書が大乘院林浦野家に伝来している。

史料4 潟野重俊書状(浦野安孫家文書)

以丹波守方ほそかや之儀引得地ニ被成度之由、様々蒙仰候、内々斟酌ニ存候得共、任御望預置申候、向後用所も候者可頼入候、早々、恐々謹言

(後筆)「天正十三乙酉」(後筆)「浦野右衛門尉」

五月五日 重俊(花押)

大乘院参

(秋山正則「中世~近世初期の浦野安孫家文書について」双文28号 2011年刊)

細谷は三島に所在する字地名であり、根小屋城北麓に位置する。これを大乗院が重俊という人物から獲得を許された内容である。大乗院は長野原林に所在した修驗道寺院である。浦野福津家系(吾妻町三島・吉祥院浦野家系図)では「重俊 上州大戸城主高四万八千石余、浦野右衛門尉、從五位下重信トモ云、天正九年三月二十四日戊子刻、於遠州高天神討死」とする。同系図では前述した根小屋城に居住した幸貞の父にあたる。文書史料上、高天神城に参陣した当主は浦野彈正忠であり(県史2857号)、黒田氏によれば、彈正忠はこれが「史料上における終見であり、この後は父真楽斎が再びその家督としてみえているところをみると、その間における弾正忠の死去などにより、真楽斎が家督を再承することとなった」としている。三島浦野氏の始まりは系図上幸貞である。幸貞の弟村信も三島に住したが、その後長野原町林に移り大乗院初代(林浦野氏)となる。系図上村信が大乗院を名乗るのは、天正17年以降であるため、史料4の年次はそれ以降となる可能性がある。重俊という人物は系図上浦野氏にあてられるが、右衛門尉という人物が大戸城主であったとする史料は確認できない。重俊を弾正忠にあてた場合、宛所の大乗院と年次上齋藤が生じる。系図上の事績を考慮せず、重俊という人物が大乗院に細谷の所有を許したとする方が理解しやすい。文中の丹波守も不明であるが、村信の妻が大戸丹波守娘とされる。丹波守が大戸浦野氏に繋がる人物であるとすれば、細谷を領有していたことが理解できる。したがって、三島地内の土地所有に影響を及ぼす関係にある重俊という人物があり、大乗院は妻方丹波守の所領取得を許されたとなるだろう。史料4は大乗院と三島の関係を示す史料として貴重である。

(2) 永禄7年三島獲得の背景

史料2段階の永禄7年、三島はなぜ本領主であった能登守系浦野氏に与えられず、大戸浦野氏の三河守に与えられたのだろうか。能登守系浦野氏・三河守两者とも信玄に服属したにもかかわらず、信玄は能登守系浦野氏に一度下知した本領安堵を撤回し、三島を三河守に与えたのである。この背景には、三河守がより優先されるべき要因があったと考えられる。また、三島を本領としていた能登守系浦野氏は、この段階で本領にいなかつたはず

だが、その在所は不明である。替地は800貫文もあるが多すぎることから、これも誤写が想定される。本領退去の状況については次項で扱う。

通例、本領が安堵されず別人に宛行われる場合、その人物がその場所を実効支配してきた場合が多い。宛行の際、「近年抱来」などと説明する例である。特に紛争地の例が多く、敵方から奪取した土地である事例が知られる。三島の場合も前述した『再編吾妻記』等により、斎藤氏に奪取された背景がうかがえ、武田方として奪回し浦野三河守が実効支配してきた経緯も想像される。以下、具体的に三島がどのような紛争地であったのか、なぜ永禄7年2月に宛行がなされたのかについて検討する。

根小屋城と吾妻川を挟んだ北岸山上に岩下城がある。近年、斎藤氏の本拠として再評価された城である。齊藤慎一氏は岩櫃城を検討した際、「斎藤氏は岩櫃城より西に約3キロメートル弱の岩下を本拠として、岩下衆を組織していたのであり、岩櫃城は武田領国化以後に登場する」とした。岩下衆の存在は『閑東幕注文』(県史2122号)に記載されるが、筆頭者斎藤越前守と構成員山田のみで、以下一紙脱落したため、他の構成員は不明となっている。また、岩櫃城の築城時期について、新出史料として永禄7年に年次比定される2月13日付け北条氏康書状が紹介され、丸島和洋は「從来岩櫃城の初見史料は、永禄8年3月であったから(『加沢記』『戦武』931)、約一年引き上げられた」とする。加えて、「岩櫃城への軍勢集結は、北条側の要請だけでなく、斎藤氏謀叛と上杉勢迎撃という緊張への対応であった」とした。ただし、斎藤越前守の謀叛は、岩下城から追われた時点の謀反を指したもので、永禄7年2月段階の岩下城はすでに武田勢下にあり、岩櫃城とともに岩下城は武田勢にとって重要な城となっていた。同時期に史料2で三島が浦野三河守へ宛行われていたことも、一連の対応として意味がある。

史料5 小山田信有書状(東京都調査家旧蔵文書)

今年之為祈念、遠路是迄巻數・守、以代官被越候、目出々候、弥以無油断祈念専要候、特串柿到来珍重候、此間者 岩下城普請、昨日又当地大前之為普請移候、恐々謹言、

正月廿三日

信有(花押)

小佐野越後守殿

(戦武948号)

永禄7年に年次比定される文書である。岩下城落城は『加沢記』を根拠に同6年10月とされているが、確實なところは不明で、史料5から翌7年正月以前である。丸島氏の初見史料紹介により、岩櫃城が同時期に存在していたことが確実となったが、奪取した岩下城を改修していたことが判明する。また、同時期信玄は鎌原宮内少輔に対して、岩下の人質を取り、三枝土佐守とともに岩下城の勤番にあたったことを賞し、服属した斎藤弥三郎に人質を甲斐へ移すよう命じている(県史2217号)。鎌原氏が武田氏の岩下城攻略に大きく関わったとみられ、斎藤弥三郎は依然として領内の勢力に影響力を持っていたことが判明する。

一方、三島はこの時期どんな状況にあったのだろう。

史料6 武田信玄書状写(尊経閣所蔵小幡文書)

急度染筆候、仍其地普請之事、三人有談合、不分昼夜可被相持候、猶用心等、是又不可 有油斷條肝要候、称津事も 近日可為着城候、可有其心得候、恐々謹言、追而、就中解破損之由候間、再興専一候、掌中に瘡出来候間、用印判候、

五月四日 信玄(龍朱印影)

山家薩摩守殿

城対馬守殿

浦野三河守殿

(県史2727号)

年次不詳だが同じ頃のもので、三河守は史料2と同一人物であろう。黒田氏はその地を大戸としている。しかし、信玄は永禄5年に服属した浦野中務少輔に対し、番勢を置くと申し出していた(県史2418号)。したがって、史料6で三河守に対して、改めて大戸城の破損した壇の再興を命じているのは矛盾しており、大戸城とするには疑問点が残る。また、この時期に三河守宛信玄書状が史料6のほか、文中に三河守を含む史料2しか知られていない点も考慮すべきである。

文書の体裁を比較すると、中務少輔宛のものは、信玄の名に花押を据えた直状であり、宮内左衛門尉と称してからも変わらない。一方、中務少輔の弟新八郎に対しては、ほぼ信玄の花押のみと差が付けられており、民部右衛門尉と称してからも基本変わっていない。三河守の例

は史料6だけだが、わざわざ手に瘡ができたと言い証して印判を使用しており、本来は花押を据えるべきものであったと知られる。こうしてみると、中務少輔と三河守は同列で、新八郎が格下となる。三河守が「御老父」、中務少輔が「御舍兄」、新八郎が「御舍弟」と比定される状況(県史2169・2170号)と合致する。

ところで、中務少輔(丞)は永禄3年に北条氏政から人質を求められた段階から受給者であり(県史2743号)、その後も信玄への服属や条件交渉は、中務少輔を相手としている。つまり、すでに当主の地位にあり、三河守はおそらく前当主で、史料2・6が異例となる。これは三島という土地に関わるのではないだろうか。史料6で三河守とともに在番が置かれ、再興が命じられたのが、根小屋城とすれば筋は通る。三河守が選ばれたのは、前当主ではあるが大戸勢を率いて三島奪回に大きな役割を果たしたからと考えられる。それは岩下城攻略のための戦略であり、武田氏は永禄6年5月に根小屋城を整備して、三河守らを在城させたと考えられる。これにより、岩下城攻略が達成された直後の永禄7年2月に、新恩地として三河守が三島・山県分を獲得したと考えられる。しかし、これは一時的な対応であったため、史料1のとおり3年後には当主の宮内左衛門尉へ引き継がれたのである。一方、大戸浦野氏は永禄8年11月武田氏から離反していた状況にあったが(県史2302号)、翌9年間8月には大戸城に山家薩摩守らが在番しており、宮内左衛門尉は武田氏に再服属を果たしていた(県史2321号)。この間に、嵩山城に拠った斎藤氏は滅んだことから、根小屋城の在番は解かれていた可能性が高いだろう。史料1で三島は父三河守から宮内左衛門尉へ引き継がれた。前当主が領主となった異例な3年間は、武田氏が西上野攻略を達成するまでの期間と重なり、上杉方の反撃も含めた不安定な状況下で選択されたものであったと考えられる。

岩下城攻略戦に関して、『加沢記』は一切触れていない。しかも、『加沢記』の内容は、斎藤氏が岩櫃城を本拠とする前提であるため、事実に誤認が含まれている。しかし、有用な内容も多いため、事実関係を吟味しながら史料として利用したい。『加沢記』では、岩櫃城攻略のため真田勢は軍を二手に分け、真田信綱ら二千余騎が幕坂峠から東方へ回り込み、矢沢綱隆・武藤(のち真田)昌幸ら五百余騎が大戸口に向かい、大戸真乗斎ら二百余騎が加わっ

たという。大戸の浦野氏が大きな役割を果たしたとみられる。

これらの状況下で、浦野三河守らが在番した根小屋城からの攻撃も加わり、岩下城攻略が行われたと考えられる。黒田氏によれば「大戸氏は鎌原氏を通じて武田氏に通じたのであり、その後も大戸氏は甘利昌忠との交渉等を鎌原氏を通じて行っており、鎌原氏が大戸氏と武田氏との間の一種の取次役を務めている」とされる。岩下城攻略に大きな役割を果たした鎌原氏との強い結びつきを背景として、大戸浦野氏が岩下城攻略に関わることができたと考えられる。結果として三河守は永禄7年三島を所領給付され、大戸浦野氏は勢力を拡大したとみることができよう。

(3)弘治年間の三島退去

『再編吾妻記』等によれば、江見氏は弘治年中(1555~1557)に斎藤氏と争い根小屋城を奪取されたといふ。江見氏の史料は知らないため、永禄7年以前から三島を本領と主張する能登守系浦野氏に考慮しつつ検討する。弘治年中当時、上野国全体で大きな変動が起きている。天文21年(1552)関東管領上杉憲政は、北条氏の侵攻に屈し居城平井城を退去した。斎藤氏の根小屋城攻撃が伝承のとおり弘治年間とすれば、北条氏の吾妻谷侵攻以前であり、斎藤氏がこの時期領土拡大を図っていたこととなる。能登守系浦野氏は、この際本領である三島を退去させられたと考えられる。永禄元年北条氏は安中越前守に出馬を求め、吾妻谷に攻め入った(『戦国遺文』後北条氏編4653号)。吾妻谷は吾妻川周辺であるから、岩下や三島が含まれるだろう。斎藤氏が北条氏に属したのは、この際ではないだろうか。大戸浦野氏も北条氏の支配下にあり、浦野中務少輔(丞)は永禄3年に北条氏政から人質を求められた(県史2743号)。文言に「越國衆出張」とあり、越後勢の侵攻直前に、浦野氏の服属が危ぶまれる状況であったことがうかがわれる。

同3年10月上杉謙信が越山し、沼田城・明間城・岩下城を攻め落とし、その他白井長尾氏・総社長尾氏・箕輪長野氏を屈服させた(県史2104号)。翌4年斎藤越前守は岩下衆の筆頭者として、大戸中務少輔は箕輪衆として上杉軍に参陣した(『関東幕注文』県史2122号)。斎藤氏・大戸浦野氏はともに上杉氏支配下で勢力を保つことができ

た。三島支配も斎藤氏がそのまま継続したと考えられる。

しかし、同4年11月武田氏の吾妻谷侵攻が始まり、上杉氏の影響が薄れることとなった。斎藤氏は武田氏の影響下に入り、同5年に鎌原氏が羽尾領から獲得した三原の内(長野原町と喜屋周辺)の境界確定について、信玄派遣の検使を受け入れている(県史2230号)。一方で、斎藤氏は同年2月に箕輪長野氏を通じて謙信への再服属交渉を進めており(県史2159号)、武田・上杉氏間で不安定な立場を取っていた。ただし、押領による鎌原氏領に対する斎藤氏の圧力は減じておらず、同年3月には鎌原氏は在所を退去するところまで追い詰められていた(県史2163号)。しかし、同年5月に鎌原氏が置かれた形勢は逆転し、武田氏によって鎌原城に海野氏らの番勢が置かれることとなった(戦武785号)。また、鎌原氏の働きにより大戸浦野氏が武田氏に服属し、同時期大戸城にも武田氏の番勢を置く相談がなされた(戦武786号)。しかし、同年6月に至っても斎藤氏の鎌原氏への圧力は変わらず、信玄は鎌原氏の報告に対して不届きとし密かに鎌原氏の意向に賛同している(戦武791号)。その意向の具体的な内容は不明である。同年11月大戸浦野新八郎に対し、武田家甘利氏が大戸の状況を心許ないと伝え、援兵を約束している(戦武809号)。この時期、斎藤氏を含め上杉方の大戸城攻撃が危ぶまれていた。吾妻谷の紛争は加速しつつあった。前述のとおり、翌6年5月浦野三河守らは根小屋城に在番することとなった。形勢はこの間に逆転し、根小屋城の攻略が行われたと考えられる。斎藤方の勢力は不明な点が多く、根小屋城を守備していた勢力は知られない。「山県分」とされる山県という人物であった可能性を提示しておきたい。

3 根小屋城発掘調査結果からの検討

(1) 検討の前提

今回発掘調査された部分を山崎一氏は下曲輪と呼称している。山崎氏は下曲輪について「数個の別郭になっていたらしいが今は不明である」と述べていた。しかし、調査の結果、下曲輪は西端を堀切(1号堀切)で切り離す以外遮断する施設がなく、長さ110mに及ぶ一つの郭であったことが判明した。これは想定外の事実であり、全体像の見直しを迫る知見であった。

実際、調査前の予見として、山崎氏の言う下曲輪案と

は別に、何の遺構もない捨郭案、あるいは家臣団屋敷案、根小屋集落案など、様々に想定されていた。調査の結果、遺構の粗密から考えて、家臣団屋敷案や根小屋集落案は同時に否定された。また、捨郭を考えるには、内部遺構が整備されていると考えられた。結果として、下曲輪という呼称を踏襲することとなった。ただし、守勢が長さ110mの平場を、一つの郭として守備するのは非常に難しい。別郭として機能するのであれば、堀で区画した主郭を最高所に設ける必要があり、前後を掘り切って広大な平場を分割するものと考えられる。しかし、それが設置されていないため、機能としては捨郭に近いと判断されることとなる。一方、城主屋敷に相当する区域は、1号堀切西側の山城裾部に想定している。

(2) 平地部遺構の状況

下曲輪の平地部は大きく二つに分かれ、西側約40m程が一段下がっている(以下、下段と呼ぶ)。下曲輪は東西一体で使われているが、機能差があると推測される。加えて、6号建物が東端の法面下に沿って建てられており、東の一段高い平地部(以下、上段と呼ぶ)を内側あるいは背後として意識していたことが判明する。上段の中央部から東側にかけては、やや多くの遺構が発見され、重複もみられる。調査時の所見では、中世上面(2面)・同下面(3面)と認識され、建物で言えば1～3号建物を上面、4・5号建物を下面と認定されている。

調査面上面の3号建物は、167.07mとかなり大きい中心建物である。1・2号建物はその付属屋と考えられ、1・2号建物は重複し1号建物の方が新しい。調査面下面(3面)の5号建物は、南端の一段下がった平坦面に建っている。土間に火凧を備えた屯所的建物である。この平坦面は通路を兼ねており、ここが埋まった後に建てられたのが、調査面上面(2面)の1・2号建物である。通路の埋没が廃棄によるとすれば、城の廃絶と考えなければならない。上面建物の場合、新たに形成された通路は認められないため、城としての防御性を備えた出入口遺構は認められない。この点を根拠として、1・2号建物は城廃絶後の建物と判断されることとなる。3号建物も調査時の所見で層位から同時期とされていることから、城廃絶後の建物とみなされる。3号建物の面積は大きく、民家の平面形を持つことから、その理由を後代に建築さ

れたとするのが妥当と考えられる。また調査面下面の4号建物は、柱穴の数量が少なく認定に問題を残す。ただし、3号建物との繼続性から、この位置に中心的な建物があることに問題はないと考えられる。

出入口遺構は、北面の1号通路と南面の5号建物がある一段下がった平坦面である。後者は1号溝と関係して、通行を制御した出入口であり、内枠形状を呈している。出入口として防衛的に優れており、正面口にあたるだろう。斜面を下る通路の位置は明確でないが、3号建物東側から4号腰曲輪を経て順次下っていったと考える。14号トレンチから西へ向かい山城部へ向かう大手道と繋がっている。

北面の1号通路は、櫓門と考えられる8号建物を伴う坂虎口である。両側に伸びた2号柵は入口周辺では塀として、横からの侵入を防いだと考えられる。山城であるため、入口付近を除けば柵であろう。1号通路は北斜面を下るが、下の平場から西へ向かったとみられる。3号豎堀は若干斜面を削り込む程度で、通過点を絞り込む役目を果たしている。通路は西へ向かい8号腰曲輪に達し、そこから3号平場へ下りたと想定される。

(3) 遮断系遺構

遮断系の防衛施設として、1号堀切と1～4号豎堀があるが、4号豎堀は1号堀切の西側であり、下曲輪内部の施設ではない。4号豎堀は北斜面通路から下曲輪へ向かう通路からの通行を制御する機能を持ち、1号堀切と相互に関係して、出入口部分にあたる3号平場を挟み込んだものと考える。1号堀切の南端は調査区外となるが、土橋または木橋で山城部への大手道を設けていたと推測される。1・2号豎堀は尾根を削り出して豎堀としたもので、顕著な掘り込みはみられないが、南東斜面から北斜面へ回り込む侵入者の通行を、二重に防いでいる。

柵は、水平方向から侵入する相手を想定して設けられたもので、1号通路周辺や1号堀切東面稜線に顕著に設置されている。3号柵は6号建物の背後に設けられ、上段への通行を防いでいる。上段への通行は、3号柵北側を使用したはずで、守兵は7号建物の北側を通っていたと考えられる。

腰曲輪も防護施設の一部である。1～3号腰曲輪は尾根の南東稜線を擁護状に削平した施設である。調査の結

果、平坦面で明確な遺構は発見されていない。このため、平坦面としての利用を意図したものではなく、斜面を削り込んで切岸を構築した結果、平坦面が生じたものとみなされる。一方、南斜面の4号腰曲輪は眼下に大手道を望むことから、上方から大手道を防御する平坦面と考えられる。

(4)全体像

下曲輪は東西110mに及ぶ平坦面を、ほぼ一体的に使用する。本城はあくまで山城部であり、下曲輪を長期的に防衛の拠点として使用する意図はなかったと判断される。下曲輪の中核は上段であり、4号建物付近が中心となる。南方正面の枡形状の虎口と、櫓門(8号建物)を備えた北側1号通路は、ともに中心部への導入路となっている。北斜面の通行は基本本筋ではなく、南斜面が登城路として機能していたと考えられる。下段である西側約40mが一段下がっているのは、山城部へ向けた陣地とならない配慮と考えられる。下段に配置された軍勢の屯所となるのが6号建物とみなされる。下曲輪は、多くの軍勢が収容できる利点を利用した構造であり、無遺構空間は野営地として広く使われていたと考えられる。このため、下曲輪は岩下城に対する攻城軍の駐留する空間として設けられた性格づけられる。

4 根小屋城山城部の綱張検討

(1)郭の配置

主郭は、西方山岳部から延びた細尾根中腹の最高所で、標高675mに位置する。下曲輪との比高差は約190mに及ぶ。主郭は一辺約15mの方形で、南東隅に直径8m前後で円形の落ち込みがあり、烽火場の可能性がある。西と南の腰郭は比較的段差なく、東二段の腰郭は急斜面のため段差が大きく、下段は二筋の尾根に備えている。主郭付近の斜面は切り立った崖で、防護面で優れている。東へ続く尾根は長さ100m以上急斜面が続き、小刻みな小郭と切岸により登城の難易度が高い。

比較的広い郭は中段郭群で、長さ30mを越える横長の郭二か所がある。背後を除き堀切等は設けず、郭面を広く使う。上位からの見通しが良く、あえて堀切等によって死角を生じさせなかつたと考えられる。中段郭群と下曲輪との比高差は約120mあり、ここだけでも要害性が

高い。主郭としても十分有利な立地と考えられるが、更に上位の主郭地点まで利用することで、城域は倍加することとなっている。

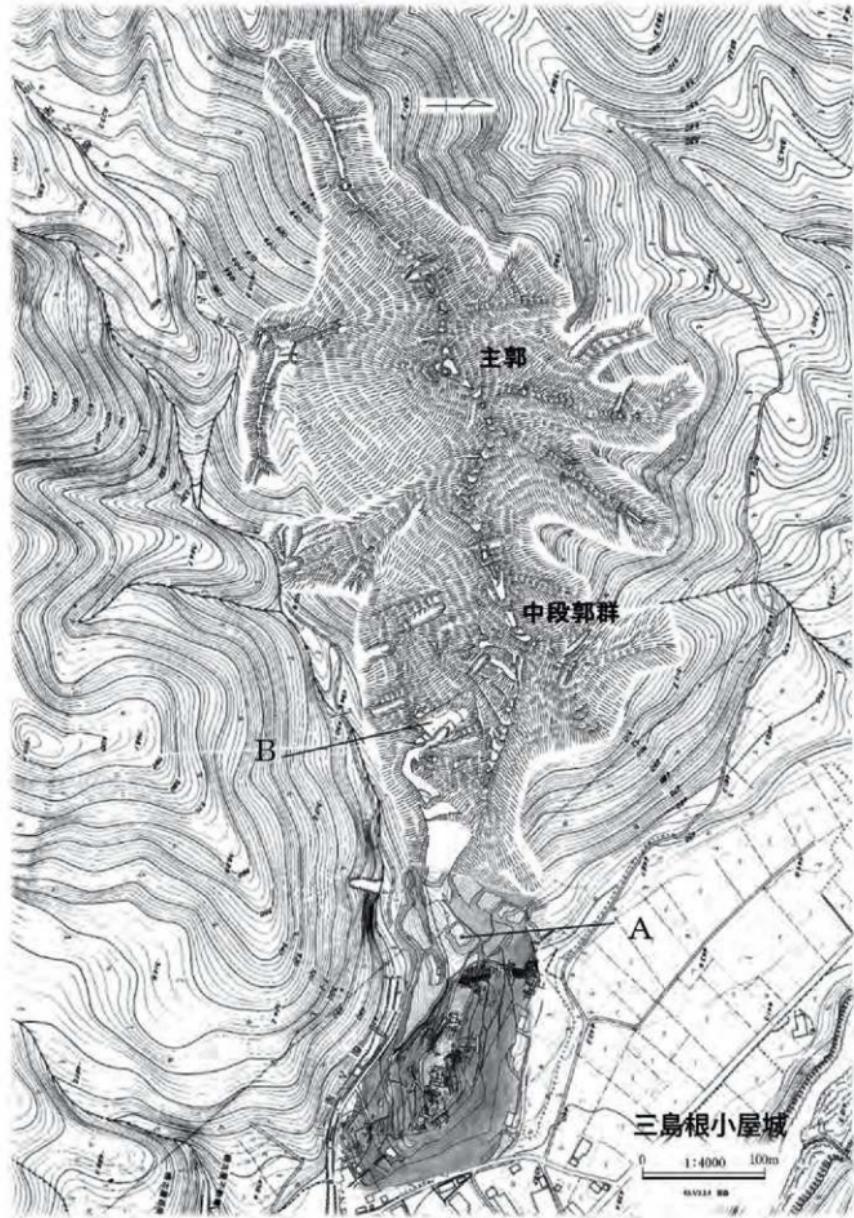
中段郭群から東方で尾根が二股に分かれ、東側が大手筋となる。北側の尾根は斜面の変換点で二重の堅堀を設け、斜面からの侵入を防いでいる。大手筋の斜面は幅を広く使用し、北側稜線上は離壇状に小郭が並び、中段まで登城路となる。上段から横長の狭い腰郭が四段配置される。南縁辺は堅堀を設けており、通路は腰郭最下段での堅堀を越えて、西側から斜面を登ったと考えられる。腰郭により、頭上から通路を見下ろしている。

尾根の稜線をつづら折れに下りた裾の平地に、四段の平坦面がある。土塁等は設けられていないが、山城部への登城口を守るという意味で、本来的な下曲輪に相当する郭群である。今回の調査で1号堀切が発見されたことにより、この部分が城内である確証を得たことになる。その一部にあたるA地点は、一辺20m程の土壇であり、北斜面からの登城路と南方大手道を頭上から抑える物見台の役割を果たしている。周間に堀の痕跡はなく、防護された郭とは見なしにくい。あくまで出入口に関係する施設と考えられる。この土壇と1号堀切との間には20m程の距離がある。なだらかで土壘の痕跡も見つかっていない。下曲輪からも見通すことができる対等な関係にあったためだろう。

B地点が城主屋敷想定地である。大手となる坂道を登らず、張り出した尾根を回り込んだ奥に位置する。西側も上から尾根が下り、前後を囲い込んでいる。

(2)遮断系遺構

主郭の背後は、一段下の腰郭の西で大堀切を設け、高低差のある切り立った切岸により強く防護されている。更に間に2条の小堀切を経て、鞍部に大堀切を設け、外側に堅堀を設けて二重に備えている。背後はこのまま山岳部へ続く細尾根の登り斜面で、攻勢に回り込まれることは想定しにくい。東斜面は、中段郭群の背後を2条の堀切で切り離すまで、主郭から急斜面の郭群となる。この間の堅固さは格段に高い。主郭に至るまでの間に、2条の急傾斜の尾根が北側へ延び下るが、中腹に堅堀を設けて入り口に備えている。こうした堀切や堅堀の内側高所にやや広い腰郭を設け、正面攻撃を図るのが、この



第85図 三島根小屋城縄張図

城の約束事となっている。

尾根から中段郭群までの登城路は、技巧的な工夫が凝らされている。北側尾根の北には深く切り立った谷があり、北へ回ることはできず、狭い尾根を登ることとなる。中段で腰郭上を西へ約50m進むと、豊堀と背後の尾根が現れ、斜め上方からも攻撃にさらされる。この間、上方の郭からも攻撃を受けることとなる。

この城の特徴は、高い要害性にある。主郭へ向かう斜面を登るには、隊列を絞らねばならず、それを頭上から狙う構造である。小兵力しか籠もれない広さであるが、鉄壁の守りである。中段郭群は登城路を工夫することで、攻撃性を高めており、城の築城技術として技巧的な特徴をみることができる。

まとめ

本稿では、浦野三河守に着目し、根小屋城との関係を検討した。三河守はすでに大戸城主を嫡子宮内左衛門尉に譲った前当主であったが、永禄7年頃の史料が散見され位置づけが混乱していた。それを根小屋城在城に結びつけることによって、三島領有をめぐる能登守系浦野氏の動向との混乱を解消した。また、三河守による三島領

有と根小屋城在城を想定することによって、從来不明確であった岩下城攻略過程の試案が提示できたと考えている。

根小屋城は、遺構状況として複雑な表情を持つ城である。山城部は多数の小郭と急斜面に守られた堅固な主郭を中心とする。中段郭群は登城路を工夫して、攻撃性を高める技巧的な面も備えている。また、発掘調査によって1号堀切が発見されたことによって、下曲輪と土壇A地点以西の山城部が連携していないと考えられるようになった。発掘調査された下曲輪部分は、1号堀切の存在によって、本城である山城部に対して、捨曲輪に近い位置づけにあることが再認識された。一方、内部に通路遺構や建物を備え、長さ110mの平場を広く使用する状況であることも判明した。このため、軍勢の収容能力が高い点が特徴的と評価されることとなり、小勢力の籠城に適した山城部分とバランスを欠いた状況と判断されることとなった。この状況を理解するために、下曲輪の作事を後発的な要素と考え、特定の目的に沿った改修と考えることとした。その契機は、文献史料からの検討により、永禄6年5月から浦野三河守らが在番することから、この際に行われた改修ではないかと推測されるに至った。

第2節 まとめ

根小屋城跡の発掘調査では、縄文時代の土坑6基、古代の土坑5基、中世末の城館の一部、近世の土坑、集石などを検出し、調査している。

縄文時代の土坑では、6号土坑が袋状を呈する断面形状から貯蔵施設であったことがわかっているが、他の土坑は遺物の出土もみられないため詳細な時期や性格について究明できない状態であった。なお、調査範囲からは早期から中期にかけての土器片が出土しており、このうち、早期から前期が9割を占めており、遺構もこの時期に想定することができる。

古代では、縄文時代と同様に土坑が5基検出されている。そのうち3基についてはその形状から狩猟を目的とした落とし穴と判断できた。時期については、遺物が出土しておらず、土層断面でも鍵層の堆積が確認できないため確実性に乏しい。しかし、今回検出した土坑は、橢円形を呈しており、上郷岡原遺跡や長野原町内のハッ場ダム関係発掘調査の成果を基にすると古代に比定しても問題はないと考えられる。

古代の落とし穴については、『延喜式』に記載されている古代上野国の負担物品の中の「年料別貢雜物一零羊角6具」、「交易雜器一鹿皮60張」の確保のため落とし穴が用いられたことが窺え、根小屋城跡で検出された土坑もこうした狩猟の一部に使用されたことが想定される。

中近世では、以前より存在が指摘されていた中世の山城である根小屋城の一部が対象であることから、その成果が期待されていた。

発掘調査を実施するにあたり現地形の測量を実施し、城に伴う腰曲輪や竪堀、通路などの想定を行った。その結果、腰曲輪や竪堀などが窺える箇所が数箇所存在していることから、こうした箇所について重点的に発掘調査を行うこととした。発掘調査は、丘陵頂部は全面的に表土を除去したが、傾斜地は安全対策を考慮し、トレントによる調査で遺構の存在が確認できた地点を抵張していく調査方法がとられた。

その結果、丘陵頂部の比較的平坦面では、建物7棟、柵2列が検出されている。そして平坦面の周縁では柵が設けられ、検出された柵の中程の出入り口には門と想定

できる建物が検出されている。この他、今回調査対象であった下曲輪と斥候山に存在する本郭の間には上幅が最大7m、深さ2.70~4.50mほどの大規模な堀切1条が検出されている。

なお、現地形の測量で想定された竪堀や腰曲輪については不明確な点が多く、調査成果から判断することは難しい状態であった。竪堀については安全確保のため十分な調査ができなかった1~3号竪堀や対象範囲の全域を掘削したが、崩落によって痕跡を見いだすことができなかった4号竪堀など存在それ自体を確認できていない。

腰曲輪についても現況図で8箇所ほど想定できる箇所が存在したが、調査の結果からは腰曲輪と判断できるものは道を伴う3号腰曲輪とピットを複数検出した4号腰曲輪の2箇所だけであった。この2箇所も斜面側が崩落したのか平坦面や柵など伴う施設の確認などはできていない状態であった。

こうした中で下曲輪と本郭の間では比較的規模の大きな堀切が検出され、山城の存在を肯定する構造であった。

また、下曲輪と呼称されている丘陵頂部では建物同士の重複が確認され、一定の期間において根小屋城が機能を持っていたことがわかる。しかし、今回の調査では中世山城に伴う出土遺物は僅かで、鍋や石臼、渡来鏡など10点に満たない数量であった。この遺物の少なさは戦闘時だけの使用を考慮しても僅かである。なお、5号建物で検出した炉の状態から推察すると日常的な煮炊きが行っていたことがわかる。すなわち、下曲輪では複数の建物が存在していたが、日常的に使用されていた建物は5号建物などごく限られた建物であったとみられる。

以上のような状況から見ると根小屋城では、日常においては少人数によって施設が維持管理され。いざ戦となつたときのために備えていたと想定できる。しかし、建物の焼失や柵の柱穴で倒された痕跡が皆無であることから、岩棚城の斎藤氏との間に起きた戦でも戦闘に巻き込まれることが無かったと想定される。

なお、根小屋城は、中世末期に廃城となり、その後放置されていたようであるが、近世末に丘陵頂部は耕作地、傾斜地の下部の小規模な平坦面は墓地と地域住民によって再利用されたが、急傾斜地ということもあり、一時的な利用に止まり、現在に至っている。

遺物觀察表

縄文時代遺構外出土遺物

種類 PL.No.	No.	種類 器	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第128 PL.40	1	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:石英多/良好 赤褐色	横位沈線以下、斜位沈線が連続する。内面調整は弱い。 撫でて。	沈線文系土器 中部高地系か
第128 PL.40	2	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片		胎:織維・片岩/ 良好/明褐	口唇端部に浅い刻みを加える。外面は浅い斜位条痕、 内面は横位条痕を施す。	条痕文系土器 鶴ヶ島台式
第128 PL.40	3	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片		胎:織維・片岩/ 長石/良好/明赤褐色	口唇端部に刻みを加える。外面横位、内面斜位条痕を 施し、丁寧な撫で調整を重ねる。内面凹凸顯著。	条痕文系土器 鶴ヶ島台式
第128 PL.40	4	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:織維・石英/ 片岩/良好/橙 赤褐色	内外面とも横位条痕を施す。体部上半の屈曲部に横位 削り突を連続する。	条痕文系土器 鶴ヶ島台式
第128 PL.40	5	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:織維・石英/ 片岩・白色粒/良 好/赤褐色	外面斜位、内面横位条痕を施す。	条痕文系土器
第128 PL.40	6	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:織維・石英/ 長石/良好/明赤褐色	体部下半か。外面は細かな斜位条痕、内面は縱位条痕 を施す。内面凹凸顯著。	条痕文系土器
第128 PL.40	7	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片		胎:織維・輝石/ 白色粒/良好/明褐	口縁部内湾。幅狭内皮連續爪形文と外皮削突文を横位 多段に配し位下にR Lを施す。内面丁寧な研磨。	黒浜式
第128 PL.40	8	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:織維・片岩粒/ 白色粒/良好/橙	体部上半か。幅狭の内皮連續爪形文を横位に多段に配す。 外面平滑な撫で。	黒浜式
第128 PL.40	9	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:織維・チャー ト・白色粒/やわ 軟質/橙	幅狭の平行沈線を横位多段に配す。外表面摩滅、内面 平滑な撫で。	黒浜式
第128 PL.40	10	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:織維・チャー ト・白色粒/良好/ 橙	幅狭の平行沈線を横位多段に配す。以下 位下にL RとR R Lによる羽状織文構成を呈す。内面 研磨。	黒浜式
第128 PL.40	11	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:織維・石英/ 白色粒/良好/にほ い黄褐色	外反する体部、L RとR Lによる羽状織文構成。外反 部に追加整形施文の痕跡を見る。内面丁寧な研磨。	黒浜式
第128 PL.40	12	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:織維・石英/ 白色粒/良好/明褐 色	横位L RとR Lによる羽状織文構成。あるいは菱形状 意匠か。内面平滑な撫で調整。	黒浜式
第128 PL.40	13	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片		胎:織維・片岩/ 白色粒/良好/明褐 色	外反する口頭部に内皮連續爪形文による菱形状意匠を 配す。内面平滑な撫で調整。	有尾式
第128 PL.40	14	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片		胎:織維少・石英/ 白色粒/良好/明褐 色	波状線。波頂部より織維小窓が垂下し、斜位平行沈 線が派生する。肋骨文。体部はR Lを施す。内面研磨。	諸機 a式
第128 PL.40	15	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片		胎:織維少・白 色粒/良好/赤褐色	薄手の器厚。口唇部に刻みを加える。以下横位R Lが 施す。内面平滑な撫で調整。	諸機 a式
第128 PL.40	16	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:石英・輝石/ 白色粒/良好/	横位R Lが覆う。内面弱い研磨を加える。	諸機 a式
第128 PL.40	17	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:石英・チャー ト・白色粒/良好/ 明褐色	横位R Lが覆う。内面縱位研磨を加える。	諸機 a式
第128 PL.40	18	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:石英・輝石/ 白色粒/良好/明赤 褐色	外反する体部中位か。横位R Lが覆う。内面弱い研磨 を加える。	諸機 a式
第128 PL.40	19	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片		胎:輝石・白色粒/ 良好/にほい黄褐色	口頭部屈曲し、縱位修狀貼付文を付し幅狭内皮平行沈 線を横位密接に施す。内面弱い横位研磨を加える。	諸機 c式
第128 PL.40	20	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片		胎:石英・輝石/ 白色粒/良好/にほ い黄褐色	口頭部に強烈削突を施す。以下平行沈線による横 位矢羽状文が施される。内面平滑な撫で。	諸機 c式
第128 PL.40	21	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:輝石・白色粒/ 良好/にほい黄褐色	体部上半屈曲部に縱位状とボタン状の貼付文を付し、 斜位平行沈線を地文とする。内面丁寧な研磨。	諸機 c式
第128 PL.40	22	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:石英・輝石/ 白色粒/良好/にほ い黄褐色	幅狭の平行沈線群による横位レンズ状意匠が配される。	前期後葉～末葉
第128 PL.40	23	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:石英粒・白色 粒/良好/淡黃	幅狭内皮平行沈線群による対弧状意匠内に横位沈線群 が充填する。地文に横位R L。内面弱い横位研磨。	前期後葉～末葉
第128 PL.40	24	縄文土器 深鉢	1区 口縁部破片		胎:石英粒・白色 粒/良好/灰オリ ーブ	口唇部欠損。幅狭内皮平行沈線群による横位弧状意匠 が配される。内面弱い研磨を加える。	前期後葉～末葉
第128 PL.41	25	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:輝石・白色 粒/良好/相	位下 Rを地文とし覆位沈線群を加える。内面平 滑な撫で。	五鈴ヶ台2式
第128 PL.41	26	縄文土器 深鉢	1区 体部破片		胎:輝石・白色 粒/良好/にほい黄 褐色	位下 Rを地文とし覆位沈線群による区画文構成か。横位沈線、波状 沈線を斜位沈線を充填する。内面平滑な撫で。	勝板1式
第128 PL.41	27	縄文土器 深鉢	1区 頭部破片		胎:石英・雲母/ 良好/にほい黄 褐色	頭部斜面と口縁部区画文を設ける。側面は單列の結 節沈線。頭部横位波状貼付沈線を施す。内面横位撫で。	阿玉台1b式

種類 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第13回 PL.41	28	縄文土器 深鉢	1区 頭部～体部破片				粗：石英・雲母 良好：暗褐色	頭部に横位波状沈線を施し体部は横位隆線で画す。V字状突起より弧状隆線が懸垂する。内面平滑な撫で。	阿玉台1b式
第13回 PL.41	29	縄文土器 深鉢	5区 体部破片				粗：石英/良好/に ぶい褐色	横円押型文を横位に施す。内面平滑な撫で調整。	押型文系土器
第13回 PL.41	30	縄文土器 深鉢	5区 口縁部破片				細：織維・輝石/ 白色粒/良好/に ぶい褐色	口唇部内外面に刻み。横位弧状沈線の内縁に刺突文が施される。内外面とも横位条痕を施す。	条痕文系土器 鶴ヶ島式
第13回 PL.41	31	縄文土器 深鉢	5区 体部破片				細：織維少・石英/ 輝石・白色粒/ 良好/に ぶい赤褐色	体部僅かな屈曲を示し、小型のC字状の刺突文が重なる。内外面とも横位柔条痕を施す。	条痕文系土器 鶴ヶ島式
第14回 PL.41	32	縄文土器 深鉢	5区 体部破片				粗：織維・石英/ 片岩・白色粒/良 好/に ぶい赤褐色	厚手の器底を呈す。内外面とも横位・斜位の条痕を施す。	条痕文系土器
第14回 PL.41	33	縄文土器 深鉢	5区 体部破片				細：織維少・輝石/ 白色粒/良好/相 好	外表面は斜位条痕、内面は横位条痕を施す。外器面は摩滅する。	条痕文系土器
第14回 PL.41	34	縄文土器 深鉢	5区 口縁部破片				細：織維・片岩粉/ 白色粒/良好/に ぶい褐色	口縁部内側。内皮連続刺突文を横位多段に配す。以下横位RLを施す。内面研磨を加える。	黒浜式
第14回 PL.41	35	縄文土器 深鉢	5区 体部破片				細：織維・石英/ 輝石・白色粒/良 好/に明赤褐色	L RとR Lによる縱位羽状繩文構成。おそらく菱形状意匠か。内面撫で調整。	黒浜式
第14回 PL.41	36	縄文土器 深鉢	5区 体部破片				細：織維・石英/ 輝石・白色粒/良 好/相好	L RとR Lによる縱位羽状繩文構成。おそらく菱形状意匠か。内面撫で調整。	黒浜式
第14回 PL.41	37	縄文土器 深鉢	5区 口縁部破片				細：片岩粒・白 色粒/良好/相 好	導入の厚器を呈す。口縁部外反。横位R Lが覆う。内面丁寧な研磨を加える。	諸磯a式
第14回 PL.41	38	縄文土器 深鉢	5区 体部破片				細：石英・片岩/ 白色粒/良好/相 好	横位R Lを地文とし、短輪軸状の結節部を横位施文する。内面平滑な撫で調整。	諸磯a式
第14回 PL.41	39	縄文土器 深鉢	5区 体部破片				細：輝石・白色粒/ 良好/にぶい赤褐色	横位R R Lが覆う。内面は弱い研磨を加える。	諸磯a式
第14回 PL.41	40	縄文土器 深鉢	5区 口縁部破片				粗：石英・片岩/ 白色粒/良好/黒褐色	口縁部内皮に内皮連続爪形文を重ね口縁部横内区画内は縱向繩文を充填する。地文は横位R L。内面平滑な撫で。	前期後葉～末葉
第14回 PL.41	41	石器 石甃	1区 完形	長 幅 4.1 7.5	厚 重 1.0 25.5		黒色安山岩	背面部は平坦な分割部とする幅広削片を用いる。打面側に弧状を呈する刃部を作出する。左刃切刃部は粗く、刃部再生の可能性がある。	
第14回 PL.41	42	石器 三次加工あ る剥片	5区 完形	長 幅 2.9 2.7	厚 重 0.9 4.8		黒曜石	小規模の幅広削片。右刃面を粗く加工して刃部とする。透明感が強い良質石材。	

古代遺跡出土遺物

種類 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第19回 PL.41	1	上部器 鏡	1区西端 口縁部片	口	15.0		細砂粒/良好/明 褐色	口縁部は横ナデ、体部は上位がナデ、中位から下位は手打ちへら削り、内面は体部から口縁部へへらナデ。	
第19回 PL.41	2	上部器 鏡	5区 頭部～脚部片				細砂粒/良好/に ぶい黄褐色	脚部は横ナデ、削片はへら削りか、表面摩滅のため単位不明。内面は底部へらナデ。	

1号堀切出土遺物

種類 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第65回 PL.42	1	石製品 石臼(下)	底面 破片	径 幅 25.0	高 重 8.8 573.7		粗粒輝石安山岩	下臼破片、副溝4本が確認されるのみで、2・3目以下の縫隙の間隔が空く。下臼の縁は丸味を帯び、長期に亘り使用が窺われる。体部には煤が付着、被熱破損したものと見られる。	
第65回 PL.42	2	践鉢 元豊通直	底面 一部欠損	外 内 2.5 2.0	厚 重 0.1 2.2		銅製品	裏表体の「元豊通直」。わずかに見える。不鮮明。輪、郭は一部明瞭。	

中近世遺構外出土遺物

種類 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第82回 PL.41	1	石製品 白石(下)	底面 破片	口 底 -/-	高 重 -/-		浅黄、外側灰黃 鉱物粒多	器壁厚い。内面は丁寧な撫で。外表面は撫で。	中世
第82回 PL.42	2	在地系土器 内耳瓶	0区 内耳瓶	口 底 -/-	高 重 -/-		にぶい黄/海綿骨 針	器壁薄く、口縁部は内傾する。微細な片岩が雲母含む。	15世紀末～16世紀中葉
第82回 PL.42	3	在地系土器 内耳瓶	2区 内耳瓶	口 底 -/-	高 重 -/-		にぶい黄/外側 黒褐/鉱物粒多	口縁部横撫で。2片接合。	中世
第82回 PL.42	4	在地系土器 内耳瓶	4区 内耳瓶	口 底 -/-	高 重 -/-		にぶい黄褐/外側 灰褐/鉱物粒多	器壁厚い。	中世
第83回 PL.42	5	肥前磁器か 染付碗	0区 下半1/2	口 底 -/(4.4)	高 重 -/-		白	やや焼成不良。外表面に繊維と梅花文を描く。	19世紀前葉～中葉
第83回 PL.42	6	瀬戸・美濃 陶器皿	2区 底部1/4	口 底 -/(6.0)	高 重 -/-		灰白	やや焼成不良。内外面灰褐色。高台外面に窯道具痕。貼り付け高台。	16世紀

遺物観察表

種類 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴			備考
				口 底	高 底		白	縁壁やや厚い。外面は簡略化した半菊文状も染付。口縁部内面に1条の線彫。底部内面1重圓線内に不明文様。	18世紀末~19世紀中葉	
第83回 PL.42	7	肥前系磁器 染付広東碗	2区 完形	口 底 5.0	高 底 6.1	白				
第83回 PL.42	8	肥前系磁器 染付碗	2区 底 3.4	口 底 (6.5)	高 底 5.3	白		内面無文。外面上幅圓彎と植物文を描く。高台端部付近無地。		19世紀中葉
第83回 PL.42	9	美濃 器磁か 染付端反彫	2区 完形	口 底 9.0 3.7	高 底 5.1	白		外表面簡略化したなすな文。口縁部内面2重圓線。底部内面1重圓線内に不明文様。		19世紀前葉~中葉
第83回 PL.42	10	製作地不詳 陶器 片口鉢	2区 口縁~体部 底	口 (16.2) 底 -	高 底 -	灰白/夾雜物含ま ない		外表面灰釉。細かい買入る。片口は口縁部下に設ける。		近現代
第83回 PL.42	11	石製品 茶臼(F)	5区 1/2	径 幅 18.4	高 重 10.2 2087.5	粗粒輝石安山岩		下臼上部径は14.3cm。6分割下臼の1/2が残存。軸では両側穿孔による。受け部分からみると、下臼は用面の片減で始向は明らかである。多孔質で、やや軟質。		
第83回 PL.43	12	石製品 石臼(F)	5区 1/2	径 幅 32.8	高 重 13.6 16500	粗粒輝石安山岩		内部表面には煤が付着。端部が爆ぜている。分割面と爆せた落落面の分化状態は異なり、石臼の座廻と被削には時間差がある。		
第84回 PL.43	13	石製品 石鉢	5区 1/2	長 幅 (21.2)	高 重 16.2 12000	変質安山岩		径20cm前後を敲打して浅い凹部を作出しているが、使われた痕跡はない。磨力形状を呈す亜角器を用いる。		
第84回 PL.43	14	鉄製品 不明	2区 破片	長 幅 5.4 4.9	高 重 1.2 20.1			鍛造製品でゆるく立ち上がるようカーブしているが、詳細は不明。		
第84回 PL.43	15	銭貨 古賀永通宝	5区 内 外 2.5 2.0	外 内 幅 0.1 3.2	厚 重 0.1 3.2	銅製品		面、背ともに彫が深く、文字、輪、郭が明瞭。谷部分が黒く、輪、郭は茶色の色調となる。		
第84回 PL.43	16	銅製品 半セル	5区 完形	長 幅 4.2 1.5	高 重 1.8 6.1			つづぎ目が横にあり明瞭。首はなく、火皿が体部に直接接合されている。		
第84回 PL.43	17	金属製品 笄	5区 完形	長 幅 13.4 1.3	厚 重 0.3 21.8	銅製品		象嵌が施されており、金色の光沢を持つ金属が埋め込まれている。月?を表現した毛彫りがなされる。		

重量単位 g

繩文土器未掲載遺物数量一覧

調査区	遺構名	時期	点数
1 遺構外	早期後葉		20
1 遺構外	前期中葉		19
1 遺構外	前期後葉		47
1 遺構外	中期前葉		14
1 遺構外	不明		1
2 遺構外	前期後葉		2
3 遺構外	前期後葉		1
5 遺構外	早期後葉		5
5 遺構外	前期中葉		21
5 遺構外	前期後葉		47
合計			177

土師器未掲載遺物数量一覧

調査区	遺構名	器種	点数	重量
1 1号土坑	甕	1	5.0	
2 31号トレンチ	甕	1	1.0	

剥片石器未掲載遺物数量一覧表

調査区	遺構名	石材	点数	重量
1 240~765	黒曜石	1	0.2	
1 240~765	黒曜石	1	0.5	
1 1号烟	黒曜石	1	1.0	
1 215~780	黒曜石	1	0.6	
1 235~765	黒曜石	1	0.5	
2 205~760	黒曜石	1	4.5	
3 琥珀(東)	黒曜石	1	3.5	

重量単位 g

根小屋城跡陶磁器 非掲載遺物集計表

調査区	層位 ・面	遺構 番号	遺構種 グリッド	中世			近世			近現代			時期不詳
				石器系	青銅器	國產磁	國產陶	國產施釉	陶磁器	瓦	十能瓦	ガラス	
0			調査区				1	34	1	9			
0		2	平坦面表土										
1		3	槽			1	1						
1		4	選集中			1	8						
1		5	溝			1	7						
1		6	ピット群				1	8					
1	2面	7	225~750			1	1						
1	2面	8	230~750									1	44
1	2面	9	225~755			1	2						
1	2面	10	230~755							1	2		
1	2面	11	230~760							1	1		
1	2面	12	220~760		1	3	1	6					
1	2面	13	240~760							2	4		
1	2面	14	225~765		1	3	1	5	1	1			
1	2面	15	220~770			1	1						
1	2面	16	225~770			1	3						
1	2面	17	225~785						1	1			
1	2面	18	225~790						1	5			
1	2面	19	225~800						1	7			
1	2面	20	235~800							1	8		
1	2面	21	220~805							1	1		
1	2面	22	225~805						1	8			
1	1 烟1~2	23				1	1						
1	1 烟2~2	24										1	27
1	1 烟2~3	25							1	12			
1	表探	26				3	29	1	46				
2	8 トレンチ	27							1	19			
2	31 トレンチ	28				1	2	1	38	4	598		
3	壁壇	29							1	2			
4	2面	30	235~825							1	1		
4	2面	31	230~855			1	5	3	38	3	5		
4	表探	32								1	11		
5	平坦面表土	33								1	10		
5	5 平坦面表土	34					2	13	1	36			
5	7 平坦面	35					1	3		1	106		
5	8 平坦面	36								2	94		
	調査区	37		1	23	4	26	2	3	6102			
	表探	38							2	8	2,15		
	計	39		1	23	21	97	21	261	30,994	1	44	0
											1	27	1
													24

重量単位 g

写 真 図 版



1 遺跡地遠景(手前右は岩櫃山) 東から



2 遺跡地遠景(奥は榛名山) 西から



1 遺跡地と吾妻川 南から



2 遺跡地と吾妻川 北から



1 遺跡地 垂直



2 根小屋城跡と斥候山 北東から



1 2016年調査対象地 南から



2 2016年調査対象地 近接 西から



3 0区全景 南から



4 0区全景 近接 西から



5 2018年度全景 垂直



6 2018年度全景 北から



7 2018年度全景 東から



8 2018年度全景(下曲輪)と本郭 東から



1 2018年度全景 西から



2 2018年度全景(左手尾根 本郷) 東から



3 2018年度全景 北から



4 2018年度1区全景 南から



5 2019年度全景 遠景 北西から



6 2019年度全景 北から



7 2019年度4区全景 垂直



8 2019年度4区全景 北から



1 2019年度5区東側全景 北から



2 2019年度5区西側全景 北から



3 2019年度4区・5区全景 垂直



4 根小屋城本郭 北から



5 1号旧石器調査坑作業状況 南から



6 1号旧石器調査坑土層断面 南から



7 2号旧石器調査坑 西から



8 2号旧石器調査坑土層断面 北から



1 1号土坑 北西から



2 1号土坑出土状態 東から



3 1号土坑土層断面 南から



4 2号土坑 北から



5 2号土坑 南西から



6 2号土坑土層断面 北東から



7 3号土坑 東から



8 3号土坑 西から



1 3号土坑土層断面 南から



2 4号土坑 北西から



3 5号土坑 北から



4 6号土坑 北西から



5 6号土坑 南西から



6 6号土坑土層断面 南から



7 7号土坑 北西から



8 7号土坑土層断面 北から



1 8号土坑 南から



2 8号土坑土層断面 東から



3 9号土坑 北西から



4 9号土坑土層断面 北西から



5 10号土坑 北西から



6 10号土坑土層断面 B-B' 南西から



7 11号土坑 北東から



8 11号土坑土層断面 北東から



1 1号トレンチ 南東から



2 1号トレンチ土層断面 南東から



3 2号トレンチ 南西から



4 2号トレンチ土層断面 南西から



5 3号トレンチ 南から



6 3号トレンチ土層断面 南西から



7 4号トレンチ 南東から



8 4号トレンチ土層断面 南西から



1 6号トレンチ(南北) 南から



2 6号トレンチ(東西) 南西から



3 6号トレンチ(南北)土層断面 南西から



4 6号トレンチ(南北)土層断面 南西から



5 7号トレンチ 東から



6 7号トレンチ土層断面 北から



7 8号トレンチ 北西から



8 8号トレンチ土層断面 東から



1 9号トレンチ土層断面全体 東から



2 9号トレンチ土層断面① 東から



3 9号トレンチ土層断面② 東から



4 9号トレンチ土層断面③ 東から



5 9号トレンチ土層断面④ 東から



6 10号トレンチ土層断面 西から



7 11号トレンチ 東から



8 11号トレンチ土層断面 東から



1 12号トレンチ土層断面 南西から



2 13号トレンチ土層断面 南から



3 14号トレンチ土層断面 北東から



4 15号トレンチ全体 西から



5 15号トレンチ土層断面① 北西から



6 15号トレンチ土層断面② 北から



7 15号トレンチ土層断面③ 北から



8 15号トレンチ土層断面④ 北から



1 16号トレーニチ全体 南東から



2 16号トレーニチ全体 西から



3 16号トレーニチ土層断面 A-A' 北東から



4 16号トレーニチ土層断面 B-B' 北東から



5 17～21号トレーニチ設置場所



6 17号トレーニチ土層断面 西から



7 18号トレーニチ土層断面 西から



8 19号トレーニチ土層断面 西から



1 20号トレンチ土層断面 東から



2 21号トレンチ土層断面 西から



3 22号トレンチ土層断面 西から



4 23号トレンチ 南西から



5 23号トレンチ土層断面 北から



6 24号トレンチ土層断面 北西から



7 25号トレンチ 北東から



8 25号トレンチ土層断面① 南東から



1 25号トレンチ土層断面② 東から



2 25号トレンチ土層断面(2018年度調査) 南東から



3 25号トレンチ土層断面(2019年度調査) 南から



4 25号トレンチ遺物出土状態 東から



5 26号トレンチ 北東から



6 26号トレンチ土層断面 東から



7 27号トレンチ土層断面 南東から



8 28号トレンチ土層断面 南東から



1 29号トレーニング土層断面 南から



2 30号トレーニング土層断面 東から

3 31号トレーニング 東から



4 31号トレーニング土層断面 南から



5 32号トレーニング土層断面 東から



6 33号トレーニング土層断面 東から



7 34号トレーニング土層断面 東から



1 35号トレンチ土層断面 東から



2 36・37号トレンチ土層断面 北東から



3 37号トレンチ土層断面 北から



4 38号トレンチ土層断面 北東から



5 38号トレンチ土層断面部分 北東から



6 39号トレンチ 北西から



7 40号トレンチ 北西から



8 40号トレンチ土層断面① 北から



1 40号トレンチ土層断面② 北から



2 40号トレンチ土層断面③ 北から



3 41号トレンチ土層断面① 北西から



4 41号トレンチ土層断面② 北西から



5 42号トレンチ 北東から



6 43号トレンチ土層断面① 北東から



7 43号トレンチ土層断面② 北西から



8 44号トレンチ土層断面 北から



1 3号腰曲輪全景 北から



2 3号腰曲輪全景 南西から



3 3号腰曲輪上部 南東から



4 3号腰曲輪土層断面A-A' 北から



5 3号腰曲輪土層断面B-B' 北東から



1 4号腰曲輪全景 北東から



2 4号腰曲輪全景 北西から



3 4号腰曲輪近接 東から



4 4号腰曲輪土層断面 東から



5 4号腰曲輪96・97号ビット 北から



1 8号腰曲輪全景 東から



2 8号腰曲輪全景 西から



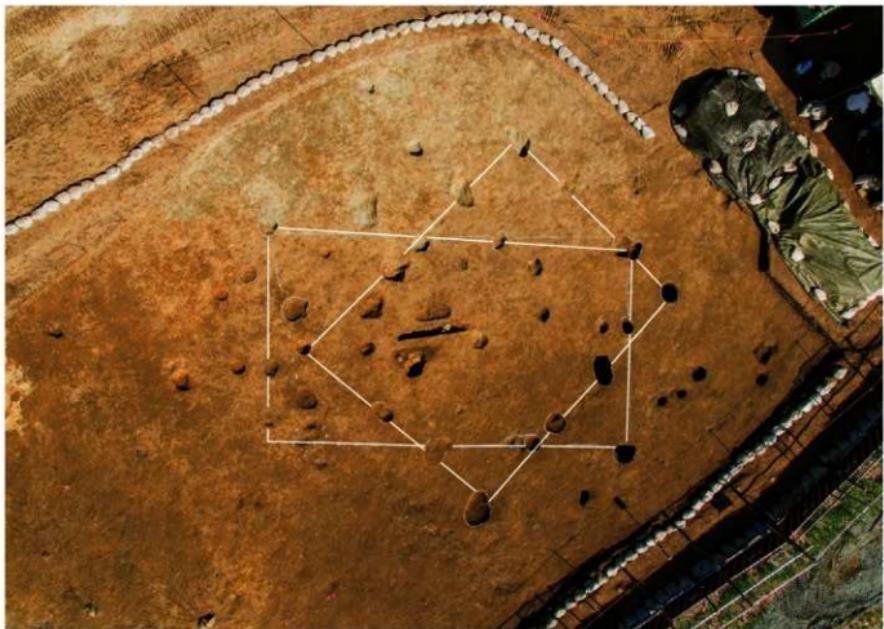
3 8号腰曲輪近接 西から



4 8号腰曲輪土層断面 東から



5 8号腰曲輪土層断面近接 東から



1 1・2号建物 垂直



2 1号建物 南東から



3 1号建物検出状況 南東から



4 1号建物柱穴P1 北東から



5 1号建物柱穴P1 土層断面 南から



1 2号建物 南東から



2 2号建物柱穴P1 南から



3 2号建物柱穴P1 土層断面 南から



4 3号建物 南東から



5 3号建物 北東から



6 3号建物柱穴P1 土層断面 東から



7 3号建物柱穴P8 土層断面 東から



8 3号建物柱穴P16 土層断面 東から



1 4号建物 北西から



2 4号建物 南東から



3 5号建物 北東から



4 5号建物 西から



5 5号建物 東から



6 5号建物 北から



7 6・7号建物 東から



8 6号建物 西から



1 6・7号建物 西から



2 7号建物 西から



3 1号竪穴状遺構 南東から



4 1号竪穴状遺構柱穴P 2 踏出状態



5 1号竪穴状遺構柱穴P 3



6 1号竪穴状遺構炉 北東から



7 1号竪穴状遺構炉土層断面 南西から



8 1号竪穴状遺構炉土層断面 南西から



1 8号建物(門)、2号柵、1号通路 南から



2 8号建物(門)、1号通路 南から



3 8号建物(門)、2号柵、1号通路 東から



4 8号建物(門)、2号柵、1号通路 北東から



5 8号建物(門)、1号通路 北から



1 1号堀切 北から



2 1号堀切 垂直



1 1号堀切(2018年度調査) 北から



2 1号堀切(2018年度調査) 北西から



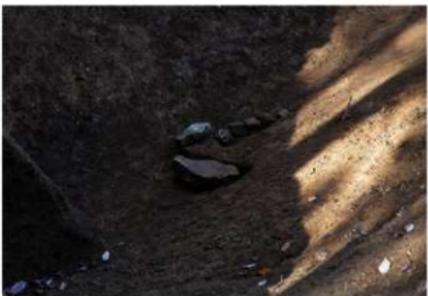
3 1号堀切(2018年度調査) 南東から



4 1号堀切(2018年度調査)土層断面 北西から



5 1号堀切(2018年度調査)下部土層断面 北から



6 1号堀切(2018年度調査)遺物出土状態 東から



7 1号堀切(2019年度調査) 北東から



8 1号堀切(2019年度調査)土層断面 C-C' 北から



1 1号堀切(2019年度調査) 北西から



2 1号堀切(2019年度調査) 南西から



3 1号堀切(2019年度調査) 土層断面B-B' 南東から



4 1号整堀調査状況 北西から



5 2号整堀調査状況 東から



6 1号整堀頂部付近土層断面 北東から



7 2号整堀頂部付近土層断面 北東から



1 4号竖堀 北から



2 4号竖堀 北から



3 4号竖堀上部 北から



4 4号竖堀下部 北から



1 4号竖堀上部土層断面 東から



2 4号竖堀下部礫堆積状態 北西から



3 4号竖堀下部礫堆積状態 南西から



4 4号竖堀下部礫堆積状態土層断面 北東から



5 1号溝 西から



6 1号溝 北東から



7 1号溝 東から



8 1号溝土層断面 北西から



1 12号土坑 東から



2 12号土坑土層断面 東から



3 13号土坑 東から



4 13号土坑土層断面 南から



5 14号土坑 東から



6 14号土坑土層断面 南から



7 1・2号集石 北から



8 1・2号集石 西から



1 1号ピット 南西から



2 2号ピット 南西から



3 3号ピット 南から



4 4号ピット 南から



5 5号ピット 南から



6 6号ピット 南から



7 7号ピット 南から



8 8号ピット 南西から



9 8号ピット土層断面 南西から



10 9号ピット土層断面 北東から



11 10号ピット土層断面 南西から



12 11号ピット土層断面 南西から



13 12号ピット土層断面 南西から



14 13号ピット土層断面 南西から



15 14号ピット土層断面 南西から



1 15号ピット土層断面 南西から



2 16号ピット土層断面 南から



3 17号ピット 西から



4 17号ピット土層断面 南西から



5 18号ピット 北東から



6 18号ピット土層断面 南西から



7 19号ピット 東から



8 19号ピット土層断面 南西から



9 20号ピット 西から



10 20号ピット土層断面 南西から



11 21号ピット 南西から



12 21号ピット土層断面 南西から



13 22号ピット 南西から



14 22号ピット土層断面 南西から



15 23号ピット 南西から



1 23号ピット土層断面 南西から



2 24号ピット 南東から



3 24号ピット土層断面 南東から



4 25号ピット 南西から



5 25号ピット土層断面 南西から



6 26号ピット 北東から



7 26号ピット土層断面 南西から



8 27号ピット(手前、奥1号櫛 P 3) 東から



9 27号ピット土層断面(右側) 南から



10 28号ピット 西から



11 28号ピット土層断面 南西から



12 29号ピット 南東から



13 29号ピット土層断面 南東から



14 30号ピット 南から



15 30号ピット土層断面 南東から



1 31号ピット 南東から



2 31号ピット土層断面 南東から



3 32号ピット 南から



4 33号ピット 南から



5 34号ピット 東から



6 36号ピット 東から



7 37号ピット 東から



8 40号ピット 東から



9 45号ピット 南東から



10 46号ピット 南東から



11 47号ピット 南東から



12 95号ピット 北西から



13 96・97号ピット 北西から



14 98号ピット 南から



15 100号ピット 北から



1 105号ピット 北から



2 105号ピット土層断面 北から



3 106号ピット 北から



4 106号ピット 土層断面 北から



5 107号ピット 北から



6 107号ピット 土層断面 北から



7 108号ピット 北から



8 108号ピット 土層断面 北から



9 109号ピット 北から



10 109号ピット 土層断面 北から



11 110号ピット 北から



12 110号ピット 土層断面 北から



13 111号ピット 北から



14 111号ピット 土層断面 北東から



15 112号ピット 北から



1 113号ピット土層断面 北から



2 114号ピット土層断面 北から



3 115号ピット 北から



4 115号ピット土層断面 北から



5 116号ピット 西から



6 116号ピット土層断面 北西から



7 117号ピット 北西から



8 117号ピット土層断面 北西から



9 118号ピット 北西から



10 118号ピット土層断面 北から



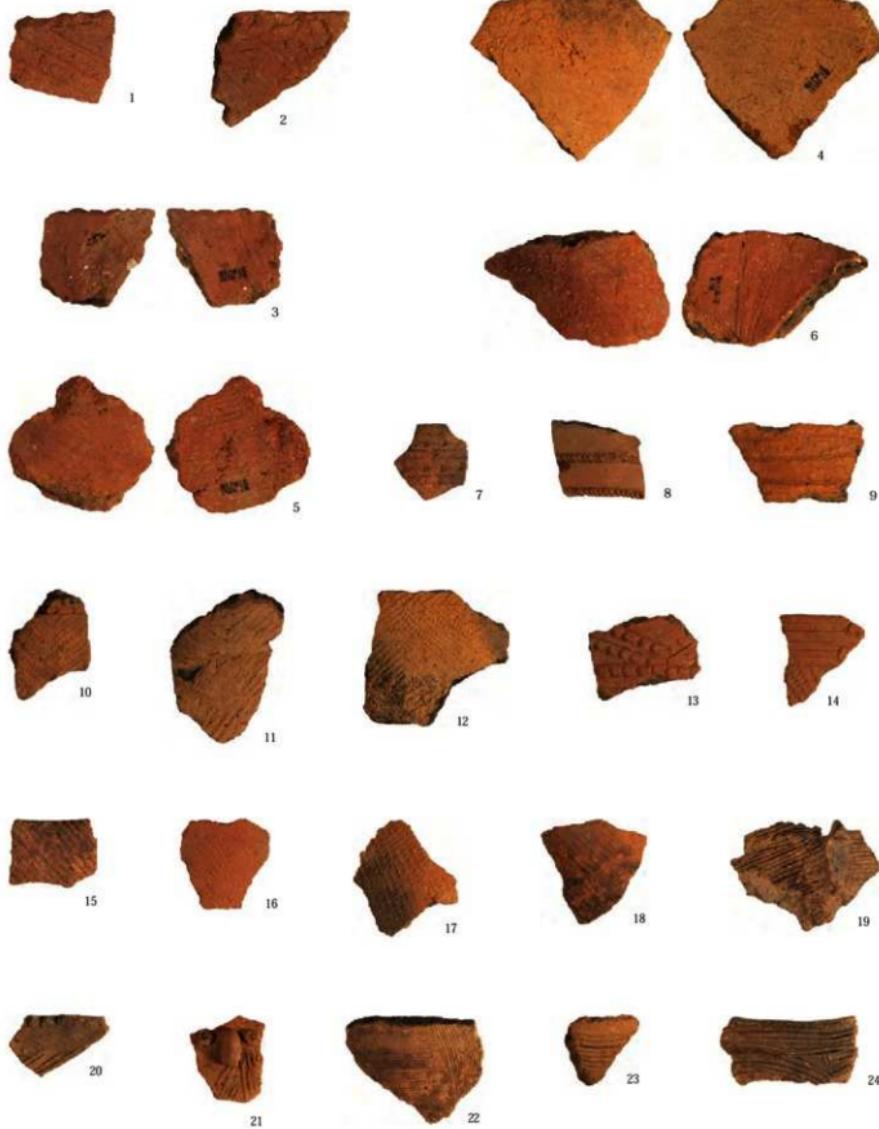
11 119号ピット 北から



12 119号ピット土層断面 北から

縄文時代遺構外出土遺物

1区





25



27



28

5区



29



31



32



30



34



35



33



36



37



38



39



40

1区



41

5区



42

1号墳切出土遺物



1



2

中近世遺構外出土遺物

0区



5

2区



7



8



9

5区



11



10



12



13



2区



14

5区



15



16



17

報告書抄録

書名ふりがな	ねごやじょうあと
書名	根小屋城跡
副署名	上信自動車道吾妻西バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	-
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	703集
編著者名	飯森康広 神谷佳明 岩崎泰一 山口逸弘 大西雅広 板垣泰之
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20220304
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	ねごやじょうあと
遺跡名	根小屋城跡
所在地ふりがな	ぐんまけんひがしあがつままちみしまあざねこや
遺跡所在地	群馬県東吾妻町三島字根古屋
市町村コード	10429
遺跡番号	81
北緯(世界測地系)	36° 33' 21.33"
東経(世界測地系)	138° 45' 47.53"
調査期間	20161001～20161231 20180901～20181130 20190401～20190630
調査面積	10,052.4m ²
調査原因	道路建設工事
種別	城跡
主な時代	縄文 / 古代 / 中近世
遺跡概要	不明-縄文-土坑 6 + 狩猟地-古代-土坑 5 + 城跡-中世-曲輪-堀-建物 7 - 積穴状遺構 1 - 檻 4 - 土坑 3
特記事項	中世、16世紀代の山城の一部
要約	山城の下曲輪に相当する箇所、下曲輪は急傾斜地に囲まれた尾根頂部に建物を配置、本郭との間には大規模な堀切を設置し防御施設としている。下曲輪では建物の他に北側出入り口である門とその両側の櫓を調査した。

公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第703集

根小屋城跡

上信自動車道吾妻西バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和4(2022)年3月2日 印刷

令和4(2022)年3月4日 発行

編集・発行／公益財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下船田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gummaibun.org/>

印刷／上武印刷株式会社



付図 1

根小屋城跡現況図 S=1/400



付図 2

根小屋城跡全体図 S=1/400

